



AC            Zoku Gunsho ruiju  
145  
G856  
1923  
v.24  
pt.1

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







# 續羣書類從

第貳拾四輯上

東京 續羣書類從完成會



AC  
145  
G856  
1923  
v.24  
pt.1

續群書類從第貳拾四輯上目次

武 家 部

卷第六百七十三

山名家犬追物記……………一

卷第六百七十四

犬追物檢見記……………二五

檢見故實……………四四

卷第六百七十五

犬追物葛袋……………四九

犬追物日記勢鏡……………五六

犬追物明鏡……………六三

卷第六百七十六

犬追物益鏡……………七五

犬追物付紙日記……………八五

犬追物草根集……………九五

犬追物手組日記……………一〇三

卷第六百七十七

笠懸射手躰配記……………一〇七

笠懸聞書……………一三四

卷第六百七十八

羽形圖……………一五〇

卷第六百七十九

諸鞍日記……………一六二

大坪道禪鞍鐙事記……………一六四

鞍鐙寸法記……………一七五

樞要集……………一八三

卷第六百八十

齋藤流手綱之秘書……………二〇二

小笠原流手綱之秘書……………二二〇

卷第六百八十一上

三議一統大雙紙……………二二二

卷第六百八十一下

三議一統大雙紙……………二八九

卷第六百八十二

了俊大草紙……………三三八

卷第六百八十三上

京極大草紙……………三六二

卷第六百八十三下

京極大草紙……………三九三

卷第六百八十四

小笠原入道宗賢記……………四二七

卷第六百八十五

伊勢貞親以來傳書……………四五六

卷第六百八十六

伊勢兵庫守貞宗記……………四七一

續群書類從第貳拾四輯上目次畢

續群書類從卷第六百七十三

總檢校保己一集

男源忠寶校

武家部十九

山名家犬追物記

篠葉集

故圓通寺殿犬追物に好給ひ候間。大明寺殿も殊に此事功者に候ひし。宗鑑寺殿。内野の御事候ての後。圓通殿(寺脱九)の御一跡は。大明寺殿に候故。但勿御入部。持豊に至り。父祖の恩厚く開け。八ヶ國の守護無相違旨を賜り。此時いかてか家に傳る犬追物の故實を正さらんやと。京都より名士等を集め。不審の數條尋究。□□□□傳るものなり。夫狗追物の起原の事。家□□□

□傳る事一決ならず。いにしへ禁中にて犬狩と申事侍りて。所衆雜色など申官人はを狩立る事ありて。其子細順徳院の記し給ふ禁秘抄と申物にありとぞ。井手某語りき。是を武家にうつして。犬追物ははしめける由なれども。事似たる似にて。實大に違へり。又の説に。神功皇后三韓御征伐の時。三韓の王は日本の犬なりといふ故事あり。是より事起るといへとも。是以降を乞て伏し従ふものを。射習ふへき様なき事なりとぞ。或故實の武士の申き。又近衛院の御宇久壽年中に。玉藻前といふ女。下野國那

須野の狐にて。是を射習ふために。犬追物を始たりなと申説もあれとも。たしかなる記録にはなき事のよし。京家の學才たち申さるゝ旨なり。陰陽道に搜り問へは。其とき安部泰親朝臣卜術の功驗ありし事なと申せとも。させる證もなきにや。當家傳來の子細は。先祖山名冠者殿遺命に云り。或る宿儒云。犬追物者日本書紀第八ニ見ヘタリ。仲哀天皇熊襲ヲ討玉フニ始ル。熊襲ハ隼人ノ集ル國ニテアレハ。隼人□□□タケキモ。王化ニ從ヘテ見セシメ玉ウ。御□□□イス人ノ故實ニテ。隼人參勤ノ時。犬追物アリトソ。但仲哀ノ天子ハ不吉ノ御例ナレトモ。其御仇ヲ報ヒ玉フ世々ノ御掟ナルヘシトソ。昔一條院ノ御宇。於京洛狗追物アリ。賴光朝臣ノ御一族是ヲ中行ル。是全源家ヨリ申行始ト聞ヘシナリ。上總三浦ノ兩介。其子孫モアリテ。玉藻ノ事正ニ家ニ傳ルトナレハ。所詮

批判モ如何ナルヘシ。當家犬追物故實ノ一卷ハ。孫二郎殿の記是なり。然るに是は道靜公の御時。宗鑑寺ヘ御讓候。愚祖にて候圓通寺殿所望候ヘとも。其ゆるしなく。あまさへ公方より召候て。一卷は公庭にあり。其うつしは宗鑑寺所持申さるゝところに。去ル明德の比ほひ。宗鑑寺逆意。故殿公方の御味方申たる故。一家のよしみ互にむなしく。鏝さきをとき申候訖。公方より家の物なれはとて。彼一卷を故殿にたひて。予に傳れり。これによりて。犬追物の來由をしるし添て。子孫にとゝむるものなり。

犬は只我弓にこそあるへけれ弓は心の外になければ。此歌予か偶作なり。犬射る故實此外に□□□ぬものなり。

右之一卷者。愚父所被筆記也。又號篠葉事者當時所用之家紋。有軍功之矩摸之旨。弓馬之

大慶表示之了。子孫可秘。云々。殊去年八月廿二日細川京兆之馬場一會。公方御成之節。少弼殿々々と伊勢兵庫助に呼懸られ候ニも。愚兄此家傳心中ニ明白ニ候故。イカニ伊勢殿八疋二十二疋ハ合申サヌニヤト申候時。伊勢守出ラレ。備中ハ十五疋候と高聲ニ被申ヲ承捨テ。次ノ百疋興行ノ時。備中十一疋ニ。此方十三疋。イカニ伊勢守殿ト申テ退候也。皆々先祖ノ高恩と存知。殊以弓ハ心ノ外ニナケレハノ一句。庭訓ノ至極。犬追物。牛追物ニハ限ラス。一切武道武藝ノ指南車と奉存者也。依加<sub>ニ</sub>奥書<sub>ヲ</sub>訖。

文正元年十一月初丑

是豐

右篠葉一卷。叔父是豐之手跡也。依御所望進之者也。

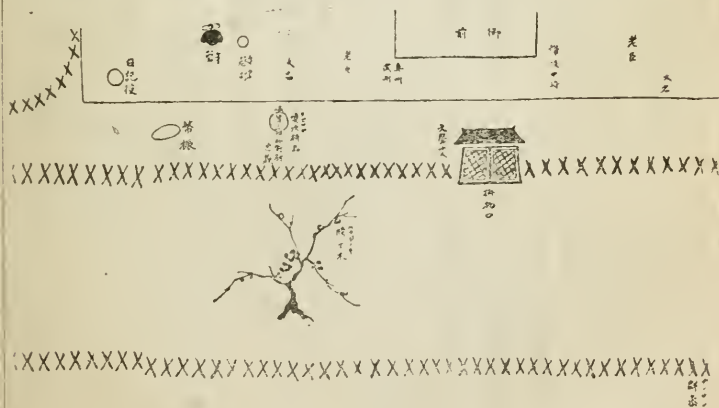
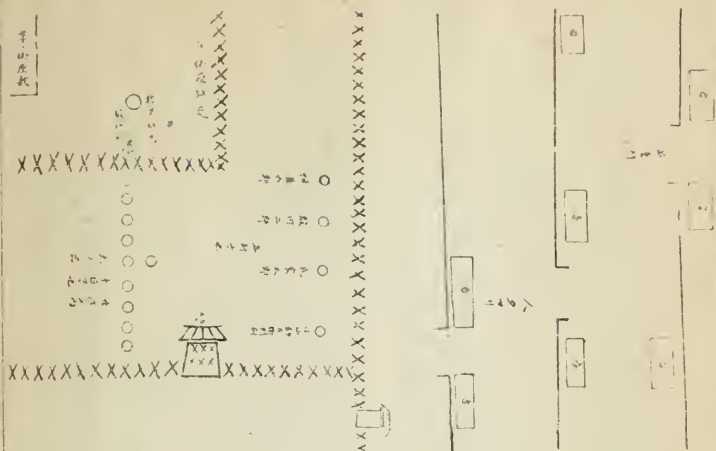
六月十日

政豐

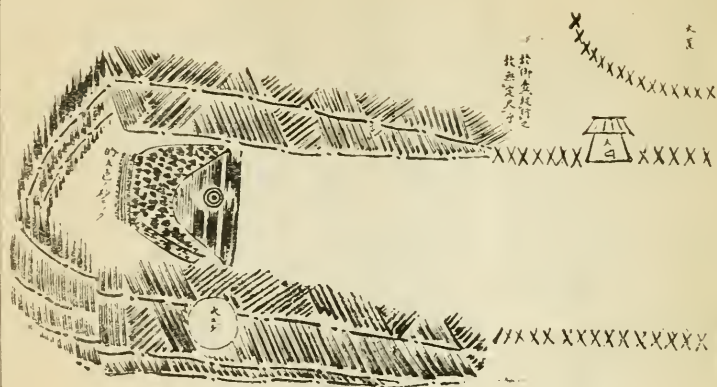
### 越中守殿

#### 射犬正法

それ犬追物は。清和源氏の御弓法にして。亂を忘さるの法なり。然るに近世諸家故實の旨を忘れて。鎌倉殿の古法すたれたるに似たり。貞應元年の式を見るに。犬二十疋にて射手四人なり。貞應三年の記には。犬十二疋にて射手六騎なり。かならずしも定れる數はなくて。只騎射をならはすの法術なり。いさゝか先師に聞事ありて。圖を作りて人にしらしむる物なり。傳聞。貞應元年二月六日南庭にて犬追物あり。若君出座興に入らせ給へり。此事讃岐羽林中行れけるなり。奥州。前武易已下群參せらる。犬二十疋と定め。射手は四騎なり。急度勝負を決せよと。別の仰ありし故。各箭數をあらそひけり。面々五疋ツ、射よと仰けるに。其用意しければ。始十疋は一疋ツ、たれくと名さ







して射取へしと仰られけるに。いづれもはけ  
み思ひて晴なりけりと射たる時。各次第に射  
當けり。各犬に作り花をして。首すちにくゝり  
そへ。其花をめあてゝ射けるとなん。檢見は駿  
河前司義村なり。申次ハ島津三郎兵衛尉忠義  
なり。其儀式只御庭前にての事故定法なし。青  
竹にて埒をゆひ。的きはには萩垣を造り。的の  
左に犬くゝりをこしらへたり。四騎駒のかし  
らを並る時。犬牽十人十疋の犬を引出。九疋を  
先とし。一疋を跡とし。磬を聞て腰なる鎌にて  
繩を切れは。矢聲衆一同にときを作る。犬おこ  
ろきてかけ出すを。四騎かけさまに射る。はう  
じまでにて射ればよし。射されはほうじ過て  
的を射る。但金的にて九分まとなり。犬にあた  
るに所のきらひあり。犬にあたりたるを上手  
とし。的にあたるを中手とし。あたらざるを下  
手と申なり。いづれも檢見奉行するなり。犬に

あたれは金の幣。的には銀の幣なり。一向あた  
らさるには罫酒の法あり。中々口傳あり。四人  
ともに初に賭物を持參して。かけおく所を。か  
け物口といふ。射所甚勝るれは。此口より賜り  
物もあるなり。犬十二疋にて。六騎の時はひと  
りに二疋ツ、なりと承る。猶口傳のみなり。是  
は今の犬追物とちかひたる事を。めつらしく  
書傳るなり。

曆應二年五月日

氏明書記之。

右一卷不思議得之訖。氏明者當家同流大館  
氏也。故加與書者也。

花押

犬追物之覺書

一馬場七十二間四方。

易ノ七十二爻  
ナ象ルナリ。

惣廻竹ヲ以テ埒トシ。ワラヒ繩ニテ結之。略

ノ時ハ東西四十六間。南北四十一間トス。其時

ハ万事皆ツ、メ申ナリ。

一此内ニ又内埒小埒ト云。アリ。廣五十四間四方。高

五尺四寸。犬ノク、ラサル様ニシテ。クルミ縁  
ニスルナリ。埒ニハスヘテ。

一間毎ニ杭木一本ツ、立ル。

一勝示。圓形ニスルナリ。サシ渡シ十八間ニ砂ヲ敷  
テ。是ヲ射手ノ馬ヲ立ル所トスルナリ。

一大繩サシワタシ六間。圓形ニ是ヲ引。但繩ノ

長十八尋。繩ノフトサ一尺八分。廻リ此大繩

ノ内ヲ勝示トス。其四方ニ砂ヲ敷ニ五色ヲ

用。

東。青砂。南。赤砂。西。白砂。北。黑砂。

中。黃砂。染砂ナリ。

此四方ニ四神ヲ祭テ。左青龍。右白虎。前朱


雀。後玄武トスル。口傳アリ。

(頭註)元本頭書ニ。南ナムキニテ。左ニ川アルヲ左青龍  
ト申シ。北ヲウシロトシ。其方ニ山アルヲ後玄武ト申シ。  
南ヲ前トシテ。ウチハレルヲ前朱雀ト申シ。  
シ。右ノ方西ニ山アルヲ右白虎ト申シ。

一小繩。是ハ大繩ノ内ニアリ。指渡二間。圓形

ニ引廻スナリ。繩ノ長サ六尋ナリ。六尋ハ突

合

如此スルナリ。ナリ。他流ニハ九尋ニシテ

行違



如此スルナリ。ニスルナリ。大サハ大繩

ニ同シナリ。小繩ノ内ニ全ク黃砂ナリ。惣  
シテ小繩ノ内ハ砂ヲ堆ク入テ。繩一盃ニス  
ルユヘ小繩ヲ埋ムト云ナリ。又伏スルトモ  
云ナリ。大繩ノ内ハ砂繩半分ユヘ置クト云  
也。

一御成ノ棧敷。或七十二間ニ四十間。或四十二間ニ四十間。嚴令ヲ窺ヘシ。

東西間五十二間。尊キ繪皮葺也。

南北間卅三間。

南面ノ中央ヲ以上壇トカマヘ。大將ノ御  
座トス

御廉。

四季ニヨリテ綠ノ色チ  
改ム。青赤白紫ナリ。

一犬塚口。是ハ埒ノ坤ノ西ニアタリテ明タ  
ル口ナリ。犬ヲ引入ル口ナリ。

一射方口。射人往來ノ口ニテ。坤ノ南ニ明ル  
口ナリ。又巽ノ南ノ口ヲモ射手口ト云。同シ  
心ナリ。

他流ニハ物陰口トイフ也

一物掛口。埒ノ巽ノ南ニアリ。イツレモ轅門  
ノ心ナリ。

一日記役所。二間四方峯形立テト云テ。頻ニ  
ホウキヤレタ

屋ヲスルトニスルナリ。四方取放シナリ。昔  
ハ正面ノ脇ノ棧敷ヲ用ユト云説アルハ非ナ  
リ。上古ヨリ今ニ至ルマテ。埒ノ北ノ方良ニ  
當テ立ルナリ。

右馬場方角取。諸家大同少異アリト承リ  
ス。

一貴人口。高貴ノ人馬場ヘ出入ノ口ナリ。常  
ハ不開之。

一見物棧敷。北ノ方ニ南ヲ正面トカクル。但埒  
ヨリハ九間退クナリ。東西ヘモ棧敷ヲ心マ  
カセニカクルナリ。惣シテ棧敷ノ後ノ方ヘ  
ハ。長ク假屋ヲ作り。面々ノ倍臣是ニ番ヲツ  
トム。棧敷コトニ入口ニ面々ノ木戸アリ。埒  
ヲカマヘテ。左右ヲ結切。虎口ノ如クニスル

ナリ。此小屋ハ皆々大名私ニカクル事ナリ。  
一射手假屋。西南坤ニ掛ル。射方三十六人。  
三ツニ分テ馬屋モ其後ニ作ル。其假屋ノ前  
南ノ方ヘ寄テ。假屋ヲ構テ。是ヲ諸役所ト  
ス。タトヘハ射手ノ装束所ノ類ナリ。

此三ヶ條。新田相傳ノ寸法ナリ。當家專用  
之。他家少々異アリ。

# 一 飴ノ具。

## 日記役所。

二重クリノ檜ノ臺。金銀ノ箔ニテ包ミ。青  
黃赤白黒ノ染餅ヲ重テ。一重コトニ作花  
四季ニ。ヲ四方江タレ。中央ニ立ル。其下ニ  
カハル。小四方ヲ以<sup>シトキ</sup>粦<sup>アラヒヨネ也</sup>ヲ供ス。餅ノ臺凡幅一尺五  
寸六角ナリ。高五尺。又三尺ナリ。餅サシ  
ヲタストコロ八寸。厚サ二寸二八十六ノ  
神道ヲ表ス。木瓶子二ツ桐ニテ造ル。本地  
ナリ。金銀ノ泥ニテ鶴龜ヲ描ク。花<sup>紙</sup>

テケ様ニ  
スル也。折シテ口ヲシタム。體ヲ入ル、ナ  
リ。是ヲ北ノ方ニ南ヘ向テ飾ル。料紙硯。  
本地ノ机ニノセテ。虎ノ文鎮ヲ置。木瓶子  
ノ前飾ル。

幣所。中央ノ左右幣二基。八角ノ竹筒ニ  
ノセ。龜甲ノ臺ニ載ル。東ヲ青幣。西ヲ白  
幣トス。幣串□□□□寸幣四下リ。幣振。  
帳役北ヲ後トシ南ニ向フ。幣振。左。帳役。  
右。兩人列居ス。蓋シ艮ノ方ニ。後方ヲ背  
テ着ク。是御前ヲ敬スルナリ。

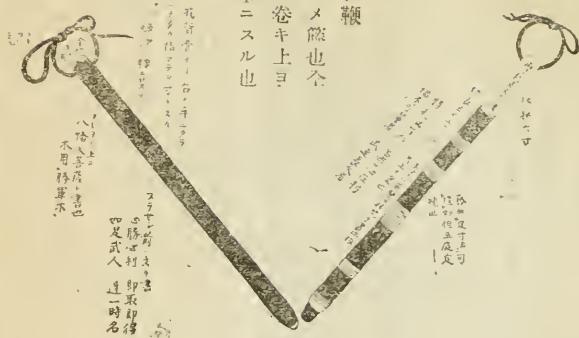
箭飾リ。南東西此三方ノ埒ノ上ニ。墓日  
ノ矢ヲ挟ム。一方ニ十二桁アリ。每桁四緒  
ニシテ四所ニ掛ル。四々十六筋ナリ。十二  
桁合テ百九十二筋ナリ。三方ノ都合五百  
七十六筋ナリ。

## 一 備具之事。

勝示。廻リ色砂調事。

赤砂 光明丹三斗  
細砂貳斗  
中 金箔二百枚。  
白砂 石灰一石  
銀箔二百枚。  
細砂一石。  
紅粉二斗。

喚次ノ鞭  
スリコメ篋也全  
ク籐ヲ卷キ上ヨ  
リ黒塗ニスル也



青砂 青黛三斗。ロクセウ二斗。  
石灰三斗。細砂五斗。  
黄砂 金箔五百枚。黄土二斗。  
細砂一斗。石灰一石。  
黒砂 石灰ヲ黒ヤキニシテ墨ヲ入レ。  
金箔百枚入六斗。細砂六斗。黒胡麻一斗。  
撿見ノ塗鞭。黒スリ所々籐アリ。熊柳ナ  
リ。  
行騰弓。小手鞆弓。轆馬具等之事者。例式  
之事ナレハ。別ニ不及注者也。  
弓。  
重籐。蛇形弓。二所籐ニテモ三所籐ニテ  
是ナリ。モ用之。式ノ籐ヲ用ルナリ。蛇形弓常ニ存  
スル事ナレハ不及委述之。  
但晴ノ犬追物右ノ如シ。大概ノ時ハ何ニ  
テモ風流ナル的弓ヲ用ルナリ。  
馬ニ泥障ヲ不差。馬幕ヲ用ル。古法ナレ  
共。畢竟騎射ノ稽古。軍中ノ試術ナレハ。  
泥障ヲサシテ乗ルヲヨシトスヘキ乎。故  
殿被用之。予モ亦從之。葛籠切付ヲ用來

ル。力革ノ事常ノ馬トハ少々違ヘシ。騎射ノ法ニマカセ。鞍ノ尻ノ間透事。凡四寸三分タルヘシ。

幣ハ檀紙ニテ切ナリ。凡廣サハ八分ツ、ニテ。八下リニ切ナリ。是二枚ナラヘテノ

寸法ナリ。例ノ幣ニ替ル事ナク串ニハサ

ム。串ノ長二尺六寸。(アツサカ)太サ五分。木ノハ、

一寸ナリ。青白二本ナリ。手札挾裏表共ニ

朱スリ。長一尺二寸。廣八寸ナリ。犬射墓

目。羽ハ眞羽。樺矧ニシテ白簀。筥ハ次筥

ヲ用。墓目ハ栗色ナルヘシ。故殿ハ交矯ヲ

用玉フ。走羽ニ鷹羽ヲ用。外掛羽ニ眞羽ヲ

用。弓摺羽ニ染羽ニテアリシナリ。此交矯

ト申事ハ。抑犬射矢ヨリ外ニハセスト承

リス。何程ニ好タル交羽ニモ。一羽ハ眞羽

タルヘシ。本色ノ羽ナレハナリ。墓目鐙人

ノ强弱アレハ。定カタシ。大カタハ五寸七

### 一裝束

寸九寸。昔ハ一尺一寸モアリシトナリ。犬ノ死スルハ甚不吉故。隨分鐙ヲ大ニスル事ナリ。強弓ニ小鐙ハ決シテ死スルモノナレハ。力次第ニ大鐙ヲ詮トスルナリ。然レトモ是モ力ニ合ハヌ鐙ハ弓ニモツリ合ヌ故。矢落スル事アルヘシ。心得スンハ中々可有不覺事ナリ。

檢見一人。騎馬。大紋立烏帽子。太刀。刀。扇。アツイタノ裝束。法師ナレハ燕尾巾素絹。

遠見。右ニ同シ。近世ハ無之。

射方奉行。烏帽子。素袍。少刀。のしめ。同服ノ侍四人ヲ從フ。

日記役。烏帽子。素袍。少刀。のしめ。

幣振。童子二人ナリ。童直衣ヒトヘサシヌキ。末廣髮ヲタレテ。金箔ノ小モトユヒ作り。肩ハクロ

メ。時宜ニヨリ。同朋ノ若手勤ル時ハ。水干ニエンヒナリ。

犬カケノ者八人。烏帽子ニ。十徳。短刀。

竹杖。



犬ハナシ五人。

装束。右ニ同シ。タスキカケルナリ。

犬下知二人。半臂ニ小ハカマ少刀。

犬牽八人。小袴ハカリナリ。

射手三十六騎。

烏帽子。素袍。官位アレハ。カリキヌナリ。カリキヌ本來御狩ノ

タメナレハ。必可用之。故殿狩衣ナリ。三條殿ニ承ルニ。狩衣ハ袖チシホルタメニツユアリ。ソノ時自由ノタメ肩チアケタリトソ。烏帽子ハ折タルハ見ルカタチアシ。平禮可然也。

下襲染物。

少刀。

木ナリ。カサリハ本式ニシテ。落馬ノ用意ナルヘシ。

スワウナレハ。左ノ肩ヌク。カリキヌハン

レニ不及。弓。小手。墓目ヲ一筋弓ニ取ソ

ヘ。又腰ニサス。二筋ニテモ。三筋ニテモ。右ニ竹根ノ鞭。

緒アリ。腕ニカクル。鹿皮ノ行騰。沓。

喚次。

騎馬大紋。風折。烏帽子。唐織。少刀。竹根。ノムチ。

矢取三十六人。烏帽子。小素袍。少刀。

檢見。喚次ノ口取二人。小素袍。亂髮ヲ

金紙ニテユウ。少刀。

見物衆。大紋素袍以下ナルヘシ。

用意ノ次第。

一兼日召其家傳正者。來何日可御覽犬追物<sub>ヲ</sub>之旨仰之。奉<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>訖。定其地後日於何所可備御覽旨申之。有進物。賜物無方量。

一奉之人命家臣故實之輩。評議之タトヘヨク

覺申事モ。猶以家ニ傳ル記錄ヲクリ。古

例ナリトモ。時ニ叶サルハ省キ。當時宜キモ

故實ニ背ルハ猶古例ニ從ヒ。熟鍊スヘシ。大

禮ナレハ不審ハ幾度モ相正シテ可入御覽。

一或家ノ說ニ。先日記所ヲ建ル。是弓箭神勸請

ノ所ナリ。次御覽所ヲ建。次ニ馬場ヲ作ル。

是敬君ノ心也<sub>ト</sub>。當家ニハ先馬場ヨリ築シ

ム。是本場ナリ。次ニ御覽所。次ニ日記所ナ

リ。心得アル事ナリ。

一馬場成就ノ時。直ニ令一見。祠官ヲ從テ祓ヲ

ナサシム。其祓ノ詞等ハ。祠官ニマカスヘ

シ。此方ヨリ可沙汰ニアラス。咒文ヲ此方ヨ

リ沙汰スルハ無用ノ事也。

一日記所ノ神體勸請ハ。其日ノ朝祠官ニ祭ラスヘシ。興行終テ。神靈歸納ノ祭。是亦祠官ニマカスヘシ。

一御覽所ノ祈禱ハ。願ヲ捧。御手ノ祠宮ニマカスヘシ。自此方ハ可有遠慮。

一用意之諸具。何モ新ニ設テ吉日ヲ撰。祠宮ニ祓ヲナサシムヘシ。

一相手組前々ヨリノ例ヲ引テ定之。

一手切ナラハ十二人。三手射ナラハ。三十六人名字ヲ記。先進上スヘシ。其人々ニモ可申通。

一幣フリノ童子兩親アルヲ用ヘシ。小兒ノ事ナレハ。兼テ習ス事第一ナリ。

一御覽ノ事被仰出ヘキ。内々ノ沙汰アラハ。還而自此方可入御覽。相願事故實也。

一犬ノ寸法ハ。例式ノ事ナレハ。不及注之。

一裝束ハ隨分風流ナルヲ好ヘシ。檢見。遠見。喚次。何様ノ染物織物也ト承合テ。ワレニ紛レサル様ニ心得申事肝要ナリ。四季ノ模様アル事也。

一此事ニ預ル人々。三日不犯ノ神事タルヘシ。最不可近僧尼也。

一日記役人書法ニ達シ。弓馬ヲ能知ル者ニ可被命。檢見ハ其人ニ陪シタル事ナルヘシ。

一何モノ裝束。弓箭。馬具。射手。奉行。喚次。檢見三日前立合無禁忌色哉。可相改也。

#### 作法次第。

一當日未明預リノ頭人場所ニ至リ。晴天ヲ見極。今日不可有御延引ト存入ル時。勝示ノ色砂ヲ敷スヘシ。扱馬場掃除可及一見。次奉行ヲ招。諸役人ノ着到ヲ聞届。御成ヲ待ヘシ。

一遠見今ハ絶ハ馬場ヨリ五町ハカリ外ニテ。警固衆ヲ掌リ申事ナレトモ。近世ハ其式絶斷



一大名以下着座。

一御成御家門等着座。

一執權以下近臣伺候。

一警固衆圍前後。

一召預<sub>リ</sub>之頭人御對顏有。御詞。于時頭人進櫓

看折櫃等。可依于大小身。

一仰可始犬追物旨承之而退

一於此所有惣詔

一次二司馬故實者一兩人進於御座之右是應

御尋之役也

此則從前何之故實者一乃罷立而從也

之方ニ銚久ハ藥ヲ三ツ折此三ツハ藥終テ

言行其夕ニ延之某ニ行山上杜旁ニ坐ハ

水手

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一次ニ射方奉行二人。埒西南ノ戶外ニ徘徊ス。

具侍四五人。

一次二犬カケ八人。犬放五人。犬下知二人。六

牽八人相進么。

一次二十六騎。射手進出。此人様ノ事上手六

上手八南。中手八西二

下手

○

○+1  
○+1  
○  
○+  
○  
○

御前之方

六

上子南

○ 卷一

中予

十  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

○○○○○○○○○○

000000600000

立。又上手六騎。下手十二騎南ヨリ入。上手ハ南。下手ハ東ニ立。此時檢見馬ヲ進テ乾ニ廻リ。喚次ハ良ノ方ニ扣ユ。是ニ從テ上手ノ十二騎分チ從フ。是ヨリ前檢見。喚次埒江入ラサル時。一旦下馬シテ入。勝示ノ邊ニテ北ニ向ヒ拜禮ス。三十六騎モ皆々下馬ノ拜アリ。悉外ヘ出テ。乘馬シテ入ル。一騎コトニ矢取一人從フ。

番組 立樣

一番二番ト組。 大繩ノ回リ。北ノ端ニアリ。  
 三番四番ト組。 大繩ノ回リ。南ノ端ニアリ。  
 五番六番ト組。 一番二番ノ南ニアリ。  
 七番八番ト組。 三番四番ノ北ニアリ。  
 九番十番ト組。 五番六番ノ南ニアリ。  
 十一番十二番ト組。 七番八番ノ北ニアリ。  
 一三五七九十一ノ六騎。 馬ノ頭西ニ向。

二四六八十十二ノ六騎。 馬ノ頭東ニ向。

而後馬ヲ入違テ立ルナリ。此時喚次ノ馬ハ日記所ノ東ニアリ。檢見ノ馬ハ勝示キハニアルナリ。

一次ニ檢見誰カ候哉。誰カ候哉ト二聲喚フ。クチ 櫛

ノ者ヒサマツイテ。櫛何某候ト申テ。馬ノ口ヲ取。檢見下馬ス。扱小繩キハニ進ミテ。北ニ向ヒ拍手ヲ打テ。心中ニハ八幡宮ヲ念シ奉ル。時ニ南ノ十二騎。東西ノ二十四騎悉下馬スルナリ。檢見馬ニノリ。大繩ノ内ヘ入ル。射手三十六騎モ馬ニ乗ル事ナリ。

一犬下知。右ノ作法ノ間ニ用意ヲナサシメ。犬牽ニ命シ。埒外ヨリ犬ヲ入。五人ノ犬放ニ渡サシム。犬放等是ヲ埒内坤ノ方ニ置ナリ。

一檢見馬上ヨリ鞭ヲ拔テ云。

御犬や候やラン。

一犬放答テ云。

御犬コソ候へ。

此時十二騎馬ノ頭ヲ立直シ。大繩ニ添テ矢ツカイヲナス。

一檢見云。御犬牽入ヨ。

一犬放答。ウケタマハリ候。

犬一疋小繩ノ内ヘ牽入。

一犬放大音ニテ申ス。ハや御犬ニケ申ニテ候。

一檢見ノ云。早クコソ放テや。

犬放鎌ヲ腰ヨリ取テ。犬ノクヒナハヲ切テ放ツ。射手アタラヌ様ニ射テ。此一疋ハ皆々射ハツシテ。ニカスヲ故實トス。是ヲノカレ犬ト號スルナリ。

一次ニ檢見重テ云。御犬やアル。

一犬放申云候物ヲ射方弓矢ヲカマフ。

一檢見云。牽入ヨトク牽入ヨ。

犬放一疋。小繩ノ内ヘ入。毎度如此ナリ。

一犬放ノ云。御犬コソニクレ。三返云ナリ。

一檢見云。早ク放テヨ。ナハ索ヲ切テ放ツ。

一十二騎思々ニ射ル。其矢所名所故實アリ。

此時介添ノ矢取カケ。廻リ矢ヲ取テ與ル事ナリ。

繩キハヲ射廻ス故。三ケ度マテハ勝示ノ内ニテ射ル故實ユヘ。外ヘノカル、犬ハ追サルナリ。

一第四度ヨリ後ハ外犬ト號シテ。タトヘ勝示中ニテ射アテタラン犬ニテモ。必勝示外ヘカリ出シテ追メクラシ射ルヲ。檢見射テヲケト詞ヲカクル。ニ四騎交リ。ハヤツテ馳射ニスルナリ。

殘八騎ハ大繩廻リニ馬ヲ立テ。進退サセテ。四騎ニ射サシムル也。又中手下手トモ。我馬前ヘ來ル犬ハ追出ス事ナリ。

一檢見馬上ニテ下知シ。犬カケ等竹杖ニテカリマハス。

一最初ニ射オフセタル者馬ヲス、メ。勝示キハニヨル。檢見射手ノ姓名名乗ヲ高聲ニ云フ。  
 一喚次是ニ向フテ承リ。記者ノ前ニテ下馬シ。  
 三返告ル。

一童子應々ト云テ。幣ヲフル。一人ナリ。

一執筆日記ニト、ム。

一喚次重テハ馬上御免候ヘト云テ退ク。依之

ニケ度ヨリハ。片鎧フミハツスハカリナリ。

タトヘ矢所ヨシト。射手ハ存スレトモ。檢

見ノ心ニ應セヌハ。射手置トテ用ヌ事ナ

リ。犬ノ腹骨身無腹。ノハシ也。頭。足。頬。尻ナトハ快

シトセヌ所ナリ。檢見射手論義アレハ。故

實人御棧敷ヨリ下リテ聞クナリ。

一ツカレタル犬ハ。犬捨ヨト云テ。犬カリ等ニ

異口ヨリ出サシメ。別ノ犬ヲ入テ射サシム

ルナリ。

此上手組犬七疋ナリ。

一今度ハ中手十二騎ノ射術ナリ。上手ハ南ニ進。大繩廻リニ至ル時。西ノ中手等坤ヨリ南ニ至ル。

一東ニアル下手十二騎。異方ニ向ヒ。南ニ立。是ハ中手ノウシロヨリ。西ニメクルナリ。コ、ニテ上手射終レハ。東ニ移ル故。上手ノ檢見喚次ハ異口ヨリ退出スルナリ。

一中手南ニス、ミ。中手ノ檢見共ニ大繩ノ間ニ並フ。相手組万事前ノ如シ。

一檢見犬ヲヨフ。作法前ニ同シ。

一檢見。喚次。日記。幣振悉如前式。

一中手ハ二ケ度マテ犬ヲ勝示キハニテ。十二騎思ヒ々々ニ射テ。三ケ度ヨリ外犬トスル事如レ前。是モ七ケ度ナリ。

此中手モ犬七疋ナリ。手組ハイツレモクジトリナリ。

一其次下手ノ術ナリ。檢見。喚次モ又代ルナリ。

一下手各南ヨリ大繩邊ヘス、ム。

一西ノ上手各坤ヲ經テ南ヘ移ル。

一東ノ中手。各巽ヲ經テ上手ノ後ヨリ西ヘ行並フナリ。

一下手各射術ヲ施シ終ル事如前々。

一射終テ下手東ニ立。於此皆如初座。

一於方示側。檢見拜正面退キ。於巽ノ口下馬。

一見之三方ノ三十六騎下馬。弓杖ナツクナリ

一卅六人沓ヲ脱右ニ持。行騰ヲ引返シテ一所

ニトリソヘ。左ノ行騰ヲ弓ニソヘテモツナリ。作法口實アリ。

一東十二騎及檢見。喚次。巽戸ヨリ退出。

一西十二騎。坤戸ヨリ退出。

一南ノ輩。坤戸ヨリ六騎。巽戸ヨリ六騎。分レ退クナリ。各如初入

式。下手モ又七疋ナリ。

一日記ノ役人。幣前ニ伏シ。一拜シ。進テ三手

ノ日記ヲ近臣ニ傳テ献ス。

一御覽ノ時。御犬追物ト日記ニ書也。

一稽古ノ時。御字ヲ略ス。

一還御ノ式常ノ事ナレハ不記之。

右ノ次第ハ。古法ニアラス。鎌倉殿ノ犬追物

ハ。甚是ト違タレトモ。當時ノアリサマヲ書

ノスルモノナリ。鎌倉殿ノ次第ハ。別ニ寫置

ノ間。不載于此者也。故實ト云フハ。古來ノ

式ナルヘキ乎。

(原本圖在此間。今移置於後)

右兩圖ハ。當代ノ用ニアラサレトモ。考ノタメ

ニ書付ルモノナリ。口傳モ受ヌレトモ。別ニ家

記ニモ見ヘタル事故略之。此古圖ノ通ノ犬追

物ニテハ。ヤ、モスレハ犬射殺サル、事アル

故。イツレノ御時ニカ。今ノ様ニ勝示ヲ中ニ。

圓形ニシテハ射ル由ナリ。雖然弓馬ノ稽古ニ

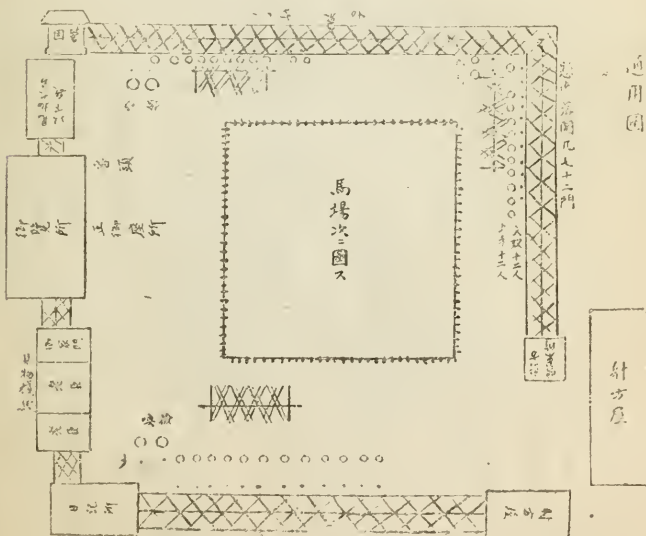
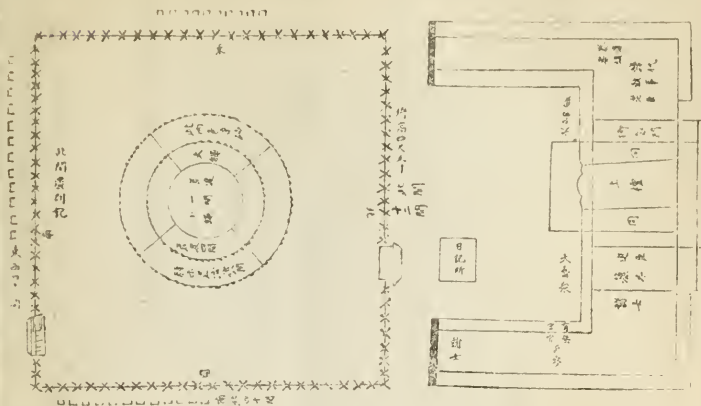
ハ。古圖ノ方勝レタルト覺ルナリ。但鎌倉右大

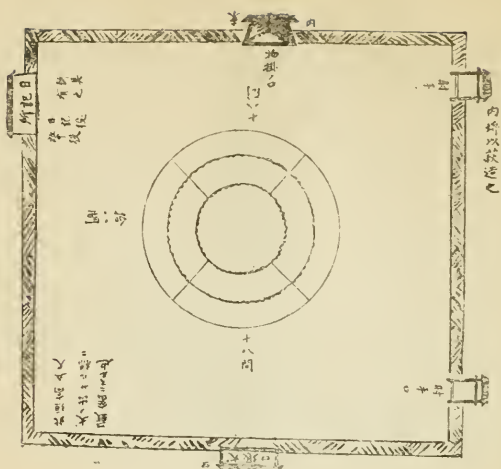
臣殿ノ犬追物ハ。是ヨリ輕シ。是モ其後ノ事ナ

ルヘシ。

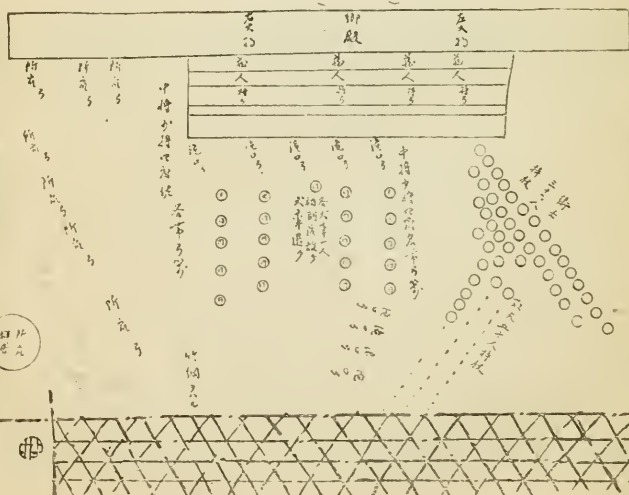
矢所。ツボ喚次ノ詞

他流所傳之圖爲後勘記



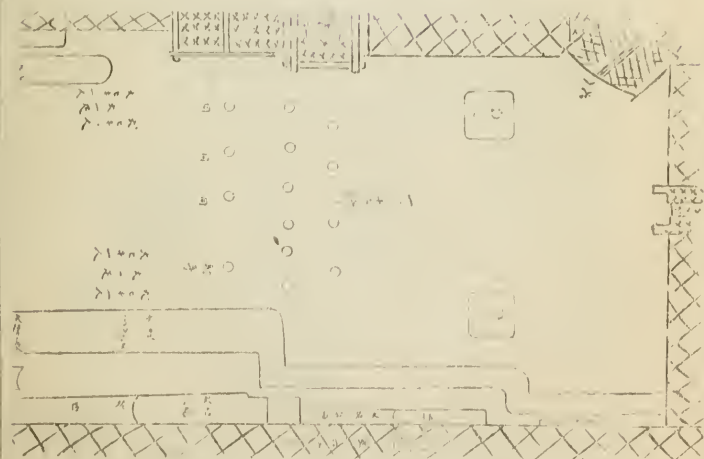
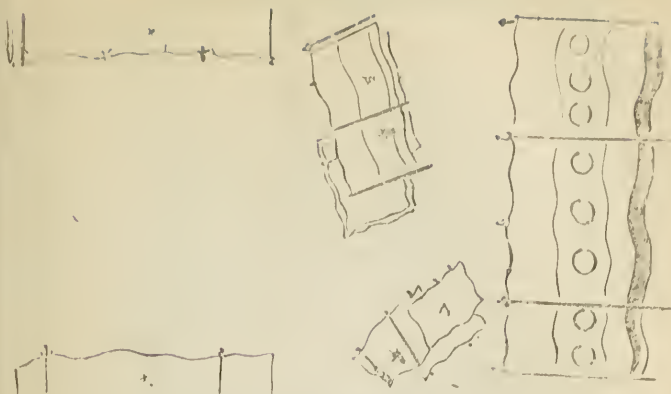


禁中大衙圖

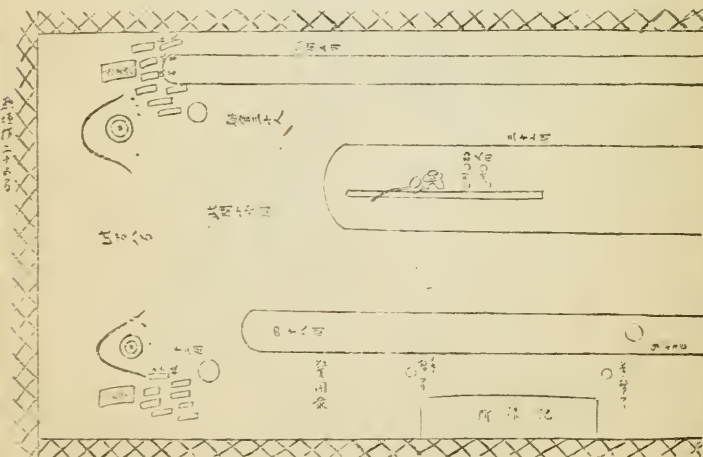
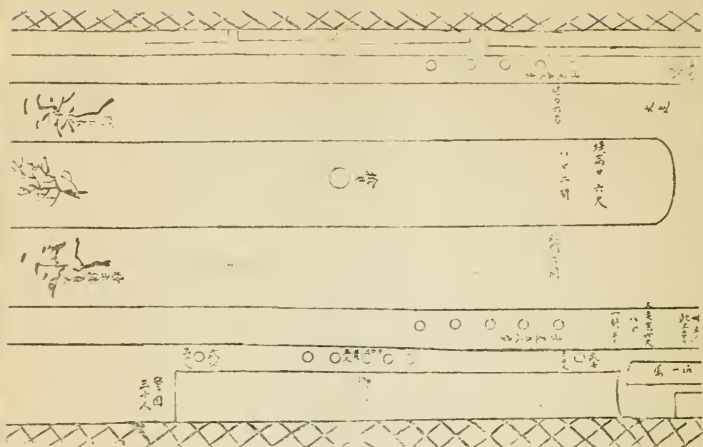


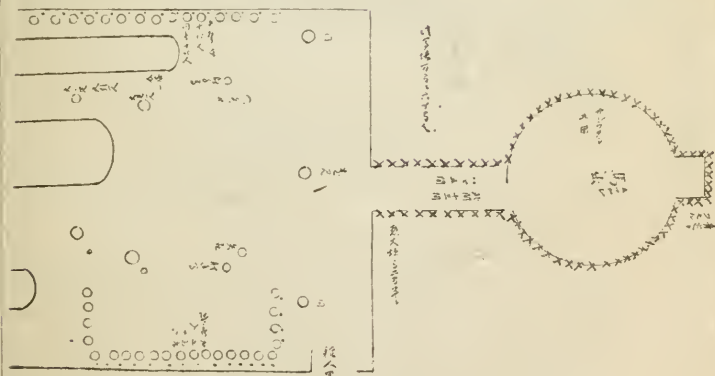
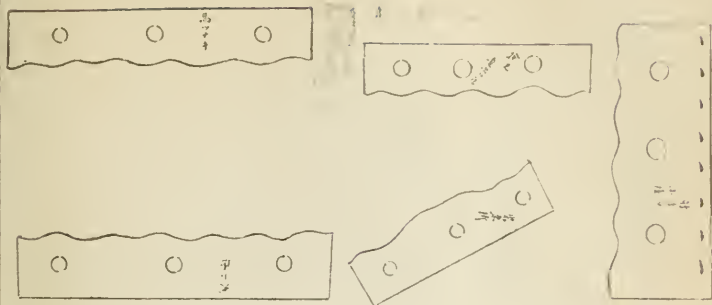


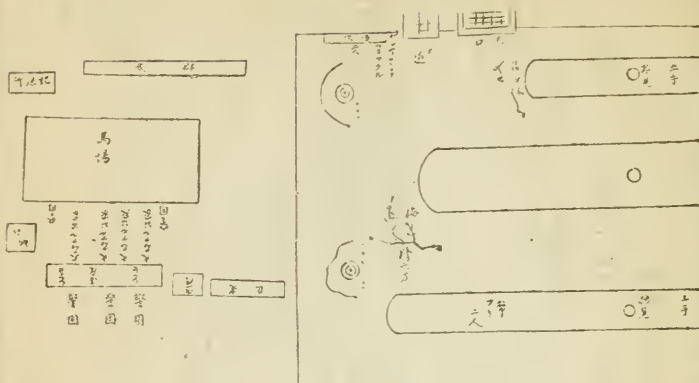
後六朝書之書法考











執筆へハ喚次傳へ。喚次へハ檢見傳フ

弓手先。鹽手先。廻頭。向フ犬。追犬。

妻手先。押捻。犬頭。手下。由木先。

綱スリ。月影。  
小繩キハ。  
鎧先。

日月骨。胸先。  
衣下。  
ツナ下。フトモ、子。

袖カヘシ。膀示外。ミハラナシ。三マイ肩。

メテ筋違。外ノ犬。メテヨコモノ。

弓手スチカヒ。追サマ。

犬追物之始リノ事

條葉集ニ云。先祖ノ遺命ニ云。犬追物ハ仲哀天  
皇御宇。熊襲御退治ヨリ事起ルトナリ。源家ニ  
申承ル事ハ。一條院御宇。賴光朝臣ノ御一族申  
行ル。是始ナルヘシトジ。今按スルニ。此犬追  
物仲哀天皇ノ御宇ニ事起リ。八幡太神宮ノ御  
時。全ク興行ヲナス事ナレハ。源家ノ氏神ノ始  
玉ヲ御事ナリ。源家ノ弓馬ハ全ク此犬追物ニ  
止ルナルヘシ。依之鎌倉右大臣家御時。始テ武

家ニ行ハル、ナリ。平家治世ノ時。犬追物アル事ヲ聞ス。

後醍醐天皇ノ御宇。小笠原貞宗奏狀ヲ獻シテ。犬追物再行ノ願ヲ立ツ。是亦源家ナレハナリ。近世行ハル、所。畠山。土岐。細川。小笠原。

一色。志波。當家ナトノ外。不被命之モ。源氏ノ外ニハ沙汰スマシキ所以アル故ナリ。伊勢ノ家ハ別儀ニテ。記錄日記ヲ傳フル故。是ニ加ハル様ニハ成タリ。貞應元年二月六日於將軍家犬追物アリ。駿河前司義村檢見シ。島津兵衛尉忠義申次ヲ勤。小山氏家。横溝等ノ人々射手トス。是全將軍家ノ御好ミニアツテ。島津ノ指圖ニアリ。殘ル人々島津ニ傳ヲ得テ勤シトナリ。向後トテモ他姓ノ人ニ被仰付儀アラハ。伊勢ハ各別ノ儀トシテ。訴申ヘキ事ナリ。必源家ノ將軍ニアラサレハ行ヒカタキ事ト。父祖被申傳訖。

一鎌倉將軍家犬追物圖別ニ有之故。不載此者也。只當時興行之様子計畫留之者也。

一一手組之事別卷ニ有之故。不載之者也。

右一卷者。宗源院殿之記也。此外直ニ犬追物ニ御逢之時之日記一卷。可木屋方御相傳候旨。文明ト有之候。雖然只其時之様子委キ計ニテ。今日興行之便にあらすと思召候哉。重而此一巻御清書候而。被傳于子孫者也。堅不可出闕外者也。

致豐謹而寫之。

右一卷山名家秘藏之卷本ヲ以書寫校合了。于時文政十  
一子のとし十月十日。

搞忠寶

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百七十四

武家部二十

犬追物檢見記

犬追物檢見條々

勝示イ

一檢見打寄る時ハ。方士より外にて。馬に乗りて射手をつれて可打寄。縦射手みな不出共。貴人出られハ。檢見打出て。繩の違目に扣へ。射手の皆打出るを可待。遅く打出。貴人をまたする事びろふの儀也。犬百疋はてハ。鞭を腰に指て打のけ。ほうしの内にて射手と同様に馬よりおるハ也。鞭をは行膝と小袴との間へさすなり。

一檢見の中間二人。矢取の左右のうしろに座して可居也。

一射手皆繩ぎはへ打寄ハ。檢見鞭拔出して。貴人又ハ古射手などに向てはなさせ候ハんと云ひて。繩の内へ可打入也。

一鞭をぬくべき事。手綱を左にかた手綱に取て右の手を前へ廻し。四のゆひを身と鞭とのあひへ入て。其まゝ前へ鞭先の成やうにおしまハして。鞭の緒をうでへハ拔入ずして持也。鞭先のさかりたるも惡し。又一もんじなるもわるし。少鞭先を上て。髪中にすじ

かへて可持也。

一檢見繩の内へ打入ハ。射手皆矢はむべし。其時犬放し御犬にけ候と可喚。三聲喚りたらハ。早はなせと檢見可云。但貴人未矢をもはめ給はずハ。縦犬はなししげくよハるとも。貴人矢をはめ給ひたるを見て。はなさすべきなり。

一外に吉矢コキありと見て。ひかよふと云て後ハ。矢いくつも落よ不及是非。吉矢の方へ打寄。其射手に目を見合て。内の矢ならハ内の矢よと可問。外ならハ外よとも。外候よ共可問。中ならハ中の矢よとも。大引目。又ハ中黒とも。たかの羽とも。黒つはども。染羽とも可問也。矢四も五も落ハ。あれよとも。是よとも可問也。時宜によりて何とも可問也。一繩の内にて馬をひかゆる事。初繩の外より打入たる時ハ。繩の違めをうしろになし棧

敷を前に見てひかゆるなり。後くはいづくにも可扣。棧敷をうしろになしてひかゆる事あるましき事なり。又貴人をうしろになしてもひかへず。貴人檢見のうしろへ打寄る事あらハ打のけて別の在所に可扣也。

一ひかよふと云事ハおそく云也。其謂ハ犬もよくかき。矢もよく落。馬の足も無煩出たるを見て。ひかよふと云間。あながち遅く云へきにあらねとも。おのれとおそくいはるゝ也。射ておけと云事ハ。はやく云なり。是ハ今の矢ハあしく候。二ツ目をとれと云心也。一番に射たる矢を。檢見繩より打出して。喚次に向ひて。すこし鞍に立すかして。なにかしと喚て。さて右へ折て。繩の内へ打入也。是ハ一番に射たる時の事也。二疋目よりハ左へも右へも折て。繩へ可打入也。イニ

一檢見繩より馬を打出してハ。たびことに喚

次に向て。馬をすへきりてかゝへて立すかし。名字を可喚事本也。但たびことに左様なるも。檢見品もなくわろし。時々ハ打通りさまに馬を横にひかへて。名字をよふなり。百疋に二疋三疋ハ名字をも忘れたる様に喚る也。是を檢見のたいはいと云也。か様の事ハ。初心の檢見又年れいなどゆかぬ人ハ。意得ても可有斟酌也。事イ

一檢見ハ打よせざるさきに。先日記請て可見事。讀イためたる義也。射手の名字。官途は。何とも日記のごとく可喚也。但弟子などは日記に殿文字ありとも。殿文字をのけて喚る也。又檢見殿文字喚とも。喚次の弟子ならば。殿もしをのけて喚次ハよぶべき也。

一人の名字をハ。三ツによひかゆる也。一番に名字より官途まで可喚。二番にハ名字計苗氏よぶべし。三番には官途計を可喚也。但同名同苗

官有時ハ。名字計。又官途計よははる事あるまじき也。

一人の官によりてかうの殿と喚事。ことなる賞翫の義也。脊又守又頭

一繩の内へ犬を引入ぬ先にハ。檢見ハ射手の名字ハ喚ぬ也。犬引こめと毎度云ひて。犬はなし犬を請取を見て。さて繩より打出て可喚也。

一繩の内より馬を打出打入時ハ。貴人の前をハ。不打出不打入也。但射手の外へあふて行時。貴人の前として馬をうちよけて打出せハ。毎度矢を見落すなり。其時ハ縦貴人のひかへたる前成とも。馬を打出へき也イして矢の善惡を可見ため也。

一檢見の弟子なりとも。外へあふて行時は打つきて行也。但ふかくハゆかざる也。をとゝ子なればこて。繩より馬をも不打出た見



送りたる計にて。ひかゆる事あるべからず。

一貴人又ハ古射手外へあふて行時ハ。檢見馬の足を出して。射手に打つゞきて可行。犬ついでふさは檢見打ませて。行膝つゞミをうちて。射手のよくあふやうに犬を可出。

一貴人外へあふ時。檢見打つきて行也。吉矢の有時ハひかよふと云て。如何にもうきくと馬の足を出して。繩ぎはにて馬をすへ。切

繩の内へ打入。御犬引こめといひ。さて繩より打出して名字を可喚也。又時々ハ繩の内へ打入ねとも。なわぎはまて打寄て。繩の外にて御犬引こめと云ひても。名字を喚也。是は略義也。度ごとに繩の内へ打入て。御犬引こめと云て。打出て名字を可喚事本也。縦犬はなし犬を請取てひかへたりとも。御犬引こめと可云事法也。

一貴人古射手など外へかゝりて行時。檢見繩

きハへ打歸る時ハ。檢見或ハ馬の口をも引。

或はしりかいなどをなをし。馬を靜ニうルコ也

ちて。貴人を先へやりて。しづくと馬をあゆまする也。但繩ニも貴人有時は。外より打歸る貴人よりはやく。繩へ打入るなり。

一引目尻を取て見るに。いろ／＼あり。吉矢さがりたるかと見分すして。取て見る事第一也。又取て見るまでもなくさがりたる矢をも可入ために。取て見る事もあり。又見るまでもなく吉矢をも可捨ためにとりて見る事もあり。

一さかりてかあるらんと思ひて。見んとする矢を矢取り取て矢を打ふりて出す事有。左様にあらハ見るまでもなく可捨也。のごひて出すも同事なり。

一どきと被射て。犬矢の下にてつきたる時。筈にても引口にて。吉コヒサゲリ疏に落つきて。矢たち



てつきたる犬に。矢たをれかゝりたりとも。其まゝ落ハよかるべし。少もひかれバ。ゑせ矢たるべし。但犬に矢たをれかゝらぬ以前にひかよふと。はやく云たらバ。たをれかゝり。ひかれたりとも可賞矢也。

一犬つかへ入たる犬を。或ハ投いださせ。又ハむかばき鞍を打などしても出さぬ事也。射手も射まじき事也。縦犬づかへ入ども。直ニ馬場へ出たるをハ可射也。惣而犬塚にかぎらず。はうじぎはなどにふしたる犬を。河原の者などに投出させて射る事ハあるまじき事也。貴人など外へなりたるに。犬ついふさバ。檢見馳よせて。行膝つゞミをうちて。弓手へも馬手へも射手の馬のひかへやうを見て。犬の出るやうにむかばきつゞミを打也。一行膝鞍の事。繩の内にも外にても。かた犬有時。むちにてむかばきを打也。うちやうつ

ゞけかけて打ハわるし。少あい有やうに。二三よき程に。ひやうしきこゆるやうに可打也。

一幕かゝる時は。檢見鞭拔出して繩の内へ打入て。引こみより遊はし候へと云事あり。其時ハ射ても不苦。但射ずハよかるべき也。

一御所様あそぶす時。引こみより被遊候へと檢見申まじき也。

一檢見の心得多しといへども。第一射手矢もなく犬も不出來して。しづみたる時ハ檢見馬をもうきくど乗りはたらかして。射手にこと葉をもかけて。射手をひつ立る様に。犬をはなさすべし。又射手そゞろきてはせ廻りて射る時ハ。如何にも心をしづめて持て。犬をはなさすべし。外へ五騎三騎射手あふ時。射手に打付て。馬を出す時も心をしづめてもつてしどくと馬をあつかふ

べし。射手と同様に馳廻り。心をそゞろきて持時は。かならず矢をも見おごす也。此條々覺悟最上。秘説也。

一 検見<sup>ハイ</sup>ひかよふと云て。扱御犬引こめと云て。打出して射手の名字を喚る也。ひかよふとも云ぬ以前に。御犬引こめと云事あるまじき事也。又あれよ是よと云事も。御犬引こめといはぬを。或は馬さくりをけこし。又かせにもふかれて。疏をも越え。繩遠に成事有べし。其時ハ煩もなき繩遠なる矢を可賞。其時繩近なる矢の主。既に矢ハおちつきを賞するにて候。我等が矢は繩近に落て候由申さバ。検見可云様ハ。御矢は繩近ニ落て候へとも。風にふかれて候とも。又馬にけこされ疵付たる矢にて候。繩遠にハ候へども。はたらかず無相違候上ハ。繩遠なる矢を賞申て候と云て。繩遠なる矢を可入也。但どき

く<sup>中</sup>とあたりて。上下にかさなりたる矢落つくさかひに。上の矢ころびて。繩近になる事あらバ。繩近成矢を可賞也。

一本是ヨリ以下ノ卷トス

一 犬にのり。又繩にかゝると見ハ。如何にもはやく射ておけと云也。のる矢無煩。吉さくりにも落つき。又繩にかゝる矢<sup>テ</sup>ころび落バひかよふと云ひて可入也。

一 繩にかゝりたる矢ころび落るさかひに。馬出すとてける事有。是ハたすけて可賞也。但勝負などの時ハ可捨也。されバ古射手などハ。繩にかゝりたる矢ころびおつると見バ。矢に馬の足あたたらぬやうに馬を出す也。

一 序破急と云事あり。五十疋計よぶまでハ。犬あいをもしつゝと例式のごとくすべし。是序也。又五十疋喚たる時分より。七十疋計までハ。犬あいをも少早ク。馬の出し入をも

いそ／＼とすべし。是破也。又七十疋喚たる  
時分より九十疋計までハ。いかにも犬あい  
をも。馬の出し入をもいそぎ。時々ハ馬の足  
をも出して。名字をもよび。もみ／＼とすべ  
是急也アルベシ  
し。又九十疋よびたらバ。以前の序にかへり  
て。しづ／＼とすべき也。但それもはや暮に  
かゝり。又雨などふりつべしき時ハ。百疋は  
つる迄急にもする也。然而序破急と云事ハ。  
未日たかにて。天氣もよき時の事也。雨雪も  
ふりつべしく。犬もはてかねつべしき時ハ。  
初より急にもする也。色々口傳在之。

一檢見水鳥のごとしといへり。是ハ名目也。其  
謂ハ水鳥ハ水の上にいかにも靜にうかみて  
見ゆれども。足にて水をすきもなくかく也。  
そのごとく檢見もうち見ハ。しとやかに見  
えて。心にハ無油斷一大事に思ひ入。氣をつ  
かひ。射手をこと／＼敵におもひなして

する事也。

一矢所を問時ハ。ひかよふと云ひて。あれよ是  
よと云ひて。射手こたゆる時。矢所ハとふ  
なり。まがハす一騎射たる時ハひかよふと  
云て。あれよ是よといはねども。矢所ハとと  
ふ也。是ハ何もくるしからず。惣而矢を所ごふ  
事。矢所不審にてとふ事もあり。又射まじき  
矢所を射たる時。可捨ッため問事もあり。又  
無相違矢をもとふ事もあり。口傳在之。

一檢見外より打歸りさまに。馬のかけ足を出  
して。繩の内へ馳入て。繩の内にてむま留る  
事有間敷事也。外より打歸る時馬の足を出  
さバ。けづりぎは邊にて。馬をすへきりて繩  
の内へ可打入也。

一射手外へあふ時。馬をだし出おくれて矢を見  
おとしつべしき時ハ。繩の内より馬の足を  
出して。繩を馳こしても打出也。但繩の内よ



に問て可賞也。

一矢行膝のすそ又何にても。あたりてひそりて犬によくあたる事有。可捨也。

一馬の尾をへたてゝて。尾ともに犬にあたる事有。わるき矢也。可捨。

一ひかよふと云て捨る矢の事。射手に矢所を問て。答へちかへハ捨る也。又吉矢と思ひひかよふと云ひて入れんとする時。勝負などの時。其矢ハ惡候と。射手中に付て沙汰する時ハ。矢わるけれハすたる也。又繩に不審の矢有。射手おけと云外に吉矢あり。ひかよふと云て繩の矢を打歸りて見るに。さくりほとをも見うしなハ。其矢を可捨。其時ハ内の矢落居せざる上ハ。ひかよふと云たる外の矢をも無力可捨。是もひかよふと云ひてすつる矢也。是ハやまはりの日記にある矢也。

一落馬の時。矢もよく馬の足も無相違時。とハ不問シテナリ

でかなハざる矢をハ。落馬したるものにも可問也。但よき程ならハ問まじき也

一矢一ツある時。繩にてもひかよふと云ひて。

矢を可賞。あれよ是よとハ問まじきなり。但

貴人古射手など手綱をつかひ矢さハやかにたくましく射たる時ハ。矢一ある時もあれ

よとも是よとひとひて可入。是ハよくあそ

ハし候と檢見褒美したる心也。又ハ矢所を

も問へし。これらハまれの事也。秘説也

一繩に不審の矢あり。射ておけと云。その射手

二めを取て外にあふ間。矢なとりそと云ひ

て。外へ射手に打付て出る處に。二ツの矢よ

き時ハ。ひかよふと云ひて。外よと問て。二

めの矢を可入。内に射置たる不審の矢をは

不可及見也。

一繩にて吉矢を射て。未馬の足の不出さき。け

づりぎはより内にて出し合てどきと射る。  
ひかよふと云ひて。けづりぎはなる矢を可  
賞。繩近の射手初に仕候矢。なわ近にて候。  
何ゆへに御捨候そと問時ハ。檢見御馬の足  
我等イ  
たまり候。削りぎはの矢ハ出合て。かくあし  
にて遊ハし候間入申候と可云。但けづりぎ  
はにて。ときと射ると繩の射手馬の足おな  
じ程に出たらハ。繩の矢を可賞也。

一檢見。落馬の時ハ脊をぬき。鞭を腰にさし。  
馬を犬塚のうしろへひかせて可乗也。打よ  
する時ハ如初繩の違目へ打よせ。むち拔出  
して繩へ打入るなり。

一檢見鞭おるゝ事有。其時ハ馬よりおり。犬塚  
のうしろにて脊をぬきて。替かへの鞭を請。腰  
にさして打よせ。如前鞭を抜て可打入也。

## 二騎檢見事

一内外の檢見事。内の檢見ハ例式繩の違目に

可扣。さて射手皆そろひて。跡に外の檢見も  
鞭を拔べき也。外の檢見ハ棧敷の前に日記  
付をうしろになして。繩とかり屋との間に  
十疋よふまでひかへて。扱十疋喚て。其まゝ  
何方へも打よせ扣べし。其後ハ何方へも馳  
廻るべし。削りぎはより外ハ。外の檢見射て  
おかふひかよふを云也。毎度犬より先へか  
け出して。犬を跡に見るやうにひきむかへ  
てみる事本也。又時々ハ跡に行ても不苦也。

一内の檢見矢を沙汰せば。外の檢見は射手と  
おなし様に馬に乗りて可見。内の檢見矢を  
談合せハ。馬よりおりて異見を云べし。外に  
て沙汰の矢有共。内の檢見を喚て沙汰せん  
事本也。但内の檢見。外の檢見に與奪ヨメツして沙  
汰せよとあらは。外の檢見可沙汰也。

一内の檢見よき矢ありて。射手の名字をよば  
ゝ。外の檢見打寄聞て。日記付の前にて喚次



ごく喚る也。

一外の矢吉時ハ。外の檢見みて入る也。其時ハ外の檢見内の檢見に。外の矢よく候と云也。いれ被申候へと。内の檢見云を聞て。外の檢見入る也。

射手檢見事  
之ノ字アルベシ

一射手檢見の時。繩ぎはにて矢代ふる時ハ。十二騎射手の引目を取あつめて。よくませて二ツに分て。一分ハまつ置て。一分をくじらの矢代ふるごくうしろへ廻し。一ツ、をくべし。扱置たる引目を又とりて。一ツ、置べし。

一射手檢見する次第ハ。一番の矢代の人。一番に檢見をする也。一番の檢見の人。一番にしたらバ。其次の檢見矢取のうしろへ行て。弓引目をおきてたる口よひたらハ。打よせてすべし。以前の檢見ハ今出る檢見をおそる

ゝ様に。打のけて矢取のうしろへ行て。射手具足をして可出也。

一射手檢見の時の馬ハ。以前犬射たる時の馬にてすべき也。別の馬にのりかへてする事あるべからず。

一射手檢見の時の鞭の事。檢見鞭に取替てする事不可有。已前射手にて持たるむちの指かけを。緒にまごひてする也。

一射手檢見の時紐の事。スアフノヒモ也射手の時とめたるひばをほどきて。じきにむすびてするなり。

一射手檢見の時。矢代ふりて日記に書時ハ。關次第と書也。一番の檢見の人を檢見の所に

何番

かく也。又賞翫の人あらハ。なんはんめにもあれ。賞翫の人を檢見の所に可書也。されハ射手と檢見と二所にひとりの名字を書也。一射手檢見をは。一番の矢代より十番めまでする也。十一十二の矢代の人ハせぬなり。

一 射手檢見の時。本にハ時と云字までかたに付る也。棧敷の前にて矢代をふる時ハ、棧敷の左の妻よりおき初るなり。引目ハ繩の方へ曳べし。棧敷と矢との間弓杖二杖計をくべし。

一 棧敷の前にてハ腰さしをも取て人に持せ。ゆがけをも取るべきなり。

一 外よりかき歸りたる犬を。繩の内にて射る時。打矢出來て沙汰する時。繩に弓のさゝゆる事あらハ、繩をのけて可沙汰。又小繩にさゝゆる事あらハ、繩をのけて可沙汰。又小繩にさゝゆる事あらハ、そのやうによりて。何とも可沙汰。其謂ハ小繩の事きこのけらるましき間。檢見はからひよき様にさたすべし。

一 繩の内にて外にて射る様に射る事有。其時は檢見外候よご間事あるべからず。是よご

もあれよごもどひて可入也

一 檢見矢を沙汰する時。弓髪搔を射手に請事。未馬よりおりざる時。檢見の中間にても。人の矢取にても。弟子其外心安親類あらハ可請。左様の者なくハ。何の射手にてもあれ。見はからひて恐れ入たる事に候へごも。御弓髪搔を借給候へご云ひて取よせべし。馬よりおりて後こひたるもくるしからず。檢見馬よりおりて。馬に乗たる射手に直に請事ハあるまじき也。矢を沙汰しはてハ、弓を左の手に持。右のすあふの袖にて。弓の浦苦の方より本はすまで弦をこきさけて。すなをとおとして御弓畏入候とて返して。さて馬に乗。矢あまた有時ハ。繩近よごもあれよごも是よごも射手にとひて。喚次にむかひて。なにかしとよばはるべし。又沙汰したる矢一はかりの時ハ。とはでもいるゝなり。



一 檢見繩ぎは沙汰する時。繩にひかへたる時ハ。繩の内にて馬よりおりて。繩より外へ引出させて沙汰する也。又繩より外へ馬打出て。おりても沙汰する也。何も不苦。繩より外にて。馬よりおりて繩の内へ馬をひかせてをく事有まじき事也。

一 檢見も射手も。主其外貴人落馬の時ハ。馬を打のけ。脊をぬきて。頓而脊をはきて馬に乗べし。吉矢を射て馬を出しさまに。射手の落馬する事有。其時射手貴人にて馬よりおるべきならハ。喚次に名字をよひて後。打のけて馬よりおるべし。矢を入るまに落たる射手。頓而馬に乗りたり共。檢見ハ馬より下て廳面のりて。繩の内へ可打入也。

一 芝の上にてハ沙汰あるべからず。つくかと思見ハ可捨。引かと思見ハ可捨。是ハ芝の上にての事也。縦芝の上なりとも。雪のふりたる時

ハ可替也。

一 濡れ犬と云ハ。縦令堀川などへも落人。又ハ雨にもぬれたる犬の事也。此時の引目尻を取てみるに。三方濡れハ可賞。二方ぬれハ可賞。一方ぬれハ可賞。但二方なりともぬれたる所。引目のどうへはけにて引たるやうにぬれハ可賞。引目しり皆ぬれハ不及申吉矢也。雨のふる時の事ハ。射手具足ことくくぬる間。濡れ犬のさた有まじき也。

一 檢見捨候と云事有。暮かゝりたる時の犬など。外にて矢もなき時。勝示イ方士のきはへふかく射手のあふて行時の事也。縦暮かゝらずとも。初心の射手など。馬場内を追廻る時。一度二度可云也。捨候と云ひて後ハ。たとひ吉矢有とも可捨也。

一 矢もなき時射てをけと云事あり。貴人或ハ古射手など。暮にかゝりたる時。外へかり

て行時。犬によくあふて。射つへしく見ゆる時。檢見矢もなきに射ておけと云也。其謂ハ内に矢ハなく候遊ばし候へと。檢見射手におしへたる心也。是は當流異なる秘説也。千疋二千疋にも無左右云まじき事也。

一檢見可意得次第。貴人古射手など矢さはやかによく射たる時ハ。よく被遊<sup>てイ</sup>へく候と。檢見思ひたるやうに見せて。ひかよふをもうきく<sup>と</sup>と云ひ。馬をもいそ<sup>く</sup>と打出して。名字を可喚入。弟子さしてもなき。射手射様もわるく。小引に射たる時ハ。例式の躰にて。其矢を可入たびごとに。か様にあるべきにハあらず。檢見の心得なり。

一たる口の矢をも打矢あらハ可沙汰。遠近十文字にても打て馬に乗。是よとも。あれよとも問て入る也。其時ハ御犬引こめとハいはぬ也。

一越たるかと見ゆる矢を引目尻を取て見る事あり。築地屏など物そへにて射たる時。今の矢ハ越たるかと不審の時引目尻を取てみる也。引目尻に土少もつかバ。越たる矢にて可捨<sup>ナルベシ</sup>。少も土つかずば可賞。さかりたる矢の外に。引目尻とりて見る事。此矢ならでハ有間敷也。

一三ツが一ツと云事。外にて檢見馬を出しおくれて。矢落の善惡をも見分ざる時ハ。弓をよく引たるも見へ。矢音よく聞へ。射手矢答をするを。三が一と云也。此内一もあらハ御矢ハよく候つるか。と射手に可問。射手よく候とこたへバ。さらバ御誓文候へと檢見可云。其時射手ハ八幡も御照覽候へ。よく候と可云。然ハ檢見矢を可入。誓文をハ何とたつべきとも。射手のまま先に云事也。御犬引こめと云て後。あれよ是よと問事あるまじき

事也。

一繩にても外にても。吉矢あらば其矢をひかよふと云て可入。矢あまたある時ハ。なにともどひて可入。ひかよふと云て後。内に矢の有をしらずして。外にて射る事毎度の事也。其時檢見其射手に口を付て見る事あるまじき事也。ひかよふと云ひたらば。其射手の名字を可喚まで也。毎度ひかよふと云て後。射手に口を付て見る事有まじき事也。

一繩にて矢二有時。繩近なる矢さがりてあるらんとみえ。繩遠なる矢ハ<sup>定ナルベシ</sup>まがはずよし。其時ハ繩遠なる矢をあれハ上の矢と云て。なわ近なる矢の引口尻を見て。落尻よくハなわ近の矢を繩近よと云ひて可賞。繩近の定落尻わるくハ。繩遠なる矢をあれよとひて可賞也。

一繩の矢不審の時射ておけと云。射手外へあ

ふ時。出さまに矢な取りそと云て。射手に打付て行時。外の矢よけれバ。ひかよふと云ひて後。外ハ定の矢よと云て。さて繩の矢の落尻をも見。又疏をも見るに。繩の矢よけれバ繩近よと云て可入。繩の矢わるけれバ。外の矢を。外の矢よと云て。御犬引こめとて可入也。

一繩にて吉矢の有時。射手外にあふ事有間敷事也。貴人古射手など繩に吉矢の有るを知らずして。外へあふ事有時ハ。よき矢の有を貴人にしらすべき爲に。檢見ひかよふをたか〜と云事あり。是ハ法の外の事也。無左右云まじき事也。

一弓手おしもむり。又弓手〜の矢何もよき時ハ。繩近なる矢たるべし。檢見の誓文せよともいはぬに。射手の方よりたつる事あるまじき也。是又秘説也。しらみがきの時な

らでハ。射手にせい文さする事あるまじき也。

一 ことなりの引目と云ハ。犬にあたりてなりて行を。ことなりの引目と云也。矢のよきわるきによらぬ事なり。犬にあたりて後。なりて行を云事也。是も秘する事也。

一 射はしめかす矢と云ハ。犬によくあたりて。そふ矢のごとくにおちつきて後。犬につれて行を。射はしらかす矢と云也。縦遠く行とも。矢ハよき矢たるべし。此矢を射はしらかす矢と云也。秘説也。

一 矢つかの引たるを見る事。秘説也。

一 䟽を見る事秘説也。

一 風吹の矢事。別而爲秘説間。別紙に記置也。

一 檢見と喚次と十疋つゝ打かへゝする事も有。其時ハ十疋よひて。鞭腰にさして。喚次の所へ行也。其時喚次ハ。むち腰にさして繩

へ打入て。檢見をやるなり。其時ハ喚次のあたりに落たる矢をよく候歟。あしく歟など。とふ事あり。常ハなき事也。自然喚次のあたりにかだ犬などある時ハ。行驒つゝミをうちて。射手に追かくる也。是又例式の喚次ニハかはる事也。

右此檢見之條々者。多賀豐後守高忠、壬午之官長者江相傳之物也。然元治以自筆書寫畢。慥判形之正本也。聊不可有外見者也。

右同寺之書也。

貞丈云。同寺トハ右ノ本チハ同寺ニテ書ト云フ也。是又

檢見故實可覺悟條々

一 檢見尤大事と。古人も申をかれし。されば他人賞すと云とも。たやすく領掌しがたしと。かの日記にも見えたり。檢見とうせいこんと云事あり。てんねんの情大切たるべし。元弘のころとかや。信濃國より鎌倉へ二百騎。

何も射手のともから打越に。小笠原長高。友  
野出羽守兩人檢見沙汰有しを。一眼の龜の  
浮木にあへるがごとく申侍し。長井治部射  
手と云宗珍此道開山。奥書ともしリイ。四人の内  
にてありしかとも。檢見一度もけいれきな  
かりし道を。ふかくしつしける心さし神妙  
之至也。

一檢見水鳥の水にうかむがごとく沙汰せよ  
と。申おかれし上ハ聊もイいかにもゆふくとし  
て。下には無油斷粗そに入細さいに入。火打の  
火を打ちらすやうに。弓手馬手上下に矢あ  
り共能見分てさばくべし。水鳥の下やすか  
らぬと歌道に申ならハし侍る。尤かんしん  
せしむるものなり。

一檢見そふ矢乗のる矢。餘る矢。こゆる矢。たり  
入矢ありとも。御所様。又貴人。或ハ射手骨

をおりて射たらんときハ。たすけて可入。非  
制限。

一檢見音聲を可嗜。射手の事ハ中に及はず。檢  
見も品かゝりよく。さあらんは。可爲肝要。

一檢見射手之名字。官途。受領。早ク喚て能も  
有。靜に云てよろしきもあり。かやうの故實  
自身之覺悟なれハ不及申。

一檢見ひきめしりみる事。いれんかためにも  
見すてんが爲にも見る也。ぬれ犬の引目し  
り見る事。隨分の義なり。

一檢見打矢ありとも。細々不可沙汰。射手さゝ  
へてしきりに申事あらハ。力なくすべき歟。  
その遠近十文字たるべし。其外の矢は聊爾  
に不可有沙汰。

一檢見矢とも有。口傳中に風吹大切也。よの矢  
のひつりやうになる故也。さはきにあまた  
有。肝要の事なり。

一 射手檢見の事。條々是あり。不及注。

一 勝負犬追物之事。老若七所勝負。三正勝負。だしの犬追物等也。故實これあり。しるすに不及

一 檢見と喚次と十足にてもあれ。二十疋にてもあれ。打かへて沙汰するときの馬の出し入習有。六條の馬場にて。氏長。滿長さた有し邂逅の事也。

一 檢見内。馬殿場外馬の習第一大切の事なり。射手相論是にて落著可有。

一 外之馬場方士を定る事。乗馬にて可沙汰。方士にてへい幣をもさし。繩にても置べし。船の綱をきたる本説あれハ。外の馬場の最初浦はた濱するなかれの棹のごとし。されハ鹿苑院殿様兵庫の御馬場にて被遊し。兒たちにて行簾に至迄。美麗なりしとかや。越前氣比國けひの馬場にて。宗珍檢見ありし時。引め

のかしらなり。出し犬の舟みたるを被捨し。本マかれめいよのすい一也。氏長法名 亦信濃國河内嶋にて檢見ありしに。かゝりかゝらずの矢沙汰せられし。何も海のはとりか。但野經をさらふにあらず。先代經時しらミがき射し時。友野出羽守三め迄捨し。檢見にをきて希代の高名也。引めのからなどにつきて。物かたりあれども。射手の背輩イ有爲知歟。不及注。只いにしへの被思出侍る也。

一 檢見つば馬場。外の馬場中に不及。何に馬場によりて。當日の覺悟かふるべし。馬場のやうかねてよく思惟あるべし。

一 内外の檢見興行のとき。外の檢見馬の扣所以下條々習あり。内の檢見又同前たり。談合といふ事隨分の義也。不審の矢あるとき。内外の檢見うちよせて申合事也。

一 檢見射手をしりにひき立て行とき。行簾つ



ゞミを打べからず。檢見馬の下<sup>走イ</sup>立出る犬見にくき物也。左右へ馬を折りても見わけがたし。馬を前へあゆませ出して見べし。隨分の故實也。

一檢見にく<sup>株</sup>ゐせをまもるといふ事。法にからまるゝか能心得べし。堪能のともがらも。たどをりて<sup>わろく候イ</sup>疏見にくき物也。細々可沙汰。

一檢見<sup>功士</sup>わるく候へハ。右烏帽子といふ事あり。

最上のかうし。内外のふるまひ神妙成を。初心未練のやから。まなびてわるき事也。射手もて同前たり。かの日記にみえたり。

一檢見に打たるはくえきといふ事あり。矢の見ちかへハ。昔も有といへども。時に望て餘に無下の不足歟。いかさま斟酌ありとも。いさゝかも心にかけずして。射置たる矢を能さはけとなり。

此二ヶ條隨分の口傳也。笠懸に三の大事十

の工夫といふ事あり。十の工夫此心か。可秘。

一檢見御所様御てうづと喚申事。御てうど共可申習在子細なり。甲乙のこゑ是也。

一檢見誓文の事。やうある子細なり。しるすに及ばず。

一檢見ひとりごとの事。聊爾ならず。最上の事也。

一檢見矢じるしの間の事。ある射置たる矢。引めの大きさ。羽も同しときの事也。尤大切也。同やう口傳在之。

一檢見御所様。御てうづあれよこれよとハ不可申。此時獨ことにて可申。在口傳。

一檢見の鞭の寸法。最極の秘説也。貳尺七寸計。表する事あり。口外あるべからず。

于時應永廿五戊戌年八月十六日 於八幡寺



宿坊橋本<sup>キッ</sup>書<sup>ッ</sup>之。小笠原禪門興元多年練習口傳條々。大略注之。此外少々相殘歟。無盡期之間。被置之畢。短才僻案之子細相交歟。其憚非一。併爲子孫染禿筆者也。雖然非器未練族輒不可一見<sup>ス</sup>。深納箱底可誠外見。若聊爾之義在之者。可有<sup>二</sup>大菩薩冥見<sup>一</sup>者歟而已。

沙彌道觀御判

沙彌興元御判

于時明應五丙辰年六月廿一日。此一卷從故右馬頭入道殿<sup>號未禪寺</sup>。禪昌院<sup>號中右馬頭</sup>。御口傳也。於然從禪昌院于天竺兵部少輔御傳。元治在子細而令高借以自筆寫畢。聊不可有外見。可秘々々。

右同寺之書也。

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

## 檢見故實

檢見故實可覺悟條々

一檢見ハ最大事と。古人も申おかれたり。されハ他人賞すとも。たやすく領掌しかたしと彼日記にも見へたり。檢見たふ勢ひこんといふ事あり。天然の情大切たるへし。元弘の頃とかや。信濃國より鎌倉へ二百騎いづれも射手のともから打越に。小笠原長高。友野出羽守兩人檢見さた有しを。一眼の龜の浮木にあへることく申侍りし。長井治部射手といふ。宗珍<sup>長高法名此道開山</sup>。奥書ともし。四人の内にてありしかとも。檢見一度も經歷なかりし道を。深くしつしける心さし。神妙之至極なり。

一檢見。水鳥の水に浮かことく沙汰せよと。申おかれし上ハ。いかにもゆふくとして。下

には聊も無油斷疎に入細にいり。火灯の火を打ちらすやうに。弓手馬手上下に矢ありとも。能見分てさくへし。水鳥の下安からぬと。歌道に申ならし侍る事。尤肝心せしむる者也。

一 檢見<sup>(ソイ)</sup>てふ矢。の留矢。あまる矢。越る矢。たか入たる矢ありとも。御所様。また貴人。或ハ射手ほねをおりていたらん時ハ。たすけているへし。非制限。

一 檢見音聲をたしなむへし。射手の言葉申におよはす。檢見も品かゝりよく。さあらんは。可爲肝要。

一 檢見射手の名字。官途受領はやく喚てよきも有。靜にいひて宜しきもあり。かやうの故實自身の覺悟なれハ不及申。

一 檢見引目尻見事いれんためにも。見すてん爲にも見るなり。ぬれ犬の引目尻見る事隨

分の儀なり。

一 檢見うち矢ありとも。細々不可沙汰。射手支て頻に申事あらハ。無力すへきか。其遠近十文字たるへし。其外の矢ハ聊爾に不可有沙汰。

一 檢見矢共あり。口傳中に風ふき大切なり。余の矢のひつりやうになる故也。さはきにあまた有。肝要也。

一 射手檢見の事。條々在之。不及註。

一 勝負犬追物の事。老若七所勝負。三疋勝負。たしの犬追物等なり。故實有之不及註。

一 檢見内馬外馬のならひ第一大切の事也。射手相論是にて落居有へし。能可意得。

一 檢見と喚次と。十疋にてもあれ。二拾匹にてもあれ。打かゑて沙汰する時の馬の出し入習あり。六條の馬場にて氏長。滿長さたありし邂逅の事也。

一外の馬場方士をさたむる事。乗馬にて可沙汰。はうしにへへひをもさし繩にても置へし。船の綱おきたる本説あれハ外の馬場の最初。浦はた濱すかなかれの棹のことし。されハ鹿苑院殿様。兵庫の御馬場にて被遊し。兒たちにて行騰に至るまで美麗なりしとかや。越前國けいの馬場にて。宗珍檢見ありし時。引日の首ほりいたし。犬の舟見たるを被捨し。かれ名譽の隨一なり。氏長法名道隆。又信濃國河中嶋にて。檢見ありしにかゝりかゝらすの矢沙汰せられし。何れも海のほとり歟。但野經をきらふにあらず。先代經時しらみかき射しとき。友野出羽守。三日まで捨し檢見におきてハ。希代の高名なり。引目の柄などに付て。物語あれ共。射手の輩有爲知歟。不及註。たゝいにしへの被思出侍る也。

一檢見つほ馬場外の馬場不及中。何れに馬場

によりて當日の覺悟可替。馬場の様兼てよく思惟あるへし。

一内外の檢見興行の時。外の檢見馬のひかへ所已下條々ならひあり。内の檢見また同前たり。談合といふ事隨分の儀なり。不審の矢ある時。内外の檢見打よせて。申合する事なり。

一檢見射手を尻にひつ立て行時。行騰つゝみをうつべからず。

一檢見馬の尻下走出る犬。見にくき物也。左右へ馬を折ても見分かたし。馬を前へ歩ませ出してみへし。隨分の故實なり。

一檢見に株クイゼを守といふ事。法にからまるゝか。能心うへし。かんのうの輩もたとをりてハ。疏見にくき物也。細々可沙汰。

一檢見に目くわるハ。古烏帽子といふ事有。最上のかうし。内外の振舞神妙なるを。初心未

練のやからまなひてわるき事也。射手とて同前たり。彼日記に見へたり。

一檢見に打たるはくえきといふ事あり。矢の見違ハ昔も有りといへとも。時に臨て餘に無下の不足歟。如何様の斟酌ありとも。聊も心に懸すして。射置たる矢をよくさはけと也。此二ヶ條隨分の口傳なり。笠掛に三の大事。十の工夫といふ事あり。十の工夫此心か。可秘々々。

一檢見御所様。御てうすと喚申事。御てうすをてうとも可申ならひ有しさひなり。甲乙の聲是也。

一檢見誓文の事。やうあるしさひなり。不及注。

一檢見獨ことの事。聊爾ならす。最上の事也。一檢見矢しるし問事あり。射置たる矢。引目の大サ。羽もおなし時の事也。尤大切なり。問

様口傳あるなり。

一檢見御所様。御てうつ。あれよ是よとハ不可申。此とき獨ことにて可申。在口傳。

一檢見の鞭の寸法。最極の秘説なり。二尺七寸計表する事有。口外有へからす。

已上終

于時應永廿五戊戌年八月十六日。於八幡寺宿坊橋本書之。小笠原禪門興元。多年練習口傳條々大略註之。此外少々相殘歟。無盡期之間。差置之畢。短才僻案之子細相交歟。其憚非一併爲子孫染禿筆者也。雖然非器未練族。輒不可有一見。深納箱底。可誠外見。若聊爾之儀有之者。可背大菩薩冥見歟而已。

沙彌道觀

沙彌興元

御判

于時明應五丙辰年六月廿一日。此一卷從故  
右馬頭入道殿。號末禪寺。禪昌院。號中右馬頭。  
御口傳也。於然從禪昌院于天竺兵部少輔  
御相傳。元治在子細而令高借。以自筆寫  
畢。聊不可有外見。可秘々々。

慶安年中

加須屋左近

七月吉日

武成花押

以宮內省圖書寮本膽寫校合畢

續群書類從卷第六百七十五

武家部二十一

犬追物葛袋

印歌

葛袋下號。犬追矢  
沙汰口決を讀

遠近をむちにくらふる足つかひ繩をまたけて  
矢はひたりなり。遠近は繩のふところ最中と  
筈とのあひをむちにくらへよ。繩きはの遠近  
うつは弓手より筈にくらへて繩にくらよへ。  
馬手の矢の遠近うつはかはりけり繩にくらへ  
て筈にくらへよ。弓手うつ繩のそはなる左足  
馬手の時には繩のうちなり。弓手うつ左の足  
をそのまゝにひけはさくりのきゆるなりけ

り。馬手の矢をまた打時もかはらぬは繩をま  
たけて寸を取る也。弓手なる矢と繩あまり近  
ければ繩をまたけすむちにてそとる。弓手な  
る矢をはまたけす打とても馬手の矢打は繩  
をまたけよ。弓を持遠近うつはまたけたる左  
の足をそのまゝにひけ。弓手なる矢をうつ足  
を馬手迄もおなしとをりにひくところぞ聞。弓  
手なる矢をうつときの踏足は馬手の時にも  
そのまゝそひく。弓手打矢よりそのまゝ馬手  
迄も左の足を引はしめけり。

かゝるかゝらず

繩に寄かゝるかゝらず見わかねは貴人に向て  
なわをまたけよ。持あくるなわは檢見のひつ  
かゝみあしのとをりをすきぬなりけり。此矢  
をもたすけんために持あくる繩を内手へひね  
るこそきく。

繩を持んとおもふ所より。我まへのしゆん  
尺はかりより。繩をいたくやうにして。さて  
手を先へなてやりてあくる也。

つるゝわかるゝ

右の手にかうかい二ツもちながら左の手に  
弓をひつさく。筈をさす時までも。さくりをは  
檢見の人の馬手になしけり。引そむる羽ひき  
の本と又末にかうかいをこそ二ツさしけれ。  
堅點のつるをわたして持弓を人にもたせてか  
うかいをぬけ。二ツぬくかうかいさすはまつ  
かたなつきはゑほしのへりにこそさせ。筈を  
ぬきてさくりを妻手になし引目のしもへまは

るなりけり。かうかいはさくりもとよりぬき  
そめて残りもやかて次にこそぬけ。八廻りに  
二ツ引目は繪にかけとなてやる後はしるしな  
りけり。弦のあとにかゝれはゑせ矢かゝらね  
はむかしよりこそ矢には入けれ。

#### 四寸羽引

繩は右矢をは左にをきながら四寸の羽引ふち  
にてそとる。鞭さきにくらへし羽引寸法をゑ  
ほしのへりにたかくあけけり。寸を取る時は  
檢見のさしよりて繩と羽引にすみかけて居  
よ。

#### まるふさくりの十文字

筈をさしとる時のあしふみは十文字うつ時に  
たかはす。矢のきはのまるふさくりをうつ時  
わ犬の足あと馬手に見る也。堅點をうちて左  
へ弓をとり。たゝひとつこそかうかいをぬけ。  
右の足さくりに乗てまたぬかぬかうかいにこ



そ横てんをうて。横點を渡してやかて弓弦の間よりこそかうかいをぬけ。よこてんを打より早く矢の筈のかゝるかゝらすやかて見えけり。

### 十文字

しつ／＼と繩の内よりあゆみ出てさくりを馬手になしてこそゆけ。右の手にかうかい二ツ持ながら左に弓をひつさけにけり。筈をさしよるとき右のあしそはは六寸さくりにそよる。かうかいをさしよる時の足ふみはさくりの方を馬手に見る也。十文字打に堅點わたすにはまつ外の方へ當そめにけり。十文字さくりにのりて則に本より末のかうかいをぬけ。筈をぬきての後はりやうほうのくつのはなにて定木をそあつ。右の手に弦をつまみて寸を取時はいつれも弓をふせけり。右の手につるをつまみてふせながら左は弓をにきるなりけり。

り。矢沙汰せはいつれの時も筈を二ツは右に弓はひたりに。十文字餘り弓杖ちかければ繩をのけさせ矢をさたしけり。兩の足ふみひろけたる。後に弓手の弓を右へとるなり。

右矢之沙汰様驂。大方歌に詠て可作覺。如此せられ候間。是はさる人の被持候を寫候て置者也。おもしろき物候間。如此候。不可外見候也。

天文十八正月廿三日 歸本軒

宗仁在判

碓井次郎三郎殿

葛袋

一十文字沙汰する時。弓手／＼の矢横點を渡す時は。弓よくうら筈の方。左へ先に弦を渡し始へし。馬手／＼の時は右の方へ弦を渡し始なり。是は何度さくり近へわたしそめたる儀なり。

一弓手く馬手くの時 横點より寸を取時は。何もさくりより寸をとるへし。

一十文字沙汰の時。下ニわるき矢あらは。上の能矢の横點に近き所に、引目にても筈にても印の筈を立て。下のわるき矢をさらせて。吉矢をもとのごとく置いて。筈を取て十文字を沙汰すへし。又上にわるき矢あらは。沙汰すへき下の矢はたらかぬやうに。檢見とらへて上の矢を矢とりにとらせて。沙汰すへき也。十文字沙汰すへき矢の一砂に立事有へし。その時は引目の方はたらかぬやうにとらへて。扱おしふせて沙汰すへきなり。ゑんきんとらぬ方へ矢をふすへし。偕立たる跡より横點寸を取へし。

一十文字沙汰の時。一はさかりてか不審の時。馬よりおり䟽元へ近き所に印の筈を立て。引目尻を見へきなり。矢能は本のこと

く置いて筈を取て。十文字を沙汰すへし。矢あしくは沙汰に及はず。馬に乘て今一の矢を。馬のひかへ所によりて。是よ共あれよ共とひて可賞なり。

一十文字打時。弓手馬手のとをくかへりて。横點矢とをりへごと、かさる横點をつくへきなり。つくへき次第例式のことくまつ豎點を渡して。扱横點を渡し候時。先弓手の矢の方へ弓を遠くやりて。足をはこひて弦にそへて。筈をつるより外に一立て。矢のとをりへ横點を渡すへきなり。其後馬手の方へ弓手のことくつくへき也。筈を弓手の方より一とりて。よこ點より遠近を沙汰すへし。弓手の矢ニ而も。馬手の矢にても一とをくかへりて。横點と、かすはいつれニてもよこ點をつくへきなり。

一十文字を沙汰して。馬に乗りて矢をとふ時

は。いつれにても横點に近き矢をとひて可賞。弓手女手矢同し近きならは。弓手の矢を是よといひて可賞。弓手／＼の時同近きならは。䟽近を是よとひて可賞。馬手／＼おなしく檢見のひかえ所によりて。あれよともとひて賞すへし。

一繩きはにての十文字。又はゆみの本筈繩につかえて。立點渡しかたき時は。繩をのけても十文字を打事あり。其時は横點に近き矢を繩にてのさはきのことく。なわ近よととひて入たるも能なり。

一檢見矢沙汰する時。自然貴人我弓にて沙汰せよと。弓かうかいを出す事ありとも。かたく斟酌すへし。弟子射手にあらは。弓かうかいをとりて沙汰すへし。なくはたれにてもこひて沙汰すへし。他人の弓とりて矢を沙汰して返すときは。素襖の袖にて弓の弦を

末筈より本筈きてこきさけて。砂をおとして。禮をいひて返すへし。

不射歟

一犬追物の時引こみの犬をは。いぬといふは將軍のあそはさるゝによりて。平民は斟酌可有事なり。如斯のしたひによりてなり。

一十文字可打次第。矢より内のさくり二にかうかいを立て。弓の弦を渡して。又十文字に打て。その横點より矢の内外をたゝすへし。弓手／＼の矢同近きならはさくり近を賞すへし。馬手／＼の矢又同前。弓手馬手の時は弓手を可賞。繩きわにての沙汰同事たるへし。

一大事の勝負などの時。射手矢所をいひちかひぬれは。矢よけれどもちからなく可捨也。

### 檢見古實の覺悟之事

一檢見おんしやうをたしなむへし。射手事は不及申。檢見品かゝりうよくかさあらんは。

簡要たるへし。

一 檢見内に矢ありとも。細々さたすへからず。射手さゝへて。しきりに申事あらは。ちから不及。遠近十文字たるへし。其外の矢はれうしに沙汰有へからず。

一 内外檢見こうきやうの時。外の檢見馬のひかえ所以下條々習ひ有。内檢見又同前たり。談合といふ事隨分の儀なり。ふしんの矢有時内外の檢見打寄て申あはする事なり。

一 犬追物の馬場。小繩より三十三杖なり。四方へ同前。繩の長さ百貳拾壹ひる。けつりきわ小繩より。弓杖三杖半。小繩の内弓杖なり。繩のふとき壹尺八寸。

一 檢見は先ひかえうといふて後。矢所をとふへし。外の矢をはひかえうといひて。後外候よごいひて後。又矢所をとふへし。矢所をとふは馬手すかひ。弓手なごちと馬のいたし

やうなどふしんの時とふへし。たゝし白みかきの犬追物の時は。三疋に一匹も矢所を問へし。

一 けつりきわとしはとに懸りたる矢の事。内の矢なり。それをはせよせて。是よともあれよともとふへし。

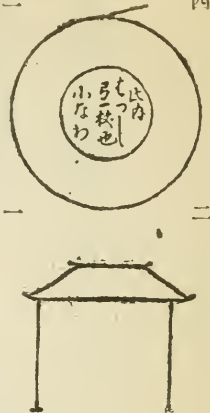
一 檢見の時射手二三騎外へ犬を追時。いまた射ぬさきに。檢見射ておけといふ事あり。是は犬を追射手に。とく射よと檢見のさいそくすることゝるなり。

一 犬追物の時。繩の賞翫の馬の立時。四の加となり。如斯。是もしるし進入候。

大なる繩のふとき一尺八寸。長さ廿一ひるにもうたすへし。

此あひ／＼に。馬を打よせひかえへし。檢見策をぬきいたし。繩の内へ馬を入は。貴人の方へそと弓をよこたへ。禮を申やう

四  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百



にして。扱矢をさしはけ。さい初に數犬を  
 は我前へ出てくる犬なれとも。惣の射手  
 をしやうくわんのため。矢を不放して犬  
 を通す義なり。但勝負の犬追物はさいし  
 よ矢を放なり。一段の儀ともなり。

一二聲といふ事。矢犬に當りて後ついち扱へ  
 いにてもまたは何にてもあれあたり候を  
 云。わるき矢にて候。可捨なり。

一射手検見すへき次第。一番の矢代の人常の  
 検見のことく出立て打よるへし。鞭は犬の  
 時のむちをさし。内ひかけを緒に巻總てむ

すひ付てさす也。扱禮式の検見のことく。繩  
 の内へ打入へし。さてなわの内十疋とよは  
 り。次呼をきゝて廿めの検見矢取のうし  
 るへうちのけて。馬よりおりて。くつをぬき  
 こふこしさしの引目を取。すあふの袖をつ  
 ねのことく直して。紐を結びて鞭の緒を如  
 前緒にまとい。腰にさし。杵をはき。馬に乗。  
 繩きわへ打よるへし。その時以前の検見。十  
 疋のたる口射たる人の名字をよはゝりて。  
 やかて鞭にさして。矢取の後へ打のけ。射手  
 具足をして。例式に出立て。繩きわへ打よる  
 へし。今出たる検見と。以前の検見打のくる  
 時は。今出たる検見をは。おそるゝやうに。  
 馬を打のけてとをるへし。百疋はつる迄此  
 心得たるへし。但検見するほとの人一番に  
 十疋する時は。検見策を指出てもする也。是  
 は検見する程の人の事。検見鞭にてしても

不苦。夫よりも犬射むちにてもすへき事本式也。

右不可有外見者也。

天文十八月日 歸本軒

宗仁在判

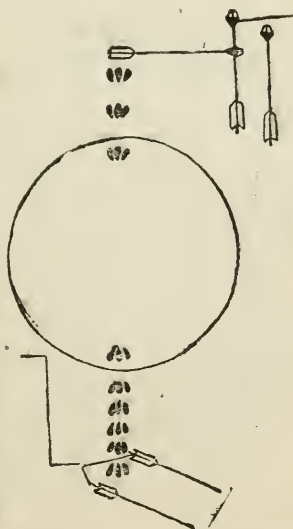
碓井二郎三郎殿

右葛袋三卷と在之候得共。貳卷は相見候。檢見古實と在之處より。壹卷と被存候。然レ共卷の別ち無之。不審。口傳ニ云。葛袋と云事は。小笠原長時右之卷物を葛の袋に入て。常に懷中せられし故。葛袋と申傳しとそ。

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

# 犬追物日記 勢鏡上卷

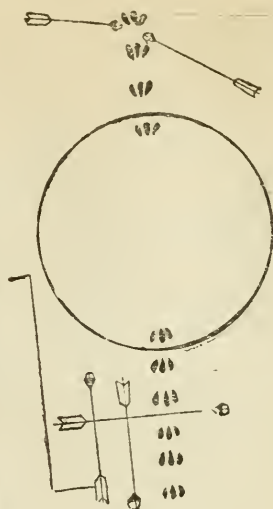
一重りたる下の矢は。外たる矢也。残り二ツを沙汰する時は。上の矢を不動様に。檢見能さらへ。さて矢を矢取にてものけさせて。十文字沙汰すへし。



何も外の矢也。如此共に疏ニ懸る矢。十文字打て見るに。横點より同近きならは。疏本の矢を賞すへし。

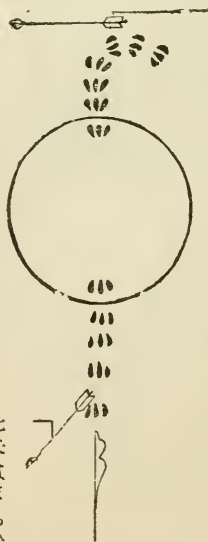


䟽に懸りたる矢の近所にかうかいを立て。矢を取除て。點を渡して。矢を本のことく直して。横點より寸を取へし。䟽に懸りたるさ云とも。十文字の沙汰成へし。



此矢何もより下の矢也。繩より遠きによるへからず。下の矢を可賞也。

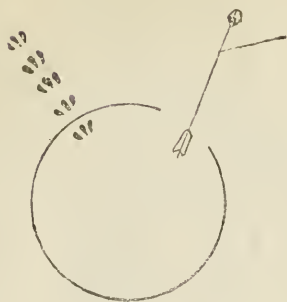
此矢は弓手にて射たる矢也。射られて矢落し。こなたよりかき歸りたる犬なり。矢落の通に䟽なき間可捨也。



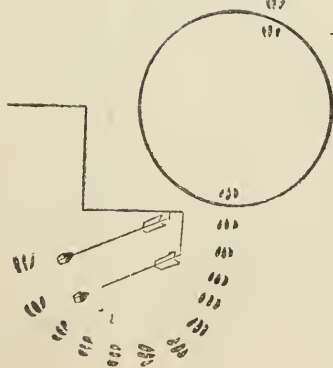
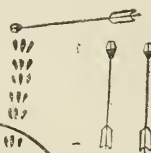
此矢はまるひ䟽の羽引也。堅點を矢通より先へ。例式よりは遠く弦を引。て。扱横點を打てみるニ。かゝれば其時弓を人に持せて。例式の羽引のことくにさたすへし。



此矢如此繩さたへ切目へ矢落着たる間  
沙汰すへき様。格別口脛有へし。

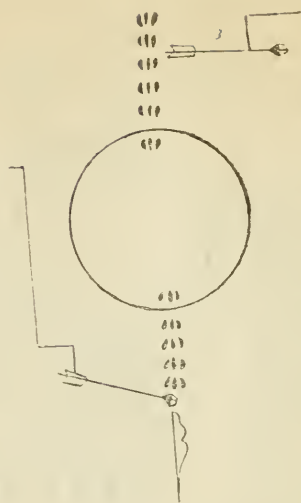


此矢は疏近の矢を打返したる矢也。



此矢は遠近を取て見るに。繩も疏も同じ近サなりといへども。内馬外馬の沙汰にて不可有。外馬の沙汰同事なり。疏もその矢を可賞也。

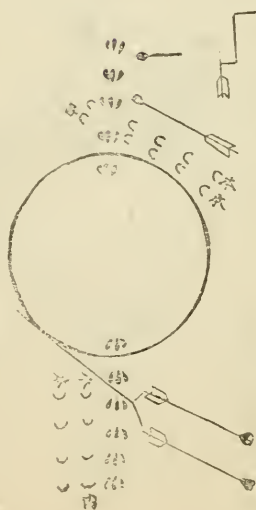
此矢は犬より先へ落たるさいへ共路へ行たる間可賞也  
但引目の方先落は可捨也。それも犬かく通りに落たるは  
子細不可有。犬よりも先へ落たる矢はすの方先落付。又は  
引目の方と筈の方と同じ様に落たるは能矢成へし。



此矢はあいの矢さて可捨矢也。但勝負な  
その時論する射手なさは鞭ニ而寸を可  
取也。能疏より引目の上の中へ寸を取る。  
又引目の方よりまるひ。疏の方へ寸を取  
て見るに。よき疏へ近くは可賞。若はまる  
ひ。疏へ近クハ可捨。又同じ程の遠さなら  
は。あひの矢とてさなから可捨也。寸取時  
は疏に乗て可沙汰也。

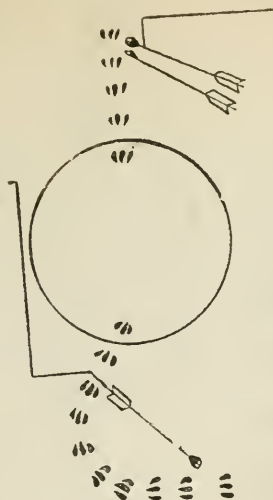
## 犬追物日記 勢鏡下卷

如斯折て廻も疏に同じ近き成時も有へし。それも矢つか  
長き沙汰同事也。内馬外馬によるへし。



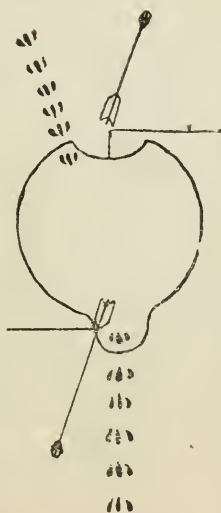
是は内馬外馬の沙汰也。馬  
手切おしもちりの時も同沙  
汰成へし。

如此外の矢。引目われて内の矢と同程成事有へし。其時は引目のわれと。内の矢と十文字の沙汰有へし。



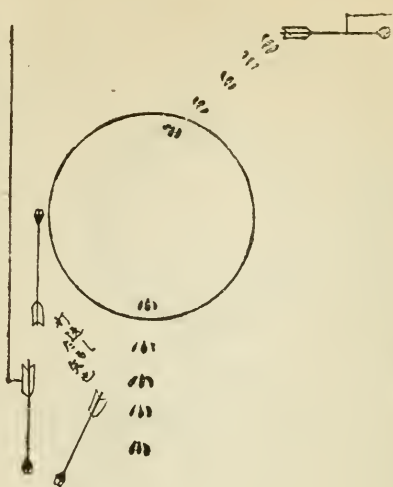
是は馬手より走り来る犬也。然に例式の馬手切の所にて不射してすかひ弓手に成所にて射たる間。馬手より走り来さいへとも。すかひ弓手成へし。

かやうに繩働て入事有へし。其時は射たる矢本の繩の通りより入て落事あらは。是は射手高運にて可賞也。



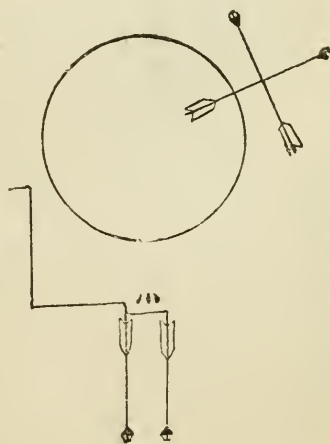
如此繩働きて出る事有へし。出たる繩に懸りたる矢は。其射手不運にて可捨也。

是はあまる矢也。然さも跡へ落たる間不苦可賞。但引目の方さきに落て後。皆落つかは子細なく可捨也。それも犬かけ通る跡に落は子細不可有。犬より先へ落矢筈の方先に落つき。又は引目の方さ同じ様に落たるは能矢成へし。



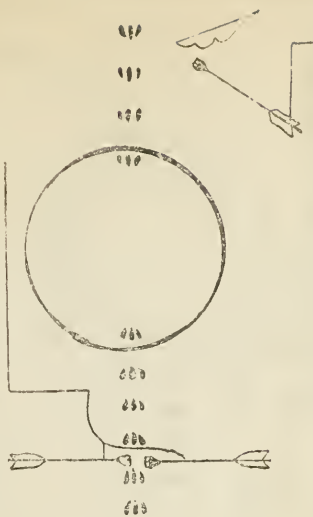
是は疏近の矢羽引也。是を沙汰する時は。先羽引の矢の筈にかうかいを立て。例式の羽引のこく沙汰すへし。疏遠き矢近くて。羽引の沙汰せられぬ程ならは。是にも同く筈にかうかいを立て取のくへし。羽引の矢わかれは。如本二の矢を疏近より置候て。横點を可打也。羽引の矢疏に懸らは。矢を直すまでもなく。疏遠の矢を可賞也。是も羽引の十文字の沙汰也。

是は懸り矢也。矢に懸りたるは子細なし。可賞也。



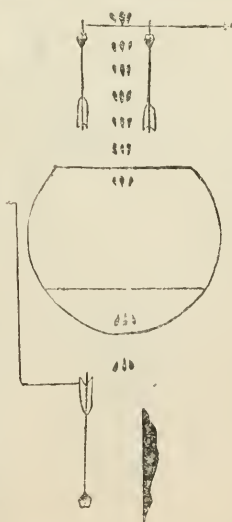
是は繩より弓杖にあまる矢也。十文字を可打矢也といへ共。疏一ツ有間別に沙汰する様有。物而疏一ツもなき時は。沙汰ニ不及。但それも口傳有之。

是もあひの矢也。如此䟽よりのきて落たる時は。引目の頭にかうかいを立て、弓の弦を渡して、又䟽の通りにかうかいを立て、それより例式のあいの矢のこさくすを可取なり。



此矢は何も䟽に懸りて、弓の弦を渡し、かたき間䟽本へ近所に。かうかいを一つ、立て、矢を取除て、弓の弦を渡し、矢を直し、かうかいを立て、横點を打て、遠近を沙汰すへきなり。

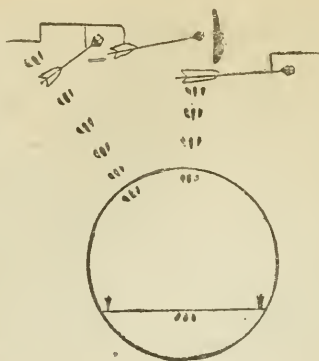
是は繩とたえの矢也。如此繩さたへたる時は、繩の切目二所にかうかいを立て、弓の弦を渡して、其横點より遠近を沙汰すへし。口傳有。



此矢もまろひ䟽の矢なり。如此繩の際、に能䟽一ツ有。懸るがゝらざるを沙汰する程は、繩より外の䟽さ。内の䟽にかうかいを立て、繩の内にもしるしのかうかいを二ツ立て、弦を打越て、弓の弦を渡して、懸る懸らざるを沙汰すへし。

# 犬追物明鏡之記 第一

此矢能䟽に懸りたる方は直䟽に懸り。此方はまろひ䟽に懸りたり。加様成矢をは䟽の通りにかうかひを立て。扱引目の頭よりかうかひの方へ寸を取て、又かうかひの方より筈の方へ寸を取て見るに。能䟽へ懸たる方長は可賞。短くは捨へし。又同長さ成は可捨也。



此矢は十文字を可打矢也。一ツは䟽に懸りて堅點引かたき間。懸りたる矢にかうかひを立て。矢を取のけて堅點を渡して後。矢をもこのことく直して。かうかひを取て十文字を打へし。䟽に懸りたる矢より。寸を取へし。

如斯ともに繩

際に近き矢をは。繩より内にかうかひを二ツ立て。繩を打越して。扱かうがいのきはに横點計打て。それより矢の遠近を沙汰すへし。

一射手具足の事別紙に記之間書載に不及。先射手具足する時は。敷革を敷事白毛を左へなすへし。又常の引敷を敷共。其方を左へなすべし。

一射手具足して後。犬をそく初る時は。床木に腰をかけて待へし。

一外の馬場には。棧敷可有之。各もかり屋をうつへきなり。

一ゆかけをはさす時は右よりさして。取時は左より取へし。又禮義に取は右より取へし。先一ツ卷て扱上より大指にかけておりかへして二まき卷へし。以上三卷なり。緒と革とのあいたを引とをして。かたわなに於て。三ツを一ツにして。能ひねり合て。上より押かふへし。緒の先は手の内に可有之也。

一 沓をはく時は。左よりはきて。ぬく時も左よりぬくへし。たとへ中間介添等出す共。如此可心得也。

一 射手鞭を持時は。とつゝかをうてくひにぬき入て持へし。扱ゆひかけをたけ高ゆひにかくへし。馬上にてはとつゝかを持たすしてさけて持へし。射手の鞭は長くする也。寸法以下別紙ニ記之。

一 検見の鞭の事。とつつかへ腕くひをぬき入へからす。とつゝかに緒を取添て持へし。検見の鞭は短むちなり。寸法記ニ不及別に有。

一 素襖にて犬射る時は。紐を前にて眞結ひにして。兩へわけて袴の帯に押かふへし。又一ツに取ても押かふへし。又かたを打越て後にて留る事も有へし。是は畧義也。笠懸の時は如此留て後にては糸にてとつるなり。

一 同紐の留様。前にて一結ひして一筋宛間を

三寸計ほとに。袴の腰におしかふへし。又ひとつに取ても押かふて置事も可有之。何も不苦。

一 刀を留る事。革を五分計に切て。刀のさやのとをるほとわりかけてくりかたまで入て。また目貫のとをりにて。二にわりて。其にて目貫の上にて結ふへし。うらの目貫の上にて留へし。但糸にてもする也。

一 烏帽子は常より少はねてきたるかゝけなとして見能と云也。かけは少ふときは外より能見ゆる也。

一 検見も射手もうしろかみのそゝけたるは見苦也。矢取等の心得て。紙をぬらして持て外などに逢テ歸る時。卒度しらぬ様になて付へし。

一 晴の時はゆひつきたるゆかけを不可用略義也。内々にて稽古の時は。ゆひつきたるも不



苦。又一具ゆかけをもるゆかけと云へからす。一具ゆかけと云も悪し。ゆかけ一具と云へし。

一下地馬の下乗の事。口を引へからす。口にあたりぬれは。其日は心替りてわるきなり。馬をかひおり／＼乗て草臥かすへし。足を出すへからす。たく／＼を乗へきなり。但其も馬によるへし。

一下地になる馬とは。一寸二寸の間の馬なり。二寸の馬を用るも。人によりて大ならさるも有。又一寸の馬は。人によりてまくなると云事有間。一寸五分の馬尤可然也。

一下地馬は。人のため逸物なれとも。我か手にあはぬ事も有へし。心をしらて人に所望する事不可有。あます事あれば大なるはちなり。可心得。

一繩をいかにも稽古に射へし。腰のすへやう。

弓の引様。さかりやうをも能々人の指南を可受也。わるく射付てくせに成候へは。後まてなをりかぬる物なり。腰高なるは不可然。左手綱のかき様以下能々古射手に可尋事肝要也。

一はしめたる下地馬にて射る時は。廿正卅正までは馬を繩に立つめて。馬の心をしりて後矢をははなすへきなり。

一晴の犬追物の時は。馬のしたてを能すへし。馬の頭は少短クほを立てかるへし。尾には油を付てむらなくすきたてへし。尾をは少高くあけさせへし。長ければ自然ふみぬく事もあるへし。つめにも油をぬり。卒度刀をあてへし。ふりかみのあつけれは。自然物を見る事有へし。裏をすくへき也。

一手綱はむねごの物也。左右の手綱に心をかけさらんは。射手にて不可有と云へり。

一新敷手綱は。手にまとはれて悪敷なり。新敷を卒度洗て。よりて能のしをかくへし。古きも又手にまとはるゝ也。心得へき也。

一ゆかけは新敷はわるし。少射ならしたるは能なり。手の内を取事無下の事成といへとも。取ても不苦。此等は別の子細なし。射手の好によるへし。

一沓も新しきはすへりてわるし。少ふみならしたるは能なり。いにしへは沓のうらをぬる時。砂をふるひあけてはきたると云也。

一鐙も塗立たるはすへりてわるし。これもふみならしたるは能なり。

一力革は是も新敷はこははりてわるし。乗ならしたるは能也。但射手の好みにより少長きは能なり。長さは大方鞍の上に立あかりて。尻の前輪を越へぬ程なるは能也。切付も新敷はこははりてわるし。力革の事は射

手によりて長短有へき。人によるへし。一鞍に二重腹帶を懸る事。軍陣の様にはせず。腹帶を二ツして。小腹帶をかけてしむる也。是も射手により。馬にもよるへし。上手の好ぬ事なり。

一轡は白みかき本也。黒ぬり又とかけ色などに塗たるは。見たる所もうつくしく。亦おも能とて人毎に好事なれ共畧義也。晴の時は斟酌たるへし。

一犬追物の時。持弓は常よりほこ短きは能也。本もあさ木の弓の輕きを用へし。刃の立たるは引てさかるにわるし。本を少すへ鳥打も少すはりたるは引能也。少もつよき様におほゆれは。打おこす時思ふ様ならず。又さかるにもわるし。拵様なと籐をしけくつかひたるはしたるくてわるし。矢すりかふらど計にても能也。只赤うるし。又ぬくひ

うるし。又黒くぬりたるはあさくとして能也。其外いろく拵たるはおもくれて見ゆ。但人の好みにもよるへき。<sup>シイ</sup>又弓の籐の上をぬるは略義也。ゆめくぬるへからず。入道などとは不苦。

一弓のにきりの事。ふるきはわろし。晴の時は必新く巻へし。巻様かち立の弓の様に。中をあけて巻へからず。ひしとよせて巻へし。にきりのたけは。人の好みによりて長短有。

一弓は木のかさあるは。矢音も能也。去共引目。手綱。弓三ツ取添て持ゆへ。木かさの有は手にあまるへき。人によるへし。弦は少ふときは能也。さぐりも大成へし。少矢先さかりにゆひたるは能也。よるへし。

一腰さは少すねたるからは能也。うきたるからは行膝をしむる時。ひしくる事あり。一からは夏切たるへし。八月上旬ほとにたち

たる筥は能也。からは少ふときは矢音も能といへり。但弓手綱取添るにふときは煩たるへし。但ほそき堅き筥能と云へり。され共ほそき筥はしはりてわろし。可心得也。

一犬射からのぐわいの事。筥によりて替りはすれ共。先は羽たけ四寸の物也。但かねの定也。され共人の望によるへし。くわいの事は弓法方に委記之。

一馬の事古逸物大切也。第一喚次の馬。第二撿見の馬。第三射手の馬と云へり。其謂は先喚次は矢のある度毎にかけ廻るに依て。馬わろくては成へからず。射手は馬わるければ物かけに扣へて矢數なけれ共不苦。無念なから無をしてもそのぶんたるへし。喚次は是非共に馬をかけ廻らてはかなはぬ事成故に第一と云なり。

一犬追物は筥懸より後に初りたる物也。然共

牛追物は前に初りたる物也。初は笠懸引目にて射たる間。赤漆に塗也。扱からは節ぬりたる様にこかしたる也。當世も用ゆへきなれ共、當代は毎度興行しけくからも損する故、白篋に定たる也。又古射手なとこかしたるからにすりたる鶴の羽など付る事面白也。余は斟酌たるへし。

一繩へ馬を打寄る事。十二騎の射手上衆次第に打寄する也。矢取馬の左右に附て出へし。棧敷と繩との間をとをりてよるへからず。

一馬場始の犬追物。手始の犬追物。犬始の犬追物。主人の犬始御誕生。惡星物紀加様の犬の時。必射手ことく着したる素襖を河原の者につかはする也。

一騎合の物は。能調て犬をあひもらさぬ様に。まくりひらきをいかにもこまかにして。寄合所にて射へきなり。したしめころして

はつれたるは不苦。なましたゝめなるは不可然。

一騎合の物は。射手の位見ゆる也。口ひろなる犬をは。まくりかけて物を近付てくひるゝ時。一開ひらけは。又のく所をまくり。弓手に弓を引は。猶くひれんとよこ様になる所を射れは物つよく。矢音も能也。したゝめすして射つれば。物あさく見ゆるなり。又犬のふるまひを見て。馬をもあつかひ。まくりひらきをすへし。毎度犬おそくは馬をすへ。馬おそくは鞭を打へし。筒を懸人の手をかけたる犬をは射ましき也。

一外にて生得に犬よろゝと足よはきを。射手の馬を留て。犬の尻に付て行事不可有。見苦事也。左様の時は一鞭あてゝ。犬より先に馳ぬけて。馬をすへさまに。馬手にても弓手にても急におりて。犬に向て弓を引は。必ず

かひ弓手に逢へし。加様のよはき犬は。弓を強く引たり共。放ち様□ゆるして放へしといへり。又ついふしかはりノとまりかに成犬に可心得事。足の出る時に射れは留る事有。全所よりとまりたる犬を射たる様にみへて不可然。能々かきたてさせて射へし。馬も留まり犬も足なき時は不可射。かきたるとはきとかきとまりたる犬の走るを云也。かき留るとは走る犬の留るを云也。

一外の物をしけくあふへからず。引ク方の定て能走る犬の便宜。能寄合へきを見て逢ふへし。初より寄合頭にあはんとするはわろし。さくりに押懸てあへは寄合頭になる時可射也。弓をしけく引て。しけくゆるすへし。別レ頭の所にては。手綱を押入て。弓を引て犬の横様になる所を射へき也。一走る犬の馬のかくれはとまり。扣れは出る

をさし寄て。馬をうとくなして。尻足を犬にむけて。打のきてひらけは犬出るなり。其時矢を放すへし。

一論の犬の時。相手外の物に一騎合て行時さへ矢とがうして引目を射かくる事有。其も様によるへし。既に相手弓を引くくらゐならは。さへ矢を射へからず。遠まわりの時。相手寄合頭になるへきなとをは射へき也。一遠かくる犬の事。物近にさし寄て。開て弓を引へし。弓手馬手同じ事也。

一はうじきはの矢所の事はうじの内に。矢を射おきつれば。はうじの外に走出たり共。矢たによければ人也。馬をは矢を射置て急にはうじきはより。弓手にても。馬手にても引てはうしにそへて。はせのくへし。一足なりともはうしの外へ馬を出すへからず。

## 犬追物明鏡之記 第二

一外にて。弓手にても。馬手にても。矢を放に  
はずれて。檢見射ておけといは。時宜によ  
りて二めを取へし。なを様によりて三めを  
も取へし。

一犬の疏に付て。追事さくりに乗と云て。わろ  
き事也。但貴人など外に御逢の時は。犬のか  
きたつる様に追かけへし。古實也。我射へき  
ためにては。返々不可然。又外の物に逢時。  
射手あまたあらは可心得事。人の馬に馳あ  
てぬ様に馬をあつかふへし。第一の覺悟也。  
一棧敷の前にて。たとへ十分に寄合たり共。矢  
を不可放。但勝負の時は心得て射様有へし。  
其時射様と云は。いかにもつゝ付て弓を引。  
矢の越ぬ様に火打の火を打出す様に射へ  
し。

一外にて出ぬ犬をはしたたるく追立さする  
也。犬のさはりと成て不可然。

一外に二三騎も相かさなる時。大かたみつひ  
やうし。替りくする時は。物にせきかけて  
馬を可寄相。かさなりたる射手より引のけ  
て。すきにひかへて。犬のちかふを見て逢へ  
し。如此の犬には。手綱をもおそく。弓もお  
そく引ては不可叶。火打の火を打出すこと  
くにと云は。加様の時の事也。

一鞭を打事いかにもさしのへて。たふくくと  
高くあけて。少上にて持様にして。鞭のさき  
を少尻目にかけて見る様に。品々と可打也。  
一度打て間もなく。頓て不可打。又打へきな  
らは。間を置いて打へき也。鞭を打事大事也。  
能々稽古すへき也。

一よはき犬は常に射るを見てつく也。加様の  
犬は能々見分て射へき也。犬の足跡そろひ



たるはつく也。

一さいまを馳通は。其矢をさしはすして。又つかひて射へし。其儘は不可射。たとへ射たり共矢ならぬ也。

一外に逢事。まさしく繩に能矢の有に。犬をも追。矢をも放事。初心にみゆるあひた。可心得事也。

一毛をしらせて射たると云は。犬にあたりたる矢の。犬にひつ付たる様に見ゆるを云也。但能あたりたる矢の事也。是はほめて云事也。

一繩にて射たる矢。或はおもかひ。又は何にても懸りて落さる事も有へし。其も矢たに能はくるしからず。矢の落付を見はつるに不及。

一射たる矢土に立て。しはしころはぬ矢有。ころはぬさきにひかよふと云て可入。ひかよ

うと云て後は。たとへ繩へころひかゝりたり共不苦。能矢也。ひかよふといはぬさきに。繩へころひかゝりたらは。ゑせ矢也。捨へし。

一繩を敷たる矢と云は。繩の上に落臥たる矢の事也。あまねく人しらぬ矢也。

一繩より出る犬。繩より射かへさるゝ事あり。矢當りて後。繩のうちをかきまはりて出はる。せ矢也。假令一足なりとも捨へし。直にかきこをらは子細なし。

一犬を射おくりて。又土に矢音有。矢は二こゑとて引目尻を見るまでもなく捨へし。又是をしりこゑとも云なり。

一上手下手に馬を立る事。上手は下手より勝たり。上手にては馬の尻にて下手の馬をおさへ。立つめて射へし。若かねに立て繩をふかくこめて。犬の肩を射んと心にかくへし。



下手にては上手の馬をためあけて。馬のくひにさゝへけ。矢をつかふへし。行膝のひれしほでのねをかくる程にかゝらは。引しさらかして。上手の馬の尻に。我か馬の頭をならへて立へし。上手の馬金に立はなをつかせて。繩に添て立へし。

一矢所は風上風下。若は犬のあかきによるへし。生得に犬の前足の繩を越るあはひを射へし。大かた下手は繩としには。犬のなりより少こからかして射へし。上手にては前を射へし。若馬なをらすは上手をおさへて。外にて射へし。

一御所にては。常の馬場より犬すみては。はやく下馬して脊をぬきて。右の手に行膝のすそに取添へて持へし。左の手にては弓と引目を行膝のすそにとりそへて持て可出。弓の弦をは上へなして持へし。御通りにて畏

へし。足なかをはくへき也。只の馬場にては少おそくおりて。弓引目を介添に渡すへし。行膝のすそを介添。兩人にかたゝ宛どらすへし。ひどりしても行膝のすそを取て持て脊をは人に持すへし。又引目をは我と持て出たるもよし。

一外にて貴人。又は上手のあひの馬に成て。我も射す人にも射させぬ事尤不可然。左様の方へ犬を追懸て射させ可申事也。間の馬と云は。射手と犬との間へ馬を馳入る事也。是又斟酌あるへき也。

一あてこふしは射手の約束と云へ共。馬手は腰はそくよりてふかく弓を引て前をおすへし。走くひるゝ物をは。犬馬共につよく開てあらはして。弓を引てあらはるゝ所を矢所とすへし。ちかい犬は外馬の尾の下を矢所にすへし。すかひ弓手。馬手切むかふ様にさ

しよせて。馬の頭に隨て射へし。是等ちかい犬の矢所也。

一毛さきまかする物と云はわかれはせて。わかるゝかと思ゆる程成犬の事を云也。但けさきをまくるほとに當るを云也。

一犬に射間敷矢所の事頭足ほそ尻也。又足痛て足三にて走犬をは射間敷也。是を足なき犬と云也。

一繩にて犬まさしくかゝぬ先に射たらんは。矢は能共捨へし。外にても同沙汰也。なまかきなる犬成共。まさしく足あるは射へし。

一矢印の宗を檢見問時は。矢印の宗を何と申字にて候と可申。檢見はあれよ共是よとも被申は候と可答也。

一貴人檢見にて矢を沙汰せられは。射手は繩際を打のけて。介添を召寄て。向寄むよりにて。馬よりおりて。畏らすして脊をぬき。脇に

置。弓は左ニ持。鞭を右に持へし。我矢能と思はゝ。人より早々馬に乗りて中へ出へし。一等輩の檢見の時は。下馬すましき也。只繩際を打のけて候へし。

一檢見より弓又はかうかいをこはるゝ事有へし。檢見貴人の時はとても。沙汰の時はおるゝ間おりて出すへし。弓を出す時は。引目をは其儘右に取て弓計出すへし。等輩の檢見ならは乗なから弓をも使に渡すへし。請取様にも乗なから取へし。かうかいの時も同事也。

一射間敷犬の事。檢見はや放せと云ぬ先に。繩をひつ切て出る犬くひたまの付たる犬。三足にてさす犬。耳の切たる犬筒を出したる犬是等也。又外にてはなまかきなる大繩にて。矢の有犬物つかれ。此等を射間敷也。能々可心得也。

一繩に矢有。又外に矢有。外の矢主矢よければ。矢をとるなと云て。馬をすへて檢見の方をみる也。其時檢見内に矢有と云て。内の矢を入る也。内の矢の能時は。外の矢は善惡の沙汰に不及。内の矢を賞すへし。

一繩きはに矢の筈にても。引口の方にても。土に立事有へし。すくならんは云に不及。たとへ繩の内へ少かたふきたり共。まさしくたをれふさゝらんかきりは不苦。能矢なるへし。是は矢毎にたすけたきこの義也。

一繩にて犬の足一踏落したる矢なれ共。能さくり有るうへは能矢成へし。但さくりは分明にみたれ共。まさしく足ふみ落しつると。たしかに檢見見定たらは捨へし。如此の事はよろしく檢見の心にまかすへし。但論の犬追物の時は。一わう射手さゝへへし。時ニ寄所ニよるへし。

一たる口の犬に。貴人檢見の時矢を沙汰せらるゝ時。下馬して重ては乗へからず。御落馬の下馬したるも同事也。

一繩にて能矢を射たる時。馬出ぬとて。或は鞭かけて見せ。或はねすなきをして出す事不可有。殊に貴人など御加の時はらうせきの義也。内々稽古などの時はさも有へき歟。

續群書類從卷第六百七十六

武家部二十二

犬追物益鏡

序

夫犬追物者。繩四外四八之矢所也。雖然檢見之依覺悟。善惡矢之紛在之。古今最大事申傳者也。去者一足之犬三四矢射置然可捨矢。可賞矢分明雖記歟。日夜不惰工夫肝要者也。仍名之益鏡。云々。

檢見射手覺悟之事。

一檢見射手ニ矢所を問事。よき矢射たる時。ひかよふて云て後矢所を可問。又矢あまたあ

る時は。ひかよふと云てのち。あれよともこれよとも矢を問て。さて矢所はと可問也。

一馬手頭に立たる時。下手より出る犬を。わか馬の尾の下にて。おしもちりて射て。さて左手綱をつかひて。した手へ馬を折出したらは。只弓手也。矢所をとほし弓手と可答。

一外にてすかひ。弓手を押もちりて射る事あり。縦射様はおしもちりて射たりとも。犬の出様すかひ弓手弓手也。其も馬をさつとすへ切て。打歸りてすへたるは面白也。

一犬射引目のうるしはきは赤漆たるへし。御

組の時も。雨ふらは可射也。

一弓手にて矢をはなし初てこそ。馬手切をも射へけれと云義あり。雖然馬手切押もちりを先射たるもくるしからず。又繩にて矢をはなさすして。先外にてあふ事。晴の犬などの時は聊可有斟酌歟。其も事によるへし。

一ふちをはふふ／＼と高くあけて。持様にして打也。一度打てあいもなく又重而うたぬ也。又可打ならは。あいを置いて可打也。

一内犬射る時。外の人なくは。主の名を只官途計日記に書てもくるしからず。

一馬の上にて弓を取落事常にあり。異なる貴人主など檢見にても。射手にても。又は棧敷にも御座ある時は。打のけて矢とりのかけにて馬よりおり。沓をぬきて弓を執り。さて沓をはき。馬に乗て繩きはへ可打寄。同輩の時は少打のけて矢とり出さは。馬の上にて

執て可打寄。

一腰さしの引目。自然物にあたりて損したる時は。矢取のさしたる引目を執てさすへし。落馬などの時は。毎／＼損する也。檢見にも射手も貴人御坐あらは。弓取落したる時の覺悟のことし。

一繩をはたらかさしとて。杭を打と云人あり。當流に一向なき事也。たとひ人くひをうたせたりと云とも。檢見杭をぬかすへし。

一三手の犬追物。鹿苑義満院殿被遊時。射手三十騎ありたる也。其時は上手十二騎。中手十騎。下手八騎にて被遊たる也。

一百疋の犬にても。いか程の犬にてもあれ。自然暮過てはてぬはくるしからぬ事也。尊氏等持院殿御犬始の時。依暮七十疋ありて御はたしありたる也。

一つほの馬場の時は。矢取はすみちかへにて

も。又一方にても。其外何ともあるへき也。  
本は假屋形の左右にある事不珍事也。取矢  
は二人有へき事本儀也。しかれ共つほの馬  
場などにては。一人にござせてもくるしか  
らす。又矢取は中間本也。但加様の時は畧儀  
なから。小者とりてもくるしからす。

一しらみかきの犬には。矢毎に少の事をも能  
糺し。矢所の善惡をもみかき射る事也。射手  
も檢見もしらみかきの犬には。別したる心  
へあるへき也。

一射置たる矢おほくある時。我矢よきと思は  
し。馬を出して。やかてすえて如法馬を折  
り。檢見の方を可見。

一射手のむしたるには。日記ニ無ども。何ども  
不可書也。

一外へ押かゝりて。矢をはなさぬ時は。馬の折  
様。左へも右へも可折。苦しからす。

一内馬外馬の沙汰の時も。矢を沙汰して後。是  
よと可問。但馬のひかへ所によりて。あれよ  
共可問。

一まくりひらきと云事は。外にての事也。ま  
くと云は。犬と馬あはひ遠き時。犬に近くあ  
はんとて。手綱をつかひて馬をよするを云  
也。ひらくと云は。犬と馬とのあい近く成  
て。口せはになるを。あはひをひろくなさん  
とて。手綱をつかひて馬をのくるを云也。弓  
手馬手同貞輔云射鏡にあると同じ事なり。  
一日記につくと見は。すてよと云は。犬に引目  
のあたると同様に。犬のころふを云也。捨る  
矢也。

一口せはに成と云は。馬も犬もよりあひ頭に  
走かゝるを云也。不可射。されは一ひらきひ  
らきて射たるはよき也。但勝負の時はひら  
かす共可射也。經家云。勝負之時ひらかす



共可射と云事不密。

一あまる犬と云は。繩にて射られずして出る犬を云也。以前にはなしたる犬を射て。遠く追て射すして打歸る時。あまりて繩より出たる犬にあふて。射たるをあまる犬とも。にけ犬共云也。同事なから。ことにはあまる犬と云かよき也。何もと云なから。此犬をはいかにも手さはやかに射たるはよき也。さきに不射して打歸るとて。あまる犬を射るに。又にふきは不射におどるへし。

一馬のたまると云は。なわにてときと射て。おそく馬を出すを云也。わるきこと也。

一繩したるきと云は。能矢を射て馬を出すに。馬おそく出るを云也。鞭を打は矢かすたる晴の犬追物にてもなく。貴人も無御坐時は。矢を捨て馬を爲可射入。ふちを打たるもくるしからず。棧敷にても檢見にても。貴人御

坐ある時は。よき矢をすてゝ。馬を爲可射入。ふちを打事可斟酌くわんたいに見ゆる事也。若輩すへからず。

一馬のけきると云事は。弓を引時あゆみ出るを云也。何もわるき曲也けきる。馬をなすはせめ様あるへし。あゆみ出るはむつかしきもの也。

一犬の時しちありて。用を弁するニは。矢取のかけへ打のけて。むらはきの緒をしめなをし。こしさしなど取かへてさす也。但等輩の人計寄合て射る時は。馬に乗なから。弓などをも取替へし。

一射手繩に少のけて。金に立てひかへる處に。檢見鞭ぬき出し。繩へ打寄處にて。射手皆馬を繩にすへて立見合て。矢をさしはさむへき也。

一繩の四のかと賞翫也。若輩此四のかとの外



いつくへも可打寄。雖然棧敷のどをり一二のかとの間へは不可打寄。是は最初の事也。惣而檢見の左のわきへ打よる事よかるへし。一二の間は物頭と云也。

一棧敷の左右より馬場へ打入。繩きわへ可打寄事。物きはをいかにもしなくと矢取二人めしつれて。矢取の後を通り。繩へ可打寄。棧敷の前をすちかひに通事。努々有ましき事也。犬始りておそくは矢取の後を不通過も。繩きわへ直ニかけ足にて。打寄こともあるへき也。

一射様の事繩をふんきる程に。少しすみかくる様に立て。弓の本をしなくと打おこし。かきより引くたしよきかとへさかり思程引て。少持て繩をこすこさすにて。ときと射て馬をよき程に出てすへ切てかい折。弓取なをし。繩きはへ可打寄也。一騎あいなどな

らは。馬をすへて口を引へき也。弓を持直し候事よくし。初心の人稽古すへし。古射手の事は不及申。若き人なといかにも手品よく取なをしたるかよきと也。

一繩馬手の事。馬手頭に立て。弓の本をこして射置て。物の尻を切て馬を可出。檢見矢所をととはし。繩馬手と可答也。

一外へかゝる共。外へあふとも可云也。又外へはうとあふなとも云也。

一等輩の手組の時。弓を取落し。又は張替をとる事あらは。けつりきはより外へ打のけて。馬の上より可執。但主貴人御坐あらは。矢取のかけにてとりかゆへし。

一物きわをそふて走る犬を。十文字に寄てすかう弓手の様に射置て。其儘物につれて馬を出事有へからす。若如此馬を出す事あらは。矢所を問て可捨也。

ニ) このことく物にそふて馬を出した  
らんは。矢を可捨なり。

馬。

如斯馬を出し。馬をすへ切て。右へ  
折たらんは。可賞矢なり。

一檢見はたとひ我子弟なりとも。外へあふ時は。繩の外へ馬を打出して。射手おけひかよふと云へし。子弟なればとて。繩の内にひかへてゐる事有へからず。犬をも追かけ射さすへし。但貴人のことくさのみふかくは有へからず。

一檢見と喚次と替りて。十疋ツ、する事有。先  
十疋目の足口の時。繩より打出して何かし

と喚也。其鞭ヲ腰にさして。喚次の扣所へ行也。扱喚次棧敷の前へ。例式のことく打寄。何かしと喚て。繩の違日へすくに打寄て。鞭ぬき出して打入て。檢見をする也。又二十正のたる口射たる時。何かしと喚て。以前のこくと替る時は。喚次は假屋形の前より。すへに繩へ打寄て控也。常の喚次に替たるは。喚次のひかへたるあたりに。不審の矢をは喚次に。今の矢はよう候歟。惡候歟と可問。喚次見及程の事をは云也。雖然馬を遠く乗働して。矢をさはくへきには非ず。内外の檢見のことくには不可有。此日記には初の檢見を可書。如此檢見喚次打かへくする事拾六條。馬場小笠原備前守殿氏長同子息次郎滿長常に沙汰ありたる也。

一檢見は日記のことく。殿の字有ともなくともよふへし。又喚次は檢見よひたる如く可

喚。但大名の内の者。犬射たる所へ。其主見物に來て。棧敷に被居は。日記には殿の字有とも。檢見よふへからず。檢見よはぬ上は。見次もよふましき也。又其主人歸られたら

は。殿の字を付てよふへし。其主人自然被來見物ある間の事也。日記をは不可書改。殿の字ある日記其儘可置。但犬不始以前より來て主見物あらは。殿の字を日記に書ましき也。若主犬半に歸たらは。縦日記には殿の字不書とも。殿文字を付て檢見よふへし。

一檢見矢をみるに。能クは繩へ打入て。御犬引こめと云て打出して。名字を可喚事本儀也。繩へ不打入して其儘喚事畧儀也。但犬あひもおそく。檢見の牀も見にくき時は。時宜によりて繩へ打入すとも名字を可喚也。

一繩きは矢餘多有時。ひかよふと云て。扱馬を繩より外へ打出して。繩近よとも。是よと

も。あれよとも問て可入。是本儀也。又矢のきはまで打寄て。繩の内にてあれよ。是よと云て打出して。名字をよひても苦しからず。時宜によるへき也。

一檢見矢沙汰する時。馬よりおりは射手は馬に乗ながら打のけて可扣。親檢見にて馬よりおるゝ其。子は馬よりおるゝ事ある間敷也。落馬の時。但大名我内の者計にて射る時。大名落馬あらは。子弟おりて可然也。外の馬場又は外人など射る時はおるへからず。經家云。此一書不審也。主落馬あらは。内者皆おるへき也。若檢見落馬の時。弟子下馬の事歟。主檢見して馬よりおるゝ事あらは。内者射手にあらは。外人有ともおるへき也。落馬同前。

一主人其外能矢を射て。馬の足出して後。落馬の時。内の者檢見ならは。先矢を入て鞭腰に

さして打のけており。脊をぬきて。やかてはきて可乗。但時宜によりて矢を入ぬ先において。主繩へ打寄せられたる時分。馬に乗打入て。矢を入たるもよし。何もくるしからず。

一 檢見矢を沙汰する時。射手矢のあたりあまり近くはひかへぬ事也。ちと打のけて可見也。又外の矢を沙汰する時も。打寄可見。それもあまりに近くは不可打寄。繩近の矢沙汰の時。繩の兩方へ打寄てみる也。御手組の時も同前。

一 檢見矢沙汰の時。弓筈こふ時はかる人の矢とりをよひて。弓かうかいをかりたるか能也。但其矢取ニ而なければとも苦しからず。檢見貴人にて射手馬よりおりたらは。矢取もなくちきに射手にかるも苦しからず。間遠くはそれも矢取にてこふへし。馬の上に射手乗てある所を。檢見馬よりおりて。直にか

る事有へからず。若又左様にあれば。射手は馬よりおりてかす物也。然は事の外造作なる故に。以中間かるかよき也。

一 檢見遠近を弓にて沙汰せんに。子弟射手の内にあり。其弓を取て沙汰すへきに。若こしやうなにて。弓のほと短くてとゝきかたは。子にても弟にてもあれ。其者の名を云て。弓のほと短候間。とゝきかた候。御弓可借<sup>ル</sup>由を云て。余人の弓をこひ可申也。矢と弓との間を見はからひて。弓のほこみしかくてもとゝきつくは。小性の弓にてなりとも沙汰すべし。

一 射手檢見すへき次第の事。一番の矢代の人。常の檢見の如く出立て可打寄。鞭は犬射鞭のゆひ懸を緒に卷て結付てさす也。繩の内十疋とよふ迄聞て。次の二十疋めの人矢取の後へ打のけて。馬よりおりて小手引目を

取て。寸合の袖を常のことくなをして。ひほを結て鞭をさして。例式の檢見のことく出立て。繩のきはへ可打寄。其時十疋のたる口過たらは。以前の檢見矢取のかけへ打寄て。小手をさし。射手具足をして。例式の如く出立て可打寄。若今出る檢見遅くは。出はたる口よひたりとも。二三疋の事は以前の檢見犬をはなすへし。其時はいかにも今出る檢見と。又以前の檢見打のくる時は。今出る檢見をは少恐る様に。馬をも打のけてとをるへし。百疋はつるまで此心得たるへし。但日記をは先書て。射手檢見計の爲に。矢代ふり圖をとる事も。大畧は矢代次第第二日記にも付る也。前十人十疋宛する也。十一番十二番めの矢代に出たる人は。檢見のそかるゝ也。又初心の射手あらは。始より矢代をのそくへし。若檢見する人十人迄なくは。七八人もあ

らは。始の十疋の檢見より次第にかはりてすへし。尙又五人もあらは。二十疋つゝけてすへし。十疋宛打替てもする也。射手檢見の時は。射手と檢見と二所に一人の名書を書也。

一朝犬又暮過て。䟽見えかたき時は。檢見犬の出る方へ。䟽に打ついて。馬を出し矢をみる也。是はことなる秘事也。

一檢見射手を見合。鞭をぬき／＼馬を繩の内へ乗入。御犬をはなさせ候と。貴人又は古射手に云て。扱犬引こめと云て。扱犬にけ候と二聲計いはせて。はやはなせと云て。馬を打出しさまに。犬引こめと云て。一番の馬の打出し始には。繩の前の右のかどへ打出して。左のかとより可打入。一二疋までは如此。其後は矢の有方より可打出。貴人檢見の時は。犬引こめと可被仰也。但公方様被遊時。細川



殿。山殿。御檢見成共。御犬ひつこめと可被仰也。檢見中間一二人矢取のかけに可置也。

一檢見繩の内にて。鞭取おとす事あらは。馬を繩の外へ打出しており。脊をぬき。中間に鞭をとらせて。取てこしにさし。脊をはき。馬に乘事如前。繩のちかひめより。ふちをぬき。打入也。但一段と貴人は繩のうちに。中間にとらせられ。其まゝ御とりある也。

一檢見引目尻を見る事。二の心得有へし。先善惡をみん。一ツ。又貴人の御矢わるきと見れとも取てみる。是二也。引目の目三ツすりつれば。あしき矢也。二ツすりたるは能矢也。

一貴人外を追て御出有時。檢見の心得あり。馬を繩の内より打出して。走る犬の跡より行際つゝみを打追かけ申也。御矢能あらは。其

儘繩の内へ馬をかけ入。御犬ひつこめと云て打出しよはゝるへし。又其犬はしらて御矢をさしはつして打。御歸あらは。馬の口をあひしらはし打。御よせある跡より可打歸。又等輩の人外の時は。繩の内にて追かくる也。又平人外にて矢をさしはつして打歸は。檢見はやく先へ打歸り。犬をはなさすへし。

一二騎の檢見とて。内外を二十疋かはり。又はなん十疋替打かへてする事あり。其定のたる口の時かわるへし。かはる時ふちをぬかは。外の檢見もぬくへし。

一内外の檢見の時。日記の書様は。いつもの如く檢見喚次と書て。檢見書所に。いつものことく誰と書て。外の檢見もならへて書也。喚次とは。書たれとも。誰ともなし。此書様に。内外の檢見と見しる也。

一檢見の馬の折様の事。最初の一疋ハ必棧敷に向て馬を打出し。左へ可折。後々には右へも折也。不定事也。但棧敷に向てなを打出すに。大人なと御控ありたらは。わきより可打出。大かた繩の左より打出して。右の方より打入。右より出しては。左より入也。馬の折様大かひ如此也。あなち定る法にはなけれど。如此するか能也。又名字官途喚るに。喚次にすくに向て可喚也。常々そはさまに喚事。如在之義也。

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

## 犬追物付紙日記

多賀豊後守高忠筆作付紙日記

一櫟を一具さす時は。右よりさして左より取へし。

一沓をはく時は左よりはきて。ぬく時も左よりぬくへし。

一射手繩際へ可打寄事。膀示の外より馬に乗て打よるへし。百疋はてゝ後。繩際を打退て。外膀示の内にて。馬より下る也。打出る時は。棧敷の左にても。右にても其むきの然るへき方より打寄へし。

一初め繩際へ射手の打寄時は。繩と棧敷の間をは。打とほらぬ事也。矢取も同前也。

一繩きはへ打寄る事。貴人一騎も打寄せたらは。則可打寄。遅く打寄事尾籠の事也。

一繩際にて。馬の扣所の事。賞翫の次第。四の



角あり。覺悟可有事也。是は初て打寄て。犬の初りたる時の事也。

一矢取の事仲間たるへし。烏帽子かけをすへし。小者にとらする事は畧儀也。墓目ハ二ツさゝすへし。棧敷の前左右へのきて。繩の通りに可立置。棧敷の方に立たる賞翫の儀也。射手の打寄時。繩と棧敷との間を。矢取通る事有へからず。犬はや初て矢取時は。いつくをも通るへし。射手出ハ。矢取ハ射手のあとに可出也。

一一番に放す犬ハ。牽込の犬とて射ぬ事也。二疋めより可射也。二百疋目の犬を檢見牽込より被遊候へと云事有。其時ハ可射也。夫も射さるハよかるへき也。

一射手可具次第之事。先烏帽子かけをして。小袴のくゝりをしめて。行膝の左の皮一蹈込て。扱右の皮へ蹈込て。其後緒を結ふへ

し。扱左の素袍の袖をぬきて。上より下へ右皮の緒に引通し。左の方へ袖を卷へし。其後左皮を卷たる袖の見へぬやうに重て緒を可結。腰差も緒を結ふ時可差。其後籠手をさすへし。籠手さす時は。左右の手を前にて組て。くつくと有やうに。右のそしゝの通りに。籠手の緒をとむへし。ほとけぬやうに紅の糸にて上を可結。緒の組やう數不定見能程にすへし。長五寸計成るか能也。其後髻を指へし。素袍の袖おは。昔より下より上へ取て。右皮の緒に卷て納め來たれと。上より下へすくに引通して。納たるか仕合よき間。近來如此沙汰せらるゝ也。

一素袍にて犬を射る時の紐をは。前にて二結ひむすひて。前の小袴の緒へ紐一筋宛。別々に間を二三寸置て押かふ也。一ツに取ても前腰に押かふへし。又前にても二むすひ結

て。後の襟に紐むすふやうにも結也。是は笠懸射る時と同事也。

一腰差の矢の事。打出さまに走羽を上に通へ成て指て可出也。

一犬射籥の事。白籥たるへし。籥は羽中を可賞。眞鳥羽本也。中黒妻黒妻白などを可用。糸矯たるへし。但かは矯にもすへし。不苦。切生なと籥に付る事。殊成貴人は是非に不及。常の人は斟酌可有也。ませはき又は鶴の羽なと籥に付る事不苦。但略儀也。晴の犬には不可用也。

一犬には八の矢所の事。繩にては弓手押戻馬手切繩馬手是四ツ也。外にては弓手馬手直違弓手馬手すかひ是四ツ也。以上八ツ也。是を八ツの矢所と云。問時如斯答へき也。此外不可有之。

一馬の折様弓手違弓手押戻を射ては。馬を出

してすへ切て。馬手へ折へし。又馬手切繩馬手を射ては。弓手へ可折る也。

一外へあふて。矢も放さぬ時は。弓手へも馬手へも。何と折たるも不苦。

一貴人の扣たる上手へは不可打寄。打寄る事は尾籠の事也。又我扣たる下手へ。貴人打寄せられは可打退也。

一繩にては犬毎にさし弛をすへし。殊に白磨の勝負などの時。さし弛をせずは。矢は能とも檢見可捨也。されは古射手なとは。矢をさし弛て候。矢をはめ直して候なと。檢見にむかふて云也。勝負なとにてなき時は。さし弛シなければと。檢見見落したる顔にて。矢よければ入る也。

一能矢を射ては。馬を居て弓を持直す事。馬をかひおらぬ先に可持直。又馬をかい折て後も可持直。是は不定事也。

一機敷近時の犬を射ては。假屋形へ向て馬を居る事不可有之。何方へも馬を出して可居也。

一能矢を射て。未検見扣ふとも云ぬ先に。鞭を打ては矢はよけれども捨る也。荒馬などの繩したるきを。馬を打入へき爲に。態と矢を捨て鞭を打事も有。但貴人など扣たる時は。馬を打入へきとて。能矢を射たる時。矢を捨て鞭を打事尾籠の事也。

一鞭をたふく高く上て。少上にて持やうにして打也。一度打て間もなく。又重てはうたぬ也。又可打ならは。間を置いて可打也。

一外の物にあふて射て打歸る時。兩の手用の時。つねに弓を腕にかけて。弓の本を土砂に突事も不苦也。

一犬塚へ入たる犬。其儘すくに走り通りて出たらは。射手抑懸て可射。少も犬塚にたまり

出たる犬をは射間敷也。検見も犬塚へ入たる犬。射手に追かくる事有間敷也。犬塚にたまりて後。這いてたる犬をしらすして射たりとも。検見可捨也。

一外より遅く繩際へ打寄る時。はや犬をは放す時分ならは。犬のむきを見合て。犬の出へきもなき方へ打寄る也。如此の儀は。遅く繩際へ打寄ては。速もやかて射られ間敷間。もとより扣たる射手に。射さすへきため也。

一外にて馬手を射たる時。弓の本を越。矢を放すさかいに。犬つい伏替り。又は馬かき留り。矢を放させぬ時は。弓はもとの方へ直すへし。二度三度に一度は。馬手の方にて矢を取落したるやうにて落すへし。是は放さてしけくもとの方へ弓を直す事。面目もなきと云心也。殊に古射手など取落たるは。おもしろき也。弓手にて藝目取落す事はわるき

事也。

一弓手にて矢を放初てこそ。馬手切をも射へ  
けれと云義有。然といへとも。馬手切押戻を  
先射るも不苦。又繩にて矢を不放して。先外  
にあふ事。晴の犬などの時。聊可斟酌哉。但  
夫も馬繩にたゝすして。繩にて射つへくも  
なき時は。外にてもくるしからず。

一能矢を射ては。繩へ打歸る時もとの疏へは  
打かへらぬ事也。何方へも見はからひて打  
よすへし。

一犬に首玉のつきたるをは射ぬ事也。縦射た  
りとも其矢すたるへし。檢見見落てはなさ  
するとも不可射也。

一なまかき成る犬なりども。まさしくかく足  
あらは可射也。

一さくりに乗と云て。犬の走跡を追事比興の  
事也。手綱をつかひて。弓手にても馬手にて

もあふて可射也。

一犬の足一ツ切。又痛て足三ツにて走る犬の  
事。縦能かくとも射間敷事也。射手不知し  
て射たりとも。檢見は可捨。是は足のなき犬  
の事を云也。

一檢見はや放せとも云ぬ先に。繩を引切て犬  
の出る事も有。又犬放卒忽に放事も有。檢見  
放せとも云ぬは射間敷也。縦矢は能とも檢  
見可捨也。

一射手二ツめを取事。馬を直して手綱をつか  
ひて可取。二ツめを取時は。腰にさしたる墓  
目のそとの方にさしたるを取か能也。

一外にてつゝを出したる犬をは。射間敷也。縦  
射手しらすして。射だりとも檢見可捨也。

一いかにも引てさかりてたゝしたりとも。犬  
わかるゝかとも見へ。又身通り成る物とも  
思はゝ。さしゆるすへし。縦能弓手を射たり

とも。ゆるすへき所にて。矢を放てはいたつら事也。

一能矢を射て馬を出す時。持たる弓他人の射手具足にもかゝる事あらは。やかて弓を可捨。遅く捨れは。我か落る計はちから及はす。人をも落す事常に有。弓を早く捨たるか能なり。

一同所にて三疋はつせは。そこを打退て余所に可扣也。

一矢多有時我矢能と思は。馬を出してやかてすへて検見の方を可見。検見あれよ是よと問はんとするに。射手不知して。馬を遠く出す事見にくき事也。

一犬の時弦も切。又弓をも引折。または取落。其外射手用の時。貴人射手にても検見にてもあらは。矢取の後へ打寄て馬より下り。沓をぬきて張替を矢取に取寄て。扱沓をはき

て馬に乗て可打寄。只弓を取替る時も。貴人ある時は矢取のかけにて。馬を打退けて下り。沓をぬきて可取替。等輩の時は馬を打退て。馬の上にて取かゆへし。

一弓の弦も切。又は折たる時は馬の上にても。張弓のことく可持也。

一馬轡をはみぬきたらは。馬を能留めて。轡を矢取にはめさせて。矢取の後へ打寄て。おもかいをつめてうちよるへし。

一腰差の墓目物に當りて。篋も折れ。墓目も損たる時は。貴人射手ならは。矢取の後にて。馬より下り。矢取のさしたる墓目を取て替へし。等輩の時は。馬を打退て。馬の上にて扱さしかゆへき也。

一落馬の時は。馬をぬきて。馬を矢取のかけへひかせて。射手具足などをも見つくろひて。馬に乗て打出へし。烏帽子など落る事あら



は。烏帽子をかしらにかゝへて。勝示より外へ可出。

一 貴人檢見にて。矢を沙汰せは。射手は繩きはを少退て。馬より可下。落馬の時も同前。下りは。やかて脊をぬくへし。等輩の時是不可下ル也。

一 親檢見にて。矢を沙汰する時は。其子射手にてあらは。子は馬より不可下ル。惣の射手のことくたるへし。

一 まくりひらきと云事は。外にての事也。まくと云は。犬と馬と間遠き時。犬に近くあはんとて。手綱をつかひて馬を寄する事を云也。ひらくとは。犬と馬と間近く口せは成るを。あはひを廣くなさんとて。手綱をつかひて馬を退るを云。弓手馬手同前也。

一 物の尻を切ルとて。犬の走り通る跡を蹴を切りて。弓手ならは馬手にあひ。馬手ならは

弓手にあふを云也。

一 たり入矢と云は。犬の下腹へ射廻したる矢の少土に當たるを云也。されは毎度檢見は。褻目の尻を可見也。

一 身通りにて。射たると云は。射手の身の通にて。矢を放事を云也。いたゝかれたる物より。尙後ろなるを押戻て射たるやうに見ゆるを云也。

一 犬のかき留ると云事は。走犬のしつとゝ留るを云也。

一 かきたつると云は。しつとゝ留りたる犬の走るを云也。

一 わかるゝ物と云は。馬は西へすくに走れは。犬は坤の方へ行を云也。

一 すかふ弓手と云は。馬は西へ行は。犬は東へ。弓手の方へ走るを云也。

一 馬手と云は。馬の右を走る犬を。弓の本を越

て射たるを云也。

一すかふ馬手と云は。馬は西へ行は。犬は東へ右を走るを云也。射間敷矢所也。

一弓手切と云は。弓手より馬手へ犬の走るを。

弓手にては不射して。弓の本を越て馬手にて射たるを云。是も射間敷矢所なり。

一矢の下につきたると云は。墓目のあたると同様に。まろふ犬の事を云也。

一犬のつい伏替ると云は。直に走る犬のしつと、留りて。余所へ走るを云也。唯伏替るとも云也。

一口せはに成てと云は。馬も犬も寄合頭のやうに走りかゝるを云也。一ひらきひらきて射る也。勝負の時はひらかすとも可射也。

一添矢と云は。犬の頭の方へ墓目つれて行やうに添ふを云也。

一下る矢と云は。射こくりて。墓目の出るに當

りたるを云也。こつそとさかると云は。犬にあたるとも見へす。さかるを云也。

一越る矢と云は。あたりたる犬のあなたへ落たるを云なり。

一うは手とは。我より前に扣たる人の事也。下手とは我よりうしろに扣たる人の事を云也。

一余る犬と云は。繩にて射られすして出る犬を云也。箭放たる犬を射手遠く追て不射して打歸る時。余りて繩より出たる犬にあひて射たるを。余る犬ども。にけ犬ども云也。同事なれども。詞にはあまる犬を仕たると云か能也。

一出かたの定りたる犬と云は。毎度西へも東へも出ルやうなる犬を。出かたの定りたると云也。

一物頭と云は。棧敷の前の事也。物頭に毎度扣



る事は。斟酌有へき事也。但あまりに矢數なく。又は無をもすへき程ならは。透を見て物頭へ打廻りて可射也。

一さし渡して射たると云は。間遠物を射たるを云也。さし出して射たるとも云也。

一かた犬と云は。可射所にてはかき留り。さなき所にては走り廻り。繩の内を走り廻り。馬の下腹尾の下などをくゝりて出る事を云也。是を能心得て。矢所尋常に射候は。ほうひせらるゝ也。

一たくましく射たると云は。さして見所はなけれども。弓もつよく。墓日も大きに。矢音高に。能さかりて射る射手を云也。

一いやけなく射たると云は。上手なとつまりて。馬の首の下へ走り入物を。矢束を引てさかりて射たるを云也。

一手のきゝたると云は。繩にても能射當てゝ。

いか成所にても弓を引こめ。三ツ目をも早く取て射るを云也。

一馬のたまると云は。繩にてときと射付て。遅く馬を出すを云也。

一馬のけきると云は。弓を引けは繩にてかいて出るを云也。

一馬のあよみ出ると云は。弓を引時。歩み出るを云也。

一なけ馬と云は。繩にて弓を引は。尻足二ツをひつしきて。前の足にてなけかへる馬の事也。又は足をつかひて。こまかになく馬も有之也。

一ふるまふ馬と云は。弓を引はしなくと足を。はこひて射さるを云也。是をあらはす馬とも云也。

一毛さきまかする物と云は。わかればせて。わかるゝかと思ゆる程の犬の事を云也。

一矢弱なる射手と云は。矢束をも不引矢音なきを云也。矢弱なる射手とはいへとも。矢強なる射手と云事不可有之。

一犬追物の時。馬場にて介添の弓持てよるへき事射より五六寸上を。右の手にて弦を下へなして。ひつさけて持て出す時は。主人の馬の左へよりて。左の手にて射より。一尺四五寸上を取て。扱右の手にて射の下を取て。弦を外へなして。左の手をは弓に添て出すへし。左の手にて弓をつよく取たるは見にくき也。繩に扣たらは。馬の後ろを通りて。繩の内にて出すへし。但射手繩にひかへなから。弓を取事不可然。打退て可取也。替の弓を出して。折たる弓なりとも。又弦切たるとも。今出したる弓の下より取て持て歸るへし。外竹を上へなして。張弓のことくひつさけて歸るへし。切たる弦あらは。弓に取添

てもつ也。

以上七十九ケ條。

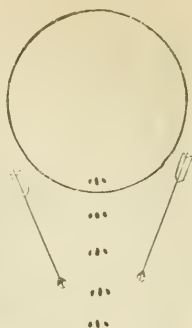
以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

# 犬追物草根集

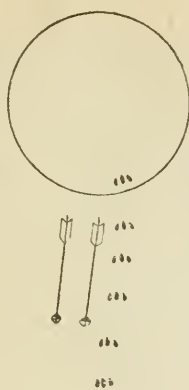
草根集

小笠原備前守殿入道淨元

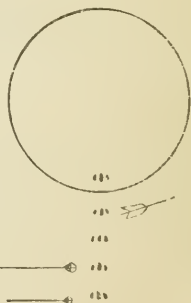
犬追物日記



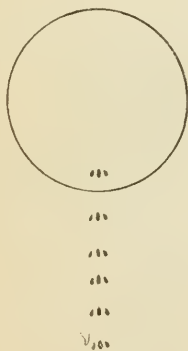
かやうに。弓手をしもぢりの矢繩おなじちかきならば。弓手の矢を賞すべし。



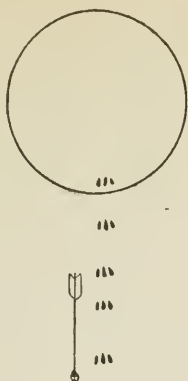
ともに弓手の矢繩おなじちかきならば。疏近を賞すべし。ともにおしもぢりの時も。同沙汰なるべし。



外の矢おれて。疏を越たるを不審の人あり。是も矢束ながきに。おなじおれ疏を越たりとも。繩近き間。此矢を賞すべし。縦篋のおれ引目のわれにても。少もさくりのこなたにあらは。能箭なるべし。或はともになしもぢり。又は弓手をしもぢりの時も。同前たるべし。



是は羽引矢なりつるゝわかるゝ見分ヶさる時は。矢の引はじめたる䟽と。又矢となりのさくり二に筈を立て。弓の弦をわたして。引目の方をおさへて。少もはたらかさずして。筈のかたを䟽に打かくれば。つるゝにてゑせ矢捨べし。かゝらねばわかるゝにて能矢也。わかれ羽引つれ羽引と云は。此矢一の義也。



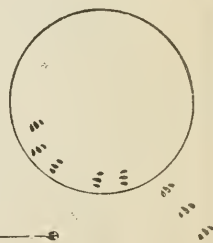
此矢は筈繩にかゝるかゝらざるかと不審の矢なり。

是な筈の時影はゑりなきし。引目の時は目をさす人有。

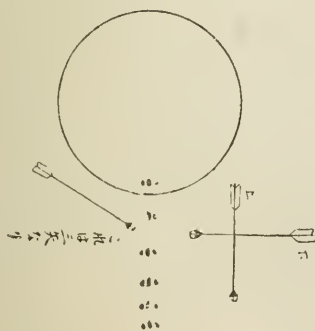
心得ざる事也。或矢の遠近をたゝす時も。はずのゑり

引目の目より寸を取事なし。なわの内へ入時も。はず

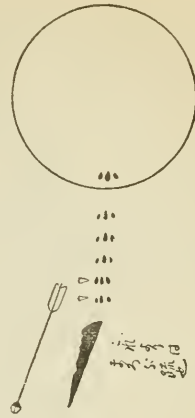
のかけ引。目のわれなど少もゆるす事なし。加様なる矢をば。當家には繩をすぐに上さまへ持上るに。矢少もつきてあがらば。捨べしはたらかずは能矢なり。



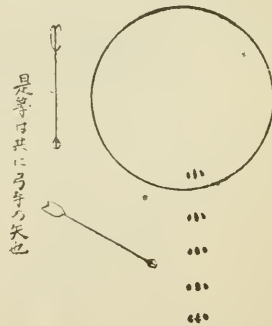
是は繩の内より射返したる矢なり。此矢あたりて後。犬がやうになわの内をかきまはりて出ばゑせ矢也。縦一足二足成とも。かきまはると見は捨へし。



二ある下の矢を賞する人もあり。於當家は此一矢を賞するなり。其謂はいつれより繩ちかき矢は。猶下に矢有。其下なる矢よりも。此一の矢は近き間。是を賞するなり。

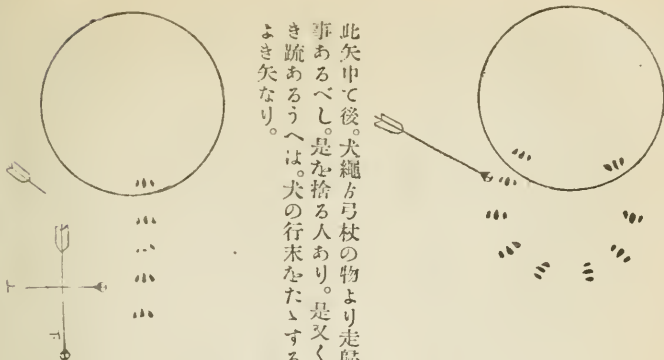


かやうにまろぶ疏の矢。能さくりにかゝるかゝらざる見分ヶざる時。まろぶ疏のきわの能さくりに二ニ筈を立て。弓の弦をわたして。扱矢に近き疏のきわを。十文字に打に。其横點にかゝれば能矢なり。矢かゝらねはゑせ矢也。たさひわるき疏にかゝるとも。能疏にだにかゝらは能矢なり。此矢はまろびさくりの十文字とて。繩より。杖ナルベシの内にて。十文字を可打矢なり。



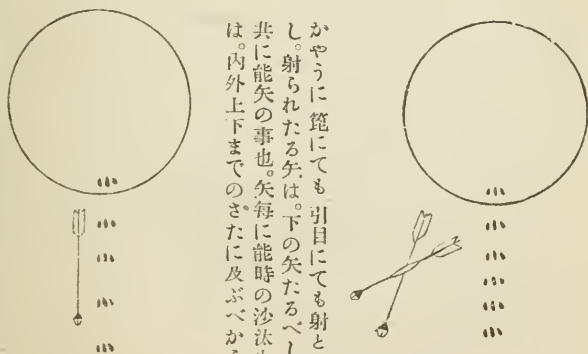
此繩近き矢は。疏より弓杖にあまるを捨。繩遠く疏ちかきを賞する流もあり。於當家は其儀なし。只繩近きを賞ス。疏近ナルベシを賞することは。繩同程成時。せめての沙汰也。まさしく繩ちかき間。疏に遠によるべからず。此矢を可賞也。

此矢中て後。犬繩方弓杖の物より走歸て。又繩へ入る事あるべし。是を捨る人あり。是又くるしからず。よき疏あるうへは。犬の行末をたゝするに不可及。此矢よき矢なり。

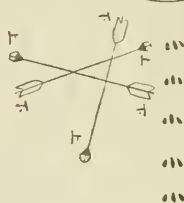
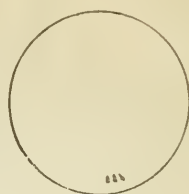


上の矢おれて。かやうに繩近き事有べし。しかりといへども。たゞ矢束ながきにおなじ。下の矢を質すべし。

かやうに籠にても引目にても射とをさるゝ事有へし。射られたる矢は。下の矢たるべし。是を賞すべし。共に能矢の事也。矢毎に能時の沙汰也。あいてなき時は。内外上下までのさたに及ぶべからず。



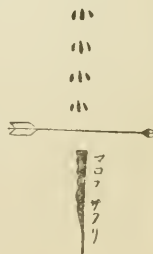
かやうに䟽につれて引たるも。四寸まではくるしか  
らず。四寸過は捨べし。



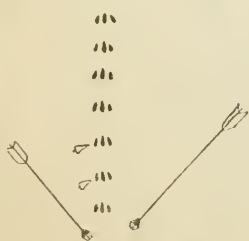
是は三組の矢なり。いづれも可捨。さもによき矢の時  
の事成べし。若一もわるくは。三組にあらじ。



如此ともにおれて。上下へになること有べし。何  
を上さも下ともさだめかたし。三組同義也。仍共に可  
捨也。



是はまろぶ䟽の矢なり。如此能さくりにもかゝらず。  
ゑせ䟽にもかゝらぬをは。あひの矢間さて捨也。是も人  
あまねく不存知矢也。





是はともになわより弓杖にあまる矢なり。十文字なうつべし。

一十文字打べき次第。矢より内の䟽二に筈を立て、弓の弦をわたして。又十文字に打て。其横點より。矢の内外をはたすべし。弓手くゝの矢。同ちかさならは。䟽近を賞すべし。其に馬手くゝの矢。又同前弓手馬手の時は。弓手可賞。其事は繩際ニての沙汰同事たるべし。

一繩のきわに。矢のはすにても。引目の方にても。土に立事有べし。すぐならば不及申。縦繩の中へすこしかたふきたりとも。まさしくたをれふさ<sup>伏</sup>らん限はくるしからず能矢なり。いかにも矢ことにたすけなき物なり。一繩もしは。射手の馬の足などにかゝりて。はたらく事有べし。其時は繩をもこのことくなをして。矢の善惡遠近をばたすべし。

一繩の内を。射手矢をはげながら不意に馳通る事有べし。その矢にて外の物を射たらんは捨べし。あるひはその矢をすて。もしはさしはづして。又外にてはげて射たらはよかるべし。

一繩の内へ射手の具足の入事。射たる引目の外はくるしからず。縦その主落馬なども常のこと成べし。馬射たる引目犬これ三ツ無相違は。具足以下はゑぼし<sup>鞭</sup>ふち。腰にさしたる引目。或は沓風情に至るまでくるしからず。

一繩の内にても。犬まさしくかゝぬさきに射たらんは。矢はよく落たりとも捨べし。国外の物も。犬いまたかきたてぬさきに射たらんは。縦矢はよき䟽に落たりとも。ゑせ矢なるべし。

一矢の羽などの繩にかゝり。もしはきれて繩

の内へ入ことも有べし。くるしからず。

一縦羽引の事。たゞひきたるを同なしことなるべし。つるゝわかるゝによるべし。いかにとだへゝ遠くひきたりとも。わかれはくるしからず。一二のとだへなりとも。つれはるせ矢なるべし。

一犬にあまる矢。同犬にそふ矢添わろし。可捨。かれ等は必しるすに及べからずといへども。當世不審の人有によりて。所載日記なり。

一犬に乘矢の事。はたらかずうしろへ落たらんは子細有べからず。或は筈にても。引目の方成とも。犬よりこなたの土につきはてす。やがておちばよき矢成べし。すこしもひくかと思はば可捨也。犬のあなたに成たらん方。まづあなたに落て後。みなおちたらんは。越こしたる矢成べし。捨べし。

一犬に引目の立ッ事も有べし。それも大かた犬に乗と同事なるべし。はたらかずすくに土に落付たらんは子細あらじ。筈の方まづ土に付ても。やがておちばよかるべきを。それはいかにもひかるゝ事有べし。少なりとも引かと思はすつべし。

此二の矢の事如此。犬にもものり。又は犬に射立たる時。又余人より射置たらば。その矢を可賞。後に射たるによるべからず。先の矢未落居の時。後の矢既落着たる矢は。前後に寄べからず。先落着所を賞すべし。もし又かさならは。下の矢を賞すべし。そのことは繩にての沙汰同前たるべし。

一引目のわれ篋のおれにても。もしは見うしなふ事有べし。繩の内にたにも見えずは。能矢なるべし。

一繩わたしと云矢所有べからず。繩際にては

弓手をしもぢり。或は繩馬手。又は馬手切。此外は矢所なし。縦もし繩をさしわたして射たりとも。矢の落やうによりて。弓手ともをしもぢりとも云べし。只繩渡とは云べからず。ことに當世は必射べからざる矢所なり。

一内の矢䟽をこえす越たる。又は犬のつきつ

跌不跌

かすと不審の時。檢見射て置と云外にて能矢行。ひかへよといひて打歸て。先の不審の矢をみるに。もしはさくりを見うしなはは。外の矢の無相違も力なく捨べし。䟽なくて。矢をたゞしかたし。内の矢の是非さたまらずしてハ。又外の矢入がたし。仍共に可捨者なり。檢見はからひて入べきかのよし云人有。返々心得す。偏頗の時は。矢ことに善惡是非もあるべからず。大方は先きたまれる法如此。當世此矢に不審の人おほし。こと

に無謂事なり。實朝時代ナ云從上右も定置法なり。更不審あるべからざる者なり。

一誠に大事の勝負などの犬追物の時は。射手矢所を云違ぬれは。矢はよけれども。力なく捨べし。

如此雖注置。毎矢可有口傳。亦堅可憚外見者也。

嘉吉元年十二月廿六日

小笠原備前守持長  
沙彌淨元在判

以宮内省圖書寮本騰寫校合畢

# 犬追物手組日記

犬追物御手組事

御方御所様。

一色五郎。

細川淡路守。

武田彦太郎。

赤松孫次郎。

藤宰相。

檢見。

小笠原備前守。

文明十年三月七日。

犬追物手組事。

管領。

畠山左衛門佐。

一色兵部少輔。

山名彈正少弼。

管領。

伊勢左京亮。

堀和興四郎。

伊勢守。

伊勢七郎。

一色左京大夫。

喚次。

伊勢次郎。

管領御成。

治部大輔。

土岐美濃守。

伊勢守。

伊勢備中守。

細川淡路守。

左京大夫。

檢見。

小笠原備前守。

寛正六年八月廿二日。

犬追物手組事。

藤中納言。

小笠原刑部少輔。

伊勢因幡守。

伊勢次郎左衛門尉。

廣澤左馬介。

檢見。

多賀豐後守。

文明十七年三月一日。

犬追物手組事。

右京大夫殿。

上原神六。

伊勢兵庫介。

細川讃岐守。

喚次。

小笠原民部少輔。

於殿中御馬場有之。

伊勢守。

伊勢與一。

毛利次郎。

矢部八郎。

伊勢兵庫介。

喚次。

伊勢七郎次郎。

三年ノ日記也。  
於細川殿在之。

治部少輔殿。

香西又六。

大平中務丞。

庄兵衛四郎。

秋庭備中守。

牟禮次郎。

安富又三郎。

齋藤兵衛尉。

伊勢備中守殿。

宮下野守殿。

檢見。

喚次。

小笠原備前入道殿。

伊勢守殿。

内外ノ檢見ニハ如斯調進也。

長享三年八月十三日。

三年ノ内。  
於細川殿在之。

中手。

右馬介殿。

攝津守殿。

藥師寺與一。

小笠原兵庫介。

寺町三郎左衛門尉。

安富與三左衛門尉。

長濱又四郎。

上原道祖鶴。

若槻民部丞。

四宮四郎。

小笠原播磨入道尉。

安富新兵衛尉。

檢見。

喚次。

小笠原備前入道殿。

伊勢守殿。

長享三年八月十三日。

下手

民部少輔殿。

三年ノ内。  
於細川殿在之。

香西五郎左衛門尉。

孫三郎殿。

小笠原三郎。

井上六郎。

奈良備前守。

原田五郎。

高橋孫次郎。

額田次郎。

玄蕃頭殿。

遊佐加賀守。

檢見。

喚次。

小笠原備前入道殿。

伊勢守殿。

長享三年八月十三日。

右此三口三年ノ日記也。殿文字ニ心得

アリ。

犬追物手組事。

於大内殿馬場在之。

左京大夫殿。

小笠原刑部少輔殿。

內藤彦太郎。

杉次郎左衛門尉。

仁保次郎。

仁保太郎。

江口與三。

飯田彌五郎。

杉彦三郎。

杉四郎。

野田九郎。

弘中小太郎。

益田治部少輔殿。

平賀藏人大夫殿。

檢見。

喚次。

伊勢守殿。

弘中次郎左衛門尉。

永正七年七月七日。

於大內左京大夫殿在之彼内衆計也。

犬追物手組事。

於伊勢守馬場在之。

小笠原六郎殿。

伊勢左京亮殿。

益田治部少輔殿。

種村三郎殿。

平賀藏人大夫殿。

飯田彌五郎殿。

長九郎左衛門尉殿。

宮上野介殿。

檢見。

喚次。

伊勢右京亮殿。

鈴木小五郎。

永正七年七月十九日。

手懸事。

於伊勢守馬場在之。

小笠原六郎殿。

種村三郎殿。

江口與三殿。

伊勢與一殿。

益田孫太郎殿。

平賀藏人大夫殿。

伊勢又七殿。

檢見。

喚次。

伊勢右京亮殿。

鈴木小五郎。

永正八年五月二日。

犬追物手組事。

藤兵衛督。

細川六郎。

桃井治部少輔。

進士九郎左衛門尉。

大和彦三郎。

伊勢加賀守。

小笠原兵部少輔。

伊勢右京亮。

種村刑部少輔。

伊勢守。

右京大夫。

大館兵庫頭。

檢見。

喚次。

小笠原民部少輔。伊勢八郎。

大永二年四月廿七日。

此日記は。細川殿へ御成之時貞忠調進。

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢



續群書類從卷第六百七十七

武家部二十三

笠懸射手躰配記

一笠懸の時。射手各例式の裝束を着し。馬場の

外にて。弓と引目を介添矢取出すを。射手取て。沓を左よりはき右をはくへし。矢取にても介添にても。馬を引直して乗すへし。扱馬場本へ馬を打寄て。貴人に禮をし。先馬を一騎つゝ通して。二番目より射るなり。残りの射手次第を置いて通すへし。馬通す次第は。始と後と少賞褫の義なり。

一始只通す時も。的を見おくるへし。弓もたて

通す射手ハ。的を見おくる事ある間敷なり。はしめ只通すをすはせといふなり。二度目よりの的を射るなり。

一笠懸射る時。馬通すへき次第々々を。引目鬨にて定るなり。引目鬨をふること。射手いまた馬場本へ打入ぬ先に。射手の引目にて。屋形の左のまよりふり初て。射手の次第を日記に付る也。射手の次第を射手にしらす事。矢取にても介添にてもしてしらすなり。但矢代ふる人は。沓をはくへし。

一笠懸の時。射手の鞍かまへの事。腰をすへて

鏡をさるごろのしゝにふんつけて。ひさを  
ゑませて。尻を鞍の後輪にあたるやうに出  
して。腰より上はすくなるへし。

一笠懸射る時。手綱の長さまはりを取て。乳二  
の間に持て立すかすに。緩々とゆとりのあ  
るやう成る能なり。

一馬場を弓持て通す時。弓の持様。馬の耳二の  
間なるへし。弓横になり安きものなり。馬の  
耳をこさぬ程までは能なり。耳を越す程ま  
てはあしかるへし。

一笠懸の時。射手馬に乗りて手綱取ての持所  
は。乳二の間に持へし。我身に近きもわろき  
也。又前に出し過たるも悪敷也。ほとらるは  
面々の勝手に能程に可持なり。いか程とは  
不定

一笠懸の矢かまへは。引目の頭。ゑはしの高さ  
程たるへし。ひらき出したらるときは。引目

尻は外へむくへし。其時。我身の後へ行たる  
はわろし。我身通り成へし。弓をにきり出し  
て持へきなり。弓弦うてもあたるか能なり。  
矢かまへわろければ。打上までわろし。

一笠懸の打入は。馬の右の耳と引目のあいた。  
いか程有も苦しからざる事也。馬の頭の持  
様によるへきなり。躰拜<sup>タテマツ</sup>よければ子細なき  
事なり。先は引目のすけきは。馬の右の耳の  
内に付る様に打入へきなり。

一矢さしは。肩よりこふしの方少さかりたる  
へし。水はしり程といへり。又引目こふしよ  
りさかりたるかよきなり。少さかりたるか  
と見ゆる程にかけさせへし。扱引目は外へ  
むくへきなり。手綱をすてゝ。ひたゝれの袖  
を少打出す様に外へまはして。引目外なり  
に押合して。矢筈をさるなり。猶口傳なり。  
一矢筈取て打上様に。引目の方さかる事あり。

さかるはわろき也。さからぬやうに持上へきなり。

一笠懸射るには。引てはしらかして。おしてを少的のかたへあつる様にして。扱馬にてつめさせて。後の串の通りを。馬のあしかき入て。いかにもねち入る様にしてはなすへし。初引てはしらかす時より押手のすく成はわろし。かねにはなすもわろし。むかふてはなすもわろし。後の串の通へかき入る時放すへし。

一矢を放て手綱取時。弓をすこしかたむくやうにして。扱手綱を取るはわろし。只射取たるまゝにて。するりと取へきなり。射放ては少持様成へし。目ひとつ残させといへり。扱手綱をとるへきなり。

一ねり馬にて射るときは。矢さし久しかるへし。矢はすを取ては頓てうち上へきなり。又

當時ねり馬にて射るとて。馬返す所を。扇かたのほそみのきわにて。馬をかへす事無謂事也。惣して矢さしすこし久しきか面白なり。

一弓を持すして馬場を通す時。梁の方をみるも無法成事也。弓持すしては見ざるなり。

一打歸る時。馬次第々々に跡へ打入へし。馬手のかたより矢取矢を出すへし。引目の方をふり返して出すを。射手取へし。矢取はかへ矢置處に歸りて居へし。一十度はつる迄は。如斯矢取は中間たるへし。但小者も苦からす。

一馬歸す時。自然馬ころひ落馬などし。左様の時は脊をぬき。馬場本の際へ馬を引のけて。替矢の引目を取。馬の尻かひをも直し。はるひをもしめ直し。又乗て射へし。

一十騎の射手悉く射はて。馬場末の方にて

馬よりおりて。同馬をは次第に跡へ引入引ては。跡の上を引て通るへし。

一的よりこなたにて馬きれたらは。又馬を跡へ打入て。馬場本へ歸り射へし。但公方様御相手の時は。其儘跡へ打入て唯通すへし。又上意の時は射直すへし。

一打上て引おろしさまに。こふしはつれもせは。其儘矢をさしはつし。馬を通すへし。其時もの見をくるへし。

一打上ぬ先に。矢取落すこともあらは。馬場本へ打歸り射直すへし。

一神事笠懸には。鶴の羽のからにては射へからず。其時はきりふ中黒を用へし。一段の心得なり。亦晴の時も鶴の羽は斟酌あるへき也。

一張替の弓二張。弓袋に入て持すへし。引目は五七又は十ものひて。袋にいらて替のゆか

け一具も二具も矢にかけて持すへし。是は道すからの事也。射手馬場本へ打入る時。的の後の串の通りに。矢取介添居るなり。弓引目は袋を取てたはねて。矢取の前又は梁の後のかごにも置へし。

一主貴人の矢取は。的の前の串の通りに居るなり。引目も矢取の邊に置へし。介添は馬場末の打上所の芝の上に。鋪草を敷て居るなり。

一笠懸の手綱の長さ。前輪に打懸て一尺計餘るほとにすへし。

一あら馬を通す事。扇形に打入ひんむけて通すへし。一段の口傳なり。

一ねり馬といふ事は。いかにもかせき能馬をいふなり。

一はやき馬をは。於當家は射間敷事也。

一圖笠懸の時。圖を取て男のゑほしの右の手

の下に指へし。入道は行麿の首上は指へし。何も口傳有へし。

一射なかつ笠懸と云は。公方様御相手に參時。九度まで詰て有共御はつしあらは十度めは的の下射さけてはつすへ是を射なかつ笠懸と云なり。

一笠懸の的射る時。的の下へ射さけたるに不審成時。引目の尻をみるやうあり。其時は。引目の目の中へ砂にても芝にても入事有。左様にあらは檢見する人は。引目の落尻をたゝきてみるに。砂芝にても少も出すはさかりはてぬ間。能矢成へし。すこしも出へ。さかりたる矢にて惡敷矢なり。的に限りての事也。一段の秘傳なり。

一こふしはつれの事。日記の付様あり。

一遠笠懸神事ににゑのかげ様の事。魚ならば鱸などを一かけ懸へし同かくる木は何の

木にても枝をそろへ。其枝をこきてそれにかくへし。木の長さ弓のはこ程にすへし。又鳥ならは二つかひ。同山猪懸同ならへ。雄は前の方。雌は後の方に懸へし。亦鮎をかくるには。わろしへにてもあきより口へ引通し。五ならへ數十かくへし。但的の方に懸へし。口傳いかにも秘へし。

一おさなきわかき人のからの筈巻本はきは。紅萌黄の糸はき苦からず。

一笠懸の馬場の事。根本は法量以下不定也。其謂は。頼朝の御代。前後へ十騎二十騎馬に乗りて打出。しらすの上をまつすくにはしる馬を。一番にはしらかして。其跡に一騎つゝ通して。其跡を跡と定て。的をかけて射られたり。此謂により。今に射ぬさきに。馬を一度宛馬場を通すなり。一騎馬宛をはしらかして。跡を付て跡と定る事。下川邊庄司行

平初めたるとなり。其來曆に依て。今に如此笠懸の馬場を拵るをあつると云也。去間。犬の馬場をあつるといはぬは此故なり。兼てより笠懸射させらるへき時も。濱の馬場に於ては。別に拵ゆる事有るへからず。跡の法量を定め置るゝ事は。其以後の事なり。犬追物の終に笠懸有事あり。其時も馬場拵る事有間敷也

一笠懸布革の事。根本はなかりしなり。笠懸射る時は。幕を引れて射ける。あまりに我人の紋を射る事然るへからずとて。布を青く染て。幕のことく五幅にして。的の後に懸て射られたり。五幅はせはきとて。一幅をへて六幅に。布かわを定め置れたり。惣て根本は布革なかりし也。かけすかしにて射たるなり。一弓手に埒をゆふ事。高さ一尺五寸なり。又は一尺八寸共云へり。柱の口二寸計り中を間

中に一本宛たつへし。其間には木口七八分計りなるくろもんしを立る也。口の二寸はかりの柱をは。何木にてもするなり。跡のはたより一尺八寸なり。矢をも埒の上より出すなり。埒のふとさは(脱アラシ)三六寸也。柴はくろもんしたるへし。藤にてもあか繩にてもほそくないて。常にもかりとゆふやうにむすふ也。結目は上に結也。くろもんしにてゆふ時も。中には柴を入るゝもくるしからず。又さし埒とて。木にてもするなり。よの常のかうらんのことし。土より上の高さ以下ゆひ埒のことし。柱はいつれも丸かるへし。さし埒は削るなり。埒は不斷して置也。矢道の通りにはせぬ間。矢道の兩方の脇の柱の面の通りに切留る也。馬場本。馬場末の扇形の分には。埒有間敷也。跡の分はかり埒有へし。埒のしとめは。土の上よりなそへにする也。



これも常に佛神の前のかうらんのことく。いつくをも木にてする時は、檜木にてするなり。くろもんし本也。

一笠懸の假屋形は馬場本也。的の方なるへし。馬かへす所よりいか程馬場本は不定。廣さは三間四方はかりなり。跡東西へあらは。假屋形の棟北南へ有へし。鋪板は常よりも高くすへし。

一笠懸の的可懸次第の事。馬場本の扇形の分四杖。つえ中のけて其際の細みより三十三杖打て。其通りに的の後串をたつるなり。的あひの事は。跡より八杖に打て。的を見る也。其後、的革を懸て昔は射たる也。是本義なり。八杖に的を懸て射る人有かたし。是は昔弓もつよく。矢つかも長く引たるによりたるなり。

一的可懸次第。七杖にも六杖にても。杖中にて

も。猶其より近くとも。的間を定て。跡りの中通りに。弓の本宮を押當て。後の串の通りを。梁の方へ打て。横串を地にしかと置て。あてかいて先後の串を立定て。前後の串を五寸はむかせて可立なり。立串立て。二の間は横串の廣さたるへし。其後、的懸る時は。面を上へなして。串の中に置て。先後の串の横繩を留て。其後、前の串に留て。其後、手繩をかへして。横串に留へし。留様はいづれも前より引廻して。其繩懸て。後へ廻して。串に卷て留るなり。的の高さ地より六寸なり。其後、的革を懸へき也。的革の後の串のねも。弓の本弭を押當て。うら弭より一尺五六寸。的の方へ寄て。的革の後の串を立へし。其も横串を置て。横串の廣さと同廣さに。前の串を立て。其後横串へ的革を通して。横串を可置。的革の下は。地一はいにゆるくと



つく程に可置なり。的草の前の串は(かたカ)はむくましきなり。すくにあるへし。

一笠懸布草の上に草を付て。串にゆひ付る人有り。本はなき事也。付かぬか能なり。餘に立串の間廣くあく時は。黒草を付て立串にゆひ付へし。常のすわうのひも程に。草を切て付へきなり。本式にはあらさる義なり。

一布草の下に繩をは。布草の下に土のきわにゆひ付るなり。其餘りの繩を。的串にゆひ付る人あり。大に有ましき事なり。

一笠懸的をもすかさなり。的草なくとも射る也。惣して的草は。笠懸射初たる後に出来たるものなり。去間。昔は的草なくて射ける也。其後。的草をはし出して。今に如斯なり。時としての草なくとも可射なり。

一笠懸射る時。初馬に可乗所は。常にひかへ所より外にて乗て。外にひかへなから。人とを

せ我かごをせなと、しきたいして。馬歸る所へ直に行て。まつ一度宛通す也。其後より可射也。一番に通したる人。一番に打歸。二番に通したる人。二番目に打歸る。次第々々打歸るへし。一番に通したる人打歸時。馬場本扇形の馬歸る所へ。直に通りて。惣の射手の跡を打上るを見て。打入て通して可射也。殘射手。馬場本にて馬の立様は。二番目的人是。いち馬場末にひかゆへし。三番の人。二番目の人より馬場本の方にひかゆへし。四番目の人。三番目人より猶馬場本にひかゆへし。何騎もあれ如斯次第々々に可扣也。扱二番目よりは。一番に射たる射手は。跡より打上て馬場末に可扣。皆打上たるを見て。一番に馬返して。本の跡へ打入て。馬歸る所。馬場本に可控。殘りの射手。次第々々に皆打歸りたるを見て。また打入て通して可射也。

一射手馬を通す法量の事。先一番に通したる射手。矢を放て跡を打上るを見て。二番目の射手打入へし。二番目の射手打上るを見て。三番目の射手打入へし。次第々々如斯可打入也。

一同馬場末にてひかへ所の事。一番に打上たる射手は。打上所より少馬場末の方へ行て可控。但射手多て扣る所つまらは。一番に打上たる射手ハ。馬場本のかたへよせて扣ゆへし。残りの射手。次第々々に馬場末に越て扣へし。馬場本にても。馬場末にても扣る次第は同事なり。又沙汰の矢のときは。馬場末の的の方より打上て。前の串の通りへ打寄てさゝゆる事もあり。又主貴人御相手の時は。馬よりおりて。沓をぬきて。的の際に行て沙汰する事もあり。主貴人常に打上て扣る所は。的の懸りたる方の芝砂の上打上て

扣へ候なり。笠懸の時。外にて馬に乗りて馬場本へ打入事。犬追物の時。外はうしの外にて馬に乗りて。扱繩際へ打よすると同沙汰成へし。笠懸射はてゝはほうしの内にて。馬よりおるゝ也。犬追物の時も。射はてゝはほうしの内にて。馬よりおるゝ也。犬笠懸同し事也。但外にて乗所なくて。馬場の内にて乗らてかなわぬ馬場有へし。其時は馬場の内にて乗るへし。其も射手の扣る在所にては乗ましき也。少餘所にて乗て。射手の扣る所へ打よせたるか能なり。

一馬場末にて馬のひかへ様は。一番に通したる射手。一番に射手ひかへ所は。馬場の方にひかゆる也。二番に射たる人。一番の射手より馬場末に扣る也。三番に射たる人。二番の射手より尙馬場末に扣る也。何騎も如此扣へし。亦射はてゝ馬場本へ打歸る時ハ。一番

に射たる人。一番に打歸るへし。二番に射たる人。二番目に打歸るへし。何騎も射る。是も如此有へき也。

一馬場にて賞翫の扣所は。馬場本にても馬場末にても。的の懸りたる方賞翫なり。何も的懸りたる方の近き方賞翫なり。此在所唯よの常の人。ひかゆへからさるなり。御所様被遊時。此在所に御控ある也。

一笠懸射る時。紐を納る様の事。前に二結むすひて。素襖の後のゑりの中の通りに結也。如此留るは。本式にはあらず。乍去さけてのとなさはりて六ヶ敷程に。後に廻して留るなり。但後をは人に結はするなり。結たる上を糸にてとけぬ様に結ふ也。素襖の紐。前にて二結ひむすふ本式也。

一笠懸を射る時。的を見る事三所也。馬を跡へ打入様に一度。ひらき出して一度。矢筈を

取。打上様に一度。是は打上て矢を放つ迄は。目をはなすへからず。此三所也。其外は我身の(さか)さんまいを見るなり。

一笠懸の躰拜三の見所。先馬を跡へきと打入て。こうてをつかひて。何となく見所一。亦矢つかを弓の木中に引かけて。引目をも能射ならしたる所一。亦的に能射付て。きつと的を見送りて。馬を能留切て。跡の上に打上る所一なり。此三の見所。射手覺悟の義也。譬は見物する共如斯。

一梁の事。法量なしといへ共。梁の地際弓杖一杖にも。亦は一犬にもする也。上の廣サは地際一丈の時。七尺五寸にもする也。高サ七尺程につくへし。見はからいてつかすへし。委は法量の卷に有。不及記。

一矢道の事。梁の廣きたるへし。

一笠懸の的革とは云へからず。布革と云へし。

日記にも布革と有。不知して的革と云。革布共云人有。不知事也。

一御所様の御矢取は。御中間可取也。御小者取は略儀也。御矢取は。的の前の串の通り弓杖二杖計り。馬場末の方に座すへき也。御所様は。御矢取にてなく共。ことなる貴人などの御矢取は。此所に居へし。貴人二三人も被遊時は。於此在所も。馬場本'sの方へ居るは。賞翫の事也。

一例式の矢取は。的後串の通り二杖計り。馬場本へよりて居へし。中間にどらすへし。小者は略儀也。ゑほしかけをすへし。此所にて馬場末の方。的に近きは賞翫なり。

一馬の立様の事。先一番に射たる人賞翫なり。亦其次十番目賞翫なり。其後は二番目の人。三番目の人賞翫なり。九番目は次第々々の賞翫なり。十騎の時は。九番目いち下たるへ

し。日記にも如此次第々々に書へし。

一的を懸たる前をは通らぬ事也。布革と的との間を通るなり。亦梁の布革との間をも通る也。梁の後にすぎあらは。それをも通るへし。但布革と的との間を通る事斟酌可有。梁と布革との間すぎなくは是非もなく。せめての事に的と布革との間をとをるへし。

一馬場末より馬場本へ馬を引する事もあり。跡の中を引せて通すへし。

一射はてゝ馬よりおりては。馬引て歸るものには。沓をもたすへからず。別人にもたすへき也。此沓の持手は。馬の跡にても。そばにても何も苦からず。是は式々の時の事也。常には馬引て歸る者ももつ也。

一射はてゝは。馬次第々々に跡を引せて歸る也。

一笠懸射る時は。刀の下緒を前へ押かふへし。

下緒のさかりたるはわろし。ちいさき刀をさしたるは見能也。主もあつかいしよきもの也。

一矢はむる事は。馬返す所にてはむる事本義也。犬の時も繩へ打寄て。檢見繩の内へ入時。矢をつかふへし。但幕にもかゝりたる時。七八度も射て後は。矢をはめく馬場本へ打寄たるもくるしからず。是は略義也。

一馬跡へ打入て。矢かまへしたる時。馬こゑはりなといたさは。矢をさしはつして。弓に取添て持て。出しはてたらは。亦矢をはむへき也。

一能あたりて落たる矢のたとひ。横繩をこへたるはわろき矢なり。

一あたりたる矢。横繩にかゝる事常に有之。筈なと少懸りたりともあたり也。的の上のかごにあたりて。横串を越而矢落つかぬさき

に。横繩に懸れは能矢也。横繩にかゝらすははつれ也。

一的にあたりたる矢。おれもせよ。亦引目のぬけもせよ。何方にてもあれ。一方は的の前に留り。一方は布革同串などにあたりたらは。はつまなり。たとひたおれて後へ行共。物にあたらすは。あたりたる矢なり。縦矢の本はき邊よりおれて。筈の方は的より前に留りて。引目の方は後へ行とも。布革串などにあたらすは能矢也。是もいつれも的にあたりたる矢の事なり。引目のかけなど。自然的より前に留りて。矢。的の串より後へ行は。縦物にあたらす共。それははつれなり。

一的の中に能あたりたる矢の。自然地にても繩にてもきれて。矢串の通りを過る事有へし。串を過はるせ矢なり。懸らぬ程ならは。例式沙汰の矢成るへし。

一的にあたりて。扱堅串横串に引目の頭あたりたるは悪矢なり。可捨也。但引目の中なとあたりて能所へ落るは。よき矢なり。

一矢を放さんとする時。引目ぬけて。扱其まゝ射あてたらはいかゝと不審の人あり。昔より定れる法は是なし。然りといへとも。たゝあたりに可用也。的矢の時。いたつきゆかけに留りたるを。其儘射たるにしゆんすへし。一的にあたりたる矢。或は串をまはり。亦是的を廻りて。的の串より前に出る事あり。横串をもまはれ。堅串をもまはれ。外より内へもまはれ。内より外へもまはれ。布革串などにあたらははつれ也。的の串より少も前へ矢出は。あたり也。

一的にあたりて矢串を廻りて。前へ出たる矢の事。的革より前へ出たるか。入たるかと論の沙汰すへきなり。前の串の通りに落たら

は。先前の串に弓の弦を押あてゝ。いかにもすくに弦をわたして。矢に弦の懸りたるは當り也。後の串の通りならは。先後の串に弦を押あてゝ。弦を直に渡して見るに。矢懸らはあたり也。もし矢。弓杖にあまりて。遠く矢落たらは。犬の矢沙汰する時。十文字の横點つくことくたるへし。的の串の根に。弦を土に押付て。かうかいを弦の外にそへて立て。かうかひを其儘置て。それを本にしてつきて。矢の方へ弦を出して見るへき也。懸らはあたり。かゝらすははつれ也。前後共沙汰の時は。うら弭馬場末に成へし。草鹿丸物の沙汰に同じ事たるへし。口傳。

一笠懸の矢の沙汰する事。矢下へたふれて。串より前へ出たると云人も有。不出と云人も有。論する時は。檢見沙汰して射手に見すへし。常は其中の古射手にても。誰にても沙汰



すへきなり。沙汰する次第は。馬よりおりて。先沓をぬきて。弓のにきりの上を。左の手に取て。弦を下へして。弓をひつさけて持てよりて。其儘うら引を馬場末になして。右の手を弓にそへて。的にあたらし様に。的の下より弦を入れて。前の串と後の串に弓弦を押あてゝ見るに。弦に懸らはあたり。かゝらすははつれ也。矢の主にてもなき人沙汰せは。矢の主も馬よりおりて。沙汰するを見るへき也。草鹿丸ものゝ沙汰同事也。懸りて候共。亦かゝり候はぬとも。亦わろく候ども。能候共云へきなり。

一笠懸の矢の沙汰は。串より前に落たる矢は。沙汰するなり。串より後は沙汰せざる事なり。犬に矢ことにたすけ度とて。跡のはつれに弓の弦を渡して沙汰する事あり。如斯の事を過て沙汰せは。笠懸の沙汰の時も。串の

後より沙汰すへけれども。昔より串の前にて沙汰する事也。

一笠懸の時。引目尻を取て見る事。勝負の時。矢さかりたると云人もあり。亦まかはす能と云人も有論する時は。引目の尻を取て見るに。砂芝なと引目の頭にもつき。亦引目の内なごへ入たらは。さかりたる矢たるへし。はつれ也。砂芝つかすはあたりなり。勝負の時は。かやうの批判すへき人。的の後の串の通り馬場本の方に置へし。左様の人なくは。射手の中の古射手。馬よりおりて見るへきなり。其時は矢の主も馬よりおりてともに見へき也。亦大事の勝負の時は。時宜により馬に乗なから。射手も皆打寄。的の前の串の通り弓杖三杖四杖の間。馬場末邊にて見るへき也。左様の時は。矢取。引目の方を上て持てこよと云てよりて見るに。引目の中に



砂にても芝にても。其外何にても入ははつ  
れたる矢なるへし。何も不入はあたり也。此  
矢串を過は。沙汰迄もなし。串の通りに有時  
の義なり。矢を取て持て來る時。引目の方を  
上て來れと云子細は。引目の中に何にても  
あらは。さけて持てよりは落へき間云也。矢  
の主に能見すへき也。此矢。堅串の通りより  
後へ入たるかいらさるかの論の時は。先矢  
を沙汰して能は引目尻を可見なり。

一矢取に能おしへ可置事。たふれたる矢かあ  
たりたる矢かど見る矢の事。串の通りより  
少も前へ不出はたふれ矢也。當りかたふれ  
かと見分さる時は。矢取串の前よりとらは。  
あたりなるへし。串の後より取らばはつれ  
也。少の事は矢の取様に寄て。當り共はつれ  
とも成へし。されは勝負の時は。左様の矢を  
は。そこつに取へからず。射手の時宜を矢取

見つくるふへし。

一笠懸の時。見物すへき在所の事。的の主。馬  
場へよりて見物すへし。よりのきの事は苦  
しからず。假屋形を打へき時は。馬場本に  
可打也。其在所邊にて可見物。もし其在所に  
見物の人多くて。ふたかりたらは。的の前跡  
のむかふ的にむかひて見物すへし。其在所  
もふたかり。亦よりにくき事あらは。馬場の  
末の的の方にて見物すへし。見物の在所。此  
貳三ヶ所なり。少しのよりのきは苦からず。  
屋形を作るも。此三ヶ所也。

一御所様御笠懸の時は。檢見出て矢をさはく  
へし。的の後の串の通り。馬場本の方に弓杖  
一杖二杖の内に居て見へし。脊をはくへか  
らす。小袴にて敷皮を敷て居る也。

一笠懸射る時。馬きれて跡より上へあかる事  
あり。打入てひらき出さぬ時は。三度までは

矢をさしはつして。馬場本へ打歸りて可射なり。はやひらき出したらは。其儘跡へ押入てひらきて可射。いつへくもなくは。矢をさしはつして弓に取添てとをすへし。

一ひらき出さぬ以前に。矢を取落したらは。馬をすへて扇形に打歸て。矢を取て又射へし。跡ふかくて馬を打歸す事し得すは。ちからなく唯其儘馬を通すへし。

一ひらき出さぬ以前に。引日ぬけて落る事あらは。是も馬をすへて打歸て。こと矢を取て射へし。ひらき出して後。引日ぬけたらは。矢をさしはつして。弓に取添て通すへし。

一射なかつ射手と云ふ事は。假令百番につくもすへき射手などの上の事也。十度可射笠懸に。時の賞翫の射手の七八九など射たる時は。我かすいに我も八九度射るなり。主と射る時。つゝなき時。内の者なとつゝなと有

事は。人目何とやらん。わざと射はつしたる時なとを。射なかつと云也。射手の上の事も。射なかつ射手と云事ハ。笠懸にかきりたる事なり。異なる秘事也。

一應永三十三年七月二十七日。爲諏訪神事於紫野馬場笠懸十度有。此射手の内に。こふしはつれの有射手有。その時日記に。はつれに被付ける。如此は不可付事也。射なをすへき也。但射手に依へし。願主方の射手は。必射なをすへき也。假令願主方の射手にてなく共。願主方より射なをせと申さは。射直すへき也。常に人の知らざる事なり。但此時は。こゑをかけられたる也。

一笠懸はや二度三度にても射たる時。おそく人來て射る時は。以前の射手悉く射て後に。先例式の如く通すへし。打歸て射る時は。以前射たる射手いち後に可射なれ共。遅く參

して候は、通しつる射手よりは。前に可射也。但遲參の人初打よせて。先通しもせて。頓て射たらは。以前の射手は遲參の射手よりは。後に可射通したらは遲參の射手よりは。前に射へき也。惣て遲參の射手は。一度通して可射事本式也。以前より射たる射手はてゝ。馬よりおりは共にあるべきなり。

一十度射て又可射ならは。先馬場末にて馬よりおりて。馬場本へ引せて。又馬場本にて乗て。先一度通して射へき也。但通す事。射つけの馬ならはとをさぬも子細なし。本義は通すへし。惣て犬は百疋と定。笠懸は十度と定たる故に如此也。

一昔十度の笠懸に勝負を射けるに。的の立繩はとけて。的の落けるを不知して。次の射手。的の前にて見つけ矢をさしはつし。只通したると也。落たる的を射たり共。同沙汰な

り。扱其後。此矢はあたりにすへき也。はつれにすへき也と論有りし時に。小笠原備前守持長祖父に尋申ける時に。あたり共はつれとも難申。但日記の付様口傳有。こふしはつれと可爲。同沙汰の由被申也。それも人によるへきか。口傳。

一百番の笠懸を射るに。馬一疋二疋にては通りかたし。數多にて乗かへて可射也。馬によるへし。

一百番の笠懸を射る時は。毎度十度目には馬よりあるへき事本義なり。亦二十度射ておるゝも有。三十度つゝけては不可射と云々。何十度目にてもおれ。馬を乗かへたくは。馬場本にて乗替へし。百番と云事。笠懸ならては有間敷也。

一百番の時。自然こふし落。其外。何にてもしつありては不射時は。一騎打歸て射直すへ

き也。

一弦も切。弓も返りたらは。馬場末にても弓を取替へし。弦替は矢取にても。余の中間にても持て可出なり。但馬場本にて控たる所。亦打入なとする所にて弦もきれ。弓も返たらは。馬場本にて取替へし。賞翫の人射手にあらは。下馬して脊をぬきて。弓を取かへて乗るへし。引目なと取かへる時は。打歸りさまにいつくにても取かへし。引目は賞翫の人有共。馬に乗ながら取替へし。くるしからす。

一落馬の事。外人有とも。主落馬せは其内の者は可下也。外人ある時は。親にて候共おり間敷也。其故は私成故也。外人なく傍輩計りの時は可下也。誰も常の賞翫の人にはおるへからす。假令管領其外大名同子息人の内の者は可下也。外人參會の時は可下也。但一族

によるへきなり。

一笠懸十度可有事。十騎計りの中に。自然一騎用有之。馬よりおるへき時は。十騎の中ほと。の射手なりとも。馬場末にはいち後迄残ておりて。馬を跡のいち跡にひかすへし。但別の道もあらは。それへひかすへし。亦用の時は。馬場本にても可下。苦しからさるなり。時宜に寄るへし。

一半的と云事有へからす。小的には寸法なし。但式的的を半的にする事あり。是を口傳の的といふなり。は無謂。

一的にあたりたるをも物語にはへいし共語とき共語也。はつれたるをはへいすと云へし。犬のことくにへいずつとは云へからす。

一引目をしらむと云。しらむる時々。はたぬきてもはたぬかても射る也。いづれも法なき間くるしからす。

一馬場にて自然主の馬鞍にて。乗れよとあらは。沓をはくへからず。御誕ならはくへし。

一笠懸の丸物と云事有之間敷事なり。唯小的と云へきなり。

一布革の布のはたはりは一尺二寸也。是はぬはぬときの寸なり。高さは五尺なり。是はぬい立なり。いづれも高さの事なり。

一的の繩をは。横つな堅つなと云なり。

一草鹿懸て射る事はなき事也。自身張行にて如此射る事は有へからず。人と參會の時射る時は無力可射也。本にはあらず。亦一説に射と云也如何と云々。

一的の通りの邊にて弓取落したる時。矢取。其弓を取て射たる引目と取添て。馬場末へ持來る有は。一度にも取へし。法にはあらされとも可執。又弓計り持來は。本よりの事也。

しけくは有間敷なり。

一髪切たる馬にて物をは射ぬ事なり。但たかいからみにて少し巻程ならは可射なり。

一馬通る時。何にても挾物なと立て。神頭などにて打入ひらきなとして射る事は畧儀なり。雖然。内々にてはくるしからず。人の見る時は。いかにも可斟酌。法式に非ざるゆへ也。

一射手打歸る時。何度ぞと云時。今度は通す五度共。向五度とも云。馬場本にては是非に向ふと云へし。三度射たらんは。向ふ四度と云へきなり。

一自然引目損して無引目時は。四目などにて可射。くるしからず。但是は人の見さる時なり。亦是略儀なり。

一馬場にて酒なと有事有て射手打歸る時。跡り中的の懸りたる道にて。誰にても銚子を

持來りなとせは。其中に賞翫の人貴人たる人はおり間敷也。人の同の者はおりて吞へきなり。おるゝ程ならは。脊をぬき左右のゆかけを取て可吞也。馬をは馬場にてひかせて。其間にゆかけをもさして。馬場本にて可乗也。もし馬場末にてあらは。下馬して吞て。頓て可乗。馬場本同前也。

一酒とうほしいなと有時。相手に貴人もなく。常の馬場ならは。ゆかけをさしなからもくるしからす。少の禮ならは。たおほんをむくり返してのむへし。時宜によるへき也。

一笠懸からに矢つか巻をする事。鹿苑院殿の御より始也。古はなき事也。自然からわれたりし時は。故實に時としてかわにて巻たりしを。人知らすして。かわにて巻て進上ありける。是を人の法とする事おかしき也。すへからす。

一笠懸の時。馬のかせくと云事。亦むらかきもなきなと。云事は。笠懸の馬に限りたる事也。犬射馬場などにては云へからす。

一矢くるひする馬なと。語事は。笠懸。やふさめ。小笠かけの馬に限りて云事なり。犬射馬にいふへからす。

一矢はなす所にて。馬つか走りを物語に矢筈取てよりつめてと語りて。能馬の物語の様に語る也。是はわるき馬なり。如此はじる馬をむらかきの馬と云て惡に云也。唯馬場元より馬場末まで。同様に走るを能馬と云なり。

一笠懸射るとき。其邊を馬に乗りて通る人。見物はせず只禮に下馬して通る事あり。其時射手は馬よりおりはせず。中間にても小者にても遣して。只めされ候へと禮計りを云へき也。亦おりたるも無子細。犬同前。法は



定らす候へ共。如此可然也。惣て笠懸から立  
なとを射る邊を。馬に乗て通る事は。間一町  
計の外はおらず共。難はあるましき也。

一幕にかゝりたるとき。つれ笠懸とて射る事  
は。本より有事なり。略義なり。つれ笠懸な  
と射るとはなき事也。前に射る射手。矢筈取  
時分に後の射手馬場本にて馬を通す程に射  
る也。餘りに間の近きもわるき也。亦馬によ  
るへし。

一五度共三度共。定て可射に其を皆射て當り  
たはつゝと語るへし。其故は三度弓の御的  
の時も。十の字にてつゝと云間。如斯成へ  
し。何時も限るへからず。兼て定によるへ  
し。

一矢そりとハ云とも。矢の退きたとは不可言。  
そる共身かのくともいふなり。

一十度可射に定て。其内に小的を懸ても可射

也。先其間に馬よりおるへし。但時による  
へし。是は二三度も五六度も後の事なり。

一常に十度なと射るも。こふしはつれ其外落  
馬なとにて。矢をはなさぬ時ハ。残りの射手  
に此分を今一度可仕なと云て可射也。其  
射手の所存によるへし也。去間。余の射手も  
被遊候へなと云へし。但射手衆に寄るへ  
し。亦時によるへきなり。くるしからさる人  
數の時射へし。不然は可斟酌。又余の射手  
射たるは射へし。

一入道は頭巾にても小笠原にてもきへき也。  
犬に同し。きざるは尾籠也。かち立の時ハ。  
たとひ著たきとてもきへからさる法也。

一昔は度毎に行賸をはきて射たる也。今時は  
ことなる時ならては。はかぬなれとも。はき  
て可射事本儀也。

一馬場本にて馬の歸るをは歸ると云也。犬に



繩にてはなかるゝと云也。是又各別也。

一すはせと云言葉は。笠懸の馬場を唯通す事を云也。馬場にてもあれ只乗と云間敷なり。

一引口を持せは。きりふ中黒其外何にても眞

羽にてはきたるから計可持事本儀也。鶴の羽付たるから計を持せ間敷なり。鶴の羽

は略儀なり。二三ませて持せたるは不苦。眞

羽のから持せは。二はかり可持。

一鶴の羽の白と黒とをませはきにして射ぬ事

也。同白鶴の羽にても射ぬなり。

一鷹の羽をは付ぬ事也。但定置れたる事にて

はなし。昔より如此ませはきにしても射ぬ

也。

一内向外向不定。いづれも不苦。但矢に寄るな

り。外向はよし。

一引目結て持する事。五より多くは持す間敷也。能々可心得也。但又犬の時は六と有之。

三ツ宛別各に成故也。

一笠懸の時。馬上より馬に乗ぬ人に物を云事。先は不可然事也。殊に賞翫の人には可斟酌なり。

なり。

一からの事。さわし籠本也。のこひ籠は略儀也。晴のとき。のこひ籠にては射間敷也。内

々にてはくるしからず。

一からをもうるしはきにて拵て。一は可持也。

一弓のつよきよはきなどゝて。取替る事は尾

籠なり。弦きれなとしたる時は。馬場末にて

も馬場本にてもとり替る也。

一串はぬらても立る也。ぬらぬとてわろうへ

からず。雖然ぬりて可立事本なり。笠懸丸物

の串。黒塗たるは本也。大的の串は白き本な

り。ぬるへからず。

一布革の串の程らいは本なし。但布革の寸法有間。布と一はいに内のりをすへし。横串堅

串は的串に準すへし。但竹のふときも寸法なし。又土に入程も定まらず。大方一尺計り可然なり。

一馬場を打て見るときは。馬場本より打へし。跡と梁とのあはいを打て見る時は。跡より打なり。跡の中の通りに。弓の本弦を押あてゝ。梁の方へ打へし。跡のかたへ打へからす。

一弓にて打時は。はつし弓にて打事本也。但人など張弓出す時。はりたる弓をはつして打へからす。其時たゝはりたる弓にて可打。はり弓は略儀なり。

一はり弓にて打時は。右の手にひつさけて弦を下へなして。左の手を弓に添へて。例式に打へし。打時は外竹上へなるへし。はつし弓にて打時は。本竹下へ成へし。

一射るとき。馬の髪をは馬場にてはぬくへか

らす。宿所より結候をぬくへし。

一馬場にて何にても立よごあらは。串の通りに立へし。串なくは梁に添て立へし。其外。本草の葉をも立へし。但串なき時は梁に添て立れば遠き間。串立たるあなあらは。其通りに立てもよし。笠懸の時に限りたる串なり。丸物の梁の時は。串有て串立たる穴有とまゝ梁に押添て立へし。

一勝負の笠懸の時。錢出物などは。串の通り馬場末のかたより坐すへし。同鬪のふり手も同前たるへし。

一鬪をは。若たうふるへし。中間もふる也。但略儀なり。

一錢をそろゆる事。若たう沙汰すへき也。

一射手鬪可取様。馬場本にて鬪を取て。ゑほしの右の手の下より少ひんのかたへよせて。紋を下へなしてさすへし。射はてゝ馬場ま

て皆射手のそうひたる時。鬨を合せて馬場本へ打歸さるに筒に入て。又馬場本にて取也。幾度も如斯可有也。鬨持たる者。馬場末へ馬場本へ行あるく也。亦馬場本にて取はしめて。馬場末にて揃たる時合て。頓て馬場末に入て。打歸り様に跡の中にて鬨を可取振て。鬨を振て出すへし。如此鬨取初る時は。馬場本にて取る也。入道は行膝のくしのみの方緒の下に。少しすしかへてをすへし。行膝はかぬ時は。はかまの前腰にさすへし。へその通りに扇さすことくに。すこしすしかへてさすへし。鬨を左へ持て振て來りたりとも。右の手にて取へし。

一鬨を取初る時も。馬に乗て取へし。

一鬨は十度はてゝ後の一度に。鬨を合する事も有。一度射て頓て度毎に合する事も有。何にても射手の定たるへし。

一鬨の拵様の事。一にても二にても。或はすしかへても。又四季の字などにてても。一對宛拵へし。十騎本成間。五騎たるへきなり。略儀の時は。射手の數によるへし。鬨の長さ法なし。但五寸計り可然。兩方を細くふすくけつりて。中をふとく削る也。竹の筒に入て振る也。亦犬の鬨は。頭を五分計りに。かうかひのことく下を細く劔頭にする也。

一勝負の様。射手六騎あらは。一々。二々。三々の鬨を取に。一々の相手射あてゝ相手ある時。二々。三々の相手矢一あたれは。一々勝なり。二々にても。三々にても相手みなあたれは持に成る也。亦七騎有時。鬨七なり。四つかひの分たるへし。其時は落一人可有。落は矢一ツ二ツの當り成へし。相手の射當たるに。落一射當らは持に成へし。例式から立の鬨弓同前。如斯落は有事なり。ねむりと

ては古法にはなき事也。亦七所の勝負の時  
は。日記を付て例式射はてゝ鬨を可取なり。  
常には毎度一宛にて鬨を取て勝負を定る  
也。

一鬨笠懸に勝負なき時は。鬨を取直さぬも苦  
からず。但振り直したるも能なり。

一笠懸又はかち立にても。勝負の日記には。七  
所勝負ならは。十度射はてゝ。例式上三度下  
三度に鬨を可取。其鬨の勝負のしるしには。  
小點をそとかくへき也。○假令如斯成へし。  
十度の矢數を五宛あわむを置てつくへしと  
云人あれとも。唯常のことく可付也。

一鬨笠懸の時。自然こふし落。其外何にても  
矢をはなさず不射時は。其度の人數にては  
不可有。其不射人の相手は。時として落に成  
へき也。最早以前より落あらは。其落の相手  
になるへきなり。

一笠懸のたしの日記も。はしに笠懸の射手な  
ととはしに書事不可有候。唯矢數を可付迄  
なり。

一鬨笠懸の時。ともに射あてたる人。亦鬨をも  
取合たり共。出錢は唯一分可出。あかす事不  
可有。かち立の時は。相手共に射當たる時は  
あかる也。但別人矢一あればあけへからず  
也。去間一分可出也。

一おさなき人は。先すはせを稽古すへし。鞍に  
も能立。鎧も能ふむ時。馬かき入所より。矢  
さしをしても射るなり。

一おさなき人。弓持てももたいても。射手同様  
に通す時は。毎度いち後に通すなり。

一御贄懸る事。遠笠懸など又は小笠懸など諷  
訪の神事笠懸射る時に限て懸る也。懸る在  
所の事。馬場本の扇形と一的とのあわむ中程  
より少的の方へよせて。弓手の方に懸る。

り。何木にてもあれ。木一本切て。土より上。弓のほこたけに立へし。土へは木はたらかぬ程に。何程にても堀入へし。木に枝を四殘て。魚をは二宛腹を合て。あきより四へ穂のある稻にても。穂のある薄にても通して四の枝にゆひ付るなり。穂の有稻薄にても付る事。魚にかきりたる事也。何魚も苦からす。

一鳥をは。一宛四の枝に懸る也。藤にても付るなり。鷹の鳥に山緒懸ることくに。鳥のせこうの上にて結て。鳥の頭を上へなして懸るなり。

一鹿も懸る也。四の枝をおろして。爪の方を下へなして。一宛も懸。亦鹿の身を取て。藤又はわらにてもかくるなり。

一雪降つもりたるときは。跡の中扇形的懸たる前計。雪をかゝせて可射なり。

一ねり馬にて射る時は。上手のわさ也。はやき馬にて射る事。下手のわさ也。されははやき馬を御好候かと尋ぬるもの也。

一遠笠懸の事。馬場たけ一町。馬場本の扇形の細みよりの後の串まで三十三杖に定。九杖に柴をつき。八杖にて的をかけ射へき也。何としたる子細にて如斯被定置哉と。勢州小笠原播摩守。多賀豊後守に尋被申候處。其謂を相傳有也。世に知る人稀なり。

一遠笠懸と云は。常の笠懸の事也。遠の字秘する字なり。例式の物語には。唯笠懸と云へきなり。

一七夕の笠懸の時は。七度可射なり。十度射事不可有。

一日記付様の事。遠笠懸。七夕笠懸。七所笠懸。百番笠懸。小笠懸日記付様。別紙に注置なり。

一馬場のあて杖。別紙に注置なり。

一矢代の振やう同前。

小笠懸之事。

一小笠懸を射るおこりは。ふせ鳥を射るを表たるものなり。

一同射拜の事。遠笠懸よりは矢かまへを。たふくくと高くして。馬の馬手の耳に越て。ふかくと可打入。扱ぬき出して矢さしは。犬追物のことく弓を打おこして引てさかりて。

ひちの持様は。遠笠懸同前たるへし。

一小笠懸の的は。檜の木の板なり。但まさめたるへし。板の厚さ二分計なり。廣さ方四寸。かねの定也。兩方の裏をおくへ五分きさむ也。面へみへぬ様にきさむ也。くしは藤なり。長さ一尺二寸なり。かき合のうるしにて黒くぬる也。土より上八寸的半分二寸。土へ入る分二寸也。はさみきはを白かねにて。口

かねを入れてしむるなり。口かねのひろさ五分計也。串立土のそこにすりぬかを入るなり。上へは見へぬ様に入て。其上に芝をふせて的を立る也。串をはあまた拵て可持。小笠懸の的に限りて。土より上八寸なり。的立る時の切の前の下へ成へし。

一小笠懸の馬場とて。別になきとて。常の笠懸の馬場末より馬場本へ走らかして射る也。若斯射る謂は。遠笠懸の馬場にハ。弓手に埒有故なり。昔より如此也。埒なき時も同前。遠笠懸の馬場にいつも埒あるへきなり。是は十文字の馬場なり。向ての時は。さか馬場にも入。押もちりても射るなり。何れも同じ心得なり。

一半引目と云は。小笠懸の引目の事也。半引目本也。同しくかふらの拵様は別紙に有之。

一小笠懸の的立る間の事。遠笠懸と同一程な



り。扇形四杖々中のけて。細みより三十三杖に打て。跡のはたより八寸のけて的を立るなり。

一小笠懸の的は。射手の人数によりて十度射る様に拵て持へし。一人に十宛立るなり。

一小笠懸の射手出立様は。遠笠かけのことくゑほしかけおして。直垂に小袴にてくゝりを入て。行膝をはく也。亦略儀には素襖にくゝり袴にくゝりを入て行膝をはくなり。

右此卷者。笠懸射手故實。并矢沙汰。馬場法量等都合一部之内也。從金仙寺貞宗相傳之畢。雖爲秘說。其方依惣領讓之者也。猶珍重々々。仍如件。

伊勢守

天文十五年八月十三日 貞孝

伊勢十郎殿進る

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

# 笠懸聞書

一笠懸の事。

右大將頼朝也

右幕下御時。於富士野御狩の次。

小笠原次郎長清中沙汰之由見えたり。馬場のおこりは。はまにていさごの上を二三へん馬にてはせとをして。其跡をさくりにして射はしめたり。笠懸と云子細は。昔やふさめ。犬追物射時の日でり。笠を懸て射始めしによつての名也。あやいかさのことなり。一たちすかすと云事。笠懸にかきる事なり。失一しつの事。自然弓をひかぬさきに馬きれば。弓に引目を取副て。本のことく打歸て又通す也。二三度は如此すへし。又其まゝ通す事もあり。神などには打置て射なり。たちすかし様は。はかまのまへこしの鞍の前輪に當ほとにする也。打入ひらきに引目又は弓

綾曲笠



取落事あらは。何も矢取をよひとりて可射也。力革例式のよりみしかき也。

一射手の装束の事。惣てはひたゝれに。むかはきゑほしかけて。くつをはくなり。馬には馬場外よりも乗て入なり。又馬場へ鞭をさす事あり。馬なとせめ候には持せ候へとも。只持せ候間敷候。沓をはかては。(主たては)内者なとは射候間敷候。射はてゝ後は。馬場末にておりて。馬をば馬場末より馬場本へさくりをひかせ候て馬場本より引上て歸るなり。引者はあつちの方を上を通るなり。たふれたる矢は。的をすりこするなり。それも様あり。あたりになるもあり。刀はさけをにても。別のものにても留る也。

一ひもおさむる事。のとのとをりにて。こまむすひに結て。うしろへこし。うしろのゑりの下邊にて。ゆるくと結て。いとにてとち



円



同



付て。又ざんじなとにむねにて一結して。前腰におしかひ候也。是はすはせなとにも能也。犬の時も同事也。小手さす時は前に留よき也。

ひもの留様如此。犬の時もひもの留様同事也。同事なから。おさなき若き人は。犬の時も後にてとめたるか能なりと申習したるなり。

一笠懸引目のひしぎめは。實朝のにぎりひしきてあそはし始たる也。それよりして。ひしきめ始り也。かみそりなとにて。ひしきめをする也。

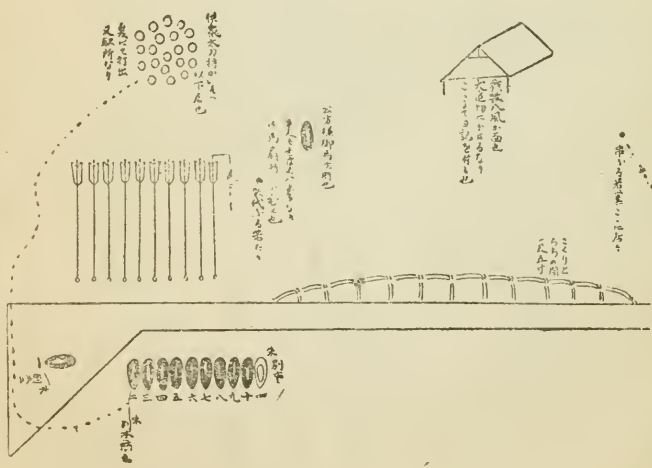


アメニ似タル心也。

先可射前ニ矢代の、さく馬場本より。一二三四五六七八九十。馬を可立馬場本の扇形に馬をはむけてたつる也。馬場末もはむくる也。一番より始てすはせを十番迄すべし。馬場末にて馬を打上て。一番の射手馬場本へ馬をさなして打上て馬をひかふへし。二番に同馬場本へさくりを通して。扇形に的の方へ向て馬を立る也。さて残りの射手悉馬場をもさして打上てさくり本より三四五六七八九十さ立ててさく扇形なる射手一番射手なり。さてさくり本より次第々々に可射。馬場末にての馬乗様給の如し。十度ながら如此也。馬場末にても一番に射たる射手馬場本より一二三四さ打上て馬を立るなり。

一我射番の時。そはより馬を打上候へて。扇形へすくに通候也。其外の人。そはより打上る也。

一的とさくりの間。弓杖五杖に打て。八杖に可



立。是太式なり。又當世は。八杖に打て五杖に的を立歟。口傳なり。

一的と布皮との間。弓杖一杖也。一杖に少近と云り。一尺はかり近くするとなり。

一らちはおらちめ。うちと申せ共。的の方のらちおらち左也。一すしとをるかよきなり。さ

くりはたより一尺五寸のけて結。馬引時。らちとさくりの間を通なり。木はくろもじか

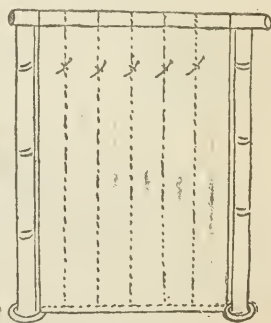
よき也。高さ一尺五寸信州小笠原二尺五寸と被申。但一尺五

寸を可用。ふとさまはり一尺二寸。萩のかわにて所々結なり。皮むかざる八寸の檜木杉

を一間に立。其間にはそきかわむかぬを一

つゝ立なり。矢取道一間あくる。もとより矢道七尺五寸はあくる也。さて又馬場末に結なり。

一勝負笠かけの事。先馬場本へ打寄て。各ひかへ候所へ。主々の若たうよりて。馬の上に持



此、竹の節をぬひくゝむ也。

をなはくゝり内へ入

六のあさき布の長五尺たかはよりの定ふせぬひ也ひろさ一尺二寸の布也となりのを一品ツ、二きくとちあり上より一尺一寸金の定とち革あいかはなり菊とちの長さ二寸結てひろさ五分計り菊とちは二、を一にとちてもよし又いさにても付るなり。

たる引目を一取て。扇形のはしをおのゝまはりて。矢代ふる若たうに各渡す。矢代ふるもの。馬場本に向て請取。十あれば五分て別のものにもたせて。一つゝ双て。又五を取て。一つゝ双て。扱次第を射手たち見る。其後。矢代を取て各かいそへの者に渡す次第を定

て打入て。一度にすはせをとをす。其後。馬

場本へ打歸る所に。くし持たるわかつたう。矢

取の右の方より出立なから出す。馬の上よ

り一つゝ取て。男はるはしの右の手の下に

さす。人道は右のちの下そば腹のかとはか

まのこしにさす。さて一番つつことくく

射て通りて。馬場末までくじを合て見る。く

しふるわかつたう。布皮とあつちの間を通り

て。馬場末馬を立双たる所へよりて。一番に

射たる人の方より始て。筒を馬上へ指出す。

各々其筒にくしを入る。又いまのことく本

の跡へ歸て。又さきのことく鬨を出す。十度

迄かくのことし。行茂云布皮ハ白皮なり。又云シキ  
カハトヨム事アリ。然リトイヘ共

此書ニミヘシハヌノカハトテ矢ヨケノカハナ  
リ。布ニテゼニカタ有キクトジチ付ルナリ。

一鬨の長サ五寸二分。はらのイ竹のこうのかたに一々

二々とほりつくる大なる方をはぬるへし。

イニアリ

ひ



一勝負の事。一度あたれは惣の料足を取て。く

しの相手と二人して取る。惣の地ニ一ツあ

たりたり共前はうまるへし。くしのあい

ふたりあたりたらは。うまるへからす。惣の

を取二人わけて取るへし。地にはいくつあ

たりたり共前うまるべし。相手二人外は一

ツあたりたり共。ふたりまへもうまるへし。

代物十錢ツ、皮にてつなきて。かいそへの

者。日記の前にてさはくへし。行茂云料足ハあ  
しの事なり。

一日記付所二所にあるへし。いつくにても好

也。第一矢取のとをりを。棧敷の八風さくり

へむくへし。棧敷あらは座敷にて日記はつ

くへし。昔のは日記をあたりをくろむる也。

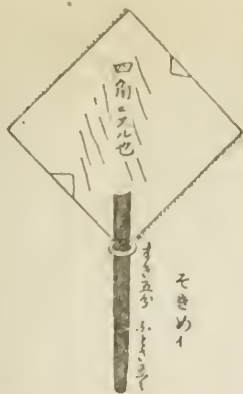
いまは御所的是。あたりをくろむる也。當世

は笠懸の的はつれたるをくろくすへき也。  
御笠懸射手と書御相手の時は。殿の字かく  
す。七夕には射手と云字をは不書。七夕笠か  
けと計書なり。

小笠懸の的也。板方四寸。

かさかけの馬場をさかさまに馳て。三十  
三杖に立る也。

串の事本にも非す竹にもあ  
らずさは是也。くしの本次  
第にほそし



白銀にてせめ  
を入也。あつ  
さ五分計きさ  
みめ前へみへ  
す。いための  
内のかとをき  
さむ。すけぬ  
かを入て。上  
に土をかけて  
なく也。少は  
むくへし。口  
傳イ。

折懸串ハ何し串  
のなき時する也。  
然共秘説たる間。  
そこつにせすと  
云々。



一大館總州聞書云。あたりたる矢の布皮ニあ  
たりて、横繩にかゝりたるははつれ。たゝ布  
皮にあたらぬはあたり。的の下かとにあた  
りなくりてからなからの前へ出はあた  
り。芝にても土にてもそはに付はあたり。引  
目の眞尻に付ははつれなり。  
貞丈云是ハ貴人ノ御前へ當ル時ノ事ナリ  
一笠懸の時急なる事ならは弓下のゆかけを  
取へし。たおほひもあなし。  
一矢もおれ引目もこほれたりとも。的より前  
へ落は能矢也。

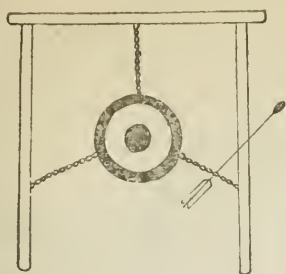




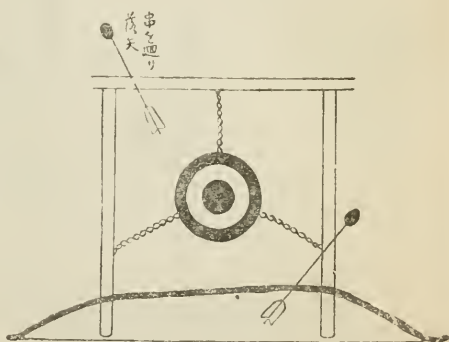
一あたりて行矢か。布皮にあたりてよこつなにかゝりてもはつれ也。引目のそはに出候でも、芝にても付はあたり。まかしらに付ははつれ也。

一笠懸からの羽たけ四寸二分。

一笠懸に<sup>主イ</sup>しうの脊を立るとて。馬上より左脊を取て。人に出して右をとりのけて射とも。おのゝ我脊をぬくへき也。同輩<sup>傍イ</sup>などは。すあし成ともぬくへからす。



是ハよこつなにかゝりたる矢なり。よこつなを前へ引ニ。矢はつれて落ハはつれ也。なわにかゝれハよき矢なり。



うらはす馬場へ成也。脊チぬへからず。

一主の馬鞍にてそのまゝ射よと仰られは。脊をはくへからす。

右笠懸聞書は。梅戸大藏太輔自筆に書置たるを。已後書寫者也。定て惡事にては有へからすとうつし置所なり。

串二の前は。う。引。目。は。う。引。目。云。う。引。目。前。に。あ。り。て。候。と。も。あ。た。り。也。矢。は。前。に。あ。り。共。に。引。目。前。に。あ。り。は。な。ら。れ。な。り。

# 遠笠懸之事。

一射手は十騎本也。同射様の事。いかにもしつかなるねり馬にて。當家には可射なり。

一射手の出立の事。古は大口ひたゝれにて射たるなり。但神事笠懸などの時は。行膝をはくへき事本也。同むかはきの白毛のかとを。少たつへし。それによつてはかまむかはきと名付る也。

一鞍たち打入の事。先馬を馬場本の扇形の中程に馬をひかへ。少扇形のかとのすみへんへ。馬の頭をむけて。扱矢をたかゝとさしはけて。同矢かまへを。いかにもひきくかまへて。ひちをたて。手綱を馬手の手に。二重にまつ持て。扱てきつとつゝ立て。いかにも鞍の中に立すかして。尻の方をはしつわへ出し。前の下かみをは。同鞍の前輪の方へ馬の走かせしにつきて。きつしりゝゝゝゝ

とあたる様に。くらたちを心得て。さて馬を扇形のさきへたふゝと打出して。さくりのまん中へ馬をひんむけて。くるりと返して。同馬三かきかゝせて打入へし。引目のとう中へんを。馬のまつら中へ打入て。同馬を三かきかかせて。少ぬき出す様にして。ひらき出し。きつとこうてをつかひて。いかにもわかうてをさしのへて。扱て少矢さして。馬をかゝせて。やかて手綱をなにとなくすて候て。ひたゝれの袖にても。又はすわうの袖にても。少なをす様にして。矢はすを我むねのとをりにて。出し合て取候て。歩弓の時の様に打あけて。同引おろして。よくひきかためて。馬を少かゝせて。的のとをりにて。きつと弓手のこふしをうしるへねつる様に矢をはなせは。的のれんせんにしつと射つくる也。口傳くわん以もかくこ有へし。

一的に射付ては。左右のこふしをきつと少持て。扱同様に手綱をかきて。同的の方を少見送て。馬を能留切て。馬場末のかたへ打上て。次第々々に各の射手馬をひかへし。惣して馬の次第は。さいしよと一後に可射事。賞翫の義なり。

一馬きるゝ事あり。的よりうしろの串の邊ニてきれば。やかて矢を指はつして。さくりへ馬を打入て。馬場本のかたへ又馬をなをして。今度は先只馬を通すへし。但上意などにて。唯仕候へと被仰候時は。馬をとをすにおよはず可仕なり。同馬ころひて落馬あるときは。やかてくつを左よりぬきて。馬を引なをさせ。引目なとそこねたらは。取替て射直へし。又的にても矢をはなちて。頓ても馬ころひてあらは。そのまゝ馬をも馬場末のかたへひかせて。同射手も馬場末のかたへ出

へし。やかて又馬に乗て。馬場本の方へ打歸り。以前のこくとく射へし。

一馬場本にて馬ひかへて。矢かまへして馬をかやさんとするとき。馬こへをも出し。同はりをもつかは。矢をさしはつして打馬をしつめて。我心をもしつめて馬をかへし。扱射へき事なり。

一射なかつ笠懸と云事は。公方様の御相手にも参りて仕候はんする時。八度の九度めまでつめてあれとも。公方様の七度の八度めにも。御はつし有時は。御相手の人。十度目にわさとの下的へも射さけてはつすへし。是をはなかつ笠懸と申也。上を賞翫申儀なり。

一的に矢のあたりはつれの事。矢的にあたりてたふれてよこつなにもかゝるへし。其時は矢取心得。矢道の前より取候へし。又う

しろの方より矢取矢をはあたりには成へからず。同矢的にいしつとあたりて。的よりさきへこへて行事あり。それも矢のはすの方。的よりこなたにてそとつきてこへは能矢なり。

一串まはりとは申矢の事。是も的に矢あたりて。あまりて行矢。頓て横串の内をまりて。同矢道のかたへ落はよき矢なり。加様の矢の事は。勝負の笠懸又はくし笠かけの時儀なり。

一笠懸の矢にも引目尻見る様あり。小的を射る時は。下へ矢射さけて有にみる様口傳あり。是も勝負のとき。射手と論する時の儀なり。

一笠懸のとき。まつ最初に馬を一度つゝ通す事。昔かたを前馬場と申。はますりにて砂ふかく付によりて。古人の射手。馬をまつ一度

つゝはせとをすによりて。其馬せくり。やかてきくりとさためたり。如此の儀により。今に至て馬を一度つゝとをすなり。同昔は的など定たる儀なし。あやかさを的にして射たるなり。如此の子細により。笠懸とは申さためたるなり。

一もとよりのかわご申たる儀もなし。同あつちしてもなし。古人の射手の的かわには。まくを表してせられたり。又はあつちなんども。的にあたりて。矢のこへて遠く行によりて。如此あつちをも表して拵たるなり。其時分は的串とてもさためす。竹を折かけて的串としたる儀なり。それより今に折かけ串と定たる儀共也。如此イありイ子細。口傳

一小的をもかけて勝負にも射に。的の下へも引目的さけたるに。論する矢あるへし。其時は矢を犬追物のことく矢を沙汰する様あ

り。

一 諏訪の神事に。御にへを<sup>贊</sup>かけて。笠懸をも可

射時のにゑの懸様。山の鳥ならば。一懸山緒をかけて懸へし。又鱸など懸へき時は。是も一懸魚のあきより口へほそなわをかけ引とをし。同一懸かけへし。かくる木は。大成木の枝を。高サ弓のほこたけ程にして。其の木の枝に。鳥にても魚にても懸て。にゑを手向申て。笠かけをも射申て。諏訪へ可行子細なり。にゑを可懸所は。的の方より前邊に懸へし。

一 笠懸引目を射て見るには。しらめてみると云義也。犬射引目をは。しらめてとは不云。

一 笠懸の手綱の長サ。鞍の前輪にうちかけて。たふ／＼と一尺計長くすへき也。

一 笠懸引目のからに。鶴の羽つけてあるへし。はれの笠懸。神事笠懸の時は。鶴の羽畧儀

間。斟酌あるへし。其時は眞羽矢にて射へし。

一 笠懸の時も。頓て引目にて矢代をふるへし。

日記の書様付様。條々口傳<sup>ニイ</sup>あり。

一 さくりへ馬を打入て。只馬をとをし候時は。すはせを可仕と申へきなり。

一 的のかけ様。先後の串より立初て。扱横串を後のさわよりすくに。入道のとほりへすくに横串を先ときて。さて前の串をは。五寸はかりさきへ出して立へし。是は的をはむけて立たる儀也。同的を懸る時は。兩人して懸へし。横繩をしかとめ。さて上の繩を横串にしかと留へし。同的の惣とは。地の上より五寸に可懸。又時に寄りて四寸三分にも懸へし。的革の串を立。同布皮をも懸へし。懸様口傳。

一 鬨笠懸の時は。射手をの／＼鬨を一つ／＼取



て。男はるほしの右の手の下にさすへし。法

躰師イハむかはきのくしかみにさすへし。犬追

物の時も同前

一笠懸の時のひもの納様。小袖のゑりのとを

りにてむすひて、又上を一ツむすひて。扱う

しろのすわうのゑりのまん中に。ひも結た

るとくにしかと結てとめへし

一替の引目をは五ツ又七ツ計可持。両張替の

弓二張。弓袋に入て持へし

馬の頭をはすきたて、犬笠懸の時ハ可乗

の本なり

一笠懸の的の串。同丸物の串などは。木にて拵

て黒くぬるへし。口傳有

一こふしはつれの時は。つゝのうちにててもあ

るへからす。又はつしたるに成へからす。

日記にイも付様あるへし。口傳有。

小笠原兵部少輔

文明十六年六月廿八日

佐々木宮内大輔殿

元長在判

参

以下別本ナシ

一笠懸の事。諏訪の神事にかきりて。費を懸る

なり。費の懸所の事。馬場の扇形と的。中程

より少納の方へよせて。弓手の張に懸るな

り。費懸る本有別紙。

一笠懸の時。矢代をふりて。矢代次第に。日記

を付る事有。圖次第と書事也。矢代ふり所の

事。馬場本の方より振初へし。座敷なと有

て。棧敷の所にてふる共如此有へし。座敷な

くて振る事あらは。何の在所にてても。射手の

居たる處にて振へし。在所不定。何の在所に

てもふるとも。馬場本より馬場末へふる也。

引目尻は跡サツリの方へ可成也。

一日記の事。たとい矢代をふりて。矢代次第に



書共。日記には鬺次第と可書矢代次第など  
書事努々有へからず。矢代則くし也。然  
間 鬺次第と書也。

一 矢代の振様 如常引目を一ツに取て。右の手  
にてさかてに後へまはして。矢をおひたる  
ことく左の手に持て 右の手にて一ツ宛を  
きて。□さるへし。矢代は五ツ宛振て 又五  
ツふりつくへし。矢代ふり初る前邊に。五ツ  
をきて扱て振つく也。何所にてふるとも。馬  
場本より馬場本へ振なり

一 小笠かけにも。むかはきをばく事本なり。

一 やふさめの馬場 遠さ二町。約三所に立也。

一 百番の笠懸日記付様有別紙。

一 笠懸引目のひしきめは 中程のとう卷より  
下を十一にひしく也 定木をあつるに中く  
はなる處定木ありにくき程に 定木を中く  
はにたむる也。笠居のすへをもむは大竹をわり

て。あなを少せはき程にしては もみくす  
るなり。

一 笠懸引目は。皮袋には人物也 簞には袋より  
革をつつけて 簞卷をぬひ付る也。卷様ハ  
簞を持て。わかむねの順に立て持て。右の手  
を以て。わかむねの外へ卷なり 矢なみをね  
つることく成へし。本はきのもとにて。ほ  
そき皮を付て。ひはむすふことく留るなり。  
袋の内のかたにとち付るなり 簞卷革金の  
一寸計也。

一 大的懸る串の立様の事。先横串をくしの可  
立所の下に置て。前後の串可立所に。しるし  
をして。前後の串可立穴をほりて。扱前の串  
を立てうしろの串を立て。其後横串を上  
にをくなり。

一 大的懸る手繩。下は長シ。上の繩は短し。せ  
ミの緒ハ上のは長して。上の横から串にか

くるなり。下兩はうらの横をにむすひ付へし。的懸るをは横綱と云也。唯綱と計はいはす。

一 甲冑尼子殿長綱へ尋申條之事

一 射禮の席に羽林中少將の器用をゑらむと云事

器用に候間。ゑらみ被出たる事。

一 丸物れんせん儀と云事。

錢をつらねたる心にてあり。

一 うつほの上にしんとうにそへてさす鞭。ぬ

き様の事。前へぬくと有如何。

うつほを付なからさけなどありて。主の前へ出候時は。うつほ又矢をはとらす候。鞭計を取てよし。

一 外の馬場にてまきはなる射様の事。

傍示きりの事。

一 三番五番の時。用意の射よと申事如何。

三度弓は六人。五度弓は十人。然處に用意の射手一人候間。三度弓には射手七人。五度弓には射手十一人。是を用意の射手と申候。的の間に万一歡樂をも仕なし。いか病氣の事也。祝の詞なり。様のさはりも有なん時。事をかくましきと有心つかひ也。

右一帖。此度仍御懇望。免傳寫候畢。

伊勢万助判

寛政四年壬子九月十日

松岡平次郎殿

參

文化七年四月十四日

松岡次郎太郎行義

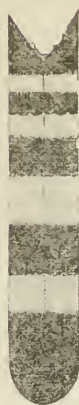
以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百七十八

武家部二十四

羽形圖

中品  
しきりふ  
と云



中上品  
しきりふ  
と云



上品  
こきりふ  
と云  
又と  
をかりと



上品  
きりふと  
云



中上品  
きりふと  
云



中上品  
しきりふと  
云



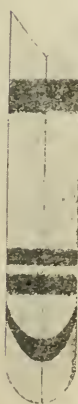
中品  
まねをと  
云



上々品  
あまの面



上品  
あまの面  
と云



上中品  
まねあま  
の西と云



上品  
うすあま  
のおもて  
と云



中上品  
地しろき  
りふと云



上品  
ほしきり  
ふと云



上々品  
あまきり  
ふと云又  
まきりふ  
と云



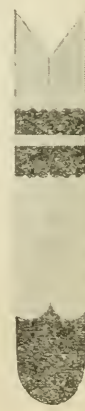
上品  
にせあま  
の面と云



中上品  
あまのお  
もてと云



中品  
これより  
そやう部  
はちほみ  
と云



中上品  
さるきり  
ふと云



中品  
ねこきり  
ふと云



中上品  
ねこきり  
ふと云



中品  
すりきり  
ふと云



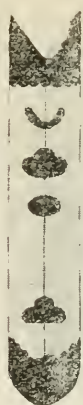
中品  
まねきり  
ふと云



中品  
すりきり  
ふと云



中品  
すりふと  
云



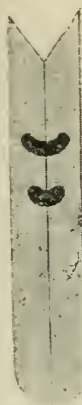
上品  
きりふと  
云



上品  
名同前



中々品  
つまきり  
ふと云



上品  
ひとつふ  
羽と云



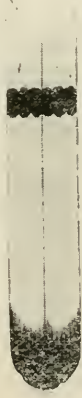
上品  
中しろと  
云



下上品  
すり中し  
ろと云



上々品  
地白と云



上品つま  
しろと云  
は特殿の  
おめ入の  
くそや時  
のそりけ  
しと名を  
付る

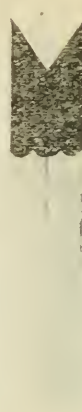




中品  
つまくろ  
と云



上品  
大つま  
と云



中下品  
すりつま  
と云



下上品  
くろかう  
をと云



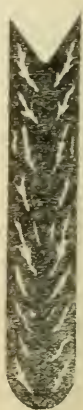
上品  
小つま  
ろと云



上品  
忍ふすり  
尾と云



上品  
くろすり  
尾と云



中品  
かうすり  
尾と云



上品  
さける  
の尾と云



中品  
中くろ



中上品  
大中黒



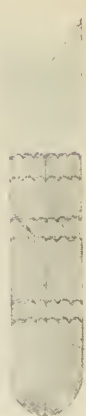
中品  
小中くろ



上品  
小中くろ  
ふしの  
矢はく  
はくを



下品  
すり中く  
ろ



下品  
たかうす  
へ尾



下品  
うすへ尾



下品  
しと尾



下品  
ひけ中く  
ろ



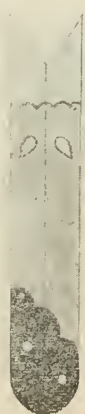
上下品  
わかつき  
りふ



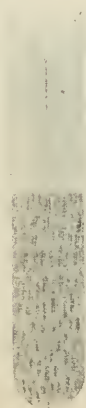
上品  
とかり矢  
の羽



名おつ本  
マ、



下品  
すりうす  
へ尾



是より又  
副ふてくき  
上品



はちのみ  
上品





さるな尾  
の  
上品



しききり

上品



うすきり

上品



中くろ

上品  
以上六十



又一説貳

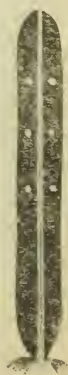
本  
小きり  
の上



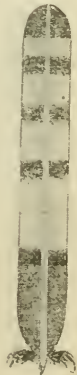
ほろきり  
ふの上



ほし雨な  
しきりふ



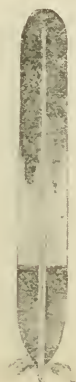
しきり羽



かゝしら  
す



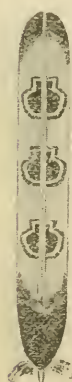
すりつま  
くろ



つましろ



ねこきり  
ふ



小きりふ



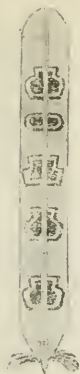
かきりふ



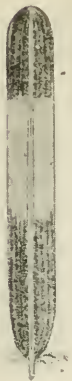
たからす  
へふ



ねこきり  
ふ上



うすへお



申しろ



つまくろ



さかりふ  
の上



つましろ



ちゝしら  
すの中



かすふの  
上



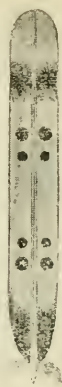
ちゝしら  
すの上



あまのお  
もての上  
中



まれなる  
尾



あまのお  
もて



ちしろさ  
りふの上



あまのお  
もて上



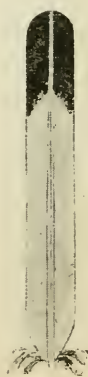
中しろ上



一文字大  
中黒上



小つまく  
ろ



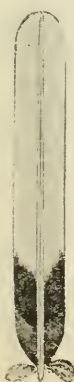
しきひら  
のかすふ  
上



むめちの  
きりふ上



たかうす  
へふ上



たかすり  
上



三きりふ  
上



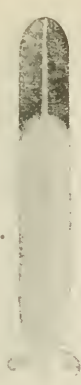
あまのめ  
上



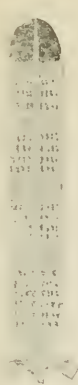
あまのお  
もてし



大つまく  
ろ上



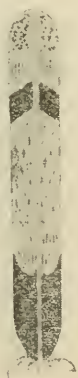
しつれき  
りふ上



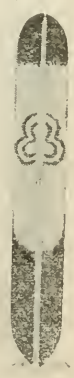
柳地のき  
りふ上



さかさま  
ふちのか  
すふ上



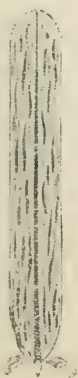
すはま切  
符のつま  
くろ上



すりきり  
ふ上



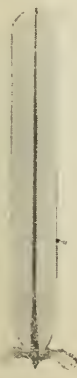
たつすり  
上



小中黒



白尾



小きりふ



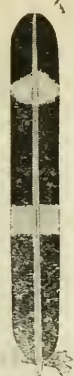
中黒



さか一上々



大中黒



やかた尾上々



まねやかたお



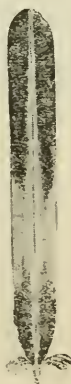
なみきりふ上



すりきりふ



うすへう



ねこきりふ



小きりふ

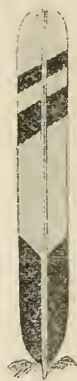


しきは

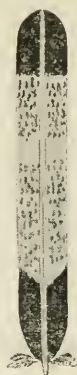




はちはみ



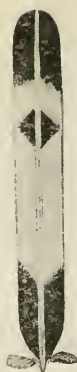
申しろ



あんま



ふまねきり



ままねん



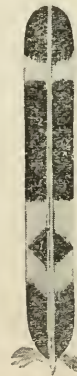
あひきり  
ふかへり  
ふともふ



すちきり  
ふ



あまのお  
もて



あひきり  
ふ



すちしら



きりふ



つまくろ

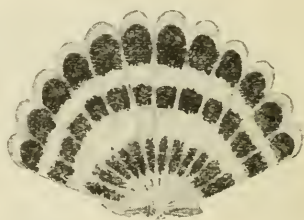
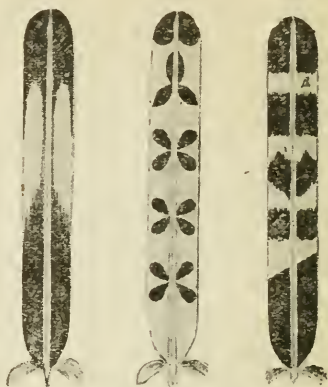




きりふ

にせきり  
ふ

たかうす  
へふ



(鷹尾名稱右ヨリ)

ひうちイしうちイ大いしうち  
いしうちイのすりイ小石うち  
なら尾イしはいき

ならしは

たすけ

すゝつけ

すゝつけ

たすけ

ならし羽

なら尾

いしうちイのすり

ひうちイいしうち

續群書類從卷第六百七十九

武家部二十五

諸鞍日記

鞍種類。

一移シノ鞍ノ事。

移ト云ハ。覆輪打付タル鉢鞍也。二ツ由木ヲ掛タリ。内ハ朱ヲサシテ。外ハ黒塗ナリ。下鞍ハ裾廣ニ切テ。上ニエウヲ入タリ。地ハ黒ク塗テ。縁ハ大滑ヲ廣クサシタリ。縁外レニ白布ヲ三ツ線ニシテ。綾杉ニシテ小縁ノ外レニサシ廻シタリ。表敷ハナキナリ。腹帶トハイハテ由木搦ト云テ。由木に結付テシメ

一御幸鞍ノ事。

タルナリ。鍙ハ壺ナリ。鞍ハ平鞞ニ總ヲ付タリ。力革ハ赤革ニテ包タリ。泥障ハサ、ヌナリ。行幸ノ時ハ。公卿殿上人モ此鞍ニ乗ルナリ。隨身ハ此鞍ニ乗ル。手綱ハ蘇芳ノ手綱トテ絹ヲ染タリ。

移ノ形ニテ。赤銅ヲ外ニ打テ掛テ。覆輪ヲ掛タリ。此カネニ各カ紋ヲ打テ付タリ。切付ハ虎ノ皮。形ハ行騰切付ナリ。表敷ハ錦ニテ包テ廣表敷ナリ。腹帶ハ下ニ結テ。表敷ノ上ニハ上腹帶トテ。革ヲ一寸計ニ切テ。錦ニテ包

テ。先ニ鍔ノ鉸具ノ様ニシテ打テ付ルナリ。シ  
ホテハ銅ノ小シホテハ赤革ニテクケタリ。  
力革ハ包タリ。鍔ハ銅ノ鍔鍔ナリ。鏡鞍共  
云。此鞍ハ御幸ノ時。公卿殿上人ノ乗鞍ナ  
リ。泥障ハシヤクノ泥障トテ。馬ノ皮ヲ黒ク  
塗タリ。根本ハ琵琶ノ撥盤塗様ニシテ。櫛ノ  
木ノ汁ニテ染タルナリ。

### 一唐鞍ノ事。

形ハ移シ同シ。但黒鞍ナリ。切付ハ大ニシ  
テ面ニ銅ヲ付テ。覆輪モカ子ニテ掛テ。面  
ニ様々ノ物ノ紋ヲ打テ付タリ。此鞍ノ具足  
ニハ馬ノ額ニ銀面ヲ當ルナリ。面ニハ是モ  
様々ノ紋ヲ打付タリ。又角袋トテ錦ニテ包  
テ。木ニハカネニテ少シ先細ナルヲ付ルナ  
リ。頭ノ上ニ付ル也。又頸總トテ。ヲトカヒ  
ノ下ニ付ル物有。色々ノ玉ヲ貫キテ下ケタ  
リ。長サ二尺餘リナリ。又雲珠トテ。鞞ノツ

チノ上ニ付ナリ。如意寶珠ノ様ナル物ニ。坐  
ヲ敷鞍ニ結付タリ。又尾囊ト云ハ。尾ヲ唐尾  
ニ取テ。尾筒ヲ入テ付ルナリ。此尾袋ノ左右  
ニ。蝶ノ様ナル物ヲ打チ付タルナリ。此鞍ハ  
御祿ノ行幸ノ時。節下ノ左大臣ノ一ノカミ  
ノ乗ル鞍ナリ。又ハ加茂ノ祭ノ使モ乗ナリ。  
鍔ハ前鍔アリ。鞞ハ牛ノ皮ニテシテ。上ヲ赤  
ナメシニテ包テ。杏葉ヲカネニテ打テ。アハ  
ヒ四五寸計ニ付タリ。又手綱ハ綵ナリ。

### 一水干鞍ノ事。

常サマノ鞍ナリ。コレハ褰ノ御幸ノ時。淨衣  
ノ御幸ニモ。公卿殿上人ノ乗ル鞍ナリ。

### 一前驅ノ鞍ノ事。

形ハ移ノ如シ。蒔繪鞍ナリ。木鍔モアリ。

此一冊ハ。享保中將軍家命アリテ。求サ  
セ給ヒシニヨリテ。武州金澤ノ稱名寺  
ヨリ獻セシ古書也トテ。寶曆十三年癸

未十月廿三日。伊勢貞丈寫置レシヲ。彼家ニ求テ燈下ニ走筆。

伊木常典

右一帖從伊木常典恩借書寫遂一校畢。

于時天明五年八月六日 酒井忠理

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

大坪道禪鞍鐙事記

大坪左京入道々禪直弟鞍鐙之事

一本二  
夢想之卷。

一我竹馬より現馬に至て。弓馬鞍鐙の至極要道を願ひ。暫も身を不離。他を不受。庵に入細に入。然とも輒領定しかたし。馬ハ生得に觀音の化現なれハ。我常に觀世音を奉祈所に。何とも不知馬亭來り給ひて論談仕。有時文字六に弓。又水上にバ船を浮たると。委細に示給へり。此儀を以て。行住座臥にして不懈怠自得する事。すみやかなるへきとなり。恐くは闇夜の燈火。渡に船をゑたるかことし。誠に冥慮に相叶。諸願成就。仍如件。敬白。

十心貫中圓角

弓船是也。

傳

十心貫中ハ弓馬の根源。圓角の二字ハ

馬の形也。亦弓ハ船鞍の本牀也。

一十の字ハ。四方の相也。又地形也。則田也。田と云ふ字は。四方の中に十を加へたる物なり。又十ハ至て極るなり。極てハ散る也。又土と云字ハ。十に一を加へたる物なり。万物ハ土より生て。土へかへる。歸ると思へハ又生ししゝすることし。人馬鞍の三の心の在所ハ。十文字の辻也。弓馬の道には肝心の儀なりと示給へり。

一心の字ハ。人馬鞍の三の心。一道なくてハ成就しかたし。然ハ馬の眞ハ鞍にあり。鞍の眞は人にあると示給へり。

一貫の字ハ。つらぬくと云字なり。十の心をミを合て貫の義なり。つらぬくは中の字の中の點の心也。是を隨緣眞如共云なり。

一中の字ハ。神道にてハ中高と云。佛道にてハ中道と云。儒道にてハ中庸と云。三道にて中の

字の心易なといへとも。畢竟同心なり。先中の字ハ。四方にして豎に點を引通したる物也。豎の點は自の一心なり。中ハあたるなり。あたるは則心なり。中の字の四方の點ハ。四季天の四德なり。四德と云は元亨利貞也。中の字の心は。弓馬鞍の三道に不限。万行の源なりと示給へり。

一圓角の二字ハ。馬の相形なり。馬の形ハ丸くして角成と示給へり。

一弓の事。昔唐國に羿と云有り。弓の濫觴。射の惣領たりと傳へたり。然に弓の情德無限也。弓ハ天地陰陽の形を請たる物なり。外竹ハ天にして陽也。内竹ハ地にして陰也。中の木ハ人也。本弰は陽なり。裏弰は陰也。矢すりハ人也。本弰ハ半にして陽なり。裏弰ハ重にして陰なり。是則天地人の三才の表儀なり。然ハ天に五行有。地に五行有。人に五臟

有。此三を合て十五なり。十五を弓の定尺にして。其長一丈五寸なり。是ハ日御神の弓なり。今の弓は。其半にして七尺五寸なり。是は天神七代。地神五代の徳なり。又云。人躰の定尺ハ七尺五寸と云を以て也。去に依て長幼に不限。其人の尺にして七尺五寸と云なり。これハ自の尺といふなり。

一夫天の五行と云ハ。風暑濕燥寒是也。地の五行と云は。木火土金水是なり。人五臟と云ハ。肝心脾肺腎是なり。

一弓を作る事。六材七木と云事有。先六材と云は。木。竹。籐。漆。膠。革也。合て六材なり。但法の弓也。六材を取事。時を以て賞へし。又七木と云は。たうの木。桑。桃。山桑。はせの木のきめ。からすめなり。

一役ハ木は遠き事をなす。竹ハ深き事をなす。<sup>(糸カ)</sup>膠は和する事をなす。籐原は堅き事をなす。

漆は霜露をいとふ是なり。

一弓人弓を作る事。其人の血氣に依へし。

一天子將軍の御弓ハ本長也。勸賞の御弓也。其外は自身の尺と云なり。

一弓のすかたは中の字なり。弦ハ中の字の豎の點ハ心なり。心は則あたる也。是を隨縁眞如と云なり。

一弓竹の節數の事。外竹ハ七節。是を陽中ハ陰なり。又内竹は六節なり。是陰なり。

一弓に籐の遣所の事。節毎に遣ひて。上下の籐を合て十五なり。是は天神七代。地神五代。三光の徳なり。是重籐と名付なり。又裏弰より七五三とも巻へし。昔より是等をも重留と云也。然共今の重籐と云は。又各別なり。今の重籐ハ。本籐の外にうら弰の方に三十六所。本弰の方に廿八所。是は本籐間々に如斯遣たるを。眞の重籐と云也。知る人稀成る



へし。藤をしけく遣たるハ。したるくて惡敷なり。此重藤は天子將軍の外ハ斟酌たるへし。

一的弓にハ白木本なり。其外は略儀たるへし。  
一船の事。羿弓のすかたを請て作り出したるなり。是舟の根源なり。船は弓なり。帆柱ハ矢也。帆繩ハ弦なり。此三を和して。万里の海上を流行するに。弓の意徳を以て。惡風万災を除と云なり。

一鞍を作る事。弓の形を請て和する事。生得馬ハ魔障の物成る故。弓の意徳を以て。縦は惡方へ向ひ山海を渡るとも。万災の障を除なり。弓は惡魔を罰し。國家を治給ふも。弓矢の徳成故なり。此法にて和したるにては。たとへ敵陣に向ひても得勝利を事。うたかひなしと云給ふ。

一鞍ハ弓也。手綱ハ弦の形なり。鞭ハ矢也と示

給ふ。去に依て。鞍ハ弓の長にて作るなり。手綱の長さは弦の長なり。鞭ハ自身の矢束なり。かくのとくすへし。是則人馬の建立なりと示給ふなり。

一弓を作るに六材七木と云なり。又鞍を作るに六材七木と云なり。先六材と云ハ。木に二色あり。好の地の粉漆紋の金具是なり。又七木と云は。かしの木。ひいらき。つけの木。かひての木。桑の木。ゆの木。くすの木これなり。居木は此外たるへし。

一居木の事。何木にて作る共。ねむりの木。此木には火のなき木にて。殊にうれいをさる。よろこびをますと云名木也。さわくりの木。又ははせの木にても作るなり。

一鞍を作る事。弓の長を七にして。其一ツを以て。前輪の寸法に定るへきとなり。其和し様の事。先七の一方を三角にして。又六形にな

すへし。其に丸をかけて。山の形に作りなすへし。又弓長を六にして。その一ツを以て。後輪の寸法に定るなり。是も先六の其一を三角にして。又三角の上に三角をすれハ。六形になるなり。其に丸をかけて。大概山の形を作りなすへし。組切紐關間などハ。一双々々に繪圖に記する物なり。

一前後共に六形にして。圖の<sup>(マ、)</sup>とく丸をかけへし。扱小角を鰐口の廉に權合すへし。外の丸は則山のすかたに作りなすへし。但すかたは鞍の大小によるへし。又作者の器量に依て。形は替る事有へし。不苦一篇に定かたし。是も秘事也。

前輪の七双の權合<sup>(マ、)</sup>

一前輪の七双の事。双を取事。上よりつめ先に至るなり。先に三角を一双と云なり。是を鰐口の廉に權合する也。三寸三分か。又二双ハ

六分五厘。三双ハ三分五厘。四双ハ九分。五双ハ三分。六双二寸壹分八厘。七双ハ一寸三分。合て七双なり。是は前輪の權合なり。然とも此双は。大概成といへとも。金合の大事を可授爲也。鞍の大小依て替るへし。只作者の器量に依へし。

後輪の六双の事。

一後輪の六双の事。一双は小三角なり。是を鰐口の廉に權合すへし。三寸六分なり。二双ハ六分七厘。三双一寸一分三厘。四双四分。五双五分五厘。六双一寸四分五厘。合て六双也。是は後輪の權合なり。是も鞍の大小に依へし。

肉間の事。

一肉間と云は。前輪の鰐口の角より爪先へつるをかけて。二双にて一分程にすへし。去とも少劣へし。又二双にて二分と云とも一分

半計にもするなり。爪先迄なそろへて取へし。秘すへし。

一同後輪の肉間ハ。是も鰐口の廉より爪先へつるをかけて。一<sup>(二)</sup>双にて二分。三双にて五分たるへし。但如此してつめさきまでは。なそろへて取へき也。

一手形の作り様は。中の高しハ一双の權合なり。ふり分て一寸四分なり。是はすかた見能様に作るへし。一寸四分といへとも一寸四分五分迄も不苦。是ハ高しを中にして上下の事なり。

### 前輪の權合。

一前輪の組切様の事。二双肉間の一分に曲尺の横手の廉に合て。爪先の内廉に。曲尺の内の方をあて。扱二双の所にて墨を引て。扱て五分半にふかさの印墨をして。下五双の肉間の二分に。曲尺の廉を合。外の爪先に曲

尺の内の方を合て。五双にてのふかさは。五分或ハ五分半に。印の墨を付て。横立を定て切還へきなり。

一外の爪先ハ。六双にて權合して。すかたハ丸に隨ふて切るへし。但六双にてのはは。大概一寸二分なるか。鞍の大小に依へし。但外の爪より一文字にてのは。なり。

一三双ハ。振分中道といふなり。

一膚射の形の切様の事。肩にてのあつさは。一寸一分或ハ二分なり。但爪先にてハ。八分或ハ八分半也。鞍の内の方にてハ一分程すへし。外の方へハ内のすきたる分はらせて切るへし。雖然。少増たるも有へし。作者の心得たるへし。

### 同裏金の事。

一表金のなけハ三角の定なり。然共一分加るなり。是も子細有事なり。亦五双にてハ三分

加るなり。爪先にては五分半加るなり。但爪先は鞍の堅伏に依て口傳有。

一鰐口のふかさは一寸なり。すかたは山形のすかたに順して作るべきなり。内外同前なり。

後輪の權合。

一後輪の切組様の事。二双にてハ二双の肉間の二分に。曲尺の廉を合て。爪先へ曲尺を和合して。曲尺の横手に墨を引。扱ふかさ六分或ハ六分半にも付墨をして。扱四双にて四双の肉間の五分の墨に。曲尺の廉を合て。外の爪先に曲尺を合て。曲尺の横手に横手に墨を引て。ふかさ五分或ハ五分半印の墨を付て。横堅を定而切るべきなり。是曲尺の外の定なり。

一中道の振分ハ。三双にてなり。然共。二双にてハ横の双にて立様を定るなり。

一外の爪ハ。五双にて權合なり。但爪のすかたは丸を隨ふへし。外の爪際にてハ。廣さ一寸二分或は三分なり。鞍の大小に依へし。一鰐口の深さ一寸又ハ一寸一分までハ有へし。

外形の事。

一外のかた權合ハ。鰐口切組に至迄。内の形に順して權合なり。然共。肩は内の肩に。二分或ハ二分半せまくするなり。是は三角のなけなり。一双にて鰐口の廣さ三寸一分或は三分なり。切目は一文字なり。但如此すれば。切組の廣さハ。三寸七分或ハ三寸七分半なり。

一切組のふかさの事。二双にてハ二双の伏に順へし。四双の深さは。四双の伏に順すへし。

一表形の事。磯の廣さハ鰐口ニ山形の廣さ三

方一儀にすへし。陰陽の二義なり。但二双にてハ。二双の切組のふかさのはいなり。四双にては振合なり。然共。鞍の大小に依て。分中或ハ一分なとは増事も有へし。爪先にてハ五分なり。四双のふかさ同事なり。

一膚付の厚サハ。肩にて一寸三分或は一寸二分なり。鞍の大小に依へし。爪先にてハ八分或は八分半なり。長さは八寸五分八寸六分迄も有へし。但外の肩は曲尺を渡して。五分内の肩より五分増へし。爪先にてハ三分劣へし。同じをりの事。其長さ三折にして。爪先の方三の物一ツ分にて。いをりを付へし。いをりの深さ四分なり。此積りハ。爪先と肩の角に曲尺を渡して。其すき四分有を。四分の深さと云なり。又いおりも四分有へし。委細ハ圖にみへたり。扱外のなりは。肉のなりに隨ひて作るへし。

一裏金のなけハ。板にて作り合て用ゆへし。一双にてのなけは。三角の權合なり。四双にて一分或は八厘程も増へし。雉子股のいおりにてハ。二分の増なり。爪先にてハ三分程ますへし。然共。爪先ハ鞍の堅ふし大小にも寄るへし。口傳。

一鞍の前後の輪の深さ淺さにて。裏金の違事可有之。作者の心得へき事なり。

一鞍を作るに。左重右半と云事あり。口傳。

#### 由岐の權合の事。

一由岐の相形は。其長五形にして。五形の外に丸を懸て。其矢を見れば。深さ二寸六分余と成也。生得に是を居木のそりに用なり。厚ハ真中程にて。三分前へわの胡桃形にてハ五分程なり。後輪の胡桃にて四分或は四分半なり。胡桃形切様。前ハ六分。後は五分に權合してくるへし。大事の權合也。可秘々々。

一由木の長は。鞍の作様に依て。少の長短有へし。一樣に不可有。大概ハ一尺一分或は一尺五六厘の事也。

一同裏の事。前後の鰐口の廉の胡桃形の角にて。長さ九寸三分四分五分迄も。鞍に依て有へきなり。縦其長ハ長共短かく共。まゝ三におりて一ツ分前の方の力革の穴に權合して。後の方ハ穴の長さ一寸八分。又九分にてもする也。但下の方にてハ二寸一分。又は二寸二分にもするなり。由木の裏はハ。一寸七分八分九分迄もする也。力革の上のちりは七分なり。裏表同事也。但瀧口ハの横はハ四分なり。瀧口下角にては。二寸一分にも二分にもするなり。此切り様ハ後の方を一文字に少心得て切るへし。前の方にてすちかへて切るへし。委は繪圖に記物なり。

一由岐のかうのしし置の事。木口櫛形のなり

に隨ふへし。裏の方は瀧口の切目の後廉にて分。中前の切目の廉にて。二厘三厘の透たるへし。

一居木先の切様の事。鞍のなりに隨て五分たるへし。兩廉を丸く作るへし。前後共同事也。

(此條重出歟)

一由岐先の切様の事。鞍の成に隨て五分たるへし。兩廉を丸く作るへし。前後共に同事也。

### 櫛形權合の大事。

一前輪の櫛形の事。木口形共云なり。此權合は指渡し七寸五分の丸をして。其を五形にして。其一を用て權合すへし。長さ四寸四分或ハ三分なり。鞍の大小に依て長短有へし。但馬脊合ハ一寸八分九分迄もあるへき間。二寸迄も有へし。不定。下の肩を定木にすへし。下の方ハ五分或は五分半なり。切組以下



は本形仕合すへきなり。委ハ圖に見へき間。  
不及記なり。

一 後輪の櫛形の事。是も指渡し八寸の丸をして。其を五形になして。其一ツを用ゆへし。  
下の肩ハ六分也。すかたの事。山形の成に隨ふへし。前後共如斯由木を馬背合。其外しゝ置所を割り立て。馬背合の廉をハ丸く削るへし。下の厚は前にて七分。後にて六分半計にすへし。

前輪後輪の和する權合の事。

一 前後の輪を和する事。前後の輪を盤の上に立て乗間。兩爪之間を權合する事なり。後の輪の伏ハ。前輪に隨ふへし。但前輪の直高一双の肩迄。五寸六分有へし。其五寸六分の直高に隨ひて。後輪の一双の直高五寸六分に成程に伏せて。扱乗間を定るなり。先後輪の爪先に。曲尺を立て。山形にて五寸六分に

伏を定る。扱前輪の山形へ五寸六分に權合して。兩方合て一尺一寸二分なり。扱爪の間は。後輪の廣さの寸を取て。後輪の左の方より前輪の右の爪先へくらへて。扱後の右の爪先より前輪の左の方の爪先にくらへて定るなり。此權合無相違様に。由木を切入へきなり。但爪先のすちかひハ。後輪の廣さより一分半程劣たるか能也。中道の高さは三方同事成るかよし。是各十心貫中の權合なり。中道の一大事なり。可秘々々。

一 前輪を權合して後の輪を。一分二分三分迄伏過たるも有へし。是は生得下かんの馬にハ。第一追風にハ不可用。弓馬堪能の人は縦追風と云とも用ゆる事有。初心の人は斟酌たるへし。

居木を切る大事。

一 後輪の左を切始て。扱右を切るへし。

一後輪を切入時。前の方の由木の木口に。付墨をして由木のふりを見合て切入へし。左後の左右を切そろへて。前の方を切るは大事也。馬背合の權合して。豎様に板にて前輪ニ仕合て。墨を引て。又下の方を積る時。爪先より五分先に曲尺を立て。すみを引て。大概のせうこに切組へし。

一由木を切組時。は、一寸八分計成板を。二枚三角に。鞍の如輪の拵て。後のわを切組て。前の方を切る時。前輪を立て切組に能合て。切組の兩方の廉のせうこの墨を引て。扱切入てほそを付る時。其墨をせうこにして切るなり。加様の事も。我等數年御傳授の外に。鍛鍊にて如斯なり。又一には前輪の寸尺にて。むくの木にて前輪のことく拵て。由木を後輪に切入て。少もはたらかざる候て。今のほんに由木の入程。穴をあけてさわらん

様に。由木を入て。扱墨にてをけ引しても置て。其をせうこに切合せても能なり。何も鞍を作る事は。書面にて中々成かたく可有之なり。

一弓馬堪能の人は。鞍の權合不知してハ。成就しかたし。穴賢。可秘々々。

一天子將軍家の御鞍作る法の事。惡日風雨を除。精進潔齋にて朝服を着して作るなり。木は七木と云へとも。櫟木。□木。黃楊。桑。楠。五木にて。等跡に作りて上た。分をしるし上るものなり。

一御傳授の權合にて作したる鞍ハ。恐も惡方江乗向ひたりとも。万災を除へし。たとへ敵陣へ乗向ひたりとも。悉に可得勝利と示給ふ事なり。

一鐙の事。一やうの船をまなひ。又沓のたくひなり。三角の權合中道の金なり。委ハ余に記

置物也。大方は繪圖にみへたり。

右夢相之一卷。依御詫儀書之記。備君覽所也者。其老申候而。文字之誤。言葉之不足に能樣故詠續。宜令洩給候。頓首再拜謹言。

大坪右京入道々禪

直弟判

永享九年正月十五日

謹上 伊勢守殿

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

# 鞍鐙寸法記

鞍寸法事。

前輪

一爪之長六寸五分六分。或八分。鏝口之同之角より爪之内崎の角に至也。

一馬交一尺五分。或七分八分。

一前後之爪間四寸四分。爪之内角也。

一手形之中之高の通より。横樣之金之透一分半。

一伏程九分。

一爪之外角より横金之透程一分。

後輪

一爪之長。鏝口之内角より爪之内之角に至て八寸五分。

一馬交一尺二寸三分。或四分五分。

一乘間一尺一寸一分。或二分爪之上角より横金之透三分。

直弟。

一鞍大形にて山形たかく。ふるきはひきくも  
あるへし。

一折め。常より折過したるやうなり。

判形なし。

一鞍ふかくあつく候。

一前輪後輪のいそのなか。少かとあるやうに  
候。但いそのかたのあたりの事也。

一海も常よりふかし。前後同前。

一由岐の裏にてうの目あり。なきも有へし。

貞長。

一直弟くらの心にして。少小頭なり。折目すく  
なり。鞍少うつくしく候。但爪などの肉置  
ハ。直弟同前なり。

一由岐さきの角まろし。

一切目の穴。直弟より細し。

貞直。

一貞長の鞍に似たり。乍去違ふ心はくらあつ

く。うみふかし。少大形なる心あり。判形な  
し。

貞仲。

一判形なし。少鞍ふかく折目おれ過したる心  
有り。貞直鞍より少うすくとなり。

貞誠。

一判あり。鞍うすく折目うつくしくたをやか  
なり。前後の輪。きりぐみにも判有。由岐の  
ふくらの方かとなし。

貞泰

一貞誠くらより少あつく大形なる心有。判あ  
り。由岐さきかと有やうに候。

貞信

一貞泰に似たり。伏過たる心有。爪の肉置。由  
岐崎し、有。判あり。

目付所。

折目。由岐先。爪のし。爪間。鰐口。いその

なり。手形。をい付。

鑑之寸法事。

(長)

貞良

一カ、ミ五寸七分。

一モン所アツサ貳分或三分。

一ヤナイハアツサ貳分或二分半。

一ヤナイハ廣サ七分。

一舌サキヨリクツフミノカタヘ一寸二分サシ  
(脱アラン)

テ。ソレヨリ横ヘ三寸五分廣サ也。ヤナイハ  
ノ内角ヨリ取也。

一一文字ノ所。シタヒロカリ也。

一エミノナリ角ナクシテ圓シ。但上ノ方シ、

ハ細クテマロシ。

右何モヌリニヨリ。少ハチカヒアルヘシ。

貞直

一カ、ミ五寸六分。

一モン所アツサ二分或一分半。

一ヤナイハ廣サ七分半。

一ヤナイハアツサ二分或三分。

一舌サキ一寸二分サシテ。ソレヨリヨコノ廣

サ三寸五分半也。ヤナイハ内カト也。

一一文字ノ所一分ヒロ也。

一エミ角ナクシテ圓シ。

右何モヌリニテ。少ハ違候ナリ。

貞仲

一カ、ミ五寸五分半。

一紋所アツサ三分。

一ヤナイハノアツサ二分半。

一ヤナイハノ廣サ七分。

一舌サキヨリ一寸二分置テ。ソレヨリ横ノ廣

サ三寸五分半。

一一文字下廣也。

右何モヌリニテ。少ハ違有ヘシ。

貞誠

一カ、ミ五寸五分。

一紋所アツサ三分。

一ヤナイハアツサ二分。

一ヤナイハ廣サ七分半。

一舌サキ一寸二分サシテ。ソレヨリ横二寸五分半。

一一文字下廣カリ也。

一エミノナリ。角ナクシテ上ノ方細クマロシ。

右何モスリニテ。少ハ違有ヘシ。

貞泰

一カ、ミ五寸八分。

一紋所アツサ二分半。

一柳ハアツサ二分半。

一同廣サ七分半。

一舌サキ一寸二分置テ。横ヘ三寸五分也。

一一文字ノ所下廣カリ也。

一エミノナリ。角ナクシテマロシ。上ノ方へ細

ク下ヘマロシ。

右ヌリニテ少違候也。

貞信

一カ、ミ五寸五分半。

一紋所アツサ二分。

一柳ハアツサ二分少ツヨシ。

一同ヒロサ七分。

一舌サキ一寸二分置テ。横ヘ三寸五分半。

一一文字下廣也。

一エミノナリ。上ノ方細クマロシ。

右ヌリニテ少違有ヘシ。

貞常

一カ、ミ五寸六分七分。

一紋所アツサ二分或三分。

一柳ハアツサ二分。或二分半。

一同廣サ七分。

一舌サキ一寸二分置テ。横三寸五分。ヤナイハ



ノ内角コリ取。

一文字ノ所。下廣キ也。

一エノナリ。上ノ方へ細ク。下へフカクマロ

キ心ナリ。

右何モヌリニテ。少ハ違有ヘシ。

無判形

直弟

第七郎左衛門  
一 加賀守  
貞直

二 七郎二郎  
貞仲  
四 幡守左京亮

三 七郎二郎  
貞誠  
四 幡守左京亮

四 左京亮  
貞泰

五 左京亮  
貞倍

無判形  
因幡守  
貞長

同

同

同

同

西 西 西 西 西

西 西 西 西 西

六 因幡守  
貞常

駿河守  
貞雅

加賀守  
貞助

同上野  
貞弘

同上野

同名左衛門尉  
貞

同名左衛門尉

左衛門 次男也  
貞則

貞誠弟子  
宮備中守

貞泰弟子  
千秋駿河守

西 西 西 西 西

同 同

西 西

同 同

貞知

同

同名上野

同名六郎左衛門  
貞順

同名二郎八道  
宗悅  
貞茂

同名左衛門尉

同

西 西 西 西 西

西 西 西 西 西

貞倍弟子  
大和五郎

猶葉左京亮  
貞倍弟子

沼田上野  
光延

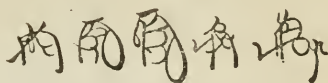
延子  
光策

關藤倉介

直



正作也  
鞍有



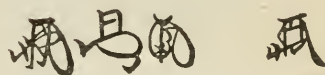
同弟子  
同名左京亮

同

沼田勘解由左

衛門  
元清

諏方神兵衛尉  
長俊



一



三

燕

五

燕



二

燕

四

燕

六



無判形  
直弟

無判形  
貞長

左京亮  
因幡守  
貞泰

左京亮  
因幡守  
貞倍

千秋

河守  
貞泰  
弟子



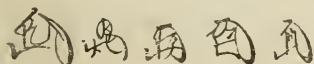
七郎次郎  
因幡守  
左京亮

七郎次郎  
因幡守  
左京亮

七郎左衛門  
加賀守  
貞直

因幡守  
貞常

駿河守  
貞雅



大和五郎  
貞倍

同名左京亮  
貞倍

沼田上野  
光延

沼田上野  
光延

沼田上野  
光延

沼田上野  
光兼

沼田勘解由左  
衛門

元清

羽田四兵衛

野村金仙寺

貞宗

後ノ

貞陸

同名次郎入道

宗悦

宮備中守  
貞誠

猶葉左京亮  
貞倍

同名上野  
貞張

同名上野

同名上野

同名上野

同名左衛門尉  
治眞

同名六郎左衛門  
左京

貞頂

同名左衛門尉

近年之判也

貞陸

同名五郎次男也

左衛門

貞則

同名左衛門尉  
始直

貞孝

同名貞忠

關藤金介

伊勢守  
貞孝

駿河守作鞍之見様之事。

上之鞍ノ分。

一前輪後輪切組之内に判形有之。

一右之由岐に判形有之。

一左由岐に。燕。おもたか有之。

一由岐うらに①如此印有。但かなやき也。

一さちも①如此印有之。かなやき也。但上之

方の切組の方へよるなり。

上之中之鞍之分。

一前輪後輪切組之内。判形有之。

一右之由岐に判形有之。

一左之由岐に。燕わらひ有之。

一由岐のうらに①如此印有之。但かなやきな

馬馬馬馬馬

馬馬馬馬馬

馬馬馬馬馬

馬馬馬馬馬

馬馬馬馬馬

り。

一きちもゝに。⑩如此印有之。かなやき。但右之分切組の方へよるなり。

中之鞍。

一前輪後輪切組之内。判形有之。

一右之由岐に判有。

一右之由岐に。燕かも有。

中之下鞍。

一前輪後輪切組之内。判形有。

一右之由岐に判形有之。

一左之由岐に燕梅有之。

下之鞍。

一前輪後輪切組之内。判形有之。

一右之由岐に判有。

一左之由岐に燕ごんはう有。

下之下鞍。

一前輪後輪切組之内。判形有之。

一右之由岐に判形有之。

一左由岐に燕松有之。

此壹卷。任請紙之旨書進候。口傳之儀面之時可申者也。

元和三年八月十六日 因幡入道

常安花押

兵部少輔殿參

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

# 樞要集

御當家御代々之次第。

等持院殿仁山大居士。

尊氏。延文三年戊戌四月晦日。五十四歲

薨。御法名少義。

寶篋院殿瑞山大居士。

義詮。貞治六年丁未十二月七日。三十八歲

薨。御法名道懂。

鹿苑院殿准三后相國天山大禪定門。

義滿。應永十五年戊子五月六日。五十一歲

薨。法名道義。寶篋院殿之御□

勝定院殿贈大相國一品顯山大禪定門。

義持。應永三十五年戊戌正月十八日。四十

三歲薨。法名道詮。

長得院殿贈大相國羽林鞏山大居士。

義量。應永三十二年乙巳十二月二十七日。

十九歲薨。法名道基。勝定院殿之御子。

普廣院殿贈大相國一品善山大居士。

義教。嘉吉元年辛酉六月二十四日。四十八

歲薨。法名道惠。鹿苑院殿之御子。

慶雲院殿准三宮贈大相國榮山大居士。

義勝。嘉吉三年癸亥七月二十一日。十歲

薨。法名道春。普廣院殿之御子。

慈昭院殿准三宮贈大相國喜山大禪定門。

義政。延德二年庚戌正月七日。五十六歲

薨。法名道慶。普廣院殿之御子。號東山殿。

常德院殿贈大相國一品悅山大居士。

義尚。長享三年己酉三月二十六日。二十五

歲薨。法名道治。慈昭院殿之御子。

大智院殿准三宮贈大相國久山大禪定門。

義視。延德三年辛亥正月七日。五十三歲

薨。法名道存。普廣院殿之御□

惠林院殿贈大相國一品巖山大居士。

義材。義尹。義植。大永三年癸未四月九日。

五十八歲薨。法名道舜。大智院殿之御子。

法住院殿贈大相國一品旭山大居士。

義澄。義高。永正八年辛未八月十四日。三

十一歲薨。法名義尚。慈昭院殿之御子。

萬松院殿贈大相國一品曄山大居士。

義晴。天文十九年庚戌五月四日。四十歲

薨。法名道照。法住院殿之御子。

光源院殿贈大相國一品融山大居士。

義輝。永祿八年乙丑五月十九日。三十歲

薨。法名道圓。萬松院殿之御子。

靈陽院殿准三宮呂山大禪定門。

義昭。慶長二年丁酉八月二十八日巳刻。六

十一歲薨。法名道桂。萬松院殿之御子。

伊勢守因幡守兩家系圖。

尊氏公從鎌倉御上洛之御時。伊勢守貞繼御供仕。以來代々之次第。

貞繼。 貞信。 貞行。 貞經。

貞知。 貞國。 貞親。 貞宗。

貞陸。 貞忠。 貞孝。 貞良。

貞爲。

正作鞍鐙之元祖。

嘉慶。康應。明德。應永年中。

直弟。

上總國住人大坪孫三郎左京。法名寶照院源宗道禪居士。籠鹿嶋之廟。以神託授御衛鞍鐙之要工御謂鹿嶋流。作謂神作。後諱神號。謂御爲大坪流。謂作爲正作。餘詳見緣起。

鞍鐙要工道禪。承

鹿苑院殿上意。伊勢七郎勘解由左衛門因幡守貞長相傳之。自是因幡守家以嫡子一人可爲正作之旨。從

義滿公上意。於今子孫謹守之。雖然。同名駿河守貞雅一人者。有故而作之內被召加之處。



無續子。一代而斷絕畢。道禪應永十六年十月十七日。七十六歲卒。

第一。

應永。正長。永享年中。

貞長。貞信二男。

伊勢七郎勘解由左衛門因幡守。世俗是謂因幡。法名貞松院意月照心。應永三十年四月十二日。六十二歲卒。

鹿苑院殿義滿公。

勝定院殿義持公。

右之御代御奉公。

第二。

永享。嘉吉。文安年中。

貞直。

伊勢七郎左衛門尉加賀守因幡守。法名松樹心。寶德二年六月七日。六十三歲卒。

長得院殿義量公。

普廣院殿義教公。

慶雲院殿義勝公。

右之御代御奉公。

第三。

文安。寶德。享德。康正。長祿。寬正。文正。

應仁。文明年中。

貞仲。

伊勢七郎次郎。左京亮。因幡守。法名清光院淨巖相郭。文明十五年三月十七日。五十二歲卒。右三代無判形。但直仲之作。間判形有之。

慈照院殿義政公。

常德院殿義尚公。

右之御代御奉公。

第四

應仁。文明。長享。延德年中。

貞誠。

伊勢七郎次郎。左京亮。因幡守。法名證雲院

樹宗誠學。明應三年八月三日。四十三歲卒。

常德院殿義尙公。

大智院殿義視公。

惠林院殿義植公。

右之御代御奉公。

第五。

延德。明應。文龜。永正年中。

貞泰。

伊勢左京亮。因幡守。法名泰葉院法蓮照順。

永正十六年八月八日。五十二歲卒。

惠林院殿義植公。

法住院殿義隆公。

右之御代御奉公。

第六。

永正。大永。享祿。天文。弘治。永祿年中。

貞倍。

伊勢左京亮。因幡守。法名瑞光院倍想心榮。

元龜三年六月二十日。七十二歲卒。

萬松院殿義晴公。

光源院殿義輝公。

靈陽院殿義昭公。

右之御代御奉公。

第七

元龜。天正。文祿。慶長。元和。寬永年中。

貞常。

伊勢與十郎傳五。因幡守。法名玉照院桑樹常

安居士。寬永四年十二月九日。七十七歲卒。

靈陽院殿義昭公江御奉公。元龜三年七月十

八日。義昭公爲信長公眞木嶋御沒落之時。御

暇被下也。其後家康公慶長十一年御上洛之

砌。九月五日於伏見御城。初而御禮申上。同

十三年七月十二日。於武州江戸御城台德院

殿秀忠公江初而御禮申上刻。爲上意御代々

御物之御鞍十三口拜見仕處。貞誠正作年號

文明十二年十月十六日卜有之御鞍。貞倍正作海有年號。天文十三年八月日卜有之御鞍。餘非正作由申上。御鎧數多雖致拜見。正作無之也。其以後御上洛之度々。秀忠公。家光公江御目見申上也。

第八。

元和。寛永。正保。

貞重。

伊勢傳左衛門。因幡守。元和九年六月十九日。秀忠公御上洛之砌。於洛陽二條御城御禮申上。同年七月二十三日。家光公江者。於伏見御城初而御禮申上。其後御上洛之每度又於武州江戸御城度々御禮申上。法名淨泉院道徹常榮居士。寛文五年乙巳十月二日卒。

貞重嫡子。

貞之。

伊勢勝右衛門尉。寛永十一年。征夷大將軍家

光公御上洛之砌。於洛陽二條御城始而御禮申上。卽以海無御鞍献之。寛永十一年五月日卜書付有之。同十五年正月二十日。三十三歲卒。存命之内。鞍三口。鎧二具作之内。一口者右之御鞍也。一口者細川越中守殿。一口者同肥後守殿。此鞍寛永十二年三月日卜註之。鎧一具者片笑。服部玄蕃殿。一具者紋燕常笑細川肥後守殿。此餘無之。

第九。

正保。慶安。承應。明曆。萬治。

貞景。

伊勢傳左衛門。因幡守。法名自樂軒眞觀常長居士。延寶四年丙辰八月十日卒。

第十。

明曆。萬治。寛文。延寶。天和。貞享。元祿。寶永。正德。

貞房。

伊勢隼人。因幡守。法名信立院然譽常貞居士。正德五年乙未九月二十日卒。

第十一。

元祿。寶永。正德。享保。

貞俊。

伊勢勝右衛門。因幡守。法名源壽院量譽常然居士。享保十七年壬子五月廿五日卒。

第十二。

享保。元文。寬保。延享。寬延。寶曆。

貞誠。

伊勢勘右衛門。因幡守。法名涼雲院善譽休保居士。寶曆五年乙亥六月晦日卒。

第十三。

寶曆。安永。

貞方。

伊勢與市。因幡。法名心覺院傳教信士。安永三年甲午十二月二十七日卒。

御城坊主岡田秀三有僞。以女子爲嫡男之罪。公聽糺其罪下獄焉。貞方嘗密通于秀三之女。其女奔來。貞方爲妻之。今因其事貞方亦下獄。罪名未定。病死于獄中。故此家斷絕了。于時安永三年甲午十二月廿七日也。

天明元年辛丑五月四日 伊勢平藏貞丈記。  
應永。正長。永享。嘉吉。文安。寶德。享德。  
康正。長祿。寬正。文正年中。

貞雅。

伊勢駿河守貞長四男也。正作鞍鐙製工。因幡守一代一人宛正作被相定。然所。貞長次貞直勤之。駿河守者雖爲末子。鞍鐙之形肉間替而珍作。于時普廣院殿爲上意。駿河守家又一流正作御定在處。駿河守無續子一代斷絕。但應永正長永享年中之鞍鐙之形。因幡守家之作無相違也。法名靈光院幽宗昭安居士。文明三年五月十七日。七十八歲卒。

長得院殿義量公。

普光院殿義教公。

慶雲院殿義勝公。

慈昭院殿義政公。ハ

右之御代御奉公。

印切組下三分前輪右方後輪左方

由岐左右ニ有之也。切目ヨリ三

分後無判形ニハ。印判形ノ所ニ

有之。

前輪ハ右ニ判。左ニ年號ト燒印有之。

後輪ハ左判。右年號ト燒印有之。

伊勢守號金仙寺。文明比。

貞宗。

伊勢守。

貞陸

白細工之鞍者。大槩吉間。惡ハ被管之細工也。

伊勢守。

貞忠。同理。

伊勢守。

貞孝

被管之細工ニ依令加判。鞍惡也。

同名中之次第。

伊勢上野介。

貞宣

此仁。細工能鞍。小形ニ象吉。

伊勢上野介。

貞弘。

伊勢左右衛門尉初與一。

伊勢六郎左衛門尉。

貞順。

伊勢左衛門尉。明應比。

貞則。

伊勢次郎入道宗悅。

貞茂。

伊勢五郎左衛門尉。貞則次男。

弟子之次第。

誠弟子。

宮備中守。

右同弟子。

沼田上野介

光延。

泰弟子

沼田上野介。光延續子。

光兼。

右同弟子。

千秋駿河守

高季。

泰弟子

杉原美作守

豐平。鞍惡。

倍弟子。

大和五郎。中務少輔。宗幻

行俊。鞍吉。

伊勢左京亮。

右同弟子。

宗久。鞍惡。

沼田勘解由左衛門尉 道安。

元清。

父光兼指南計ニテ不計家傳故鞍大惡也。

鎧ニハ少家之形氣有也。

常弟子。

人見良次。

良次寛永十一年以後有子細。家之弟。取

上非弟子也。

右同弟子。

竹田勝兵衛尉

常重。

重弟子。

山内半左衛門尉 早世。

重武。

右同弟子



安田勘兵衛尉

俊勝。

代々之見分見付所。

一磯之形。海之深。鰐口。手形。爪之肉。折目。由岐先。ヲイ付。フクラ。

前輪寸法。

一爪之長六寸八分或ハ七分。但鰐口之内角ヨリ爪之内ノ崎ノ角ニ至ル也。

一馬夾一尺七分或ハ八分也。

一前後之爪ノ間。四寸五分或六分也。

一手形之中高ミヨリ横曲尺之透一分半或一分也。

一伏程九分或一寸。

一爪之上角之内ヨリ横曲尺ノ透一分。

後輪寸法。

一爪之長鰐口ノ内角ヨリ爪之内角ニ至而八寸四分五分。

一馬夾一尺二寸四分五分。

一切組之下角之透。横曲尺渡四分四分半。

一乘間一尺一寸一分或一分半。

一爪之上角之内ヨリ横曲尺之透二分或一分半。

以上。

直弟。

一鞍大形ニテ山形高シ。古ハ卑クモ可有。

一折目常ヨリ深。

一鞍深ク厚シ。

一前後共ニ磯之象少角有。

一海常ヨリ深。

一由岐之裏ニ釘目有。無キモ有ヘシ。

貞長。

一直弟之鞍同前ニテ少小形也。

一折目淺シ。鞍少ヒナヤカ也。

一爪之肉置。直弟同前也。

一由岐先之角丸。

一切目之穴。直弟ヨリ細シ。

貞直。

一貞長之鞍ニ似リ。少厚ク海深シ。少大形也。

貞仲

一貞直鞍ヨリ少薄。鞍深。折目モ深也。

貞誠

一鞍薄淺折目美クタヲヤカ也。

一由岐之ツクラ之角無。

貞泰

一貞誠之鞍ヨリ少厚大形ニシテ。由岐先ニ角有也。

貞倍(信イ)

一貞泰ニ似タリ。少伏過ル也。

一爪ニ肉有。由岐先同前也。

貞常

一貞倍之鞍ニ似タリ。大休ヒナヤカニ。由岐先

之角ニ勢有。但慶長中比ヨリ前之鞍ハ。由岐先丸シ。其時分之後輪之鰐口チイサシ。前輪同前。又海有ハ磯之象ヒナヤカ也。

貞重

代々鑑寸法。

直弟

一鑑大形ニ鉸具柳葉常ヨリ厚シ。鷹頭大キ也。

笑無モ有。

貞長

一屈五寸七分。

一紋所之厚二分或三分。

一柳葉厚二分或二分半。

一柳葉廣七分。

一舌先ヨリ踏込之方ヘ一寸二分サシテ。其ヨ

リ横ニ三寸五分之廣サ也。柳葉之内角ヲ取也。

一一文字下廣也。

一笑角無クシテ丸シ。上之方ノ肉ハ細ク丸シ。

貞直

一屈五寸六分。

一紋所厚二分或一分半。<sup>(二)</sup>

一柳葉之厚二分或三分。

一同廣七分半。

一舌先之取樣右同前。但三寸五分半。

一一文字。右同前。

一笑之象。右同前。

貞仲

一屈五寸五分半。

一紋所厚三分。

一柳葉之厚二分半。

一同廣七分。

一舌先之寸ノ取樣。右同前。但三寸五分半。

一一文字。右同前。

一笑。右同前。

貞誠。

一屈五寸五分。

一紋所之厚三分。

一柳葉之厚二分。同廣七分半。

一舌先寸ノ取樣。右同前。但三寸五分半。

一一文字。笑之象。右同前。

貞泰。

一屈五寸八分。

一紋所厚三分半。<sup>(二)</sup>

一柳葉厚二分半。同廣七分半。

一舌先寸ノ取樣。右同前。

一一文字。笑之象。右同前。但下丸シ。

貞倍

一屈五寸五分半。

一紋所厚二分。

一柳葉厚二分。少強シ。同廣七分。

一舌先寸之取樣。右同前。

一一文字。右同前。

一笑上之方細丸シ。

貞常。

一屈五寸七分。

一紋所厚二分強。

一柳葉厚二分。同廣七分。

一舌先寸之取樣。右同前。但三寸五分。

一一文字。右同前。

一笑上へ細ク丸シ。下へフトク丸シ。塗ニヨリ

テ違多キ也。

小鞍前寸法。

一爪之長六寸三分。

一馬夾九寸六分或五分。

一前後ノ爪ノ間四寸或二分。

一橫曲尺之透一分餘。

一伏程七分或八分。

一爪之橫分半。(脱アラン)

一由岐間一寸六分。

一ヲイ付二分半。

一ヲイ付前後之透分半。

一乘間一尺二分或三分。

同後寸法。

一爪之長七寸七分。

一馬夾一尺一寸五分或三分。

一橫曲尺透二分。

一爪之透一分。

小鐙之寸法。

一屈五寸二分。

一柳葉廣五分。同厚二分。

一鉸具厚二分少弱。

一母衣付七分或六分半。

一母衣付下分半。(脱アラン)

小形成小鐙寸法。

一屈五寸。

一柳葉厚二分ニ少弱。同廣五分ニ少弱也。

一鉸具厚五分。

一母衣付六分半。

一母衣付下分半。(脱アラン)

貞雅

一鞍大形ニ深。雉子股厚。折目深シ。切組リウ

コ象ニ切ル。

一由岐廣。フクラ直クニライツキ際少クル。因

幡守家之由岐トハ。大ニ替ス子タリ。由岐先

ニ少角有之。切目ノ切樣替也。

一貞直ニ鞍之秘密不被渡以前之鞍。貞長作ニ

似タリ。大坪入道道禪作鞍具合。

一爪ノ長六寸六分或六寸五分。鰐口ノ内ノ角

ヨリ爪ノ内ノ崎ノ角ニ至也。

一馬夾一尺九分爪ノ内角ヨリ可取也。今時節

ハ一尺五分用之。

一前後ノ爪間四寸四分。

一手形ノ中ノ高ノ通ヨリ橫樣ノ念透程一分半或一分。

一伏程一寸二分或一寸三分

一爪ノ外角ヨリ橫金ノ透程一分。

一鞍高二寸四分或二寸五分。

一鰐口内二寸六分。外二寸九分。

一中墨ヨリ爪長八寸三分半。

後輪分寸法。

一馬夾一尺二寸四分。今ハ一尺二寸三分。

一爪ノ長。鰐口ノ内角ヨリ爪ノ内角至八寸五

分。

一爪ノ長。中墨ヨリ一尺二分。

一鰐口内二寸七分。外三寸。

一鞍高二寸五分。或二寸六分。

一鰐口之上。橫樣ノ金ノ透二分半或二分。

一切組ノ下角ノ透橫樣金ヲ渡テ四分或五分。

一乘間一尺一寸一分或一尺九分。

一由岐之長廣不定也。

寛正四年十一月十九日 沙彌照安在判。

右駿河守以自筆自判寫之畢。

鑑寸法。

一屈五寸六分。

一小形ニ舌先之方短ク見ル。

一絞見之象有口傳。

一鷹頭常ヨリ丸キ心有。

一柳葉鉸具ノ厚一文字ノ象如常。

一ウチ置ヨリ舌先ヘノ肉。常ヨリ多シ。

一珍敷紋共多シ。但鑑之秘事不被渡以前。貞長

作不異也。

高澤。

一直弟貞長貞直三代ノ由岐懸タル者也。此者

鞍薄小形ニ。鞍深ク折目モ深シ。由岐常ヨリ

短ソル。裏ニ鉸目有。無判。△如此之驗有。又

裏ニ鉸目無モ有之。海有海淺仕付之穴。横ニ

有。如常成モ可有也。□□○。

駿河守弟子。

倉内。

公方之御同朋。

太阿彌

野村。

右三人之者能貞雅作ヲ似セ。判形驗迄似  
ル鞍多シ。少成共駿河作ニ不審有之。似セ物  
也。依是世ニ駿河之判驗有鞍多。能可見分者  
也。右之外羽田ト云大工。駿河ノ形氣ヲ打鞍  
有之。是モ常之鞍ヨリハ吉。右三人之鞍細工  
ニテモ無。又常ヨリハ能キト見ハ。羽田細工  
ト可知也。

開藤内藏助。

伊勢守  
被官也。

貞孝加判鞍ハ多分此者細工也。鞍惡。

鞍之寸法前。

一コクチ一寸一分。



一眞中一寸一分半。

同後之寸法。

一コクチ一寸一分少強。

一前後共ニ穴之内八分半或八分廻。

同金具之寸法。

一外之エヤウ之高ミヨリコクチ迄七分。

一同右同所六分前後共同。

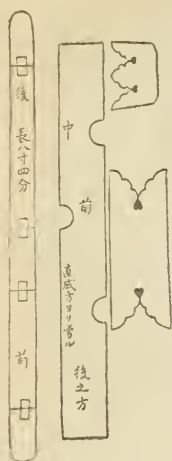
取付金具之寸法。

一長四分。穴八分廻。

同緒之寸法。

一緒之長一尺三寸七分。又四寸五分モ可ナリ。

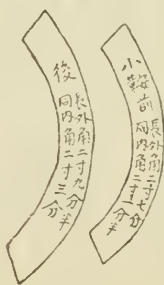
同房之長三寸。



一ノクツ金具寸法。端之金具脇長一寸六分。中之金具脇長二寸七分。

小鞍鞍之寸法。

一内ノス七分半。外コクチニテ一寸分半眞中ニテ一寸一分。



鞍鐙對之式法。

一海有ニ常ノ笑。海無ニ片笑。摠海ニ笑無。淺海ニ三ツ峯。

片笑之事。

一古ヨリ笑有ル方ヲ外ニ用來ル。雖然。笑有ハ常之義ナリ。笑無ヲ賞翫ニ於テハ。笑無方ヲ外ニ用理強シ。依是。當代ハ笑無方ヲ用テ。外ニ作之也。

鞍鐙可作覺悟。

一鞍ヲ作スルニ。木地股之肉。或馬夾由岐裏之取樣定法ニ。毫釐不可違。外之恰合ハ古今ノ鞍ヲ及見。分別之上ニテ心々ニ作スヘシ。其上古ヨリ鞍之象不定者也。

一鐙ヲ作スルニ。惣之屈之内ノ象ハ。定法ニ毛頭不可違。肩ノ象笑之トノ。鉸具ノ象舌先ノ象ハ右鞍同前。

切付之事。

一象ハ形ヲ切り。此書ニ添置也。

一式正ハ葛蘿切付白漆也。

一馬氈同葛蘿也。

一切付之表ノクツノ上ハツレヨリ横ニ。家々

ノ紋ヲ漆ニテ。黑畫事モ有。又惣ニ唐草ヲ畫。其ツルニ葛之葉ヲ七計チラシ畫事モ有。又無紋ノ事モ有。何レモ仕様右之切付之形ニ具ニ書付也。

一力革。是モ白漆。式正ニハ鉸具摺ナシ。

手綱腹帶之寸法。

一七尺五寸ハ手綱之長。

一八尺ハ腹帶之長。但常之手綱腹帶ハ。吳服ノ尺定ル。軍陣手綱腹帶ハ。曲尺之尺之定也。

一染樣ハ。手綱之端一尺ハ。何ニテモ地色ニ染メ。其ヨリ筋ノハ、曲尺ニテ一寸計ナルヲ。五筋五所ニ段々ニ染也。

押懸之寸法。

一一尺ハカウカケ前後ヘ分タル分。

一上之組違之下タハツレ先之房迄。一方之長

一尺五寸七分。

一三尺四寸五分小紐之長。

一 三寸四分ハ同房之長。

大房之寸法。

一 七尺八寸五分ハ。胸懸之長也。但小鞍ノハ六尺八寸也。

一 房之付様之事。ワナ之端ヨリ二尺七寸置下リノ總ヲ付。總ノ間三尺之分皆付也。但小鞍ノハ右同所二尺三寸置總付分二尺七寸之間也。其餘ハ何モ先キノ總計也。

一 五尺八寸五分ハ。鞞一方之長也。但小鞍ノハ五尺二寸計ニテ能也。内一尺四寸三分ハ。組違ヨリ尾夾ミ之分也。小鞍ノハ右同所一尺二寸五分也。

總之付様之事。尾夾之先ヨリ五寸置テ一尺六寸五分之分。三トリノ總付也。其餘ハ如常先ノ總計也。但小鞍ノハ同所四寸置而。房ノ分一尺五寸之間ニ皆付也。但何モ一方ノ寸也。

一 一尺四寸三分ハ。下リノ房ノ長也。

一 如常先ノ房ノ長ハ七寸也。胸懸鞍何モ同前。一 胸懸鞞共ニウネ敷七ツ。内三ハ太ク。四ツハ細シ。

一 色ハ紫。是ハ公方之儀也。餘ハ紅也。但法師ハ淺黄ニテモ紺ニテモ。或白ニテモ可用也。

手繩之寸法。

一 二丈ハ曲尺之尺也。式正之手繩ハ。曝之布ヲ四ツニ割。三ツクリニナイアハスル也。但太キ細ニ可依。三クリニ合スレハ。一尺之内ニテ三寸五分宛縮物也。然レハ二丈ニテハ七尺餘ケイヲ可截。私ニテ常ノ手繩モ右之寸ニテ可然歟。但是ハ無定法間。能程ニ可然也。又常之手繩如右拵而。二ツハ白。一ツハ紺ニシテ合スル。式正之時モ依事。此模様可然。長短ハ依馬可其沙汰也。

鼻革之緒寸法。

一丈八尺ニテ大形能比成物也。是モ式正之時ハ。如右サラシヲ五ツ割ニシテ。三ツ合セテ能也。是ハ淺黄ニソメテ可然歟。先年薩摩守殿江御成之時。被頼相調作ハ淺黄ニ染調進ス。是無定法由也。

又右ニシルス如手繩二ツハ白。一ツハ紺ニテモ可然也。

馬絹之寸法。

一四尺ハ長。

一五尺四寸ハ惣ノハ。

一一尺四寸ハ尾ニ懸ル分ノ廣サ。

一一尺九寸ハ尾ニ懸ル分ノ長サ。

一二寸二分ハ乳之長。一寸二分ハ乳ノ廣。

一二寸ハ。エリノ廣。

一六尺六寸ハ腹帶之長。但二ハ、真中ハ縫。兩端ハ不縫。兩所馬背ニテ結フ也。右裸馬ニ吉。

鞍置馬絹之寸法。

一五尺ハ長。

一五尺七寸ハ廣。

一七尺一寸ハ腹帶。如右<sup>(二イ)</sup>ニハ也。

一二寸四分ハエリノヲリ返シ。但乳ヲ不付。紐ヲ含而縫也。

一一尺九寸ハ尾ニ懸分長。

一一尺四寸ハ右同尾ニ懸ル分ノ廣サ也。是モ無定法也。

以上。

此一卷者。代々秘訣口傳之外。自古註置也。此餘家傳之書籍雖有數多。經累世之逆亂。畧泯滅畢。然而貞直被註置家之緣起。并貞雅自筆自判之鞍鐙具合與善御譜之三冊。猶幸存于今。如此書并三冊者。代々以嫡子一人相傳來。是故自祖父貞倍以是傳之於亡父貞常。貞常以是傳

之於余。余以是傳之嫡子貞景。守此先規。  
子孫撰其器。嫡子一人之外不可堅傳也。  
妄漏洩而勿背先祖家傳之本意也。

續群書類從卷第六百八十

武家部二十六

齋藤流手綱之秘書

一馬を乘に。第一の口傳。力革の尺をしるへし。笠懸と常の時ハ六寸也。犬追物と具足きてハ四寸也。人はれの時ハ八寸也。條々可有口傳。

一鞍のをきやうの事。可有口傳。

一腹帶のしめほととの事。可有口傳。

一馬の相形を見て乗るへき事。口傳云。くひし、あつくかゝりふへの手のそりたる馬の人ひかすと云事なし。但馬による事も可有

之。猶可有口傳。

一手綱のとりやうの事。可有口傳。

一鞍のしきやうの事。可有口傳。

一鐙のふみやうの事。可有口傳。

一馬をゝる事。可有口傳。

一さう／＼の手綱。可有口傳。

一引てゆるすしほの事。是書つけ<sup>(わ)</sup>かたき事

候。けいこ肝要なり所にて候哉。

一口によりて。轡のあてとの事。可有口傳。

一口をかくす馬の事。可有口傳。

口傳に云。つる乗てよきやうなれとも。口を



かくして、その口ありてくせする心得在之へく。由斷なく可乗事也。

一馬の心をしりてのるへき事。口傳云。其馬の心をよく乗しりて乗へきと云々。

一心もしらぬ馬に乗ていたしきかいて不可乗事。口傳へちになし。目錄之分也。

一口わろき馬を足士(上カ)さぬ事。口傳に云。かけ足のれハ。わろき口おこる物也。又口もなをり

おさまりかぬる物也。好玄云。馬によりて熊(能力)かけ足のりても。はやく口なをり候事も在之。可有口傳。

一馬を乗庭之事。口傳に云。過物くせ馬をハ。はしめハせはき庭のかこいもよき所に

てのるへき也。ひろき所にて過立候へハ大事の物也と云々。

一曲馬を馬より乗出す事。外にてくせしで。人をものせぬ馬をハ。馬やの内より人を

のせて出して。外にてのりかへて乗事。好玄云。此のりかゆる手綱をハ。うつし乗と云々

一乗手むまや庭の事。口傳に云。のりて曲しいたしたる乗手をハのせて。へちの乗手をのせて。せめなをすへし。馬やも曲したるむまやをハかへて。へちの馬やにて。曲をなをすへし。庭も同前。曲し出したる庭をハかへて。別の庭にてせめなをすへし。

一乗ほと(脱アラン)の事。口傳に云。乗ほと大事物也。うちはなる馬にのり過したるもわろし。過物にたらさるもわろし。一あせかきても。あ

せのいりておくもあるへし。又今一あせかきておくも有へし。心得て乗へし。好玄云。かやうの所。皆委けいと有へき事どもなり。一馬のいき合を心得てのるへき事。口傳別になし。いきあひ心得て乗也。いきあいをも

しらすしてのれハ。馬そんなる物なり。猶可有口傳。

一口を乗馬一手に可乗事。口傳に云。口をの

に馬をハ。我より少し手ましにて候へ。こゝろくかはるへきゆへに口不定なり。いはんやへたにのせてをやと云々。

一心なかくのるへき事。口傳別になし。過物にハ心なかくのるへきなりと云々。

一尻一くれと云事。口傳に云。是みな一七日の間の事なり。大事の馬をハ。一七日も二七日も三七日もせめて。口をなをす物なり。如斯せめて後。なをるかなをらさるかしるへき物なり。

一夜乗事。口傳に云。夜るハ馬の心も人の心もしつまる心を用なり。

一あいのりの事。口傳に云。あひのりしてな(脱アラン)らてはあからぬ物也と云々。師と弟子いつ

れものりて。此間の心にかけたる所をも。師にふしんをはなし。あく所にても手綱の心をうつし。馬上の善惡をも能々けいとする事なり。

一下乗の事。口傳に云。あすよそへ行時ハ。今日能々も馬を乗入て乗事なり。是肝要也。常にのりしたかゆるとおもへとも。人おほき所ひろき所。馬つれ有時ハ。又はれの時にハ。おもひの外。馬ハやる物なり。

一過物にのりておるハ時之事。口傳に云。過物をのる時ハ。はしめよりいらつ物なれとも。少しつまりたる時。をりておく物也。

一馬をのりはてハ。自身引て内へいるへき事。口傳に云。口を能々のりいれておくとも。中間しき(さく)のものなとふとうの物のむさと。口にあたりくさりなとして。馬やへいれ候へハ。こえ口無曲自身引て馬やへ入てつ

なくへし。

一馬をのりはてゝハ。やかて庭をはきておくへき事。口傳に云。第一馬のくせによりて。庭の乗様とも。いろく是あるへし。人にあとを見せしかためなり。又へたなる乗様も。人之しる物なり。必はきてをくへき物なり。

一のせておく事。口傳に云。時ならす馬やにて。くるふ馬をは。人にのらせておけハ。しつまるなり。すこしせめ候事なり。

一庭にて口をのる時。おこりしかめく馬の事。(とし)口傳に云。しつかにのりつくれハ。後ハ外にてもしつまる物なり。

一野山にて過物にのりて歸路の事。口傳に云。過物ことに歸路の時ハはやる物也。へちの道をかへてのれハしつまる物なり。如此乗いれてなをす物なり。

一とをき道中にてくち入事。口傳に云。人にけうくんすることくに。連々に乗いるゝゆへに口入なり。

一荷をもきにしつまる事。口傳に云。ふとれる人などのれハ。てんねんど心しつまる馬も在之。力つよき人も同前なり。然ともうてかひなくほそくやせたる人成とも。手綱をけいこしてのれハつよき理在之。

一かわれてしつまり過る馬の事。口傳に云。やせたる時くせしてあらし馬の。こえてしつまるも在之。

一くちくりたる馬の事。口傳に云。口こわき馬の手にあハさを。(る脱)ほうのうちを刀にて切やふりていたませて乗物なり。又云。手にあはさる馬を。馬たつしやはかりにて。こわくのるにより。口のさけめくりにさくりきられてあるも在之。何も是を口くりたる馬と

云なり。是ハ當座のりなをして。よの人の  
りて口のさけめ。又やふれ候へは。口わろく  
なる物にて候間。とけてなをりかたしと云  
々。

好玄云。當座なをりぬれは。なをりたる口な  
り。口くりたる馬にかきりたるにこそ。口く  
りさる馬も。當座に手かはりぬれハ氣をか  
へ。口かわる物なり。猶可有口傳。

一口いまたあつかふとは。口なをりおさま  
らぬと可心得事。口傳別になし。口をのりな  
をしたるとおもふとも。口をいまたふりあ  
つかふ間ハ。なをりおさまらぬと心得へし。  
一一曲なをれは。よの曲もつれてなをる事。

口傳に云。□内に第一のくせをのりなをせ  
は。よのくせもつれてなをる物なり。

一年行たる馬ハ。口なほりかたき事。口傳に  
云。所にてのりてにあいてのれさる馬ハ。の

れましき事歟。

一年行たる馬ハ。口なをりかたし。但いまたの  
りてにあはさる馬ならは。のりてにあは  
なをる事有へし。口傳に云とも。年行たる  
くせ馬成共。いまたよき手にあはぬ馬にて  
あらは。よきのりてにあいたらは。くせなを  
る馬もあるへきなり。目錄の分なり。

一ふる口になりたる馬の事。口傳に云。是ハ  
なふりそこなひたる口なり。おそくなをる  
へし。猶可有口傳。

一おこり曲の事。口傳に云。かねてなをりた  
る曲の。又おこりたる事を云なり。おこりて  
後は。なをりかぬる物なり。

一たとひ馬一旦おりふしたりと云共。由斷す  
れはくせおこる事。口傳に云。目錄のこと  
く由斷すれハ。曲をこるものなり。

一馬の目の色を見てのるへき事。口傳に云。

目のうろにちをこきいれたることくにして。口の内おるめかハ。未曲なをらさると心得へし。

一馬ハ。五分一寸のつめゆるしにてのれたる物也。口傳別になし。目錄の分なり。ゆるせハとて。五寸一尺ともゆるす儀にあらず。五分一寸のつめゆるしにてのるゝ物なり。好玄云。是はよき師にならひけいこしてな(くのい)らては。よかるましき事。

一口つよき馬を一疋引てうけこハぬ所にて。さしゆるしてやる事。口傳。目錄の分也。但けいこにて心得可行ことなり。

一口を引てひかされ。

一鞍立をしてせされ。

一鐙をふみてふまされ。

此等之次第有口傳。

口傳に云。馬の口ハ引てひかさる物なり。け

いこさいしやうの所なり。鞭立の事ハ。くらをハしく時も有。□□□□在之。但鞍のしたうく時をさかめて氣かゆるあいたのるうちに。おりゝ鞍立をする事在之。たちすかすあつかひの事也。又鞍立にしつまる馬も有。心得有へし。又あふみをは。ふみてよき所も有。又鐙にたにも足はつれねハ。つくつかすにふみてよし。但あかる馬に外のやないはを。四のゆひにて。かゝへてふむも在之。きるゝ馬にも同前。又はぬる馬にハ。あふみつよけれハ落馬する物なり。鐙をそとふむ物なり。猶口傳有るへし。

一かた口の馬の事。口傳に云。つよきかたを

おる物也。猶口傳有へし。又云。つよきかたへおらハ。大わにのためかたにおるなり。

一つけすまひの事。口傳に云。をしかけのたつをまかいをとりて乗なり。かけふみ又こ

しをひねりてふむ馬などには。かしらを引まはして。さくり立てのるなり。又のりてに立むかひて。身を引てのけまわるハ。つゝきまはりつめてのるなり。猶口傳有へし。

一二の手綱之事。口傳に云。馬の左右へ二人して立よりて。よきかたより一人のるなり。さて其後。本乗手立よりて。うつしのりに乗へし。是をうつし乗と云も。一の手綱なり。

一わたし手綱之事。口傳に云。常にとりたる手綱を。一方にわなにとりて。左右のこふしの間にわたしたるを。流手綱と云なり。あかる馬を。このわたしたる手綱にてあかる時。たつかみのなかほとをおさへて。をしをとす事なり。又過物に三方へ引はりて。かゝへてのれハ。心しつまる馬も在之。

一あかり馬の事。

一そり馬の事。口傳に云。此二つの手綱ハ。いづれも下口に轡を懸て。前わにかゝりてをしさせてのる事。肝要にするなり。

一かしらさくる馬の事。

一しさり馬の事。口傳に云。此二つの手綱ハ。何も同前なり。上口に轡をあてゝ。うしろの鞍をしきて乗事をいふなり。

一からかさおとろきの事。口傳に云。庭中に

からかさをすほめて立てをきて。大わにのりまはしゝて。次第々々にすこしつゝひろけて。連々にひろくのり付て。其後。人にさゝせて。手をかけつけて。かた手綱にのりつめてのち。とりてさし口なり。のちのたひ由斷すへからす。如斯二三度もして。後はとりてさすへし。但由斷有へからす。

一具足おとろきの事。すみの手綱にてのるなり。庭のすみへ馬のうしろをなして。口を



よくかゝへ。さて立よりて乗事なり。つけすまひ同前なり。

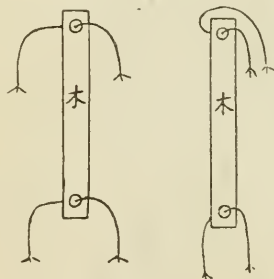
一車おとろきの事。口傳に云。内むかひてくる車に。おそれてかへる馬を。元のまゝうしろ様になしてかゝへて。車の馬のとをりへなる時分に。車をあとへなして。馬を引かへせハ。車ハ跡へなる。馬ハおもふかたへ行なり。是常に入手綱なり。常のにをふ馬うしに行合ても。いる事ともこれあり。

一物をみてなけひかむ馬の事。口傳に云。なけひかむかたへおるなり。

一あふきの事。口傳に云。物見る馬に。見る物の有かたの目に。あふきをあてゝ。物をかくしてとをす事。

一きねか袖の事。同物見る馬に。袖にて目をかくしてとをすなり。心得同前なり。  
一物にそふ馬の事。可有傳口。

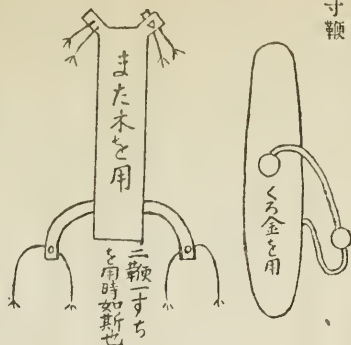
口傳に云。そふかたへかしらをおる物なり。一なへさしたる馬の事。口傳に云。手綱をみしかくとりて。下口をよくのるなり。まへハをのりてこふしをさけてのるなり。つよくくひなゆる馬にハ。二つむち用るなり。  
一二鞭の事。



二ツむちなり。木を用なり。又かり竹を用なり。人くらしい馬を乗にも。是を用るなり。一方をくつわのたちはな金に付て。今一方をハまへしほてにゆひ付て乗なり。なかさは

馬によるへし。よほとハ一尺六寸はかりハ  
(候々)  
らき馬をくく口なり。竹のふとさは是ほと  
よく候なり。又一方ハかりを用も在之。又一  
筋を用も在之。

四寸鞭



一三六寸の事。

可有口傳。

口傳に云。いかしする馬に。うしろの鞍のし  
はてはつれをさすなり。尙可有口傳。なりは

大方如此なり。

一八寸の鞭の事。 口傳に云。轡のはみのこと  
くなり。

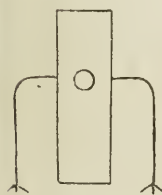


以上八寸

是をあかる馬にハ。まへわの下に敷。ハぬる  
馬にハうしろわの下に敷なり。但好玄ハ。此  
あつかい不用候。入候はぬ事に候へとも。目  
録之事候間。口傳書申事なり。

一も、色のむちの事。 可有口傳。

口傳に云。たひ陣等に用なり。盗人にとられ



も、いろの鞭。一の  
鞭と是を云なり。

ぬあつかいなり。木にても竹にても。こうての  
間いつはいに。なかきを切て。をゝ付て。  
こうてにたてにゆいつくるなり。繪圖の分  
なり。

一りうのさゝやきの事。可有口傳。

口傳に云。馬をいはへさせぬ手綱なり。夜うち  
しのひちに用なり。をなはにてしたをゆ  
いて轡のくわんになはをゆひ付てをきて乗  
なり。さいく轡をあつかひならすへし。常  
にしたをゆいたる分にてはいはゆるなり。

一轡はみぬきたる馬の事。口傳に云。轡した

をとかいへはつれたる時は。はなの上に轡  
の引手を。左ハ右。右ハ左へとちかへて引  
とゝむるなり。もし又轡。はなの上へはみは  
つれたる時ハ。下をとかひにて。引手を同前  
にちかへて。手綱をよき頃につめてとりて。  
鞍立をして引とゝむるなり。但一三のひや

うしに合て留るなり。

好玄云。上にちかへてハのりにくき手綱な  
り。下にちかへてハくるしからす候。けいと  
可有口傳。

一長腹帶之事。

口傳に云。軍陣にて用事な

り。尙必傳(口脱カ)あるへく候。

一轡之口傳事。

口傳に云。大きにまろくすへ  
しと云。猶可有口傳。

一おもかいのしつけやうの事。口傳に云。つ

よき口にはのへてしつけ候なり。よはき口  
にはめて仕方候なり。尙可有口傳。

一あしをのる事。

口傳に云。あしなみをよき

やうに乗なり。足のるへき馬在之。

一心をのる事。

口傳に云。心を肝要に乗馬

有。然者口も足も能なるなり。

一鞍敷をのる事。

口傳に云。馬敷を(るカ)のれな

り。猶口傳あるへし。

一 おもむきによりてたいたうをする事。口

傳に云。のり手をあなすりて。馬の一曲するときに。のりての方より 一はいも三さうはいも。相當をしかへす事を云事也。但手綱の數をしらすしてハ。馬によりてかないかたき事なり。尙可有口傳。

一 したかいてしたかハされの事。過物曲の

馬にハ。したかいてのる所も有。又したかはすしてのり所も在之。心得てのるハし。是肝要の心得なり。

一 かつてかたさる事。口傳に云。是も心得同

前なり。大坪父子の間にも。少つゝ心得かはりて如此なり。此二ヶ條は。同手綱の心得ともなり。馬にハかつて能所も有。又のりまけて馬にりをさせて能所も有之。但加様の所ともけいこに心得行へき事也。

好玄云。此心得ハいかしの馬に殊入事なり。

一 すみの手綱の事。つけすまいに庭のすみ。

はらのすみにて馬のうしろをおしつめて。口を能々とらせて乗なり。つけすまい以下用なり。

一 轡わたす馬の事。口傳に云。口を左へなし

てわたさハ。右の手綱をこふしをひきくとりかためハし。左へ口をやる時ハ。左の口を引手にて打ハし。是も下口をよくのるハし。尙口傳有ハし。

一 轡をさにかくる馬の事。口傳に云。さくり

てとるなり。若又きにかけて引いたす事あらハ。轡にてほうらいを打ハ。くつわはつるハなり。其時轡をとるなり。是ハほうらいの轡と云なり。かるかゆへに此轡。人引馬に打と云なり。常に打たるハ尙々人を引ハし。又うちはなる馬にも用なり。山あいの轡とも云。但他流の名なり。

一あさりのむちの事。口傳に云。口ふる馬に

打ふり。左へやらハふると打と一同にすへきなり。ひやうしちかいてハ。其曲あるへからず。口わきを上下かけて打事なり。

一くりあけ袖かへしの事。口傳に云。にはかに手綱つめたきときの事なり。手にからまきてつむる事なり。

一ひかへてたゝぬ馬の事。可有口傳。

一のりたる馬を口をあらふ事。口傳に云。のる内に細々口をあらふ事ハ。口のねはりをあらいをとして。口をかるくすへきため也。

一過たる馬を一所乗てをるゝ事。<sup>(騎し)</sup>口傳に云。

道中にてはやる時ハ。おりてくつろけて又のる事也。かやうにおりくつろする事。同道の人有時は。ならさる手綱なり。馬しつまるり在之。

一馬によりて。口をすてゝ足をのる事。口傳

に云。口をなをさんとて。口をのれハ口なをりかぬる馬を。足をのれハ。口もおのれとなをる事なり。

一あふみをちかへてふむ事。口傳に云。此心にふむ事なり。過物に用事もこれあり。尙口傳。可有口傳。

一鞍玉にとらるゝ事。口傳に云。過物に□□玉にとられてのる事在之。尙けいこに心得ゆくへき事。

一大過物にのらるゝ事。口傳に云。手綱の心得同前也。尙可有口傳。

一なつとくの分なくしてハ。上手に難成き事也。口傳。別になし。なつとくせされハ。上手になりかたきと云々。

一心より口もわろく成たる物也。口傳に云。心よりわろく成たる口をは。心をのりなをせハ。口もおのれとよくなる物也。

一口より心もわろく成たる物也。口傳に云。

口より心もわろく成たる馬をハ。口をよくのれハ。心も即能なる物なり。もくせは口よりしやうするといへとも。心よりしやうする口も有と云々。尚可口傳。

一馬の口ハ。人のおりてのことくにてにさる物也。一へんにハさためかたき物なり

口傳に云。目録のことく馬ことに。口も心もかはる物なり。されハよきなるいにてけいこせされハ。ごはうわきまへかたき事とも也。

一馬持こそ爪持よ。爪持こそ馬持よ。口傳に云。馬をよく持と云ハ。爪をよく持と云人の事なり。爪をよく持人を。馬持と云なり。爪そんなれハのれぬ物なり。のれぬ時ハ馬はすたれりと云々。

一海を流事。口傳に云。力革にひし有。又細

々足のいる事可任之。心かけて引立々々のへし。うしろの鞍をのるへし。鐙ふみなをす時。鐙をなみにとらるゝ物なり。大ゆひの外。四ツのゆひにて。外のやないはを能々かへへし。手綱ハ天地の手綱を乗へし。上口をのる事を心かけへし。

一川を流事。口傳に云。是も力革にひし有。

口傳同前なり。力革口傳ハ。腹帶に力革をゆい付なり。鐙をなみにても水にても打あくる物なり。□時鐙ぬくる事在之。□時之用なり。秘傳なり。河を流時ハ。河上の鐙をそごふみ。同方の手綱を細々引立々々のるなり。河下の鐙を心得て。よき比につよくふむなり。河上の鐙つよくふめハ。馬まるふ物なり。河下手綱をハ。ひらくひにそへて。馬をかゝゆるなり。むかひのうちあくへき所を。能々心かけへし。由斷してハ大事なり。又こ



なたのきしにて。みゝる水を入。をとろかし  
て乗秘傳也。又こなたのきしを打入る時に。  
すくにハいれす。川上をうしろになして。馬  
をよこつけにいるゝなり。かねにいるれハ。  
馬さかさまにまろひて。たちまちあやまち  
する事任之。<sup>最上</sup>さいしやうの秘傳なり。是肝要  
なり。鞍ハうしろの鞍を用なり。但川にて  
ハ。石をふみまろはかして。馬まろふ事有。  
大石にむねをつく事も有。ほかと一足ふか  
き所も有。しつかに心かけてのるへし。又お  
よく事ハ馬によるへし。是もうしろのくら  
をのるへし。口も上口たるへし。手綱大くつ  
るきしてハ。馬なかるゝなり。又口をあけて  
ハ。うしはゝのみ水をのむ事なく。條々心か  
けてのるへし。何の所にても。馬によるへき  
事なれども。殊に海川の事ハ馬によるへき  
事なり。常に河たちの馬を所持あるへき事

歟。<sup>(お脱カ)</sup>すれんの馬の中に。まし水と見てハ。水  
下をくゝる馬在之。是ハ又大事の物なり。但  
乗様もあるへき歟。常にのりしりてもつへ  
き事肝要なり。尙口傳有へし。

一川ふしの馬の事。口傳に云。竹よりの鞭を  
用と云々。<sup>(ナシイ)</sup>又ほうちいの鞍をも打なり。耳二  
つの間を打事なり。みゝのねを打事を。常に  
竹よりの鞭と云なり。こなたのきしにてみ  
ゝハ水をいるゝ事秘傳也。

好玄云。只いかしの馬を能のり候へハ。のる  
ゝ物にて候。俄に如何様の手綱をのり候て  
も。川ふしにハ其間なくて必ふす事なり。條  
々けいこ口傳に有へし。大事の所なり

一ふけをはする事。口傳に云。上口を用な  
り。うしろの鞍を用なり。さくりたちてかけ  
とをすなり。つよく足人所にてハ。馬とひて  
行物なり。とふ程の足いりハ。馬によりて二

三間はかり。やうくどふ馬有へし。又乗手のあつかひによるへし。尙可有口傳。

一江をとほする事。口傳に云。とはすへきくちを。能々馬に見せて引かへして。跡を五間計もかけいたして。やかて引かへして。江のくちへかけすへて。やかてこゑをかけてとはするなり。

好玄云。馬によりてはからいてとはすへし。是も馬によるへし。ほりの江をとほする手綱なり。ほりと書へく候へとも。江計と書申也。尙可有口傳。

一よこねをのる事。<sup>横</sup>口傳に云。後ろのくらをのるなり。但鐙をささのみつよくふます。手綱をゆるやかにとるなり。くらの上を

少そりてのる也。口をかへあくる心を。細々のるへし。かけいたす時も。鞍心同前也。

一たし手綱の事。口傳に云。是惡所かんせき

をのるなり。山をあくるには。山のなりを見てつゝらをりにあくる也。第二。同くたすも同前。つゝらおりにのるなり。第三。さかをあくるにハ。まへハにかゝる。第四。さかをくたすにはかかるなり。第五。同坂をあくるに。すへる時ハうしろをしく。第六。同坂をくたすに。すへるには前をしくなり。第七。坂をあくるに。ぬかるにハまへ敷。第八。同くたすに。ぬかるにハうしろをしくなり。第九。山のこしにて馬をかへすとは。山のかたへかしらを引まはしてかへすなり。此外かんせきとしそはをのる事。何もたし手綱の内なり。猶可有口傳。

一心の沓を掛て乗事。口傳に云。石のなき所をふませて通る事也。旅陣ハ常にもこゝろかけかんやうなり。

一具足きて馬上の事。口傳に云。常にハちか

へるなり。手綱をなかくとりて。ひちを袖の下にをきて。袖のつきをんこりとよきやうにのるなり。もゝにてくらをはさむ心得にのるなり。常のことくひさをさのみゑませす。少かめのをにて。鞍をしく心得にのるなり。せをおせになるやにいくひに乗也。こふしを引こめてのる也。又甲にひかされて落馬しけき物なり。ももにてよくはさむへし。此外條々口傳有へし。のりおり時ハ。弓つえをつきてのるなり。弓をとり候ハぬ時は。長刀鑓かまをつきても乗なり。こしつとも可在之。

一具足きてかけあしいたす時之事。口傳に云。よこうねの乗様同前なり。もゝにてはさむ心得肝要なり。

一引て行馬を鎧にてとむる事。口傳に云。是ハかけいたして。すへさまにまへ足のひち

ほねを。あふみのはとむねにて。二つも三つもしたたかにけてすゆるなり。ひちほねいたみしひれてとまるなり。好玄。此手綱も用不申。目錄の口傳にて候間書申候なり。入候ハぬ事なり。

一大まくの事。口傳に云。引馬にすわうかたきぬにても。とりてつらに打かけてとむるなり。好玄不用申候。是も用に立候ハぬ手綱にて候。但はなれ馬など。ことに人くゑなとならば。中間小者ていのむさといたきつきなとし候はんよりはよかるへし。又物みる馬にハ。用事肝要なり。

一小まくの事。口傳に云。てのくるにても。馬のつらに打かけてとむる也。用同前なり。

一口をゆいて乗る事。口傳に云。口のさけめに○是ほどのを繩をかけて。をしかけの上

にて。よきところにつめてしゝめて。おもひの下に此繩をかくしての事なり。其馬の氣色にぞめ候也。其毛の色の手綱とも云なり。

一文字の轡とハ。しのひのいと、云手綱の事也。たくひきと云轡の事。口傳に云。た

く引と云ハ。いかにこもせられす口をいたむ馬に。轡のはミの中をくさらすして。如此



○ 志のひのいと

○ たぐひ

○ 一文字

のくつわにて  
のりてなをす

なり。此口傳

を常の轡にて

乗時ハ。是程のやはらかなる繩にて。くつはのたまのたちはな金になわをはりて。一文字なして是にてのる也。又大過物に。○是程になわをこしらへて。同はりて此くつわをかけて乗なり。たちまちに心しつまりて能也。しるし候分なり。尚可口傳

一雲しきの手綱の事。可有口傳

一人引馬を鞍にて留事。可有口傳。

一をり立事。三様在之。可有口傳。

一岩のそきの手綱事。可有口傳。

一口を引ハ口おこる。口をひかねハ口なをる

事。口傳に云。わろく口もなふれは口をこ

る物也。口わろく乗よりハ。のらてをけは。

わろき口もなをる事有。尚可口傳。

一つよく引ハ つよくなる。

一つよく引ハ よはくなる。

一つよく引ハ よはくなる。

一つよく引ハ つよくなる。

此品々次第けいこに有へし。

一馬の口ハ引てひかざる物也。口傳。目錄の

分也。是もけいこに有へき事とも也。

一鞍をはしきてしかさる物也。口傳に云。敷

時も有。しかぬ時も在之。是もけいこに心得

有へき事とも也。

一あふみをハふみてふまさる物也。口傳。日

録の分なり。初に何も書申候。

一しゆもんの事。可有口傳。

一觀音の名號事。可有口傳。

一一藥之事。可有口傳。

一とくたうの歌の事。引もゆきひかぬもゆ

くハ馬の口引かすゆるさぬ時そのりしる。

つよき口よはき口おもりのりしれハ引てひか

さる物にそ有ける

なにとたゝ雪やこほりこへたつらんこくれ

ハをなし谷川の水

一是なる事ハ是なれとも。是なる事ハ是なら

さる事。可有口傳。

一手綱はかりか手綱ならさる事。

一馬の口を引事ハ。あしゝかたしゝとさ

これハやすし。

以上

右當流馬方之儀者。久天下之一物也。故鞍  
鐙轡此三之本。是今之世ニ至迄。諸家之賞  
翫タル事。尤馬ヲ能乗タルカ故也。仍此一  
卷大喜多雄介殿<sup>(權イ)</sup>エ相傳申者也。

弘治三年霜月二日

能登國住人齋藤安藝守

好玄

## 小笠原流手綱之秘書

抑大國の手綱のはしめ。馬の源を尋るに。昔漢朝に漢の武王の世を周武帝十二歳と申に世を取給。漢の武王御歳六十と申に世を去ぬ。武帝世をとりて十六歳と申に。唐土天竺の堺ちとく山と申山にて。七日御狩ありしに。十二つれたる猿。武帝の御前に落きたる武王かふらをはなさむとし給ふに。十二のさるの中に。老猿進出。上代にへけたものもものをいひけるにや。涙をなかして申けるハ。われ此山にすむこと四百余歳。可然ハ命を助給へ。われ矢にあたるならは。殘のけた物の命あるへかす。君はすなはち大聖文珠之化身なり。天下を治る寶。天馬にしかす。一時に千里をかける乗馬あり。かれハ馬頭觀音の垂跡なり。隨ひ奉らん。命を助給へと

申。武帝かふらをさしはつして。猿のいのちを助給ふ。其時。彼さる四句の文を唱。

化現々在垂跡馬頭乘馬一天乃室をりきり  
そわか。

則青毛の馬。武帝の前に角をかたふけて來。武王弓のつるをはつして。彼をつなかせて。さるにひかせて。みやこにかへり給ふ。それよりして弓の弦を表して。手綱をは七尺五寸にきり。鞭は矢を表して。貳尺七寸二分(二イ)にきるといへり。周武帝の又漢の武王の御菩提のために。七千余卷の一切經を。文珠にかへせ奉て。かの青毛の馬におほせて。靈山淨土へおくりたてまつり。道の遠きハ無限といへとも。武帝此馬に乗て。せんしやうと云し舍人はかりをめしくし。靈山淨土にとひわたり。佛ののへとき給ふ。說法聽聞し給ひたりし故によりて。よはひをもつ事二百余



歳。逝去の後とそむてんにしやうし。十二い

ふをのかれ成道の位につき給ふ。故に馬の

守ほむせい猿也。武帝一卷の書を、馬頭觀音

馬イ カイ

之化現はりき。禪門に傳はりき。禪門より白

伯イ

樂天江傳。白樂天より周穆王八疋駒を隨て

伯イ

天下を治給ふ事年久。爰に穆王の母すいり

うてんのきさき。やまひの床にしつみ給ひ。

病苦しのひかたかりし時。きさき。穆王に向

のたまはく。身つから定藥にあらず。蓬萊宮

にあんなる不老不死の藥をなめて。此度の

命をたすからはやと有しかは。穆王八疋の

駒に乗て。蓬萊宮にとひわたり給ふ時に。み

やうくとしてくらかりき。しんくとして

てせむかたをうしなふ。穆王。母の爲にやう

くのしふかきに寄て。一時の内にふかさ

三尺に雪ふりて。則天上にあかくなる。不死

(給イ)

の藥尋出へき術法わきまへかたかりしに。

乘馬右の前足を引あけたりしあとより。高

さ一尺にあを草生出。かれを取て。穆王殿へ

とひかへりて。すいりう殿のきさきに。不老

不死の藥を當。かの草藥を服して。御病のい

たみをかるしめ。命を助て本性に歸し。よは

ひさかりに成て。御年百廿歳をたもち給ふ。

故に馬をこのみ愛する人は。災難をのかれ

百のとくを得るなり。

大國より手綱をわたせることハ。音神武天

王の御宇に。てうみやう居士といひし人。一

卷の書をわたさる。彼秘書を天照大神とり

ましく。て。天器に納給ふ。其より以來。わ

か朝に馬を寶とせり。中比の事にや。相模國

の住人湯山入道中原の玄性入唐し習わたせ

り。一二の秘書とす。其以後一卷の書を燒す

てたりしを。出羽のくにの住人もち渡邊の

(給イ)

左衛門藏人高階の廣氏入唐して。大國より

ならひわたしけるを。子息左近藏人廣高相傳する廣高より脇の淵底相傳す。淵底より大夫國景相傳す。大國手綱の中卷の手綱。其外秘事の鞭手綱一も残さず。若是を僞申さは。天神地祇。堅牢地神。馬の本誓馬頭觀音(謂)の御覽を可奉仰。此條々秘事を請わたして後。一事もおろそかなるへからず。是を藝にたてん時ハ。いつれの人も其誠にをよふべし。其外猶秘事ハ弟子三人之外は不可傳。とに灌頂の鞭。千金莫傳之手綱。四の手綱等ハ弟子一人可傳なり。

一四ノ手綱といふハ。うちさる手綱。ひかへ矢の手綱。千金莫傳の手綱。いはのそぎの手綱。是を四ノ手綱と云り。最上の大事秘説也。弟子一人の外は相傳あるへからずといへり。又むすひかりの手綱ハ。他人に口傳たりといへとも。最上の秘説なり。ことにちの

りを心得すしては。其曲あるへからざるものなり。

一鞭の事。ひき馬の鞭。みけんの鞭。ちともいへり。口傳しさり馬の鞭。口傳あり。

一手のうちの鞭と云は。いつれも馬によるへし。先まはらさる馬。あかり馬。はね馬に是をもちふ。口傳有之。

一くけふけにより。馬のしゆんきやくのほり様。乗様あるへし。同かゝりの乗やう。七のしなあり。雪の庭のりたち。花のうへ木ある所。(物イ)くつぬき在所已下委。口傳あるへきもの也。

一庭乘にみせ鞭。すてむち。かくし鞭と云事あり。かくしむちと云ハ。御前のひたりならは。馬手のもごくひをうて。御前右ならは弓手のもごくひをうて。すて鞭と云ハ。手綱をこす馬ある時。もろ口にあたりて。上くひを

うつなり。同馬の百くせによりて。四十二のむちあり。

一 大人の前にて馬を飛様。條々口傳あり。そうして口をのらハ夜乗へし。よる乗ハ七徳ありと云へり。

一 馬に六わうあり。くらたちをしてせされ。馬をはさみてはさまれ。あふミをふみてふまされ。こしにて乗てのらされ。口にあたりてあたられ。手綱を引てひかされ。これらハ馬によりてのるへき心なり。凡馬ハ口わるけれとも。心ねのま心なるもあり。又口より心のえせたるもあるへし。されは一へんにのる所をせいするものなり。馬による手綱。たつなによる口と云へり。然ハ馬によりて口傳あるへし。すみの口と云事。口傳にあり。さうなくすみの口をしる事あるへからざる物なり。

一 くらをしせつといふハ。うは口をひかはしりわにかゝれ。下口をひかはまへわにかゝれ。すみの口をひかはくら中にのれ。きの口をひかはくらつほにのりいよ。口傳在之。

一 上下の手綱と云ハ。口のうちに九ほんの手綱有。うわ口に三。中の口に三。さけめの事なり下の口に三。是を九ほんと云。たとへハ入かまくひ。同かしらをさくる馬にハ。上のたつなを乗へし。上の口のうわかと。其下の又中の口あるへし。又其下かと。是を上下の手綱といへり。上ほん上しやうと云ハ。中の口さけめの事也。此所に又三あるへし。中の口のうわかと。同下かどこれらを。九ほんといへり。さいしやうのひせつなり。口傳あるへし。一むかふ口のつよき馬にハ。下の手綱を乗へし。むかふ口よはくハ。つねに上の手綱をのれ。これら口傳あるへし。しりあししかさる

馬をハ。木かけのしはにて乗へし。しもの下といふ手綱も是に乗へし。

一 さんの口の事。馬によりて乗へきなり。一へんにあるへからす。馬ことに口傳あるへし。

一 とをはせと云事。せはき庭にて乗様あり。又ひろき所にてのるどをはせもあるへし。

一 もとくひをなやす馬の事。二くわもろ手綱をのるへし。

一 馬にハまつむち手綱といへり。鞭をしらすして。手綱入かたく。手綱をしらすして鞭入かたしと云々。されどもまつ鞭をもつて。足をのり。手綱をもて口をのるへし。初心の程ハごるとらすのたつな。大方馬に渡りてよきなり。但くひなやし。くつわゝたす馬にハのるへからす。それも鞍あたりあるへし。同馬のをりやう。左へをる時ハくつわのかゝ

み左の口わきにそふやうに乗へし。右へおる時ハ。又同前たるへし。凡すみの口もおれほくとも。おるゝたつななり。いかにも馬は。よはき所なくつよき所なく乗へし。細々に一さんをのる事なかれ。つねにのれハ。五方そんすといへり。たゝかけおりを乗へし。かけおりにあまたのしなあるへし。すみの口ある馬をは。おる時こしをもとにもよるへきなり。とりちかへておる時の事ハ。馬によりてこしをよるへし。すき馬にハ取ちかへを乗し。そふしてハかけまはしに。三十六のあしなど云事。口傳にあり。同小ころしすみの口わるき馬に乗るへし。十疋に九ひきはすみの口わるかるへし。初心の時ハ。まことにさしたる所をしる事大事なり。されハ弓手の口さしたりといふ馬に。馬手さす事もあり。初心の程ハ。さうなくさしたる所を

存知しかたき物なり。然はよわき所にこはきあり。こわき所によわきあり。

一 繩まはしと云事。是も馬によるへし。かけ足をいたさすしてのるもあるへし。又のりたすけのりころせと云事も。馬によるへきなり。其故ハすき馬ハ。ひろきよりせはくのる事あり。又せはきよりひろくのるもあるへし。口のかひなき馬にハ。さすやうにのる口傳もあり。馬によりて七のもやうあるへし。乗様ハかはるとも。馬ことに繩まはりは乗へきなり。鐙のふみやう。手綱の取様。馬によりて口傳あり。

一 いれかまくひの馬を乗様。まつくつわのはみなかきをもて。かたをもむ手綱をのるへし。浪の下の鞭を打へし。

一 のりくひの馬。むかはきのすそくらふ馬にハ。浪まくらの鞭を打へし。浪まくらは。

うわ口ひる下口ひるかけてうつへし。(ち)又つらくふ馬つめかふる馬にも。此むちを可用。一 馬たけき馬。物の具おとろく馬にハ。あらしの鞭をうつへし。あらしのむちとハ。はなうへの事なり。

一 もちりはねの馬にハ。かゝみの鞭をうて。かみのむちとは。さうの口わきなり。

一 車おとろきの馬。具足おとろきの馬にハ。きくつほのむちをうて。きくつほとは。さうのみゝのねなり。

一 けみちにふき馬にハ。木すゑのむちをうて。木末の鞭とは。さうのみゝのあひのことなり。

一 おもひてはね入馬には。あひのむちをうつへし。あひのむちとは。さうのみゝのあひのことなり。

一 ふえのねをそらしてつらをあけて行には。

きそんのむちをうつへし。きそんのむちとは。日のあひの事なり。

一手綱をこし。くひをなへる馬にハ。ひやうもんのむちを打へし。ひやうもんとはかまほねかけて打なり。

一あしなみおそき馬にハ。おこしのむちをうて。おこしとは。左のさくつなり。

一鞍たかき馬にハ。はやめの鞭をうつへし。はやめのむちとは。右のさくつなり。(うい)

一かけふみの馬にハ。ともわすれのむちを打へし。ともわすれとは。左のしりゑたなり。

一くらはねあふみおとろきの馬にハ。さんこの鞭。とつこの鞭を打へし。さんこの鞭とは。はるひのゆひと。とつこのむちとは。下はらちからかわみつゝきにさうつきくつのはなにて。あけさまにさんくにて。馬をしつむる也。

一しさり馬にハ。さくらかりの鞭をうつへし。さくらかりとは。馬手の水つきをさかてにとり。かたまわしにまわし。あふみのはなにて。したおとかひをあげさまにけて。その後さしくつるけてあをれハ。さきへ行なり。

一はきれの馬にハ。おもかけのむちを打へし。おもかけとハ。きるゝ所にてかたまわしにまわし。まわすかたのふきあらしかまほねをさんくにてうち。其後さしくつるけて。きるゝかたの手綱に鞭をとりそへてとをせは。きるゝ事なし。

一まへうたかひの馬。はしすまひの馬には。ハかせのむちを打へし。はかせの鞭とは。弓のもととはす鞭のさきをもつて。したおとかひをさんくにつき。其後くつわのとち金にさし入て。さきへさせハ行なり。

一くつかけすまひつめうちすまひの馬にハ。



つましらへの鞭をうつへし。口傳在之。

一しさらぬ馬をしさらかすには。さんかの山  
おろしのむちをうつへし。さんかの山おろ  
しとハ。さうの手綱をとりあかへ。上をの  
へ。くらたちをしてうは口をゆりあけてハ。  
下口へひきなかし。むちもちたる物を。さう  
にたてゝ。吹あらしむねひさのふしを。次第  
おどりにうちさくへし。其後。めのまへにむ  
ちをふりて見せて。うは口にあたりて。しさ  
らかせハしさるなり。

一人ひき馬にハ。ゆくさきの鞭を打へし。行さ  
き(シナイ)のむちとは。ふり、かみよりはなさば  
らへかけてうつなり。口傳在之。

一つけすまひの馬を乗やう。先手綱をかけて  
のるへからす。手綱の末をとり。馬あひのく  
とも。馬に心をつけ。馬の右へあゆみより。  
手綱のすゑをむなかひの下より上へひきと

をし。右のうてにからまへ。右のおもかひに  
取くし。まゑわをかきて乗へし。乗て後。馬  
を右へかたまわしに乘へし。是ハ下ひもと  
云たつなり。同天人のひとへかくしと云  
たつなり。左のくつわからみにさし繩を  
つけ。馬の左の鞆の下よりひきとをして。其  
後。手綱をかけて乗へし。馬なけひらみて。  
あひのかわ鞆の下とをしたるさ繩を。左の  
手にかいまき。馬あひのく時。やかてさし繩  
を引。其後まへわをこして乗なり。よき手繩  
也。

一しりかひすまひの馬の事。かま繩をまへあ  
し二のあひへととりて。手綱をうちかけ。上下  
の口をつめ。其後おを取て鞭をかくるなり。  
くつかけすまひにて是を用へし。もろこつ  
めと云手綱なり。

一大ころしと云たつなの事。弓手のあふみ十

文字にふみ。馬手のあふみを一文字にふみ。馬手の水つきをさかてにとり。手綱のすゑをまへわに取くし。弓手の手をもつて。身をおしはり。鞍中に乗てすこしくらたちをして。弓手へおちさかりてふすへし。馬ふすなら。水つきとりたる手を。切付のはつれはるひのゆひとにおし付てつめよ。馬しつまるならば。左の手をもて。きつかうのかみをおさへてゐにあたるへし。

しんせきの井。まへゑたのひちはね二分あけてうちそとのみをひねるへし。

木の下(門)の井。きつつけのはつれはるひのゆひとなゆひにておすへし。

れう川(れ)の井。こつみやくのはりつほ。

水うすひの井。さうのくちわき。

せうせきの井。はなのわき。

さんせき。めの上目のしりくほき所。

きくつほの井。さうのみゝのね。

りうかくの井。はらほねのはつれ。

さう門の井。しりかひのくもての下中ほねにそひてあり。

きうちやうの井。みゝのねのうへのかと。  
いづれも馬のくせ心によりてあたるへし。しゆもんありておこす時は。上のあふみをふみ。下のあしをふみのけ。上のたつなをのへ。むなかひをさかてに取くし。下の手綱をひきておこせハ。のりておこさるゝなり。かけのへて一さんを引へし。

一くさひきと云手綱のつけすまひの馬に乗へし。はるひにとちかねを入れて。くつわかゝみのさし繩をくさわけより引とをし。引返して前に人にひかへさせて乗へし。口傳在之。一とつこと云たつなの事。口傳にあり。是ハ七とく二そんといへり。

一いわはさまりの手綱の事。したあきこはき馬に乗へし。さか馬に乗て。水付をふまへ。鞍の手かたにとりつき。鞍の中にて手綱を

つめゆるすへし。口傳これあり。

一行つれと云手綱の事。馬をしこくのりて後。おるゝかたのおもかひをつめて手綱をいふなり。一のかみのもとに。馬手のかたの手綱をつめてゆひて。轡を引うこかして行はつて行なり。はしめまはらむとおもはん時ハ。かたゝにて馬のくひをおしまはして。馬にはなれすして行へし。口傳在之。

一具足なしと云手綱の事。馬をよくのりて後。歎むなかひはるひをときて。さんゝにかけまわし乗へし。のほりにはする時ハ。せうようのかみをまるへ引。くたりにはする時ハ。さきへおし。さかをのほる時ハ。しほ手に手綱をひき入ておくへし。のる時ハ弓手のしほてにゆひを人ておさへて。右の手にて手綱をとらへ。くひ中におさへて乗へし。一しさり馬の事。尾のさきになわを付て。はゝ

のよき所にて。馬のまへより人にひかせてのりて口にあたりてしさらかせは。一たんこそしされとも。さきへゆくなり。か様にこしらへて乗なをすへき也。

一もすのとりやりと云手綱の事。はしかへしを乗手綱なり。馬をたておりに能々のりて。兩方みそのあらん所にて乗へし。かへす時ハ。弓手の手綱をたかく持て。馬手の手綱をすみの口にあてゝ。馬手のあふみをたてゝ引返すへし。是をよくゝ乗て後は。口にあたりてこしをひねれハかへるなり。

一中の繩と云手綱の事。下あきこはき馬に乗へし。轡のさうのくゝみをゆひて。くつわのはたらかぬやうにおとかひに付て乗へし。一あかり馬の事。ほそきさし繩をもて。轡のさうに付て。むなかひより引とをして。はるひにつりてのりなをすへし。同二くわ四手綱

と云事。さし繩をふたえにおり。くひにからみしゆみに付て。くつわのさうのとちかねにとをし。前足二のあひよりとをし。わらハかみの本にむすひて。其後。手綱をうちかけて。さし繩を付つめあわせて乗へし。馬のあからハ下かま繩をつめよ。あからすハさしゆるせる様にすれハなをるなり。

一同あかり馬にくら下と云物あり。金にてうちて五寸よほうに。わのやうにして。兩方に二つハ足をつくへし。足のなかさ一寸計なり。是を鞍の前の馬ハたにおし付て。むすひ付て。馬あかるときハ。前わにかゝりて。さうのあふみをつよくふみ。たつなをさけて乗るへし。口傳在之。

一同はぬる馬にハ。此金をしつわの馬はたにむすひ付て。馬はねハしつわにのりかゝり。手綱にてかしらを引あけまはしこめてのれ

ハ。はぬる事なし。口傳在之。

一はね馬をのるへき事。おりめの上を弓の弦にて。つよくゆひて乗へし。いかなる馬もはぬる事なし。同もろつめと云事あるへし。口傳在之。

一かむせきのそきと云事。馬引立て行時。とめんとするに。馬したへをちんとせは。とめちかくなりて。手綱をはつとゆるせハ。百あしに一あしも下を見て落事なし。若落ハ。なかせと云たつなあり。鞍の前わ山かたを。右の手にておさへて。左の手にてうわ敷をおせは。しりへなかるゝなり。そはへおちんとおもは。馬よりさきハ落てあやまちもあるへし。口傳在之。

一とねりなしと云手綱の事。手綱と鞍とに口傳在之。同轡なしと云事。鞍むなかひに口傳あり。

一はいきれする馬には。かみかくしと云手綱。はたまほりと云たつなあり。かみかくしと云。かみをも見て。右へきるれハ左のみゝに入。左へきるれハ右のみゝにをし入也。はたまほりと云ハ。馬手へきるれハ。弓手のきつゝけの下にくりいしをはさむへし。弓手へきるゝも。こしらへやうハ同前たるへし。

一火おどろき物の具おどろきの事。ちやうひやうほうみの鞭を用ふへし。是は鞭のさきをおもかひのくみちかへにさし入て。みゝに取くし。馬手の水付を取て。二三へんかたまはしにまわして。口にあたれハおどろく事なし

一水車と云手綱の事。かた口こはき馬にのるへし。さしよりて先手綱のまかりめを。一よりよりてつよきかたのはるひに引とをし。あまる手綱を鞆のふさにむすひつくへ

し。其後。鞭をもておどろかして。つよき方のきくつほをさすへし。さて馬をまわすなり。しはらくありてゆるすへきなり。

一もろむすひと云手綱の事。はやり馬に乗へし。轡の兩方にさし繩を付て。馬の前足くさわけのねに付て。一さん口の手綱のこく口をはせてハすん／＼乗へし。櫻かりと云手綱もこれにのるへし。

一はやり馬にのりて。ゆかけなとさゝん時ハ。やり手綱を乗へし。口傳在之。

一百くせをなをす十二手綱と云事あり。轡をはめてもろはつなにつよくつなき。さうにかま繩をさし。かりはるひにとをし。さうのはしらにつめ下はらにとち金を入て。下かま繩を前足のあわひよりとをし。うしろの柱につめて。つなきて毛をもとり。物おとろきをもなをすなり。

一浪おごろきの事。馬屋にすたれを懸て。そとより水をすたれにかくへし。馬見なれておとろく事なし。

一船ゆるきの事。はなかわをぬきて。さし繩にてくひをくひりてつなくなり。はなかわにかかりてならてはゆるく事なし。又鞭をもてしかる様もあり。

一立木と云ハ。百くせをなをす手綱なり。轡おもかひにみなわけつゝみと云事をして。こしらふるやうともあり。口傳在之。

一馬買吉日

一日吉。二日凶。三日小吉。四日吉。五日論ス。六日。七日凶。八日。九日。十日悦。十一。十二日凶。十三日。十四日大吉。十五日。十六日。十七日凶。十八日大吉。十九日。廿日凶。廿一日。廿二日大吉。廿三日死ス。廿四日大吉。廿五日小吉。廿六日大忌。廿七日。廿八

日。廿九日大吉。晦日凶。

一馬のりはしむる吉日

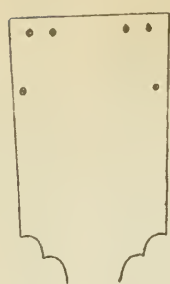
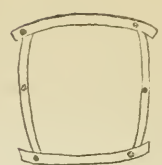
きのへたつ。きのとのうし。つちのとのとり。つちのとのうし。つちのとのゐ。かのとのうし。かのへさる。かのこのう。かののととり。ミつのとのみ。みつのとのうし。

以上最上吉日なり。

一合戦の時の乗馬相生の馬にのるへきなり。

如此雖註置。鞭手綱悉可有口傳之者也。雖有法下之嗽文。渡灌頂手内鞭七尺鞭治千金莫傳手綱享者。弟子一人之外。不可相傳最上之秘事也。





寶德二年八月十七日

淨元在判

右此一冊者。上原豐前入道石鹿證本也。然  
ニ彼息神八郎讓與之間。令暫借寫書訖。

天文六年九月日

續群書類從卷第六百八十一上

武家部二十七

三議一統大雙紙 又號當家弓法集。

當家弓法大雙紙之序。

鉞云。夫弓法と云は。弘也。法度也。是をひろむと也。當家の二字を置事。日域にて執柄たるへき姓氏は。源平藤橘を始めとして。公武の家三十餘ヶの流たり。就中仁王五十六代の帝清和天王の第六の王子。貞純親王の御子六孫王經基卿。始めて源姓を給ひけるより以來。此家の代々朝家に忠勤を致し。國を治め民をあはれみ。惡魔を伐し朝恩頻に繁榮す。然るに中比左

馬頭内大臣義朝衰世のとき。平氏清盛代を取といへとも。纔に二十余年に滅亡して。又源家に天下を反す故。源姓をさして當家といふ。所謂源の弓法といはんかことし。縦は唐書に。前漢書後漢書といへるも。其世を指なり。去は此道といつは。神道王法をおもんして。天下の差別等輩の禮三綱五常の法を研ぎ。瞽盲の耳目を明らめ。世間おたやかなる時は。束帶の法をなし。進退耀對の儀を胸とす。世間靜ならざる時は。軍旅籌策をなし。天運地利人和のてたてを本とす。俗法修羅遊覽の二儀の品。

三綱五常にはつるゝ事なし。三綱といふは。君臣の綱。父子の綱。夫婦の綱。是三つの大綱なり。然るに。恐れへき儀に恐れ。親しむへきを親しみ。恥へきを辱しむる事。此道の始ならずや。五常と云は。仁義禮智信也。仁といふは。慈悲を事として。心に情を先とす。義と云は。吉凶善惡を分ち。賞罰明らか成事を先とす。禮といふは。上中下の品をわかち。用捨を是とす。智と云は。禮記に云。智は忠也。中庸の徳をつむ。主君へなす忠は。不及申。諸人に正しきを忠とす。孔子の曰。忠とは朋友に正しきにつけ。善にあたるを以て先とす。信とは眞也。人としてまことなきは仁にあらず。万能一心にかすと云事。この信を以て心とす。然るに文質相調ても。文武二道のたゝすまひ骨法なくしては。又叶ひかたし。然るに世上の進退起居動靜の族之義は。究る處を前鹿苑院殿下義滿昇

殿御家人の一族の中に。其旨を記して。進上の族勸賞有へきよし。被仰下と雖とも。老學の族なし。或時。此旨一々書進上申へきよし。今川左京太夫氏頼にかたく被仰付間。公より子男にくたるへき法。並に小笠原兵庫助長秀には。男より公侯へいたるへき法を可有言上由被仰付間。御前におゐて含沙汰證據におゐては。代々の掟に任せ。伊勢平氏武藏守滿志朝臣と心を一つにし。弓法の准機書調門を十二門に賦する事は。天地八隅王化神道の十二形を表して十二也。是を撰して上る。名つけて三議一統當家弓法集と云々。

### 十二門。

- 第一續以爲家門。
- 第二法量門。
- 第三騎射門。
- 第四步射門。
- 第五供奉門。
- 第六宮仕門。
- 第七奏者門。
- 第八馬法門。
- 第九蹴鞠門。
- 第十饌部門。
- 第十一筆法門。
- 第十二實檢門。

三議一統大雙紙 又號當家弓法集。

續以爲家門第一。

一御當家の仁々の立所之事。義兼の御下より分りたる仁々をば。御家人と云也。義家の御下よりわかちたる人々をば。御一族と云なり。御家人は新田。仁木。細川の人々。吉見。明石の仁々。山名。里見の仁々等は。新田方の御家人なり。畠山。岩松。桃井の仁々は。義氏左馬頭殿よりわかりたる仁々也。吉良。今川。御所。志波の仁々。澁川。石橋。一色。上野。石堂。加子。小俣等の仁々は。平石殿よりわかりたる仁々なり。然間。おのゝ流は一也。御料の御事は。御家督にて渡らせ給ふ上。御代を召れて後は。一天下の人々。皆御一族たれは。源氏十名家云々をたつる間。ひろくして。そしてとも御家人家子とも申分へき事な

し。何も御家人也。去ながら畠山。桃井は一流。吉良。今川は一流。越前の仁々以下は一統。されは錦小路殿は。吉良上總入道父子の契約として其禮有。そのほかの面々は。一流々々にて。猶一家中にて立所おのゝなり。當時諸役人をつとむるも。それゝに隨て心得可分なり。去は建武の頃ほひ。先皇吉野の帝の御宇に。御即位の初つかた。大將軍へ一家之人は誰々そと。公卿より被尋下。御返答には吉良。志波。畠山等計也と御申有けり。其外は皆御家子と定らる。是は平江殿の御讓□□かたゝのことく家に相續の故に。此三家をさして御申有けるか。將軍の御代召れて後より。天下に御領の將軍家の御恩給はらさる人なき間。皆御家子なり。如此心得分へきか爲に。是を記すなり。又其時御代をめさる將軍家におゐては。流の高下有へ

からす。公家も定まる儀なり。是を續以爲家と云。公家は執柄家の御子孫も、神代に天津兒屋根尊。天照太神宮の御在世の時より續來らせたまふと申なから。太郎。次郎。三郎などの流ともに關白に成たまひぬれは。更に兄弟の立所なし。是則ち家の法なり。近衛殿は藤原氏の惣領たるよし。御家風の輩らは申なり。されとも一條殿。二條殿。九條殿などの用ひたまはぬにや。公家には唯其時の官位の次第を以て。上臈とも下臈とも申なり。但三家の公達とて。今少位有閑院家。花山家。舊家等三家なり。徳大寺殿。等院殿。二條殿などは。閑院家の流なり。三條。坊門。土御門の公達以下は源氏なり。花山家とも申也。一條院殿。九條殿は舊家の人なり。合て三家と號す。公家達とは。執柄家の御子孫關白にならずして終たるを申なり。今は

月輪。法性寺。日野。浦松。觀實寺。八條などの人々。皆名家平家の輩なりこそ。八條の攝政殿は仰られし也。左様の次に。公卿。殿上人。諸大夫。士などの次第は有とも。時の官位に隨ひて。上臈とも下臈とも申なり。士の家は官位によらず。何れも士也。乍去諸太夫卿上雲客。又武家北面以上も。次第に經のほるなり。士の家は生出より。六位なる故に。花族をするとも仰られし也。是にて諸家の高下を知へし。

### 法量門第二。

一弓を座席に立る事二様なり。一は張弓をは。未。申。酉。戌。亥。子六方をかたとりて立るなり。一は弛弓をは。丑。寅。卯。辰。巳。午此六方を像りて立るなり。

一弓袋の弓をは。艮に立る事は定る法也。一弓を天□にあくる事。東南をうら弭に定る

なり。座いかやうなるこも。餘の方は忌也。

一弓取渡に座席三方の弓と云事。弓を主人以上へ進らす事。持参いたす時。さんをこゆるまでは。かつきて鴨居にあたらぬ程成へし。座にいらは。其儘上座に向て。右にて握の下を取事。外人遠くは五寸。外人近くは三寸取さけ。左にては手のひらに。一のふしに本弰をする。御左へつきて進上申へし。是上の一方なり。中の方へは置に向て。左にて弰の下外人遠くは三寸。近くは二寸取さけて。左にて本弰を。そはより取返して渡すなり。是は中の一方也。中に見あてゝ渡すへし。下の方へは。上座より立廻り。下になして。右にて弰の下一寸をとり。左にてせんたん巻を取。人の右へつきて渡すへし。下の一方なり。

一弓請取の事。上は上座より之下人は貴人た

るへければ。左右を下手にして請取なり。中の請取は。左を下手にして。右を上手に請取へし。下の請取は。左を上手にとり。右をは少式代して上手も不苦。是下輩への挨拶なり。無禮に有へからず。以上三方の弓なり。

一馬上に五方の弓之事。一。右より進らす時は。本弰の上一尺置て。左にて取て。鳥打を右にて取。馬のひらくひをこして進らすなり。二。左より進らす時は。弓の鳥打を左にて取。右にてせんたん巻を取て。馬のひらくひに向て進らす也。三。右の乙根なり進らす時は。弰を上一尺計を左にて取。右にて鳥打を持。右の御肩をこして進らすなり。四。左の乙根より進らすには。弓のうら弰を貴人の御結の袖の下へ押込様に進らすなり。五。四方つまりたる所ならは。弓の本弰を御鎧の沓込に立。外竹を見せ



申さぬ様に進らする也。軍陣にては外竹をもうら弭をも。御前へむくへからす。鎧の鼻に一文字に立へし。

一 張弓に矢を添て取渡事。かけより出す時は。弓をも矢をも。右に十文字に成様に持て出。座敷にて弓と箭を。本筥につきそろへ。常のことくに渡すべし。

一 受取事は。其儘請取て。矢を中程へこきあけ。手の内にて。弓は弓。矢は矢と取分。十文字に持て。目禮して歸るへし。

一 弓に箠を添て渡し候事。弓をは弓にかつき。箠を左に持也。握より下を取て。上を上へなし。箠をは。右のかたにさはらぬ程に。左に持へし。弓を渡すには。箠かゝへたる手の中指。無名指のゆひ先に。本弭をこたへ。左へ向て渡すへし。上中下つねのことし。えひらをわたすときは。右の手を廻して引廻し。矢

さしの面に成様に渡し。相手目禮すれば。渡手は手を突。わかれかしらになく歸るへし。受緒。懸緒をは左の指に挟むなり。

一 弓箠請取事。指よりて先。弓を常のことく請取て取廻し。右にかつき。扱箠をは左にて請取。同かたにかゝへて。弓の弭にて自己の禮して可歸。懸緒。受緒を以前に指に挟むなり。

一 弓箠置様。弓を左に。箠を右に置事も有。又押揃て御左に置事もあり。

一 弓箠御目にかくるには。貴人の御方へなし。(籙イ)て。箠のそはへよせて置とも申なり。又御目にかけて後。御右へ通り。又渡す様に。右の手を廻して。箠を少遠く立て。弓を近くよせて立て歸も有へし。

一 弛弓をは。前竹を上になして渡し請取へし。引出物の時は。弦一張添て出すへし。

一弓二様の事。白木ならは。ふるしとも握をときて可出。又誘弓ならは。新しくとも握をまきて出すへし。

一弓取渡す事。弓をは右にかつき。鞞を左に持て出候は。艱の代の時なり。又常に弓鞞を渡には。先鞞の緒を。右の指にからみ。同かたにかゝへ。弓を左に持て出。受取人の前にて。跪さまに弓を左に立。鞞を渡して。相手のつけ候間に。弓をとり常のことく渡すへし。又下輩へ渡す時は。鞞と弓とあいもすかす渡て歸るへし。

一鞞はかり渡事。緒を常のことく右の指にはさみて。左にて腰革をかゝへ。矢配を面にして渡すへし。

一鞞はかり請取事。以前のことに緒を左の指にからみ。腰革のうらを抱て。目禮して可歸。

一御弓張へき事。我身を主人にむけ申てはれはよし。若其許に柱遠さからは。かけて立て張て參る事有。張ても弦打すへからず。すひき二つして。内へ弦を廻して。うら筈より本弭まで見下してちやくと進る也。

一絃打の事。我弓ならはする事も有て。うまぢまひとまゝ見すへし。二つをちかくみつめをば。程をあらせてする也。亦軍陣にては。

一つ打て間を置て。二つつゝけて打用心には四二とも致すなり。神前又化生をのそく時は。七五三ともするなり。祈禱の時も如此。産屋の弦打の數陰陽の習ひあり。

一弓を見る事。常のことく請取て。そのまゝ舉を内へ廻して。外のそはきを見るに。矢摺。鳥打。うら筈よく見究。其儘右へ取うつして。是も弦を内へして。内のうは木を矢摺よりひきめたいきせんたん卷まで見おはせ

て。ほめて其まゝとりさけて渡すへし。

一矢を見る事。請取ておつとりの節を右にて取。すけふしを左にて取。先頓て羽のかたを見るには。手もごより羽中苦の作様まで見て。内へ捻り返して。弓摺風切の羽をは。一度に見へし。夫よりあさ巻まで見極てほむるなり。全爪よりすへからす。惣面弓みる事。斟酌有へし。矢も同前なり。

一矢爪よる事。内へ捻は所望の心。外へ捻はそしる心なり。何れ共に爪よらさるなり。若おきためなと仕度時分。我矢ならは爪よる事もさけすむ事も不苦。

一弓順逆の事。使の時。とさんの弓又主人の弓は。右に持へし。我弓ならは左に持也。弓をかるきとほむへからす。

一御出の時。弓のうら弭を外にし。上六寸を右に持。弓をあくる事。天をひらくる故なり。

若貴人御跡に御座の時は。屏重門の際迄は。

うら弭を脚になし。弓をあをのけて持。門の際にて取直し。前のことく持て出。惣門の外にて右の肩にかつき。本筈のきはにて大指人さし指を張の間にはさみ。中指。小指。薬指三つをもつて。本弭をかくへし。絃を外にしてかつくへし。他人に向ては。左の手に移して。上六寸を取て。張を前になして持。右のひさを右の手にておさへ。貴人馬を立られは。馬より右の方によりて。前のことく跪て禮すへし。貴人を内へ入申。弓をなをし。大指を内へなし。弓をうつふせて。屏重門の内へ入るへし。歸る時弓を持事。外を内へなし。絃を上にあけかつくへし。外は陰なり。内は陽なり。惣門の外にて。前のことく跪つくへし。故に弓の外を上下ともに他にむける事定法なり。

一弓と太刀を一度に取渡す事。弓を右に。太刀を左に持て出。先太刀をは右に置。弓を渡し。さて太刀を取直して渡し。受取て目禮あらは。一禮して歸るへし。

一弓と書狀の事。先弓を我右に置いて。書狀を捧け。其後。弓を奏者にも。又は人によりて自身も進上申すへし。

一あて物に扇を立る事。要を上にして立へし。又要を前にする事有へし。惣して立よと有とも斟酌ふかく有へし。上意とならば立へし。くし立木の串ならは。わりて要を前にはさみ。またの有くしならは。要を上にかへし。

但扇の繪にならひ有。人と畜類ならは。人の有方を立へからず。畜類に鳥類ならは。鳥を立へし。虫と魚ならは。魚の方を立へし。有情非情の物ならは。非情の物を立へし。

一本の葉を立る事。春三月は。葉先を上にして立るなり。夏三月は。葉先を前へして立へし。秋三月は。葉先を下に立へく。冬三月ハ。葉裏を表にして立へし。何れも串にかくるなり。

一花の葉も。同前なるへし。つねに好て立へからず。

一疊紙を立るは。切目を前にすちかへて挟むへし。これハ小折敷の代と心得へし。ひるならハすみくを面へおりて立へし。

一四半といふは。小折敷を四つに切て立るなり。切目を前に立へし。

一九半といふハ小折敷を九ツに切て其一ツ立へし。切目を前にすへし。四半九半ともに。晝ハ角を面へ折て立る十枚の内なるへし。一挾物の事。串ハ三寸みつふせをわりて挟むへし。夜晝同前なり。

一常の敷革の敷様二ツ計に折て。白毛を見せ  
て持参いたし。白毛の方を主人の御左へな  
す様に。毛の有方を向にして敷なり。

一新革を入に出す時も。白毛を上にな  
様に。して持て出。白毛を御左へ成様に出  
すへし。

一革を物にかけて置も。白毛を面にしてかけ  
るなり。かりそめ敷革のうらの方を面  
すへからす。

一ひつしき敷様。毛の方を上にするへからす。う  
らうちたる方を上に敷なり。是も二つハか  
りに折て。片手に持て参り。緒のつきたる方  
を。主人の御後へなして敷なり。又緒の方を  
左へなして敷事有へし。

一敷革をは。毛の方を面といふ也。

一ひつしきハ。裏か表打たる方を面と申なり。

一小袖の取渡事。袖を入れて出。其場にて返して

渡すへし。

一小袖を受取事。二様あり。供使の時ならば。  
ひき廻して請取。自身得たらは。其まゝ請取  
へし。貴所より給りたらは。いたゞきて歸  
へし。

一小袖と太刀を渡事。如常小袖を折て太刀を  
帶するやうに出すへし。

一受取事二様有。我得たるを其儘成へし。是も  
貴所より給はら。いたゞく事も有へし。供  
の時ハ。引廻してうけとるなり。又懷紙一束  
か上ハ。又ハ扇子などにすへても出すなり。  
扇ならば。要を左に成様に持なり。小袖をハ  
四つに折て置なり。四つとは二つに折たる  
を。又二つに折るなり。袖を中へ折こめて打  
かけて置なり。ひろふたにすへすして。只持  
て出。小袖を渡して。扱太刀を渡事も有。品  
々おほし。

一太刀折紙を出事。いれ太刀。使者の太刀同前なり。いれ太刀ハ。右のなか指に。折紙の折目をはさみ。太刀のみねに。人さし指を手一文字に持て出。左にて折紙をひきわくれハ。字頭ハ必らず我前に成へし。扱太刀をは人にかせるやうに渡して。相手受ごらは一禮すへし。

一太刀折紙を請取事。指寄て先折紙を右にて取。其手にて太刀の足間をなて下しさまに取なほし。左をつきて一禮して歸るへし。

一太刀折紙を奏者する時ハ。太刀折紙を請取て御前に出。太刀を右に立折紙を左へ取分。太刀いつくよりとかゝひ。其儘太刀を御左へ進上申。折紙をそとひろけて御目にかかけ太刀の甲金をあけて。目貫の下に置へし。人よとあらは。引よせて取分て入るなり。一大きな太刀ならは。右の膝に横たへて。折

紙を見すへし。披露なり。

一書狀と太刀の使者ならは。太刀を右によき程に置いて。指より口上して。母書狀を捧。歸りて太刀を取。自分ならは上の渡し。奏者ならは常のことく渡で。先椽へ下りて各へ一禮有へし。其時かたく御誼ならは。又さへをこして御返答を待なり。酒茶以下禮つねより草なるへし。

一入部の時。太刀を進上の事。如常なれども。太刀の柄をめさるゝ様に出すなり。其儘可置なり。

一軍陣にても。入部の時のことくなり。

一鷹師に太刀を出す事。太刀をなひけて立て。身を少ひらきて。太刀を見せ。かの人の召連たる人に渡すへし。

一屋渡り移徙の太刀の事。むねをさらぬ様に渡すへし。むねを十文字に出すハ。切る心得



なり。棟木のなりに出すなり。馬の庭乗庖丁も。此心得有へし。又大工へハ中にわたす。

但太刀をは立ぬ事なり。

一主人へ客來の時。太刀を持出てつかはせ申事。酌の後より添て。小太刀ならは。左の手をおさへ。右にて指出しつかはせ申へし。又氣色により口遣によりて。其儘我つかふ事も常のならひなり。

一大太刀ならは。左に持て出。主人の御後へよりそひてつかはせ申なるへし。若所望なくは。酌へうつゝきて渡すとも。ひか事にあらす。主人つかひ給ハ、手をつかはせ申へし。一主人へ書狀渡し申事。右に文の本をとり。左にて文の頭におほひ。字頭を我かたへ取廻し。左の手のひらにすへて進上申へし。しかも人の名字をかくさぬ様に有へし。

一主人への文に。我を宛所にして。狀を得事あ

らは。狀をは左に持て出るなり。隱密の狀ならは。懷中もくるしからす。以前内見して腰帶引切て持參すへし。扱御前におゐて狀を取出し。しか／＼と披露して。文を本のことくにかい卷上卷おして。禮紙まで卷て。懐に持て退出すへし。

一文箱なから進らする事。是も左右にて持て出。御前にてひさまつきて捧可申。持て出さまに文箱に上下ハ不入。蒔繪ならは繪の上下を本とすへし。

一太刀をひたる文箱をは。先太刀を下に置。文箱を捧け。扱太刀を進らするなり。文箱をは左にて捧。右をはつくへし。

一貴人。主人へ物申承事。左の御膝を守りて可申承。只の賞翫の方へハ。御ひたゝれの袖を守て申へし。同輩ならは。顔をまほりて可申承なり。

一 隱密の事中承にハ。御左右ハ定りなし。外人の遠き方より申承へし。

一 主人ハ歌の題を進らせは。其儘あそはす様に。字頭を我かたへなし進らするなり。

一 母衣掛て主人ハ物申承事。我左の方の紐の(通)へりに。主君の御馬の鼻を置様にして可申承。褥をすゝめたらは。左の手をとくへし。馬を返す時も。左へ返すへし。

一 等輩の人へ申承ハ。右のかたへ打懸て二返右へ馬をおるへし。

一 硯料紙進上の事。硯を左に持。料紙を右に持。人の前にす。向て左に料紙をおしむけ。硯を右に置いて歸るへし。

一 軍陣にてハ。硯を右に持。料紙を左に持て。人の左へ硯を置。右に紙を置へし。

一 硯箱かけこより出ハ。そとふたをひらきて。硯の上下を見ておしむけて歸るへし。同

座ならは。蓋ハとられぬ物なり。蒔繪あらは繪の上下をたゝすへし。

一 御筆。貴人へ進らする事。扇に置いて進するなり。袖の方を要の方になし持参いたし。左へ要を取廻し。右にて扇をため。左の爪先をはぬれは。筆の軸あかるへし。

一 扇に物を据て可出事。うらにすへし。要の方を人の右へ取直して渡すへし。されハ人前への扇に物書へからす。

一 板物之事。物にすへて板の切目を人の方へ可出

一 太刀と板物ならは。先太刀を持たるを右の方へ置。板物を右にて切目を下手に抱。人の左をたかく渡し。人の取直す間に。太刀をとりて渡すへし。

一 小袖を扇にもすへ。又ハ疊紙にもすへて出す也。其時ハ四つに折てすゆるなり。廣蓋に

限るへからす。

一主人へ御ひたゝれめさする事。先大口を進らせて後。御ひたゝれをまいらするに。先御袴をめさせ。御足をあゆみこませ申て後。ひたゝれハ御後よりめさするなり。腰をあつるには。直にたゝせ申て。大くひ先をうしろのほんのくほに當る様にあてゝ。腰を引廻し。兩方のひだを二つつゝ折て。大口の上に帶の出ぬ様に折入るなり。後を當る時は。少そらせ申心得するなり。後帶より袴こしの上へ。そとなてくたすへし。

一御えはしの下もとゆひの事。先水を付ぬ先に。櫛を御左よりつかひ初て。五櫛目に水を付。結ゆひおさめて後。櫛のむねを御髪にあつへからす。就中。櫛のむねにて髻を打事調伏成へし。折まけぬ先に。ひんをつけて結なり。腹切時のかみを結に。ゆひおさめて鬢を

かく也。調伏なり。三十以前ハひんふくをひぬるへからす。四十已後ハひねるへし。

一御腰物の役の事。御装束めさるゝ間に。刃を下へして帶金をもうちにして。くりかたの間を持。御扇より初て御疊紙まで取揃て捧。其後。刀の刃を上にしてさゝけ。そのまゝさゝせ申へし。御手かけらるゝやいなや。ひねり返し進らするなり。

一人前ならず。御風呂行水などの時ならば。御帶を取。左の方にあいくちのあたる程に持。是もかうかいさしを面になして持なり。御さし有時。又撚返して。刃を上にしてさゝせ申へし。

一主人の御前に太刀刀持て出へき事。先左に刀を置。其後少遠く太刀をも左へ參らすへし。御はき有時ハ。置さためておひとりをして。太刀の柄を下手に取て。右にて帶とり

を解。其手にて足間を指上參らすへし。

一扇の事。是も要を下にして進らするなり。同輩へハかたむけて。左をそへすして渡すなり。左を突へし。上へハ右にしたをすへなり。

一軍陣にて座中の團。少御左へなひけて。扇に准すへし。

一疊紙の事。折紙のことく折目を。御方へ向て進上すへし。

一小刀の事。是も柄を下になし。刃を人の左にして。左の手を柄頭にそへて進らするなり。同程の方へハ。左をつきて右にて進らするなり

一さしたる刀を時として人に出す事。さしなから下緒をさやにかいからみて。左の方に太刀を出すことくにわたすなり。是も小刀さしを上になすなり。

一刀を御目に懸る事。刀を左右にて我右へ居むきて。そとあいさつの間に。ぬきこほして。かうかいかたを上にして。下緒をハ左にてさやに取添て。人の右へすちかへて。柄の方をいたして見せ中へし。

一刀見物の事。取て先さし刀を見るにハ。おひ金より筭つかかしら小尻まで見極て。扱捻返して。帶おもて鞘しりより。柄頭まで見て。扱右におし立て下緒を見下し。ほうひするなり。時たる「ものにて。抜て見よとあらは。一禮してあいくちをみねにかたなの付様に。やハらぬく事三寸五分の間なるへし。若悉見よとあらは。其時抜ても。先右へ居向て。帶方をみれハ。人のかたへ刀のみねをなす躰なり。扱右のひさを立。左にゐむきて刺表を見へしと也。又刀にはこりあらは。主へさいそくして拭はするなり。ほこりなくは

其儘さすなり。拔刀に向て物いふへからす。  
少そはへ向て申へし。

一御ひたゝれめしかへる時の事。御結の袖を  
上になして。ほそを我方になして。はくいを  
手先にして。袖は外へなり。身ころハ内へな  
るやうに懸て持へし。御袴を添て持せられ  
ハ。下<sup>(素カ)</sup>にかけへし。上にハ青襖をかけて持へ  
し。

一物を巾上る時ハ。父子君臣兄弟等の申詞。ち  
と差別すへし。ちこひさを直して遠く申か  
くへし。又隱密の事をは。少さし寄て可申。  
其時ハ禮におよふへからす。

一拔太刀。拔刀御目にかくる事。縦ハ左にて甲  
金を抱物つよく持。右にて目貫より端を持  
て。人の左へ刃のなりしかも切先のなひく  
やうに渡し申へし。

一長刀を進らする事。右にて柄を取て。石突を

先になして太刀<sup>(大カ)</sup>を渡す心持にて。客人  
の左にせき有とも。右へよりて立へし。御覽  
有度と承候は。かつきてそのまゝ進らする  
事も有へし。柄を御右へなすへし。

一長道具ハ何れも柄を御右へまいらすへし。

一御旗竿出入の事。出す時ハ蟬口を先になし。  
入る時ハ本を内へ入候なり。

一御旗竿を御旗指に進むる事。弓のことくう  
ら筈を蟬口とくわんして。さきと筈を門へ  
向てかけへし。出入も旗竿同前なり。

一軍陣にて母衣をかけ箭を負たらは。弓を持  
て出るなり。

一弓を持て御前の酒吞事。すねあて取。甲を持  
せて。すハちまきにて罷出。御座にて弓を右  
の脇に挟。弦の間より右の手を拔出して。御  
蓋を取。左右にてあとへ退すして給り。射向  
の袖を御目にかくる様に可罷立。母衣の左

の手を解へし。御座を立て本のこくとく弓をも。左に持なり。

一御旗竿の前を通る事。おさへて通すへからす。ひさ突へからす。左右の手を膝に納て。腰はかりこゝめて通るへし。

一大將に物具きせ申事。第一にはいたてけしやうはかま。第二籠手ひたゝれ。第三わいたて。第四に鎧。第五鐐。第六臙當。第七なし打。此七ツに御役人有。

一惣して物具きせ申様ハ。いつかたにても。敵のかたへむかはせ申。先へなし打をきせ申。其後に具足たるへし。少も御足を御後へふませ申さぬ様に。間を遠く介錯申へし。扱御籠手ハ左よりさゝせ申へし。次にほうとう御簾をおはせ申。上帶をさせ申なり。其後。こち目を合すへし。甲冑の文懸着甲冑鬨着法界耶呼蘇法三返なり。

一御甲の役人ハ。御かふとをかいとつて。左の手ひらにすへ。ひちにて持せ。同肩に打かくる様に持なり。敵の方へ向ふ様に持なり。同御弓の役人も有へし。

一御輿の内へ御太刀參らする事。御輿御うつりの後。めしなほりたらハ。御太刀を右の手にて足間を取。左にて甲金を取。座敷にて人に進らすることく。御輿の左の方へ參て。長柄の外より參らするなり。相かまへて御こしの前を通へからす。長柄の内へ入へからす。御輿のうしろより參て進するなり。御腰物をは。御輿の左へ指寄て。右の手にてさやの中程を取。左の手にて柄頭をかゝへ。むねを上にして。是も長柄の外より參らすへし。一鐙を進らする事。我踏こくとくに持て出。御前にて取直しそへ。左へ押揃。御左右につねに御踏有やうに置なり。鳩胸向てよし。御左



に成様に置とも申なり。

一 御鐙を座席に置事。はとむねを合てならぬやうに座上におくへし。

一 鞍鐙そろふ時ハ。客人の方に乗時のことく可置鞍をは手を前になすへし。又鞆そひたる鞍ならハ。鞍中へ押挾様にして出すへきなり。

一座にかくるに。鞍をは左のかたへかけへし。

一 鞍骨ハ二様なり。白骨をは前輪のかたを。我かたへ向て尻輪を外へなして。我左の肩にかけて出。つねにめすやうに置へし。又塗たる鞍をは。鞍かさの鞍輪を外へして持て出。尻輪をは我かたへして。前輪に左の手をかけ。後輪に右の手をかけ。兩方の手にて抱持て出。御前にて取直し。是も召なりに左のかたに置なり。鞍を引出物に出すも如斯なり。一 尻籠さすへき次第。さし物は内向なり。扱ハ

いづれも外向なり。さかりのかたへひねり返。尖矢をも手懸に刺へし。鏑矢をは表に刺。十六を四五とさす。上帯は鷹をつなく様に。くさり具足の草摺の間へ押入てはさむなり。

一出陣の乗馬に。しさり口乗へからす。右さうしる御目に懸へからす。

一出陣の牽馬。跡へしさらかすへからす。

一 主人より御太刀給ハる事。左右の手にて取戴。右の手にて足間をとり。左へ歸るへし。一 使者にて御太刀給る事は。足間の下へ右の手を押入て。取直して歸るへし。

一 貴人ハ御蓋をは御右にてめさるゝなり。下輩ハ左をも添る也。

一 召出し御酌にて御酒を給はる事。主人の氣色を見て。はやく自己の禮をつとめ。序に立破に歩。右の手。右の膝同程にふせさま(様イ)

に。左の手膝同ことく。盃を左の膝より以前に。右の手をかけ。扱左の手をかけさまに。左の踵を右の上へかさね。ひちにて疊にこたへ。盃をさしあげ。かしらをさけて申請。左の手をつきて。其方へ膝をひらき。頭も盃もさけて給はるなり。若かさねて下されハ禮之かへし。(酒臺カ)しゆたいをハ。左の手のひらの内へかたむけてしたみて。膝を直して向ひ奉りてさし置。いつかたへもよりはのよきかたへ歸るへし。

一御次酌申たる人は。御酌の右のかたへ指寄飲へし。御酌の御前を罷通る様に有へし。

一一只の御酌にて御前の御酌たまはる事。左の膝をつきて。賞翫の盃(盞)をはいたゝきて。高くかまへて吞へし。等輩の盃をは。口をつけてひきくかまへて請へし。下輩の盃には。口を不付して可吞なり。

一女の盃に口を付て吞事有へからず。戴事人によるへし。

一座席出入の事。縁際の禮。亭主貴人ならは。右にてなけしをおさへて縁にあかり。柱際をよきて跪つくへし。座敷主位の方をそはにして待事。定る法なり。座に入時ハ。左右をおさへるなり。縁の禮有へし。是奏者に對して。亭主等輩の時。縁のなけしに手をつく事なし。又座に入時ハ。さいのきハ一尺二寸のけて。爪先をたつへし。柱通り踏事を嫌なり。さへをこす事。左を越すハ又常の習ひなり。さひの上疊の縁踏へからず。

一幕打事。串より外に打へし。軍陣用心の時ハ。くしより内に打へし。何方より打とも。左の方より打初へし。紋を外へなすへし。

一幕の左右の長さ二丈八寸なり。幕上る時ハ内へ卷へからず。ちゝみを置様に。外へたゝ

むなり。

一幕打事も。左を如常打て。右をハ前の緒にひきとをし。それをもわなにしてい。左のこくとく軒際にてハ。角をあらせて打。芝居にては直にもうつなり。

一幕出入の事。春夏は左へよりて出入すへからす。秋冬ハ右へよりて出入すへからす。又紋の通りを出入すへからす。急用ならば。左にてちゝみを取様に三ツかね卷上。右にて外へなけこして座に入。用所を勤め。かへらは少其所をかへて歸るへし。たゝみ上る事ハ。外へおし出して出へし。吉にハ右を用。凶には左を用也。

一もり物しよくより主位を返すへし。物中事准之上座へ通る時の躰なり。

一火鉢をは。出家客來の時ハ。末座へ一足を向へし。俗客來の時ハ。座上へ一足をなして置

へし。

一鉄輪の足ハ。二足を賞翫のかたへ向へし。足を貴人へ向る事見くるしけれハなり。同火箸の事。御座定加用の走めくる時ハ。いろりの箱のふちにかけて。ふせて置へし。相伴の役たるへし。

一盃の思ひさしの事。我酌の時ハ飲おへて。銚子に取あはすして。臺をハ左に。盞をハ右に持て立。酌する人より上の本座へ持參し。歸りて銚子をうけとり汲へし。

一飲人ハ。其盞をとり下座へくじり。上座に酌を置てのまんとすへし。又酌ハ下座より上座に盞を置て。くまんと思ふへし。

一法の物吞へき事。下輩にあらず。但としや右の膝をつき右にて取。酒十分ならば。左の大指をつきて。同方のひきをつきて。こほれぬ程にのみて歸るへし。若こほるゝ程なく

は。少呑よしにて歸るへし。若御詞あらは。兩のひさを突。召出しのことく給はるへし。一御前にて食給はる膳の事。左の膝をつき。召出のことく居直りて。賞翫の座成とも。御膳まいらは。しかと居へし。めしたへて後は。膝を立る座も有へし。食のくひやうハ。先めしを三箸たへて後汁。扱めし。其次にハあいませなるへし。あいませなくは。時の賞翫を給へし。但汁をさいとつゝけて喰へからず。菜ごさいをもつゝけへからず。間にめしを一はしツゝませて可喰。精進のさいに率爾に箸を付へからず。中の汁あらは。おいせんの汁まいらハ。中の汁くふへからず。鳥の汁まいらは。おいせんの汁不可喰。又冷汁をは。うけたる時はかり吸て。其後すふへからず。かけて可喰事本也。汁さい少しつゝ喰事ひきやうたるへし。我心よせの汁なりとも。

躬物の汁を。飯の椀にかけへからず。大汁冷汁をかけて。一ハしくひて其後。躬物のしるも不苦。御座などにてハ。めしくいあけは。膝を立て中わり御湯を待へし。

一あけやうは。先さきしほをあけて。めし三箸くひ。又汁一箸。汁不吸して。内のなか盛。右の頭左の前より内の中まで。さいを喰。とめ食をくひ。むかふの中より左の頭右のなか。扱二の膳の中盛にてくい留る。又めしを三箸喰。おいせんの中盛。右の頭より左の中。本膳の右の手本にて喰納め。冷汁あらは。手をかけてくふへし。

一三の喰様。めし半分の時。三の膳上の左の頭に箸を添。食に手を付て。右の頭のさいを喰。其後。三の膳に手を付る事なし。扱ひきものをハ。三の膳の後にくふへし。

一食にひ物の汁を打かけて可喰事ハ。比興な

り。冷汁をかけ。一ハしの後ハくるしからす。

一餅を可喰ならは。二つにわりてくふへし。扱箸にてくふへき餅ならは。扱て三口つゝ可喰。はのあと月輪形にて見るしけれハなり。

一赤飯。強飯をは。右に持て左の手にて可喰。

一粥に汁をくふへからす。宿老等しるをかけてくふとも。比量有へからす。

一御肴ハ。先はしを右にて本をとりて。其手にて肴を持上て。汁をすい。其後。左へ取移し。箸を直して喰ふよしにて。箸をは左の小折敷の縁の下へ押入へし。

一削物をくふ事ハ。折敷のすみをおさへ。はし持テから。削物をハ取てくふへし。

一献々の肴取そろゑる事ハ。箸持ながら取そろへるなり。

一點心の事。羹ハ横にもる上に。一切ちいさを堅にあらは。生飯に取てよし。扱饅頭をくふ事ハ。包たる饅頭ならは。左にて腕を抱。箸持たる手にて。饅頭を取。ひらき方を面にして。三口つゝ可喰。あんこはれハ。箸にて押認てくふへし。こは饅頭のかは四ほうなるへし。よくく可見分。

一蒸麵をは。粉さらを左の手にて左へよせ。右のすみに小折敷をうけへし。そうめんの粉は。右の手よりの青躬もよし。そうめんのことくにさるなり。うち麵の粉ハ。左の手よりに有へし。うすひらし紙ハ。先胡椒。さてあんにん。扱山椒を入て。二ふりはかりかきたて。

一温飩ならは。生飯を入されハうけましと也。加用の人見しるへし。わんめんも同前なり。ひやむきをハ。手よりはかりをくふな

り。左をくふ事なし。

一御わけを被下ハ。御臺なからいたゞき少退きて。先きこしめしかけたる物を。御はしにて左の手に置て。たへはしめて其後。いかにも有へきなり。是は菓子等も如斯。御前ハあけてたまはるへし。とんしやは我飯を折敷にあけ。御わけを入。悉たまはるへし。士によりて少替様にふるまふへし。

一湯漬の事。喰よふしたては。上の一に熟柿に作物三ににしにこし物中のかしらにさしみ。中のこにあへ物。下のかしら焼物二に切目のさか煎。三にさどうしる。箸の臺。右の二と中の間に。すゝに水を入れておくへし。

一喰様ハ三箸喰。湯をうけ。そのゝち膳の組やうの次第のことく可喰。左の三より向順にくふへし。小しるを取て。吸物のことく先汁を吸。扱躬をくふへし。菜を不喰して汁を

つくる事有へからず。扱喰納時。さどうしるあめに手を付へし。然者加用再進をやむるなり。はしをすゝの水にてすゝくへし。

一嫁入御臺の迎の時ハ。貴人の方へまわし歸るへし。上の上は卅杖へたゞり下馬すへし。上ならば十杖へたつへし。何れも禮ハ貴人の右へつくへし。御輿に向てハ。男ならば馬上の時ハ。右へよする事。貴人を陰にして左におき。我陽に付へしとなり。上下の時ハ。主ハ陰。眷屬ハ陽と心得へし。又御輿ハ陰。馬ハ陽なり。女房のめしたる輿。御輿の左へよくれハ。女房とへたゞる禮なり。輿より右へよくれハよしとけいあいする心なり。故に介副の時も。輿の左をのほると云なり。左の介副ハ主人。此奏者御輿の綱付る時ハ。付納ハ右の役者御守等までうけたまはる役者に定なり。こしの綱の長さハ八尺七寸を解



て右へなけ。御輿の參歸るはつなのはしを取て。右の長柄にかけて退へし。又輿の綱弛事。公家女房の輿の綱は。左より弛へし。女房のこしにハならひて畏まるへし。男公家のこしに向て畏まるへし。

一女房むかひの時。輿の請取渡の事。一番の介副うしろへまはりて。受取人もこしの方を右より請取へしとしきたいす。渡人。左をわたすへし。渡人手をつかは。受取手も手をつくへし。女房輿嫁人の時は。渡人左の手をつき。うけとる人。右の手を突へし。女房輿にハ又左の手を突。男輿にハ兩人共に右の手を突へし。渡人ハこしの左へより。前の長柄に手をかけ。左の手をつき待へし。請取人ハ一禮して。轅のはしに右の手をかくる時。又渡人。請取人の後を立まはりて。長柄のはしに手をかけて。下手になる時受取人ハ先

の渡手のことくむきなをり。右の手をなかにかくるよしにて。一禮してすむへし。

一嫁入の時は。御こしの前にて御酒あらハ。輿へ三度禮有。御酒ハあからすして。御迎の人はかり飲なり。互の祝言有へし。御輿の右より後へめくり。左の脇に二杖はかり隔て跪。右の介添をまちて。つなをむすハせ同心に立へし。又嫁入の時ハ。陰陽とミやつかふへし。下すたれハ上は七尺五寸なり。同御輿の祝言酒肴の事第一うくしの肴。第二七しやうの肴。はしをはさかしまに据るなり。是は長柄を表るなり。箸を取時。右にて左の方より取へし。盞肴より可喰。吸物ハ後に取あけ喰へし。肴取事も陰より陽へ取へし。盃ハ大工の前より始て一禮して。奉行ハ第二として式代有へし。式代の時ハ。右へ三度左へ一度廻くるへし。手酌をする事有。輿の祝言

に馬太刀を。大工にいたす事なし。

一番に小袖か布緋。二番に刀布ハ定て出すへし。舁ハ小官造とて。さし圖をこふへし。

女房の御輿にハ。左ハ三ゆりゆりて付へし。男の輿にハ。右ハ二ゆりゆりてつけへし。

一女房迎の時輿入る事。葎の間妻戸の間より入るなり。門もあかすの門より入るなり。常

の時は嫌ふへし。御輿をよする事。女房の御輿は。左か上るなり。白砂の内をハ。中間縁

よりあけ。妻戸の前にてハ士の役なり。御輿をよせ申時ハ。御中間の方へわたす時。縁の

上より下へくたすへし。其外口傳有。一のた

いなとの御こしを。一度によする事は替るへし。上の御輿をはよせて縁に可畏。扱一の

臺の御こしをはよせて。少立退て可立。一例の御こしの事。輿よする役人。左右同程によせて少禮有て。膝をつき候事。左ハ左の膝

をつき。右ハ右の膝を突。縁の間までよせ。妻戸のうしろにし畏。主人御輿にめし。妻戸をおしひらき。轅に取つき。縁の上にて御輿渡すへし。

一夏の座はすゝみを本とす。然ハ縁に出て酒已下有事あるへし。其時は座席の高下なし。ふかく禮不可有之。

一人あまた參會の時。長座すへからず。大酒なとの上にてハ。鬭諍口論いかほとも可有。

一碁盤寸法の事。大裏の御物は。豎目一寸。横目八分。厚さ四寸五分。足三寸五分以上。高さ八寸なり。武家にて用るハ。豎目八分。横目七分。厚さ四寸二分。足二寸八分已上七寸なり。

一主人と碁を參る事。白石を畫ハ貴人にまいらせ。黒石を夜ハ貴人に參らすへし。双六も可准之。

一嫁入をして。三日の色直しの後。一座にて祝言有へし。女房のむねの守の緒をは。夫よりとくへし。女房の左にそひて。後へ右の手を廻して。片手にて解なり。かいしやくの局解事もあり。

一醺之座席にて。香を焼て人のかたへ参らするにハ。一足の方を進らすへし。

一人の方より香爐を出さハ。請取事左にすへ。右にて抱。香をきくへし。右を下にかさぬるは。賞翫たるへし。手をかさしてきくハおかしき事なり。香爐を左の手にて取。右をは後にかさねへし。

一鷹の鳥可切事。元之刀先別足を切へし。此義庖丁の大事に有へけれども。躰なれハ如斯記也。

一鷹野にての焼串の事。一尺二寸なり。刺事ハ先取餘たる方のひたれを本におろし。先ハ

手に持てあふり。其後ハ下にもさすへし。

一鷹の鳥喰様。はしにて不可喰。先右の手にて取喰初て。そのうちハ如何様にも有へし。

一射鳥(射イ)可出事。板にすゆる時。矢日本客の方へ向て置へし。

一射鳥をも褒美。鷹の鳥のことし。乍去手に置てくふへからず。

一鵜の魚可喰様。賞翫して鷹の鳥のことく成へし。

一中間に公方の太刀渡事。縁を下とをりに右を上手にして。中にやるへし。扱渡して後に一禮なし。

一猿樂に上下を被下事。大酒などの時。御青襖(素カ)ぬいて下されは。近邊の祇公の方承て可疊様ハ。袖と袖をそろへて。うはかひを我方へなし。ほその方を先へなして。地に置て。袖を身に口のことくに二つに折て。左の袖を

上になして。はくひを下へ打返し。はしをはその方へなして疊なり。扱疊て袖を袖身に口をは身にはくいとくいと三つに。兩方の指にてへたてをして持て出。猿樂を召出して。ほそのかたを先へなして。猿樂の左の肩に打かくれハ。さつとひろかりて。肩にかゝるやうに出すへし。巨細ハ記におよはす。太方此分なり。又猿樂に出す袷ハ。先せぬいを二つに折。上へ二つの袖を折。左に持右へわきをとり。猿樂の前になるやうに出すなり。又小袖をはたゝんで。左の手にてほそのかたをこり。右にて脇をこり渡すへき也。

一猿樂への禮も。馬の時ハ杵の禮なり。歩の時ハ詞の禮たるへし。賞翫せんより譽録せんにハ如しと云々。

一猿樂にハ主人以下の人々。御上下或ハ御青(素カ)

襖を下さるゝとも。御近習の衆ハ思慮すへし。御意候ハゝくるしからず。加用にひれなきハ見苦ければ也。

一菓子之事。飯の後菓子ハ定て楊枝を添ふへし。其時ハ楊枝計とりて座に置。菓子を喰ぬるも。點心以後の菓子ならは賞翫すへし。

一引落の物ならは。殘多様に取なり。賞翫の人ひく事あらは。左を下にかまへて引へし。右を下にかさぬへし。

一さし躬をは。可喰少以前に。三切ハかり酢鹽にひたし。しはらくあらせて可喰。上に横に一切有をハ。生飯に取へき物なり。

一あゆの魚已下の物をハ。左にて小折敷を持上。箸にてになひてよせ。一のひれを喰所を(折)さためて。はらを外へして。打返して置也。

一雲雀ハかけ爪よりくいそめへし。

一鶉ハ頭より喰初へし。喰所なる故なり。小鳥

ハ皆可准之。

一別足ひき鷹の鳥ならは。持上て賞翫すへし。唯の鳥ならは手付へからず。一物は皆可准之。

一座興褒美ハ相伴なり。長衆のわさなり。褒美すへき物ハ。遠くより来る物。はも。からすみ。ほや寒汁。鯛魚。鳥の初可准之。

一法飯。傍飯。菜飯とも。三つの仕立心得有へし。何れもわりのめし成へし。法飯ハしやうしんに限る歟。のり以下の物を粉にハ置物なり。若再進出したく思ハ、酢菜四の手方に。兩方に粉を置なり。其粉の有程ハ□るなり。然れハ再進二度より後は。粉を残すへからず。

一傍飯ハ狩場などの小飯なり。汁菜調なき芝居などにてハ。けつり物をめしのうへに置。汁にても酒にても湯にてもかけてくふへ

し。再進有へからず。酢菜二さし有へからず。一菜飯ハ。病者の前にての食なり。扱精進眞魚は。ぬしの好に隨ふなり。削物二を置て。汁を引へし。是も病者の心を養はんか爲なり。再進とハ衆之事有。然といへども。凡人のむさに菜飯と號す。

一惣別物給はる口音。我ともに左右七人へきこゆる様に有へし。

一人中にましはる事。いかにもゐんきんにして。我より下輩の者にも。着座の時ハ禮有へし。若遅參の座にてハ。先口に有皆々のかたへ禮を致し。扱人々客居の座へ請せは。左右へ押詰て式題し。我在へき座より少下かと思ふ躰なり。<sup>はい</sup>上座を心かくる事。田舎人のわさなり。獨上薦とて。かたはらいたき事なり。座の次第ハ。主人より公方の定こそほんなるへけれ。等輩の座にては。すなほにして

高下有へからず。若用所ありて立座すると。  
座に歸りてハ。我より下に有へき人をも  
おし上。我座の上にあるへし。盃の禮も。あ  
またへ皆人ふかくいたすは。還て緩怠なる  
へし。殊に病者の前。評定の座。連歌の座など  
にてハ。左右へはかりしのひやかにめし上  
候へと申へし。乍去さる比。土岐大膳大夫。  
都にも座敷を造り。御成の以前に。諸大名以  
下移徙にしやうたいす。客位にハ當官領京  
兆。主位にハ親公左京大夫其以下大小名奉  
公の面々迄。左右に座列す。半に赤松上總入  
道到來す。然とも皆々例式の家立にて。赤松  
の座をしきたいする事なし。久敷有て入道  
事あしけに風情見へき。亡父座を立半に赤  
松の下にやすらひ。當時物語少時有之時。惣  
座の老若悉立て満座す。其時もこのことく

各の座席定まるなり。時の思慮當座の名譽  
とほうひしたりき。其時。赤松ハ一期の志と  
度々申たりきと聞えし。

一弓を可渡事。右の手の上のかたへ弣より三  
寸。同輩ならは二寸。下輩へは一寸なり。左  
手上へハ手の平。又同輩へハ本弣。下輩へハ  
せんたん卷也。

一弓取事。上中下品同前也。

一銚子を渡事。長柄ほしの下をいつしきに手  
をかくへし。同はい下輩ハ。其人の心得たる  
へし。

一銚子うけ取事は。上中下同前也。

一鎗矢神前に納る事。夜晝によりて。陰陽の矢  
を納るなり。たとへハ宮内に陣をとる時ハ。  
鎗矢を納るなり。其矢に四手を付祈様有。ひ

るハ陽。夜ハ陰と心得へし。晝ハ社壇(壇下同ジ)の左。  
夜ハ社壇の右に納むる。又陽ハわたくり。陰



ハかりまた也。

一太刀折紙自身進上の事。太刀をは右に。折紙をは左に持て出。太刀を主人の左のかたへ進上申。折紙をそとひろけて。御目にかけて。太刀の甲金をあげ。目貫の下に置へし。風の心得なり。

一太刀折紙奏者に渡す事。其儘渡すなり。受取へし。

一五種の引出物の事。初献に御太刀。二献に觥。三献に御きせなか。四献に御馬。五献に武具たるへし。

一腹巻ハ一人役なり。但袖冑そハ、鎧同前なり。只御目にかくるも。左の御わきへ可參。我右の脇見せ申へからず。又々努々むきあわせ<sup>す</sup>へからず。大方いぬるを見せ申へし。口傳有之也。

一御太刀折紙出す事も。猿樂と平人ハ替るへ

し。猿樂にハ御太刀下されハ。是も御こしつけの役なり。太刀を右に。折紙をは左に持て出。猿樂をめし出し。目より高く折紙を下に。太刀を上にして。横に渡すなり。同御家人老しき方より。御前にて出す太刀刀ハ。自身御出し可有。左様の時ハ。右にて持て。左手を公方の御前につき。片手にて少ひきく渡すなり。地に置事なし。

一猿樂。遊女。白拍子などに太刀出す事。太刀を如常出して。おひて下さるゝと申せいかいの遊女は取て。太刀のつかを右の手にて取申時。渡人。太刀のさやにさなから手をそへて出す也。

一曲舞田樂に太刀取する事ハ。式のほうをつかふへからず。太刀のつかをさし出すなり。一猿樂に小袖を出す事。妻戸のきはに役人畏り。御廉の内より小袖一のたい御出し候を。

御内近き若衆の役なり。着物を三ツに折て。左の袖を三ツにして疊なり。扱御小袖(そ脱)を持出て。太夫をめして。すそのかたをどへして。左のかたへなすやうに。目より高く渡すへし。又猿樂能をしたる時。座敷より被下事ハちかふなり。芝居へめして。猿樂にとらせよと仰あらは。伺候のわかき方。此御小袖を取て。左のかひなに打かけて。すそをかたへ懸るやうに。すそをは右の手にかゝへて。舞臺か御座敷のはつれにめし出して。下さるゝそと申て。猿樂の右の肩に打かくるやうに渡すなり。

一行騰の事。切て付たるを引そろへて有のはしを折て出すなり。沓そふる事も有。左右の手にて持てよりて。客人の前に右の膝をつき。左の皮を上になして。毛先を我かたへ向人の左のかたへ。少すちかへて置なり。扱左

へ歸るへし。おひかねてそろへへし。一刀を人に出す事二ヶ條有。おし立たる引出物の時ハ。刀のなりてそへて。盆のふちよりさかるへし。又常の時出すにハ。刺なから下緒をかいからみて。右の手にて太刀を出すことくに。左のかたへ出すへし。是も小刀さしを上になすへし。又刀。御目にかくる事ハ。刀をかうかいの方を上にして。つかの方を出すへし。又下緒をハ。左の手にて刀のさやに取そろへて。人の右へすちかへて出すへし。刀の盆かへす。但内し有へし。

一扇に物をそへて出す事。うらにすへし。要の方を取直し。人右へむけて出す也。

一主人の御弓張事。主人に筈を向てはるへからす。す引二つはかりすへし。同弓を主人へ參らするにハ。弦を上へなして。弓手へ進る也。

一軍陣馬上の弓進らる事。御弓の役人弓を持て参り。御馬にめし。鞍なおりたまひて後。弦を内へなしてめさるゝやうに進らする也。努々後竹頰をも。主人の御方へ向へからす。鐙の鼻に書文字有。同文を可唱なり。

一主人文御覽の後。火に入よと仰あらは。御前にて引き持て立。火に入る也。

一御盃をまいらす事。酌とり心得て。賞翫の人ならば。左に置なり。つねの人には中程に置へし。又盃出にハ。客人賞翫ならば。其方へよせて置なり。

一鬼のみの事。主人にむかひ申て飲也。

一御酌を取膳も。上中下に取りくみて。三足しさりて参らするは上々。次ハ二足。又其儘も有へし。酒をくみてかまふるも。上中下の品有。

一銚子盃持そふる事三ヶ條。貴人聞召候をは。銚子より高く持。又少賞翫の盃ならば。目通りに持。又同輩のさかつきを。銚子より少さけて持也。御盃はしめて参らする時ハ。てうし盃。目通りに可持。

一御祝言の時の酌之事。つねハ上座へ向て歸るなり。祝言の時ハ。座上へ向てゆきてハ座下へ向て歸り通へし。又くわへとの間をもむすふなり。結様に品々有。

一御次酌の役人ハ。主人御酌の時ハ。御一門の役なり。只の御酌の時ハ。若き人の役なり。御次酌ハ。公家にてハ御ゑんに有て。御酌立てむかはハ。敷居をこしてくわへ申へし。但長座敷など又亂酒の時ハ。餘り物遠なるは。しつけにあらず。御次酌も又受取渡有へし。賞翫のかたへは。右の膝を引。左にて口のもとをつるを取。右にてうしろのつるのもと

を取へし。いづれもく下手に取て。つる中をとらせ申へし。又同程の方へハ。口のもとをつるを。右の手にて取直なり。左の手をおさへ渡す也。

一提子請取事も。賞翫の人としてハ。左をつき右の手にて下手にかまへ。しはらく式代して下手につるを取て取置。左の手をは後にかくる也。

一酌も次酌も。軍陣にては別なり。

一鷹の鳥出す事。かななかけに置て。それにすへて出すへし。鳥の頭を庖丁人の左へなしで出すへし。

一鶉の魚請取も。かさにてうくるなり。かさなくハ袖にても不苦なり。

一まな板出す事。二人の役也。先を後に成様に座敷に置なり。切て後。右へ歸る也。賞翫の人。跡をかくなり。惣して鎧腹卷の役人も。

跡あかる也。

一きせなか受取事。上手ハ先歩みて出て。主人の御座のかたへよりて。しんさく有てより。下手ハ目と目を見合。禮有て請取。進る時も下手への方へかゝりて請取。歸る時上手に成へし。

一引物の魚ハ。おりて手を喰へし。打返して不可喰。鮎の魚喰事。一のひれのもとを打返して置へし。

一幕の物見より内にてても外にてても。目を見合すへからず。

一厩の事ハ。何間もあれ。口もとを一の厩とハ申なり。

一路次の禮の事。人に行逢時ハ。我左の方を通るなり。

一城の名の事。味方の城をハ要害といひ。敵の城をハ破といふ也。

一關口と申人は人により先に物を申ハ。禮有ていふ也。

一妻戸しとみの前の禮の事。御座敷へめさるゝ時ハ。余成口ふさかりてすぎなくは。妻戸の間へ参りて。手をつき戸を見上祇候せよ。只まいれと仰あらは。其後。扇を置いて参るへし。

一御太刀を力者にわたす事。若せはき所ならは。地に立て鏢の下を片手にて持ハ。力者石突の本を受取なり。又長太刀を持て。力者のかたに打かけて歸るといふ説もあり。

一蠟燭ともして参る事。右の手に持て。主人の御方へ燭臺の足を一つむけて置なり。前足あいせはき主人へむけ申共申なり。又足あいせはき方を。主人へ一足を座へむけて置也。佛前神前にては。本尊のかたへむけて置なり。

一蠟燭を持て用心すへき時ハ。左に持て右の手をあくる也。

一火先を取にハ。左にて臺をおさへ。右の手にて蠟燭をぬきて。左の手へうつして。先をはさみ切て。少時持て蠟燭の火を見定て。能ともしてはほりを水に入へし。扱右へうつして左にて臺をかゝへてさす也。しよくせんなくハ。筭小刀にてもとるへし。

一香爐の灰の事。神佛亡者などのをは。逆にうちへおして廻すへし。御客人主人などの用の時ハ。順におしてそこへまわすなり。一てうかたにておすなり。ふとき筋を間に立へし。又座敷に置事。蠟燭の臺の足と香爐の足は。一つ足を座にむけて置へし。佛前神前ならは。其方にむけへし。

一尻籠の弓。只の弓とうの名所の有へき事。弓弣より卷たる物見簾なり。弣より下に卷た

るは。引目たゝき籐なり。鳥打邊に巻たるは。長命の藤と申なり。本弭矢すりの籐をは。せんたん巻籐と申也。

一 一そく拾の事。兩切かけを指て。皮うつほをつけて神頭をさし。鞭をさすへし。御供の時ハ。沓ハ不可候。きやはんハ朱成へし。

一 沓の仕立やうの事。熊の皮本なり。毛の方を外へなしてこしらへハ。中ハ鞠の沓と同事なり。口傳。

一 神頭さすへき事。三つさすなり。此内二つハ外向なり。一つは内むき也。

一 神頭の羽の事。鶉の羽もしなくは。小うこひひらの尾。山鳥の引尾もよし。羽長ハ四寸二分。卷目の事五分。下の卷目七分。筥巻口傳。數は三つも又一つも可刺。鞭ハ竹の根も不苦なり。

一 策の長さ三尺六寸。又三尺三寸なり。又三尺

六寸もとつゝか長さハ六寸二分。短にハ五寸八分なり。

一 馬上の弓の事。弣より五六寸上を持。馬と弓と矢摺をミつ(素カ)なわに持へし。弦をハ下へ成様にして。青襖の袖と弓の弦の間四寸ハかりに弣を出して。弦より一そく上を持納なり。たんれんせよといへり。若おりたゝす弓をかつきて畏。主人御馬より御おりあらは。弓を横に持へし。

一 馬の上の三ツ物。弓を持なからかさ(ふ)をさす事。弓をハ馬の耳の右をこゆるこへすに持。弦と手綱とからかさ(ふ)と。左の手に取そへへし。又弦を小指にかけて。弓を持と申なり。からかさの柄にそへて。めさるゝ所までさくるなり。御にきりのもとに。弓のつるをめさる時は取也。

一 引馬の鞍おほひかくる事。夏も秋も若ハ春



ハ毛などの決を用へし。熊の皮をは掛酌有へし。何にても毛先を馬の左へかけて。おほひの緒を。兩方の力皮に付て。むなかひにて引まはしてとむるなり。

### 騎射門第三。

一騎馬の事。上ハ下。中下ハ上と知へし。門送に經を結ふ事なかれ。

一一束十の事。諸ゆかけをさして後。竿を着て神動をさし。鞭を指。やかて弓を取。馬に乗へし。御供の時沓ハくへき事なし。脚半は襦子たるへし。

一沓の仕立やうの事。熊皮上本なり。毛のかたを外へなして誘へし。内ハ鞠の沓と同事なり。

一神頭指へきやう。三五ハ調なり。二四ハ半なり。三の時ハ。二ハ外向。一ハ内むき。五の時ハ。三ハ外向。二ハ内むきなり。

一神頭の羽の事。鶉の羽なくは小厭尾。山鳥の引尾もよし。羽世ハ四寸二分。羽なりハ習有。卷目の事。上の卷目五分。下の卷目七分。筈卷口傳あり。

一鞭の長三尺七寸。又三尺三寸なり。又三尺六寸にも有へし。取柄ハ長きは六寸二分。短きハ五寸八分也。

一馬上の弓の事。弣より五六寸上を持。馬と弓の天指をも。三ツかなわに持へし。弦をは下へなるやうにして。青襖の袖と弓の弦の間四寸ハかりに弦を出して。握より一束上を持。細々たんれんせよといへり。若おりたらは。弓をかつきて畏。主人御馬より御おりあらは。弓を横に持へし。

一馬上の三物。弓を持。からかさを指事。弓をハ馬の耳の右をこゆるこへすに持。弦と手綱とからかさを左の手に取添へし。又弦を

小指にかけて。弓を持とも申なり。からかさの柄に添てめさるゝ所まで參なり。御にきりのもとに。弓の弦をめさるゝは夏なり。

一牽馬の鞍おほひかくる。夏も秋も。若ハ春毛の皮を用へし。但熊の皮をハ斟酌有へし。天子ハ熊。諸侯ハ虎。太夫ハ豹皮なり。何皮にても芒を馬の左へかけて。覆の□を兩方の力舌付て。むなかひにて引廻し留る也。

一騎馬うつへき次第。嫡子一人相傳と云。同騎馬裝束の事。烏帽子にひたゝれ。又上下ハ例式なるへし。脚半沓をはくへし。沓をは常にハ左よりはいて。右よりぬくへし。

一主人の沓の事。かいしやくハめす時ハ沓の手をひるけ。ぬく時ハ跡をおさへゝし。

一平人ハこ沓なるへし。簾ハ夏毛本たるへし。一上矢にハ。山鳥の引尾の神頭三鞭を合て四ツを。藁の上にひらき立刺へし。弓ハ赤漆成

へし。あをりすへからす。但鎧摺ハ不苦。あをりどハ。毛皮の事なるへし。幡<sup>(皮)</sup>にて丸作たるハくるしからす。

一沓も佛詣社參の時ハ。右よりはかせ申。左よりぬかせ申也。

一騎馬の時の弓。黒弓に籐つかいたるもよし。籐のつかひやうの事。より折にしたかふなり。いかさま誘弓也。

一籐の名所。弣より上に卷たるは物見の籐なり。握より下<sup>(邊)</sup>に卷たるは。ひきめたゝき籐也。とり打廻にまさたるをハ。長命の籐と申なり。扱本弣末弣に卷たるをは。梅檀卷。千反卷とも申なり。

一騎馬の弓ならば。弦をもあかくぬるへし。黒弓にハしらつるよし。

一空穗に刺添る神頭ハ。三一其外數有。組二ハささぬ事也。

一馬上の鞭十の緒を結添るなり。もろゆかけの渡様。先御馬の右へより。以前に鞆の緒をこひて。右の十を皮緒を三さうにたゝみて。左おほひの中に置。指先を我方にして。右にて進らすへし。次に御策をは右にて轡のひつてをとり。左にて策をかくし。轡をならせは。馬の心其方へちとかふいなやに。左にてそと渡し申なり。馬をおとろかさぬ故なり。次に左の御十をハ。又緒を三さうにたゝみて。左おほひの中にする。ゆひさを我方になして。左にて渡申へし。

一兩十の指様ハ同緒の留様之事。先たつなを左の小指にかけ。右にて右十を取。うちかへして見れハ。緒ハゆらりとさかるなり。扱指事。檀戒三とさすへし。緒の留様。一からみ巻て。ふたからみめをひねり。大指にかけひきつめて。陽へハしを留へし。扱鞭を請取。

貴人ハ其儘鞭先を目を付。かたにかけて。くつろけて一文字に指へし。平人若輩ハ。鞭先を見さまに振なをし。乙のこく指<sup>(てい)</sup>へし。扱左ゆかけを受取申。右にて手綱を抱。又うちかへせは。下へさかるへし。指様ハ惠法願力智と唱へ。緒の留様ハ。大指にかけすして。二からみめに。手の甲に捻りて。儘へてむけて留へし。是小笠原の大事なり。十貫一ふりより内にて不可有之。

一ひもは常のこく。烏帽子にハかけ緒あり。一簾の穂皮の事。鹿の皮本也。昔ハ猿の皮をも嫌はす。今は聶入嫁娶の時ハ嫌なり。只おりによるへし。其外。虎豹の皮。いかり毛などハ。事により人により斟酌有へし。

一鞭ハ竹の根のみにあらず。熊柳其外四季によりて。替儀有といへとも。熊柳竹の根を。<sup>(なすい)</sup>常に用と心得へし。但時によりて可用。長短

ハ是も同じ。長鞭ハ春の物と也。

一十の緒の長。おのかたはかりなり。手にくらへて一折半三ふせなり。同十の上は紫のとも皮。中は紫に續拾下ハ高山皮丸文等ともかわなるへし。しら皮ふすへ皮。人によるへし。

一いまた馬上ならさる人は。一足なから十を一度にも不苦也。

一鞭をうつほに添てさすへし。神頭ハいくへも手よりに指へし。神頭ハ雉のつはを付たる白簷陰陽祝言にハ指へし。三さゝハまはをなへてハ是を付へからす。圓物神頭なごハ又心得有へし。三さしの神頭の時ハ。節の樣ハ十二束ならは。五筋の内羽中に有射付のふしハ。神頭より一束又ハ三ツかけもよし。羽用ハ四寸二分。亦三寸七分。但矢束によるへし。唯見よき様に用捨すへし。

一雉のつ羽ハ。本のふくけをすの内へ羽とるなり。

一簾に指方拔方有。矢數ハ九ツ又十二なり。根をハ身よりに刺なり。内より指はしめて。手寄を拵はしむへし。

一馬上にて白木弓は。白木むらこきなと持へからす。但むらこきは。笠掛などに人によりて持事も有へし。なへてハ斟酌有へし。

一春などは白木も緒をたにぬれハ。馬上にも持へし。弓は籐のうへぬるへからす。籐のつかひハしめ留る所ハかりは。見えぬ程に漆をもさすへし。それさへ弓によりて。左様にすましきもあり。ぬりこめ籐と中。又別の事なり。

一馬上にて弓を請取事。五方有へし。向より馬の耳の本より進する事も有。又むかふ左右おつさまより左右合五方なり。何れも法を

ちかへす目禮をすへし。弓杖にて馬に乗事。  
馬を引立。弓を持。馬の左の乙さまを通り。  
馬の左の方の手綱をさんたんを取。鞍の前  
輪にかけ。右の手に弓をつき立。馬の前足六  
寸のけて。弓弦を外へなして馬に乗へし。扱  
手綱を定。鞍なをり。弓を左へ取直し。馬の  
目付所を見へし。耳の間なり。耳の上六寸を  
見れば、我かしらかたむかざるへし。是もか  
ねの大事なり。乗時ハ弓手にて。この山形に  
手をかけはのるへし。おるゝとき。鳥打を右  
のさんたんに取添ておるへし。弓の廻しや  
う同前なり。

一御供の事。主人の御馬より一町ハかり隔こ  
いへとも。其人數により。又知らぬ山野など  
の路次にてハ。心得有へしと仰出されハ。法  
もいらぬ事なり。主命にまかすは是又法な  
り。騎馬といふ事は心あり。是は御馬の次に

打人の馬のはごらいなり。一町のたいかん  
ハ、百廿なり。

一御先打の事。是も間ハ一町計なり。然とも主  
人の馬の打様にて。つゝけて打給はんも計  
かたし。心得やうによるへし。大方は同意得  
なり。されとも其日の先打は。内外共に心得  
て。惣の衆に替る所有。弓の持様など時によ  
るへし。

一時として主人。御先へ打とおれどあらむ時  
ハ。主人の弓手を。其方の沓をぬきて持せて  
通るなり。貴人の御左にせきなくは。右の方  
を弓の禮にて。沓をぬいてもたせ打通ては  
くへし。

一或は射へき物により。あるひハ用心のため。  
所によりて弓に雁股尖矢。中指などを持そ  
ふる時。末宮の方へ根をする也。

一騎馬うつほとはいへとも。騎馬弓とはいふ

へからず。只馬上の弓迄なり。同うつほの緒の事。まち緒。懸緒。請緒合三ツなり。

一 般の付様。士凡下にかはる也。

一 士は主人の太刀を帶そふへきゆる。おしまはして付へし。

一 凡下ハ上帶をする物なれば。はふと付へし。

一 騎馬の時の嫌物の事。大きな鞍のふしうつほを付る事。禮の外なり。袖ほそ十徳の類。同肩衣は時によるなり。尾袋畧儀なり。

尾をとる事もなき事なり。腰當是又。上下の上ニハ似合す。十徳に旅出立の時は。沙汰の外なり。般の上帶。馬のふりかみを卷事な

れ。葬の髪をたにも。禮儀には一ぬく事有。おもかひやすめも遊覽に有へからず。たな

わさす事。惜をおもきとて。上に帶なとする事有へからず。野伏などの時すると心得

へし。公家女房の供に立事。行合人に禮の時

は。騎馬の人おりて禮すへし。騎馬の時。供をつれへき人衆の事。番小者先を通へし。歩弓ハ人衆あり共。主人より跡を通る也。

一 宿入宿中宿はつれもいふ事。宿入の時は手綱の禮。沓の禮。弓を右へとり直し禮すへ

し。宿半の禮とは。馬を右へおりて通すへし。宿馳にてハ鐙けはつし。沓の禮有へし。

うはさしの神頭を一ツさすへし。しらすとも不苦。宿に限りての事なり。前後左右の手綱といふ事有へし。

一 からかさ刺て弓持にハ。柄たての中へ能々さすへし。

一 我人弓持馬上の禮の事。我より賞翫の人ならは。弓持たる方を通すへし。弓手の沓の禮

にて透すへし。并弓の禮。

一 馬上五つの禮の事。第一。弓の禮とは。弦をかひこむなり。第二。十の禮手覆をかへすな



り。第三。沓の禮。鐙を蹴はつすへし。第四。手綱の禮。兩方の輪をとるなり。第五。母衣の禮。手解へし。

一馬上の弓射る時。ハたぬく事勿れ。

一貴人同心に乗馬の時。かけ向ふ事。我左の方を向へし。先騎馳せよと仰あらは。馬の跡へ打まはし。馬の左へ通すなり。扱又主人の跡を通して。沓の禮有へし。

一御供の時から打と云事。大口直垂さやまきの刀を刺へし。然れハ箠の上矢刺へからず。路中の事也。

一洛外への御出の時ハ。騎馬の供の出立の事。えほし。上下。もゝたて。繻子の脚半ハ此時なり。弓ハ重藤より外ハ何にても可持。鞭を外にさすへし。

一騎馬の役之事。先打ハ御劔の役。中打ハ沓の役。後陣ハ奏者の役。さし笠の役とも申な

り。先打餘多の時も。此心得成へし。

一御狩場の供の事。騎馬六騎なるへし。出立ハすいかんの行騰にて沓をはき。白やなくいの尻籠を負て。上矢にしめを可指。羽ハこりはき也。弓ハおもひくなり。

一貴人の弓にて禮する事有へからず。何役の時も其物をあつかふ間。餘人の禮有へからず。

一鷹にあふて弓を持禮の事。弓を取廻して。鞍の前輪にかけて禮すへし。弓を持たる時は。手綱の禮有へし。馬ハ鷹をよけへし。賞翫ならは道より下へうちおろし禮すへし。馬より鷹の上りたれば也。

一公家女房に向ての禮の事。弓を持たる時は。我右の方を通すへし。手綱の禮有へし。手綱の禮とは。輪を取かゆるなり。

一弓を持たる時。弓の禮有へし。兩沓の禮とて

あるへし。

一物詣社參。むこよめとりの時の騎馬之事。女房迎の時ハ。紫竹の鞭ハかり指へし。出立ハ同前なり。簾さる皮。にくの皮。熊の皮付へからず。馬左目馬。足毛。鶏毛乗へからず。

一物詣社參。惣して先打の事。沓にてもさうりにても、はきたるものをぬくへし。京上などの時は。御免にてはく事も有へし。

一御先打ハ必ず一騎に定りなし。二騎も三騎も有へし。其時ハ一騎つゝも打つゝき次第跡あかるなり。弦を下へなし通へし。墓日の役とて。犬射ひきめを弓に取添て持へし。障帷の物を射へき故也。

一輿との式題の事。下簾かゝりたらは。輿より右へ。下は手を突てとかく禮をすへし。下簾かゝらすは。輿より左へ打よけて通すへし。

一輿と騎馬との間。七騎へたつへし。手綱を不

可指。二毛の馬乗へからず。

一鷹も贅ハ不及禮。但せこ一人おりへし。鷹居笠をかたむけ。鞭を手に持へし。

一輿に鷹の禮。輿をよけへし。輿の禮ハ輿を立るなり。鷹の禮打向て鞭にておしなをすへし。つれたる者の詞也。

一車にハ輿よけへし。輿にハ馬よけへし。輿の禮ハ。前よりさまの明たるを。たてたるを明るなり。

一輿に鷹むけてふちにてなをすへし。其上にも輿をよけへし。つれたる者の詞也。

一車に乗て牛にあひての禮。牛をうたせて鞭をあくへし。輿の禮。さまをあけへし。明たるこしならはたてへし。

一車と馬と行向ふ禮の事。ほそ道などにて。我馬を道よりおろして禮すへし。

一我人馬に乗て禮の事。細道などにてハ。我馬

を道より打おろすへし。相手もかならず打  
おろすへし。賞翫ならは相手の見る方の禮  
有へし。沓はかすは。鎧の禮有へし。通る間  
を少ひかへて通るなり。目下の者ならは。馬  
を道より打おろしたるまでにて。禮(有イ)あるへ  
からす。

一騎馬の事。遠所ならハ。路次の内ハ皮袴袖細  
(肩カ)有衣にて出立へし。近所にてハ例式のこと  
く可出立。宿へ行事。簾の間ふさきを取。う  
わさしをぬきて。うつほに納め。本のことく  
して。うつほをととき。同前に渡すへし。鞭を  
も渡すへし。沓をも急ぬくへし。條々口傳あ  
り。

一夜なと弓箭を帶し御供の時の心得。夜なと  
御供の時。小袖にても袷にてもはたぬき。袴  
計ひきくつろけ。やかて肌ぬくやうにすへ  
し。用意には尖矢を取そろゆる事同前也。矢

尻をうら弭へなすへし。

一馬上にて物を射事。紐の納様。常の紐を結様  
に一結して。二つにわけて。兩方の袴の脇に  
押込むし。

一母衣かけ武者ハ禮をなす事。大威徳の緒に  
我大指をかけハ。如何成事そごふかく禮を  
致すへし。

一うつほ付て御供いたすにハ。かち立ハ弓を  
横になして畏り。騎馬の人は弓をかつくへ  
し。但主人馬より御おりあらは。弓をは横に  
もつ物なり。

一犬追物の時。追出す犬の事。弓墓日とり添  
て。主人の御方へ追かけへし。ゆめく射る  
事有へからす。

一笠掛の馬場の事。貳十七杖たるへし。的をか  
くる事。凡おもてにて人に抱させ。先上を付  
て。高さの法量を相はからひて。其後。前の

串にかけて。扱後の串に付へし。弛時は後より

はつし。前に弛。脩上をはつして入る也。

一弓杖を打時ハ。本より馬場の末へ打へし。十

度打てハ。腰をすゑてうちくすへし。

一沓を主人にめさする事。左より召させ。右よ

りぬかせ申事同前なり。参らする様は。御袴

のすそを中へ押入て。ゆるくと引直して

罷退なり。ぬかせ申ときハ。踵をおさへし。

し。

一主人馬上にて等輩に御禮有時の躰(る)の事。主

人御禮有ときハ。騎馬の方は馬よりおりへ

し。

一相生の弓の事。縦ハ白木ハ金なり。塗絃ハ水

なり。金性水の故なり。黒弓に白弦も其心得

也。白木に白弦ハ相かはるへし。

一相尅の弓の事。縦ハ塗弓赤漆ハ火なり。白弦

ハ金なり。火尅金の故なり。白木赤ぬりたる

弦ハ亦相尅也。

一軍陣にて大將又ハ主人の御用にかゝる事

ハ。尻籠にても鞍にても付は。弓は持て其間

より常のことく御目にかゝり。矢指をとり

よせて。弓と弦の間へ左の手を入れて。その間

に禮を申へし。

一軍陣にて被疵候時も。尻籠空穂を付て。御目

にかゝるへし。徒にハ御前へ出へからず。

一騎馬の時。弦もぬるへし。白絃ハ不禮也。

一もろ鞆緒の留様ハ。右をは如常。左をは大指

にかけすして。かいなにからみてとむる也。

一馬上の鞭鞆一度に可進事。先右の鞆。扱鞭を

進らせ。後に左の十拾を進すへし。かち立の

時は。一足なからも一度にも二度にも参す

へし。

一弓張事。其日の貴人に我身をむかはせ張へ

し。

一騎馬の供に。かち弓七張より外ハつれへからす。

一馬上の弓を進らする事。侍ハ馬の頭より弓の本筈を進らするなり。けしき馬ならは。持ことくに渡也。

#### 歩射門第四。

一弦つくるへき事。末弭一寸五分。本弭八分なり。一説天指一寸八分。本弭一寸三分也。

一披の下四寸五分。披の上五分。披の下五分を七節に卷とむへし。

一的山つくへき事。何方につくとも。其宅を懷たく様に有へし。

一陣にての的場ハ。敵方を矢先になすなり。弓場打にハ。張弓にて弓立より的山の方へ打へし。弦を下へなして。十度と云時ハ。畏てうちくすへし。縦ハ陰なりとも。いくつと答へ申へし。秘事なり。かたちは竹馬を表る(脱アラン)

也。

一丸物かけへき事。築地と串との間より持て出へし。心中に見あてかいて。下に置いて左にておさへて。右手にて後の串に付。扱前の串に付へし。扱上をつるし。馳す時ハ。前の串よりうしろを解て。緒上をとくへし。

一庭の弓神頭の時ハ。矢つきの前二杖のけて跪へし。

一四半九半の時ハ。一杖なるへし。

一草鹿圓物の時ハ。弓場殿のきわに有へし。

一三的の時ハ。庭の外に祇候すへし。

一小的の時ハ。弓立の方は三杖のき。あつちの手先より七杖のきて祇候すへし。

一座中の弓あそび。貴人はかり見物すへし。其外ハ矢取一人計なり。其外の衆ハよそめなり。目をあけて見る事あやまり也。是に限らず。諸稽古内學を見る事。不覺よりおこれ

り。殊弓遊び見て。左へ不可歸。是ハ射手を笑ふことなり。是ハ弓めてのたうるをいふ也。

一弓場へゆかけ持事。矢筒にはうわを計付へし。然ハ矢筒の緒をとけは。ゆかけのうけるなり。是も若黨の役也。

一御弓矢筒持事。御弓をは右。矢筒ハ左成へし。何をもかつき。左右のゆひさきにて。本弾と矢筒のうらを抱。弓場へ參。主人の御下に參りつき。主人我間に御弓を立。矢筒を右のわきへ取うつし。緒を解て御ゆかけをハ。左を地につきて。右にて參らへすし。參らせ様ハ。三さうに緒をたゝみて。たおゝいにしすゑて。手の面を上にして進るなり。偕主人。御ゆかけを召れ打返したまへは。御緒に苦身有へからず。其間に御矢筒の役者。左の手のひらに。御矢筈を移し。ちと膝を直し。

御目にかくる時。いつれの矢と仰を受て。其矢の筈を中指無名指にはさみ。餘の矢をは。さらりと可入。緒御目違により。御てうつを捧。主人御箭を御取定あらは。御弓を取上の渡しに進上申。扱御矢筒のふたをして。おしたてゝ待所に遊ハしおへて。御歸りの時。走向申候。御たゝしを給り。弓立にたて。御こほらし參らは。御てうつ請取て。筈を先紙にてふき。ふしをはらひ。緒いたつけを拭て參らすへき參らせ様ハ。筈を右になし。鏝を御左になして捧へし。右の手にて射付(は)のふし。左にて袖摺の邊を取へし。然れば主人ハ中をめさるゝ也。

一鋪革の事。射手の敷皮ハ。三流に三様なり。敷やう持様うらおもて等。天地雲泥也。

一弓まはりの圓座を敷事。あみめを表になす。但座配の様に。陽にハ左より踏へし。是を天



武平服のふしとも名つく。されハ貴人の前にてハ。しかうのあし。右をふみ左をふみ。偕左の膝。右のひき同程にハせ。左りをつき。右を立れハ五字なり。立時ハ敷たる足を立て。左のひきを立。左右の手先を。膝の間に立そろへ立て。左の足右の足をあゆむへし。惣而さんをこゆる事も。左の足にて越始むへし。かようにてハ三足しきり。二足よせ歸る時ハ。しやくには上座のひさをひらき。下座のひさをよせ。持たつ銚子を力にして。一文字に立。左より歩み始めてかようへし。かさり物ハ銚子と准すへし。又御膳の時ハ。下座の膝をひらき。上座のひさをよせ一文字にたて。左の足よりあゆみ。右の足以上五字返閉なり。盛物ハ可准之。殊更弓たちの時。此足肝要也。的ハ打弓の時共に。かのあし忘るゝ事なかれ。

一御供の事。御沓の役人。御中間の役なり。但社參ならは。御幣の役先たるへし。

一敷革をしく様に。二計に折て參り。白毛の方を主人の左へなるやうに。毛の方を上につけて敷なり。心を持也。座敷などにかくるも。白毛を面へ向てかけへし。

一ひつしきを敷へき事。是も二ツはかりに折て。片手にて持參すへし。弦の付たる方を。主人の後へなして敷なり。又曰。主人の引敷をしかせ申事あらは。緒の付たる方を。御左へも先を右になし。裏の方を座敷の面へなして。緒の付所を上にして懸へし。敷皮も毛の方を面に成様に敷へし。或はさかさま。或はうらを鋪事をいむなり。

一敷皮の事。白毛を我右によせは。必人の左になるなり。是も左のわきへ少すちかへて置へし。物かくるにも。白毛を前にてくひかみ

を後になす也。

一主人の御弓と矢を持事。主人の弓をは右に持。矢筒を左に可持なり。平人を弓をは左に持。矢筒を右に持なり。奏者の時の弓も。右に持へし。

一堀の高サ七尺五寸間にて取へし。此上にけしやう柴有へし。廣さ一張平。あつさ一張のあつさに。あつちの高さ弓半張成へし。

一小的の弦の事。大的と同ならは。但うらの字ハ佳或ハ鬼の字を書へし。

一轆渡す事。弓場の轆は手おひを人の右になして。あをぬけて緒を三さう半に分て渡すなり。

一塗弓に白木の弦をかけへし。馬上にてハ。ぬり弓に白木の弦をかけへからす。

一本の葉を立る事。春ハはさを上へ。夏は葉先を前へ。秋ははさを下へ。冬ハうらを表

へ可有<sup>(立カ)</sup>

一疊紙を立る事。切目を前にすちかへて挟むへし。是ハ小折敷の代なり。四半といふ事。小折敷を四ツに切て立る也。

一九半といふ事。小折敷を九ツに切て立る也。一扇を立る事。要を上にして立るなり。繪に生類并人形の有方を面にして立へからす。草木は其まゝ成へし。

一引敷<sup>(チシ)</sup>々熊の皮を。無官の人斟酌有へし。

一墓目をしねくると申へきなり。しねと云鼠ハ。足のねを好て喰なり。彼しねのころ。引目のことく成故に。しねくるとは。墓目の異名也。

一産屋の墓目の事。男女によりて射事。いしやくも替なり。男子に向てハ三度。女子に向てハ二度なり。墓目ハ鶴の本白なり。又墓目の木は。柊亦ハ山□の木なり。産屋の疊ハ白へ

りなり。夫をつるして矢所とす。紙を折て兩足に立て射るなり。紙の數陰陽替なり。二親そろいたる御一族の役なり。同御産の時。主人御子生給ふ時の役人。公方の御時坊川殿。大德寺殿。我等主人の生時は。其心まかせなり。去比始て若君御誕生有と。一入ひきつくろいて。けに／＼しくして御祝有へしとて。夫よりも親ある御一族の役成へしと申なり。亡父に尋申せしに。始てつとむる上。法有へからず。但墓目羽の事。祝言にきりに中黒せぬ事なり。祝言と有しかは。則小うすひら尾可中也。是ハ一矢の羽を本と有し間。彼羽を用意せしなり。鷹の羽にて墓目なからはかぬ事なり。但はきませハ一二と不苦となり。又新田と云人。鶴の羽に鶴の羽を分にませへし。尾は不可然と。諸人かたくせしなり。吾々鶉の羽をおほく持しかは。白すり鷹の

羽にてはきしは。亡父いましめされ候き。又笠懸の墓目などにハ。只三を引わりてつかいたりき。同時臍の緒つき給ひしには。大入いありて。つき給ひし也。其竹刀の事も承りてとのへたりき。兩度の平竹にてすると計ハ。醫師仰成申しかとも。俄の事にて竹を造りしを。きぬかつきの女性の中よりもいわく。其竹刀をは只一刀つゝ七つ作りて進せよと候へき。後にきけハ。西花門院の女房申ける也。赤かわらけをあまた分て。うつふせにて參らする其上にて。御臍の緒をつき給ふ事有と云。

一墓目の的矢神頭御目に懸る事。おしもつめ左の手にて。ねより少上を取向て參らする也。

一矢代うつ事。賞翫の御矢代をは腰にさし。一のはや前に立へし。矢代の詞の事。はやうし

ろ矢と申也。

一忌扇。忌疊紙の事。扇は繪を見。兩方の疊紙をとり引折。ひたゝれの間へおし入へし。地牀のたゝうかみのおりやうは。先中程を二つに折て。又中より三つに折てあらは。四折に成なり。兩のつのを取て。二つに打へし。是は懷紙折にハすへからす。又女のたとう紙のごとくにも成へしにもすへし。夫を懷紙折にすへし。

一主人にハ先ゆかけを參らせて。扱腰當を御心申し次第如此也。

一御輿の御供の事。筈にふちまてたるへし。小者のうわさしハよし。上さしの數五にても十にてもさすへし。矢の羽。山鳥の引尾又ふらすへし尾たるへし。

一步にて御供の事。遠行ハ小太刀をはくへし。殊更旅にて心得へし。近くは刀計も不苦馬

上も歩立も腰當ハ無益なり。但人によるへし。

### 供奉門第五

一大名出仕の次第。先さきはしりとて。十二人上下返し股立を取。弓を持て太刀をはき走へし。出立は定なし。數十二町と定るなり。此人數より内ハいか程もくるしからす。又貴人の弓同前也。

一出仕の事。又御先走奉公の面々廿八人は烏帽子すハうにて。股立を取て。小太刀を帶走也。則御帶刀の衆なり。又遠路の時ハ。たち

つけ袖ほそも不苦候。其跡に弓袋に入て持へし。雜式の役なり。其跡にさし笠袋。其跡に引馬。次に力者小者。次にこしたるへし。輿と騎馬の七騎へたてへし。

一御供の事。公家女房の供ならは。うちものも右に立へし。

一男方の供ならは。左に立へし。

一步にて騎馬の供に立事。うつほを付て弓を持へし。祝言の時ハ。上下にて返し股立を取りなり。弓は右に。弦をは上になしてかつくへし。

### 大名小家出仕之次第。

先一騎打の事。是を先うちと名つく。

一番御先走十二人。上下返しもゝたて太刀を帶。弓うつほ也。

左人  
右人

人

人

人

人

人

各出立同前也。

二番。弓袋。雜式。右にかつくへし。有時弓鞞

持なり。

三番。傘袋に雜式。左にかつくへし。有時ハくらおおひをかけてかつくへし。

四番。牽馬。如常引て。下輩追繩上事たるへし。

五番。御長刀。力者の役也。

左小者打刀の役。右小者十の役。

左小者笠を可持。右小者足半袋草履の役。

左小者手あき。右小者手あき。

主人左右に帶刀廿八人。出立同前なり。

騎馬の下ハ御仕也。簾なし。騎馬の別ハ上士なり。走出立同騎馬の者そへと云也。

騎馬も先は返し股立を取へからず。よせかゝるは有へし。

左御中間人足付御輿

右御中間中太刀可成。

其外こゝもを御中間衆あまた大太刀を持て參へし。次にうつほを付。弓を持て走なり。騎馬の供是なり。

人歩弓。

人歩弓。

人歩弓。

人歩弓。

人歩弓。

人歩弓。

人歩弓。

一笠きの供ハ百杖へたつへし。不同たるへし。  
一うはさしを指事も。板に穴をあけて口さすへし。付かわにてかため。ふちうへてかんしやうにすへし。後陣の騎馬ハ。よせくゝりなるへし。

一うはさしのつゝみ持事三ヶ條。是に小袖の入たるつゝみの事也。

一侍程の者は。緒のむすひきわかゝりをひつさけ。右に持なり。又うらのすみを取て持事有り。

一小はうし中間ハ。つゝみのくひをひつさけて左に持へし。

一さつしき力者ハ。緒を右にて取。左にて裏をかゝへし。有時ハうちかつくへし。又遠き時打かつくへし。

一打刀三ヶ條の事。大概とんしやの役といへり。

一時として小者持事あらは。右にひつさけへし。

一時として士持事あらは。左に持へし。

一遁者ハ右にかつくへし。

一主人乗馬或ハ輿の時。侍歩にて御供に太刀を持事。四十二丁より外ハ法の外なり。よせくゝりなくは。返しもゝたてなるへし。

一殿原ハ太刀の足間きわを取。右の手に柄を下けて持へし。大門より外に出てかつく事。常の習なり。下馬又御輿を被立は。始のこと



く右にて取なをし。貴人の後の左の脇に。半張隔て立へし。貴人の右をあゆむ事なかれ。一中間ハ太刀の二の足間を。頭指中指二にて挟て持て出。大門外よりかつき。貴人の右の前を歩へし。御下馬又御輿のたつ時ハ。右の御前に二張のけてつくはふへし。又貴人御前に參法量一張半可隔。御歸宿の時ハ。御撰のきわまで。御前にまいるへし。右へひらくへし。

一主人同前に乗馬の時太刀を帶事。にしきつゝみを。主人等輩以上の參會時ハ。わつそくに掛へからず。柄よりかけてはくへし。

一刀の柄よりかけてはくハ。主人の太刀なり。かたなのさやより足間へいれて。帶ハ我太刀なるへし。

一劍と名を得たる太刀を。帶事も持事も大事なるへし。切先と刃の方を。人へも我身へも

向へからず。此心得肝要也。

一社參物詣の役の事。念珠は陰の具足なれハ右なるへし。香爐ハ陽なる具足なれハ左也。

一貴人書狀(の脱カ)をは左に持。我披見したる狀をは。右にもつへし。

一經の類をハ。兩の手をかけ持へし。

一主人御供に風呂へ入たる事。御先にはたかにてぬるめをもらせ。風呂の内へ入。篠のはうきにて。風呂の天井より始めて四方の板座木の上下まで露を拂。御左右を申へし。主人貴人御入なき以前に。手つなをぬらす事不可有之。

一賞翫の人。風呂へ御入の時。垢をかくへき事。兩方の指の爪を添て。いかにも靜にかくへし。吹事も音せぬ様にふくへし。殊に拍子にかゝり吹事。尾籠のいたりなるへし。

一主人。陰所へ御入之時。御供ならば御太刀を我左に切刃に持て。御先に入て。あたりを見廻りて。其後主人を入申て。我ハ罷出。遠くなく近くなく祇候すへし。遠近ハ可任御意也。

一主人御供之時。門戸出入の事。先我か心有て御さきへ參。左右を見きはめて。出入させ申へし。又門戸出入も。柱きわと中程を通るなり。少そはへよりたる門戸の閶闔ハ主客の口なり。此心得尤陰をうやまふ所なり。

一主人常に御座有疊ふむへからす。掃除などの時も。幣をさしのへてはき。踏時も先手をつきて通るへし。

一主人の御供の時。築地のまかりめ。是も御先へ走通り。見めくらしして御供申へし。小路の時も刀こゝろ同前也。

一主人御供の時。神前にて御幣の役の事。神主

持來る所へ歩寄てうけ取。左にて幣の本を右にて上を取。進る時は我右のひさをつきて。少御わきへ寄て參らせける時ハ。御幣の本を右に持。左にて上を持れにけるへし。女房の供の時は。御輿の右の長柄の外より。我膝をつきて。左の手にて御簾をあけ。御幣の本を御輿の内へ參らするなり。

一歩より御供の事。遠くあらは小太刀をはくへし。

續群書類從卷第六百八十一下

武家部二十七

三議一統大雙紙

又號當家弓法集。

宮仕門第六。

一主人客來の時。御寢所取候事。御枕北南に定むへし。東床南枕。西床北枕と置へし。

一嫁入の床をは北枕なり。南頭北長なり。

一御宿直物だゝむ事。其まゝめすやうに。中ハかり折て。表を表にたゝむ也。

一女房兒の小袖をは。右の妻を下へなし。男法師の小袖をは。左のつまを下にしてたゝむ事。是陰陽也。

一嫁入の小袖を三ツにおり。まへを東と西へして。むかひ合て。二ツ疊の上に置へし。

一御うはしきの事。殿の御座には。枕より敷てすそより疊むへし。女房の御座をはすそより敷て。枕よりたゝむへし。

一鞠の庭の酌の事。軒向へ參りいさこの散ぬ程におり。賞翫の木に向て伺公し。人數ハ一番二番と次第々々にすゝむへし。但主人の把盞にまかせて可加用。

一鞠の人數一番二番同賞翫の木の事。

春柳

夏櫻

柳 櫻

秋楓 冬松

六松八楓四

一同庭に水打事。是も軒向より參りて。そのむかふより後しきりに打て歸り。軒へあかる時。足ぬれぬやうに嗜へし。

一庭はく事もはうきを取。軒向より參りて跡へのきむきてはきて。疊紙にて足を巾で。縁にあかるへし。

一正月朔日より三日の間。御手洗の事。御年男の役なり。わたしはんさうを置事。御手洗の(時)とき。渡し(し)のすみのかたを御前へ向て置へし。是則御小袖の妻をおさへせんかためなり。さなきは御すそぬるゝなり。是によりわたしを作り付るなり。はんさうのそこに。ゆつりはうら白を敷。其上に青き石のちいさきを置て參らせよ。手洗水かけ申時。左の手にてハ。提の口より三寸はかり隔てとり。右の手にてハふたのあかぬやうに持へし。

湯をかけのこさゝれ。御手拭ハ物に振て。主人の御左の方に置へし。又左の方にかくる事も有。又御手洗水の粉などあらは。追膳にすへて參らすへし。御手よりに置へし。

一御手洗をひさくにて參らす事あらは。我左の手にて。ひさくの柄を先を取。右にてひさくの方を取て。逆手にかけてへし。

一菓子に三ツの庖丁といふ事有。

一瓜を切に。二の習有。贅の瓜をは。皮をむきて參らすへし。六刀六角に皮をむき。先一切きりて扇に置て。扱先たてに刀をあて。又横にわきりて。かわなから天目けんさん茶碗等に入て。瓜指にさして。きこしめす様に參らすへし。瓜さしの寸ハ五寸二分にまるくけつり。一方にかと有様に。めんを取へし。以前被仰付時。御前を立。けつり可申人に。瓜指のさいそく申て。扱かたはらにて手を

洗てまいり切へし。けつり手なくは。我共上座計を用意すへし。又初瓜の時ハ。皮むく事なし。其まゝあらいて。中より切てわりて參らすへし。

一梨に二様有。節分より内には。ありのみと申。皮をは枝(杖)の方をとるなり。扱そはを一切きりてかたはらにおき。そのかたへふせて。いくへも切なり。つゑの有を上座へ進るなり。扇疊紙もしくなり。又節分より後はなしと申へし。皮をはむかて。其まゝ切へし。ありのみの時ハ。皮をきらさぬ様にむくへし。一粽の庖丁の事。ちまきをかしらよりむきかけて。よりかへて二刀きれハ。三ツになるへし。芝居などにてハ。かやうにして扇にするゑて參へし。

一昆布の事。主人貴人へハ折目を參らせへし。二切進る事。常のならひなり。

一貴人客人の鼻紙とあらは。二かさね其まゝたゝますして參らせへし。疊様しりたらは。疊てもくるしからず

一座頭勾當ならは。出家程にあつかふへし。衣を着する故也。

一勾當の案内者するにハ。右の袖をひかへて。座敷へ出るなり。その座のおとなしき人。其座躰の高下とも。めいゝにかそへきかせへし。又酒をは七分にくんて出し。又茶をは右の片手にて片手を取て。左にてもとより渡すへし。

一式三献の御酌も。兄弟の時ならは。初献ハ次男。二献ハ三男。三献ハ嫡子なり。

一御茶の事。左にて臺をかゝへ。右にてほうつきと茶碗のはんほくを。ゆひをかさねて抱。三足しきりて左の膝を突。右の膝をふせさまに。貴人へは諸手にても參らせへし。

一板を出事。鷹の鳥をはかなかけ。それにすゑて出すへし。とりかいたる方を上に見せへし。

一射鳥板の事。矢目を上に見せて置いて出すへし。

一例の板を出すにも先斟酌禮義有へし。板の法様(中)ちうはいかみ。順逆其外箸刀の置様。鳥魚の置様。羽のためやう。ひれの立様等も見

て。ちかわすは質をみつくりいて。賞翫の人をは跡をかせ。常の人には先をかせへし。座敷にはさいの外にて置所見ため。

順にまわして。頭の下座へ成やうに鳥をは置へし。おく時は左の膝を突。右の足をは入文字にふみ。いかにも力を入れて置定。右のひさを少のきて突。左の膝も同前にすへさまに。左右にて板をおしなおし候様にして。手を引さまに平に下座の膝をひらき。一文字

に立。目を見合て祇候すへし。

一板なをせとあらは。同様に二人立て。又さきの足にて手つよく持上。順になをして。以前のことく置で。膝も最前のことく見合て。立様も同前なり。偕少膝をふせてかんにんし。庖丁過は見合て立て。又順にまはりて。さいきはにて少よし有ていれへし。軍陣の板まわすへからす。

一配膳の事。御膳を据てまいるにハ。よき程に持搦て。ちと指出し。ひちのこんみやうつくしく。然も左右の指に力を入れて持出で。さいより外にて。其入へき間の中程に立。上座より下座まで一日に見はからひて。其つきくへ目を配り。上座の中程に向て歩出。その居へき人の通りより。ひきおりてさし寄。人の間半張に見計て。先左の足右の足。扱左の膝を突さまに。同方の小指にて。疊をおさ



へ。其後。右の手と右の膝を同程にふせて。しかくゝと直定。かさをとり。左右の手にて。御膳を御間ちかくおしよせて。手を引さまに。左にてはいつものことく左の衣紋をさる由にて。右の手をは。ひきさまにさらぬ様に突て。下座へむかつて歸るへし。但左座のかよふは。又左の手をおさへ。右にてゑもんをとりて歸るなり。又次第ハ。本膳の次においせん魚の類成へし。本膳の右にするよ。三の膳ハ鳥の類たるへし。本膳の左に据へし。其後の膳は。いか程も今の分右にする。後左に据よ。一物引物ハ。二の膳三の膳の中にするとめよ。同じくあけおろしにも。上は三足。中は二足。下ハ其まゝ也。

一飭の次第は。本膳の次に追飭。人の右に据へし。三の膳ハ鳥類。又あつめ物なるへし。何れも左に据へし。其後の膳ハいか程もあれ。

今の分の中右左と心得へし。

一ひき物ハ。二の膳三の膳の中程に見あてゝ据へし。三有は。又中左右と居へし。同あけおろしにも。上ハ三足。中は二足なるへし。

一鉢を出す事。中老賞飭の役なり。事かくれは。若輩もいかん晝ハ鉢を上座に置。夜はあかりを本とすへし。以前に給の袖をひるかへし。盛へき様ハ。賞飭にハ一人に一度ツ、立居有へし。少つゝすくい。食をこほさゝれ。等輩ハ一度二人盛へし。(成イ)

一御湯ハかまきにて引事。又冷汁を左にて右のすわうをかいとつて。片手にてひくは常のならひなり。但貴人ハハ左右にても有へし。湯たうにて曳時ハ。ふたのあかぬやうにかゝへへし。

一御ふちたかあけおろし。御膳のことく。惣してかるき物をも。いかにもおもけに持なす

へし

一折を置様。客よりの間より持て出。見合て上座へ向て歸るへし。盆土器の物等も。是に准すへし。

一飾物を主位近は出へからず。座下へ向て置へからず。

一盛物名目の事は御膳御茶肴等に至るまで。主人の用准之。

(脱アラン)

一飾物名目の事。折盃菓かわらけの物。銚子。盞。三具足のたくひ引出物。重寶のしよくとう成へし。客人の用准之。

一ちうはうのしよくを立る左右の事。いかり瓶子盃。又燭臺まなひたには是に准すへし。かさり物をは客居を通り。盛物ハ主居を通るへし。

一箸にて物を引事。貴人賞翫の人にハ。御下手にめされは。御つまさきに置れにしかも箸

をつよく取へし。もしさん所の者。又下はいの族。上手にとらんとせハ。はしをよわく持て取落し。失念のよしにて落たるを。はさみてとらすへし。惣して手の内へなけ人へし。されハ常にはそと置へし。

(公卿)

一楊枝の寸法の事。女房兒のハ五寸八分なり。男法師のは六寸八分なり。又楊枝をハ。物にするても挾てもまいらすへし。正月朔日に。主人に參らするにハ。くきやうにうらしろを敷て。其上にゆつり葉を置。御年男參らせへし。男の楊枝をハ。ふとみを御左へなし。据進上申せは。ふとき方を上手にめさるゝなり。女房兒の楊枝ハ。ふとみを右へ成て進上申せは。下手に取て。うちかへしめさるゝ様にすへし。

一楊枝の削やうの事。れんはの楊枝ハ習有。削かけをさけさまにするハ。そしる心なり。し

きにしたらはほむる心也。

一瓶子を座に置様。二人してつかふなり。いく  
奴も此分なり。瓶子の口をあわせて。役人む  
かひあい。しかと置おさめ。上座の方の手に  
て。瓶子のこしよりなてくたし。駒のつめ  
を置て。疊を卒度踏て。見合て立へし。下座  
へひくへし。

一女客人ならは。男蝶の方をそのかたへむき  
合置なり。男客人の時。女蝶を其方へむき  
合ておくへし。

一献々の肴の事。入瓶子のしたに。初献。二。  
三。四。五。六。七献と。上より下にならへて  
よし。

一銚子を。瓶子のひきてたてたる下に。主位  
より客位に向て置。提子を。てうしにむけ  
ておくへし。

一酒つききる瓶子たて。おかぬ事也。瓶子を

ふせて置なり。酒つく事。陰陽の客人によ  
り。女蝶男蝶の前後可有。客位に向てつくへ  
し。

一御盃を參らする事。持て出る事。おもき物を  
持こつく。惣別かるき物を。おもく持な  
し。おもき物を。つねのことく。貴人の客  
人ならは。それへよせる心有。例式ならは眞  
中へ可置。少上座に置へし。

一御銚子の名所の事。からみわたし。長柄せめ  
金ほうしを。かなめといふ也。むすひみつ  
はしりき。めさしらと申也。

一御銚子を持て出る事。右の脇に長柄をかい  
はさみ。客位より參て蓋に向て。常の膝にて  
左の踏をかさね伺公すへし。

一鬼の氣の事。持參の酒ならは。上座へ向て。  
左の手のひらに酒を少入て。こはさぬ様に  
呑みて。其手を左の袴の綴にて巾て。可立罷

在時は。左の手先をつきて。すぐに立。歩寄て盃の間能程に。左のひさより突。左の手のかうにて。疊をおせは。いかなるこおしきも。かたはしあかるへし。それへ指を入れて持あくる事。銚子のさらかしらの程にして。先貴人へ參らせて。御禮の間は三足ひさを。下さへのけて。間を居きるへからず。きゝめにて袴こしをほすへし。

一酒をくむ事も。二度てうしゝて。三度目にたらゝとつくへし。貴人へは二度加へ。本盃とそへて三度なり。つく時ハ立て。提の役者と歩むかひてつくへし。銚子を盃に持添る事も。上中下之上の御盃をは。てうしの上におゝいて加用へし。下をは銚子より下に持て加用すへし。

一御つき酌の役人。主人の御酌のときは。御家人御一族の役なり。たゝの御酌の時ハ。若衆

の役なり。

一有所ハ御縁に祇候し。つく時さいをこすへし。但長座敷又亂酒の時ハ。あまり物遠なるは。躰にあらず。つきて歸る時は。むすふ時またゝの時も。わかれかしらを嫌ふへし。

一銚子を渡す事。長柄かなめの下を取。いしつきに手をかくへし。等輩と下輩へハ。それゝの心得有へし。

一銚子請取事。右へ參り左の手をつき。右を下にしてうくへし。きゝめをとらんとする躰なり。

一兒。遊女。白拍子の有時ハ。酌ハ常よりもかわるなり。一度ツゝ結て加用すへし。

一兒。遊女等へ銚子を渡事。例のたゝうかみを一重出して。ひやうの上へかけて。とりくろみて。きくめを右のゆひ先にすへし。あけて渡し。又請取時はうけて。その時たゝう紙

をは。卒度懷中して加用すへし。

一銚子を渡に。もし右に所なくして左よりうけてきたらは。左へふりむきて。人を右にして、つねのことく渡すへし。

一提の取渡の事。請て來らは。膝を其かたへ直しさまに。左を口のもとのつるしたてにか。右をさうかしらのもとにとりさけ。中をとらせへし。

一祝言の酌をむすふ時ハ。上座へ行て。下座へ歸て。かへとの間も。右へつきてハ左へ歸り。左へつきては右へ歸るへし。渡より内へつかせへし。

一嫁人の酌の事。右の足より座へ入。前のことく疊のへりをふみ。兩のひさを例のことく右より步寄て。御盃を取。御臺様へ持參し。三足を陰陽と三足を曳。膝は如常。待女房互に禮のあつかひ可有。時宜定後。配取立て。

殿の御前に盃を持參して禮有へし。御臺の御前を立歸る時は右にめくり。殿の御前より立歸る時ハ左へめくるなり。禮ハ二度定る法なり。酒つく時。一度に初献の加なし。二献にもなし。三献より後はかさねの加へ有へし。半にする事なし。皆調う加へも銚子のうちなるへし。殿の御前にても。御臺の御前にても同くわへし。

一御盃のめされやうは。男女共に左也。

一聲入の時の御酌は。先聲に向て左の膝を突て。酒をつくへし。男の前にては銚子の外より。聲の前にてハ銚子の内よりつくへし。座に入時も左より入。ひさをひきひらくも。左より始むへし。聲舅の前の禮を。調にして盞を定へし。加へとの間。ともすれハわかれかしらになるものなり。よく。慎なり。むすひやう大事なり。

一軍陣の酌。例に替るへし。順にまはり跡へ歸るへからず。貴人の左の側へ通りて跡で加用すへし。おしてせず。ひきつくへからず。銚子も無益なり。一度に突へし。加へは二度加へて。本盃と二度なるへし。

一鷹師に向て酌の事。召出しの時は。てうしを竊に袖をおひ。盃も同じ手に持添。鷹匠の左の方を通り過て。八分に盛て右に置て出すへし。酒を少もこぼさぬ。酒ハ其日の鷹のふなれハなり。

一引物も三様有。折をは右に置て可盛。公卿に飭たるものを。左に置てもるへし。かわらけの物をは。中程に置て盛へし。

一主人御文御覽の後。火に入よとあらは。御前にて文字見へぬ程にひきさきて。御前を立て火に入へし。

一御曳物役の事。五種の引出物ハ。一番に御劔

進るにハ。右の手に足間を持て。御前にひきまつき。御太刀の甲金を疊に付て。左の手をそへて取廻し。主人のはかせ給ふへきやうに。左の方へ出すへし。又主人御つかひ有時。持て參るには。小太刀ならは取直し。渡させ申へし。大太刀ならは。左に持て其儘渡させ可申。何も身をはそむへき躰なり。(く脱カ)客人受取て後は。其法參様によりて左右有へし。二番に御弓征矢弓を張て。弦を外にして。附より上を取て。左のかたさきにかけて。裏笥の方をなひけて。物に當らぬやうに持なり。征矢をは。左にて矢摺の上を取て。左のかたさきにかけて。矢先のかたをなひけて。二ツなから一所に立るなり。若北面に成る事あらは。横様に置へし。三番に御きせなか鎧なれば。役人二人なり。唐櫃のふたにわいたて甲まで置。前の役人ハ長柄に向てかき出し



て。客人の御左へ寄て。少左のむないたとわ  
きひきをむかひあわせ申。跡の役人は。しは  
らく残り留り。草摺を手より計かいつゝろ  
い押直して。先に歸るなり。先の役者少居の  
きて待て。跡に歸るへし。是真那板の役者の  
ことく跡か賞翫成へし。腹卷は一人役なり。  
但袖甲そはし鎧同前なり。只の時。御目にか  
くるも。左の御脇へ參へし。我右の側後ろも  
見せ申へからず。向合中も躰にあらす。いぬ  
ゐを御目にかくるとなり。

一着背請取事。<sup>(長脱カ)</sup>上手ハ先あゆみ出。主人の御座  
の方へよりて。斟酌有てより。下手は目と  
目を見合。禮有て請取へし。進る時も。左の  
方へ上手より請取。歸時分上手に成なり。四  
番に御沓行騰にそふなり。是は鎧より以前  
も以後も不苦候。出しやうハ切て付たるむ  
かはきならは。ありのはしを折て出すなり。

左右にて持てより。客人の前に左の膝をつ  
き。左の皮を上にして。毛先を我か方へむ  
け。<sup>(客脱カ)</sup>人の左に少すちかつて置なり。帶をは兼  
て引揃て持なり。うへとをあわせおし折て。  
白毛を見せて。兩方の手にて同程に抱へし。  
脊をは緒を結ひて。行騰の下に持なり。くし  
かみの方を前になして。曳のへて置。脊をは  
白毛のはつれに立てふせても時によるへ  
し。五番に御馬。鞍置たる一匹。<sup>(匠イ)</sup>只馬はひき  
ての後なり。これをひつそへと云なり。鞍置  
馬のひく手ハ。烏帽子かけしてむすひて。  
そのすへをあけさまにからむなり。よせく  
ゝりなくは股立を高く取へし。下手の引手  
ハ中間の役なり。手綱付て引出すなり。ひつ  
そへの馬は。唯一人の役なり。此外の曳出物  
ハあけてかそふへからず。

一七献の引出物の事。始献は如常。二献ハ小袖

ひたゝれ。三献ハ着背(長脱カ)。四献ハ金鍔純子刀(に脱カ)を加へ。五献は盆香の類。六献ハ家の重寶。七献ハ御馬鞍具足可調。

一盆に置曳出物。金鍔。純子。刀そハすは包目を他人へなし。左右の手に持て。出入の左のそはに置。披露して人の右の方へ出へし。あ(板ガ)つ數の物まで可准之。

一刀を添る時ハ。柄の方を人の右へなし。表を上にして。先他人の右に置て。披露して何も歸る時。左へめくる事。定れる例也。

一刀の代に扇子を置事。他人の右の方に要をなして。或ハ薄板染もの之たくひ折にたて。或はかななけに握へし。かりそめにも盆に置事なり。

一盆に香箱三具足ならは。座敷の上に置。披露して其儘出へし。何も客貴人ならは。披露して取てかへり。其寄子が被官に渡すへ

し。座中にも縁にても見合ふ所にて渡すへし。

一盆の置所の事。一番に横座の疊の中より左のまんなか程に置へし。二番の盆をは。疊の中の透奥によせ。へりに置へし。三番の盆の中の中の間とおりの座下にかたよせ。疊のへりの内に可置。これハ同輩の時用へし。亦沙汰の事の時ハ。たゝみの右のはしにおくへし。

一佛事の時は。疊の左に置へし。

一賞翫の白拍子。妾。傾城などに料足出す事。むねとの中へ取て出すハ。銘々に出さすとも。唐櫃のふたへ入て出。小刀にて切様に。二刀三刀して出せは。中にて分るなり。只出せは太夫一人の引出物成へし。又小刀をひろふたに持添て。座に出てしかくくと披露して。刀にさして歸る事有なり。

一祝言の時の酌の事。つねには座へ向てかへるなり。祝言の時ハ座上へ向て行ては。又座下に向て通ふへし。法量にくわしく有へし。一鉢の食請る事。次の上へ一禮して。次の下のうくる間。はしをさへて可待。さしみの事。食以前にすにひたすへし。みつばかり。酢をすふ事なかれ。

一御茶進る事。臺を左の手に取て。右にてはうつきをかゝへて持て參へし。三足退りて。膝を御膳のことく突て。右の手をつき。左にて指出し進るなり。ひさのひらき様も。御膳のことくなり。左右共に座下へ向てかようせよ。

一柳枝の寸法の事。女房兒のハ五寸なり。五如来を表なり。女の口へ來と書ゆへになり。男法師ハ六寸なり。是ハ六字を片取なり。惣而正月行水の折も。かいけを取て。念佛三返と

なへかくる物なり。大秘事なり。

一瓶子の口包事。膳部の心得に有へけれ。大方はしるすなり。男蝶ハひたを上に取りふたるよりのはしを其儘なり。女蝶はひたを取口緒よりのはしをはつす也。

一打立に出時の事。御酒を順(に脱カ)まわすへし。相搦て逆にまわすへからず。其酌のつき。一人にて万人の順をあらわす也。

#### 奏對門第七。

一奏者の事。主人の氣色を見るを窺とす。左の人を揖するにハ。其手を左にして。右の人を(する脱カ)揖にハ。其手を右にす。同座はいの事。最負へんは有へからず。

一花を御目にかくる事二様なり。木の花をは。木のなりに本を下へ持て。御目にかくるなり。左に可持。草の花をは。葉先を下へひつさけ。右に持御目に懸るなり。當座に左にて

なけあけ。御目にかくるなり。

一花瓶の事。神前の花は。左の方へ立なり。佛前の花を右の方に立る也。

一草金進る事。薄やうに包事も有。時によりて懷紙に包事もあり。春夏ハ柳の枝にも居よ。又冬ハ梅の花の切様有てすへるなり。十字を可嫌。秋ハ紅葉に居る也。

一魚鳥請取渡事。頭を人の左にして。腹を外へ向て持て出。ひさは如常。一番の魚鳥ならば。腹を合て頭をは同前に可渡。

一羽を進る事。一尻の羽まる羽を鳥をたゝし。羽さきを御左へ進へし。つくりたる羽をは。矢をたゝして羽先を御右へしんする事なり。一鶯御目にかくる事。二様あり。只の時ハ丸体の方を人の前になし。高体を我方へ出すへし。あわする時ハ。高体を人の方へ。丸体を我方へなして可出。其謂ハ鶯の相あふ時ハ。

丸体の方を敵の方へむくるなり。左様の爲に合する時は。高体を人の方へ向て出すなり。只の時ハ。鳥の宿りを本に渡し。あわせする時は。あわせ方を外へして。めさるゝやうに出す心得成へし。

一鷹の取渡し事。先我身をかいつくろひ。鷹をおとろかさぬやうにこしらへ。如常一禮して。座へ參て指寄。先磔をひそうにさして。しかと留て。鷹のそはへ參ひさまつき。左の手を突。右の手を下手にして。先策をとふへし。策を乞請て。右の方に置。其後。又右の手同前式題有て。大緒の先を取て。とはさぬ様に受取。さらりと居直りて。鷹の五方をかいつくろふへし。渡手も同目禮有へし。一鷹渡へき事。先ふちにて見より手筆をさき等までかいつくろひ。あふらひきさせて待たり。請取人來らは。一禮して先すへかたを

渡さんとすへし。鞭ハ渡時は。惜ハ禮なり。  
渡して手をつき可歸。

一若荒鷹ならは。大緒を一筋袴腰にはさみて。  
残を先渡。扱腰の緒を取て渡すへし。

一鷹受取時。若大緒を取こほし。一筋わたさ  
す。先取こほしたるをひろひて。其手にて大  
緒のはしを取。右のゆひにかいからみつよ  
くしつかに受取。其儘順にまいりて。人を鷹  
の後になさぬやうに有へし。其儘居直りて。  
能誘てつなきわたしは又御意に有へし。

一鷹つなく事。大鷹ハ七鍔りなるへし。

一兄鷹ハ五くさりにつなくへし。

一隼ハ。九くさり又七くさりにも。間ちかに繫  
なり。

一泊り鷹ハ。大緒のはしを留て結へし。

一ごおりほこは。大緒のはしを不可留。

一神前の鷹ハ。二くさにわをならへてつな

くへし。鰐口の心なり。

一馬の代に神へ進る鷹は。くさりたる末を二  
ツに分て。兩はつなにつなくへし。

一ならへ鷹のこと。青鷹ハ本木。兄鷹をはうら  
木なり。惣而ちいさき鷹を。うら木につなく  
と心得へし。

一架の事。柏を本とす。其外の本も。品による  
へし。

一鷹とはさぬ藥の事。青鷹の返し。兄鷹の返し  
等分に合て。茶半ふく程可飼。最負の人請取  
時ハ。内儀にこれを可飼。

一餌袋の事。春夏はとりくい。秋冬ハ兎頭とも  
云なり。此方を人の方へ向て可出。

### 鷹言葉の事。

一さしとりとは。おきとる事なり。

一木居とは。何れの木に居たるも同前也。

一立はしると云ハ。木竹家なとより立て行事

也。

一うつさらまふとは。少まふ事也。

一おきしふるとは。來りかたきといふ事也。

一そしくとは。峯より下の事也。

一おなかとは。山半分を云也。

一たよくとは。麓也。

一みねをは。ゑりと云也。

一孤子<sup>(らゐ)</sup>にとは。立あるとも。踏あかるとも。踏

おろすとも云也。

一小柴をならすといふは。草木をたゝく事也。

一羸をいたゝきあくるとは。鳥の下を鷹の飛

といふ。いづれも逸物也。

一羸を見ほすと云ハ。鳥の上を鷹の飛といふ。

是を羽おもてを飛とも云。何れもにふ羽の鷹の詞也。

一羸を。かいてとハ。つかれハ草木の根にかくれたるに。上に鷹の有をかいてといふ也。

一空捕とハ。てうにて取を云なり。

一大そらに面寄合とハ。たかくそらとる詞也。

一かけなかつ。ひんなかすとハ。何れも空にて取て横に行詞なり。是をひつ付るともいふなり。

一草をとるとは。とつては放ちゝするをいふなり。されハ一くさ二くさともいふなり。

一毛花をちらすとも。花とるども。けを取ちらす事なり。

一花をふるまふとは。つむへき所を。よくつめたるをほむる詞也。

一一番たちとは。始てかけ出る鳥の事也。

一はうどりとは。公家詞。はん鳥ハ武家詞なり。何れもはみ出たる鳥の事なり。

一羸うつとは。かけ出たる鳥を取はつし取はつしするを。又たてゝ合する事也。



一あたりおとす大鷹の詞。とひおとすとは小鷹の詞也。

一ぬさはむとハ。取たる鳥を頓而喰を云也。

一あら鳥とは。つかれぬ鳥の事なり。是も番立同前なり。

一大谷渡りとは。兩の岸のあひを鳥につきて飛を云なり。

一谷わたつてくるとは。心よくみかやすき鷹の事なり。

一羸を見居るとは。おち草を見定る事也。是とお見詞也。

一あて草とは。鳥のおちたる所の事なり。

一覺の草とは。あのへんへ落たると思ふ所をいふなり。

一はるからむとは。草本の根を羸につきてまいる詞也。

一やりたつるやつたるとは。木居なる鷹の下

に居たる鳥を。おいたる事也。

一脊を結とたとふる事。鳥をううにて取て。おつる兄鷹の詞なり。脊をむすんでなくなるに似たるゆへ也。

一水鶏たつとは。少つゝ鳥の立を云也。

一左羽にて右羽をかくとは。鳥かたむきて落たる詞也。

一元草に歸るとは。かけたる跡へ鳥の歸るをいふ。立からとはたちたる跡の事也。

一きりやとまりとは。羸をおるなり。

一木取とは。つかれの鳥。竹木にのほりたる詞也。

一かさむとは。高き所へ鷹のあくる事なり。

一こしまいるとは。羸をすてゝよの鳥について行おも云也。

一こしまくるとは。たもとよりたつ鳥。前へハ不行して跡へ歸るを云也。

一見ふるす草とは。落草見失たるを云也。

馬法門第八。

一主人の仰にて。馬の庭乗の事。ひかへたる馬を左に伺公の時は。馬の左りをまわり。馬の右に寄て。こしを前におしのくるを禮とす。其時。ひつたて立めくりて。馬のもろくちをつきて後。右にてひつてを取。左にて手綱のさんたんを。くらの前輪にかけて曳そろへ。馬のかみなかをとりて。鐙をふむ否に。傍のりに乗さまに。左にて手綱を外へなし。しりわのきしもゝを外へ出すやうにして乗へし。

一傍輩程の人。指南して鐙をおさへは。其手の上に我手を置て。手をひかせて鐙をふむへし。

一主人の御馬。鞍ならは鐙の沓置に。左の手を置て。手綱を取乗へし。袴のすそをふみくる

み。鐙を可抱。御庭にて御馬の後を通り。主人の方へかい折て。三返のるへし。

一月日馬上にて矢のなき事。左の手綱をまるにして。右の手綱をさしこして取候得ハ丸か二つ有へし。是を月日と表なり。(才脱カ)角の手綱などはせぬなり。

一衣紋直し。左右の袖を手綱に取そへぬ様に手綱を取。袴の行騰のこどくに鐙のそとへ出る様に乗へし。是も縁よりおりハ。まへはさみこて。ひたの中を取て。腰によくはさみ乗申せとあらは。一禮してつはさみをはつしてのれはかくのことし。

一うりさねむねをそらして。腹を少出し。鐙をひらき。うりさねをしかすのれハ。乗すかたよろし。

一法の手綱人前にて手綱を取事。大指に引からみて。小指をはつして取へし。是は弓持時

の稽古也。

一 蟻行不斷の庭乗によし。能のれは頭のあさき馬も高くなり。前足後の足心得にも渡て。乗すかたも尋常に見ゆる。しさらかして右へくつろけて、主人の方へ引折。右へ霑て又右へ折て。しさり口を乗て一方へ三度。一方へ二度にて乗納へし。

一 腰刀。馬めくらす時の人の姿も、馬なりともむらに見ゆるなり。廻る内にも鐙をひらき。同まはす内の尻友を、まなしりにかけて。其方の肩を見こして廻すへし。馬をまわす事。舟をまわすにたとふ也。

一 行者とは。しさり口のことなり。

一 三ヶ月しさり口をのらん時のこと。前輪をつめて鐙をふみ出し開て。耳の上六寸を見て。手綱をひらくへし。

一 まへ山おさへおるゝ時。右の手にてハ。手綱

をおさへ。かみのはんほくへ取そへて。左の手にてハ。鞍の前輪を。大指を内へしておさへておりへし。(るか下同ジ)馬をは又のらんと思ふへし。おるゝともそはおりにおりへし。乗時も下時も。太刀の用心なり。

一 鞭出事。庭のりの後鞭と右の手に鞭の中を取。左の手にて鞭を取。右にてハ轡を取て鞭の取柄の方を出すへし。上へは左の膝を(突)つくへし。

一 鞭請取事。左へ手綱を取移て。右にて鞭を取。鞭先に目を付。右へ身をひらき。左の大指を袴腰にかけて。一文字に可指。

一 返し手綱。馬よりおりて後。大名ひかへるか。又人のかたへ渡へし。

一 押の上は。人のひかへたる馬をは。御馬の左へ参り。左にて下手に内の鐙のかくを下へこたへ。右にてはした先を。上手に指先にて

取左へかゝり。力を入れてこたへし。

一押の下の手綱乗て。手繩に手をかけ。鐙に足かけは。乗候はんと同力に。右にて同方の鞭をひくへし。左にてはひつ手を取へし。

一かゝりの時ハ。木のとをひきおりく三度打廻しおりへし。かゝりの繩おりめくるへからず。

一貴人の馬に鞭あてよと仰ならは。むちの先を取。とつゝかの方にて可打。

一本手綱七尺五寸。七尺には七天を表なり。(す脱か下同ジ)五寸には五行也。弓の弦の始也。

一修羅の手綱三尋。一天彌陀の三尊と同天を表なり。

一例式の手綱九尺五寸。九天九曜を表也。五寸は五智を表也。

一社參。佛詣。犬笠掛の手綱八尺二寸なり。八天日月を表也。

一本腹帶一丈二尋。陰陽也。

一修羅腹帶三尋二尺五寸。三尊陰やう五智を表なり。(陽)

一例式の腹帶ハ一丈一尺。日月を片取也。

一社參。佛詣。犬笠の時の腹帶は一丈三尺也。是又一佛三會の明月を表也。一丈とは何も二尋也。

一ひき御馬を人に出し。亦請取時の事。先に庭に入。人各わか上くと禮のつはさみを取て待へし。左を高く取へし。是は士の事なり。

一返し股たて。馬を人に出し請取時ハ。返し股立を高く取てひくへし。是は名字なき者の事也。

一引て出。人前へ馬を出候事。馬の前ゑたの通に立て曳へし。若驚くるわじ左の腕に馬の肩を出して。右の手綱をうつへし。又馬に

とをのくへからず。左のひつてに弓斷有へからず。

一片諸手綱。右犬笠掛の手綱の時ハ。一方に丸を作てひくへし。

一扣の馬。貴人の前に馬をひかへ手綱の時ハ。左右のひつ手を指上て。馬をすゝめて引へし。

一馬を御目にかくる事。先向にたて。おしゝさらかして。目ゆひを御目にかける時は。右へちとくつろくへし。押廻しさまに。すゝめを御目につかけ。つき廻して入れハ五方なり。公家にかくつろくる時。足をつかはせ。武家には足をつかわせすしてくつろくへし。

一ゑんの下へおるゝ時は。妻はさみ前也。かゝりにては。我もくゝと心かけて。梢を見分へし。

一馬請取候はぬ先に。名字をとひ進て請取へ

し。曾て上手なと無益なり。但よくく下劣の馬ならは。上手も不苦。

一禮馬を庭にひくは。我もくゝと心懸乗候得と仰候はゝ。式題して主人の通りにて。左の手をつきて。馬の前を通りて乗へし。後に所なき時はかくのことし。

一引手取馬の前によりて。内にても馬くせむき所を心につかけ。左の手にて引手を取。若馬曲の赴候ハゝ。引手をもつきくせを問分て乗へし。曾て聊爾に乘へからず。

一只庭にて馬場本馬場末と云なり。

一犬追物の時は。繩渥(渥、下同ジ)といふなり。

一笠掛の馬場にては。決渥といふなり。

一荒馬の同少ひくをは。さそふといふなり。

一轡の名所の事。はみ。はうみ。ひつて。たちはな。ひくらしといふなり。

一鞍の名所の事。前輪。後端。しほてのくつか

らみ。ゆき切付。力革。手綱。腹帶。むなかひ。しりかひ。おもかひ。さし繩。かまへなわ。はな皮。馬よろひ。馬面。馬表。袋とをり。

一馬の尺さすにハ。馬の左のかたより指なり。からみをわけてさすへからす。

一主人馬に召時。御馬を引出してめさする様。御馬の手綱を取て。片手にて打かけて。皮かしらに立向て。弓手の鐙を右の手にておさへてめさするなり。

一馬の生死を知る事。春の中に七日の間。馬の鼻に油を付てなてゝ見るに。必此文字有。

五才六。八。卅。十一。十二。十八。廿一。物と見る吉々

犬門一王天心三風死生用 雜馬になる。

一馬を人の進るを請取事。馬の後より。ひきてより前によりて請取時。ひきて禮をすへし。條々ならひ有。

# 手綱取やうの事。

一わうすい手つな。

一大十文字。

一小十文字。

一日月手綱。

一大かけ手綱。

一むすひをきの手綱。

一とりつくりいの手綱。

一龍水の手綱の取やうは。三重に取也。是ハ陽

の口の時取へし。

一大十文字の取やうは。手綱中にてむすひで。

十文字になすなり。駒かへしの時なと取へ

し。又心のうちなる馬をば。一さんを出す

時取なり。

一日月の手綱。日月とは兩方の輪を二取なり。

是宿入の時よし。

一大かけの手綱。常の時取へし。朝夕乗時の事



なり。とりやう大かけに手綱をかけ取へし。  
一小かけ手綱とりやうハ。小ゆひにかけてと  
るなり。是は万の曲馬人引馬に取へし。口傳  
有也。

一鳴古鳥とは。馬場中に馬を置て。扇にてまね  
けハ来るなり。大秘事なり。十二月まへの卯  
の日。丸めたるうさきの尿をほして粉にし  
て。甘草の粉。黄連此三ツを等分に合て可  
飼。神馬引馬にて不可成也。

一馬のあらきをしつむる事。甘を吉酒にてす  
りて。五筒可飼。餘にすこすへからす。

一橋可用やうは。手綱を同分に取て。鐙を取  
てきひすをもつて。馬をはさみて。甘の間を  
見て渡すへし。

一武明ちんのうちつまはさみ可用やうハ。馬  
を人出し請取事。左右のつはさみを取へき  
なり。是も名字有人の事なり。かつて油斷有

へからす。左を高くはさむへし。

一馬を渡事。馬をゐて出て向來立。やかて三足  
おしゝさらかしいなやに。馬の右に立手綱  
のさんたんをハ。右の手にてゆひ二にてか  
らみ。右の水付を。輪を二つゝくりてひかへ  
うけて來らは。まつひつてを渡すなり。とす  
るにうけて禮有ハ。一禮して三たんをふり  
ほごき。人さし指一にて。騾よくふるまふへ  
し。

一馬を請取事。たとへハ客居に伺公せと馬の  
左に參り。腰を張程にすくに持。尾先の通り  
にて一禮して。右へ腰を張ほとにこゝめ。一  
禮して先右を下手にして。渡す手の右の手  
の三たんを。うけとらんとする時渡して。手  
繩をおしミわたす時。右の手にてゆひ二ツ  
にかいからみて。扱水つきと下手にとり。輪  
をとりなをす也。

一圓さうの手綱。可用やうハ。つねの手綱の事。左右の手綱を丸して曳へし。

一前はさみ乗ぬ先に。禮の前。腰の中ゑむすひめをしかとはさむへし。

一乗渡し可用やうは。のらん時。少手綱をこきさけて。右にて手綱をかけ。左の手にて袖のひつてを。然と取乗なり。さうのくつわを可取。乗つくるひてはなすへし。

一押下の手綱可用やうハ。乗て手繩にてをか。鐙に足をかけのらんと同方に。右の手にて力にまかせす鞭をひくへし。右の手にてひつてを取へし。押様おほきに渡る也。

一前輪かゝり。可用やうは。右手にてひつてを取。右の手にて手綱を鞍の前わに打かけて。かしらを引そろへて。鐙に足を揃て。鐙に足をかけて。其後。右の手にて手綱を取揃て。鞍の前輪に取揃。々々て左の手にてハ。其鞍

のきしもゝをおし。はやくこしを廻してのるへし。

一そはのり可用やうは。具足立候時も。太刀をはさむつかをも。鞍にあてす乗事。馬のうしろの方へひらき可乗。いかにもかろく可乗。一そはおろ。太刀はいて鞍にあたらぬ様に。左へ身をひらいておる也。

一かま手繩の事。長さ三ひろ片わき也。

一鞭長サ三尺六寸。又三尺三寸也。取柄の長サ六寸。短ハ五寸也。

### 蹴鞠門第九。

(書カ)

一鞠の事。人數に至てハ一流の事籍有之。稽古有習なり。これハ大方計記候。たとへは主人貴人曲足名足遊したらは。よりくる鞠成とも。名のあし蹴へからず。

一鞠見物のこと。若鞠なかれて見物衆の中に來る事あらは。見のかしたるは比興也。我前

による鞠ならは。手のひらにて。庭の方へ  
うちやるへし。貴人主人の御うへも左様の  
事有へし。黄門殿御鞠の時。有人鞠のころひ  
來るを取て。兩方の手にて捧て參しを。法し  
らぬ人にわらひ申也。又疊をしかせて御見  
物有し所へ。鞠なかれてよるを。扇にて打や  
り給ひしと承候。これは御堂殿か法性寺殿  
かと申あへる也。

一かゝりを植事。柳。櫻。松。楓と植へし。木と  
木の間二丈二尺八分也。

一きつたては。二丈或ハ一丈八尺なり。家によ  
るへし。

一竹のかゝりをたてへきやう。竹と竹の間ハ  
二丈或ハ一丈八尺八分なり。但庭によるへ  
し。

一竹の掛りを切る事。一丈本のふしの下一寸  
うらも同本の枝もく事。烏帽子さわらぬや

うにもくへし。

一かゝりを植る事。妻戸の中にあてへからず。  
一きつたてハ。皆松皆柳。これハ常に有へから  
す。二本つゝは不苦。

一わけ木ハ三方有へし。乍去南計と可心得。柳  
櫻を植へし。又あみの高さ一丈五尺八分也。  
一鞠をほす事。松のうちにかけへし。人に蹴さ  
せぬまりをは一結むすひて可掛。是を見ハ  
所望をやむへし。

一藪の間にかけてほす鞠ハ。其蹴へからず。

一鞠を見物も蹴足を立る人ハ。是非とも(ナシイ)に可  
蹴心持也。蹴足ふせて居へし。

一かゝりの枝をすかす事。柳櫻楓ハまたより  
一寸置て切。松をハ際より切へし。

一鞠の取皮一寸に可切。八分に切事もあり。か  
さ返しの針目七針。但まりによるへし。

一土用のきつたては。松貳本柳二本成へし。但

土公を可祭。まつらすハ不可蹴。

一鞠を庭に置事。取皮を左に持て。木の外を廻り櫻と楓の中を通りて。腰皮を御前に向て。取革を上になし。庭の中に置てしきり式題多し。

一松の本にハ。酌する人東脇にたつへし。下足ハ楯の南に。三足ハ東の脇に立へし。櫻の西脇是も心得へし。

一足ふくろハ無役。紫黒皮是ハ常にはくへからず。貴人の沓也。紋は何にても不苦。

一鞠のかゝりに留をおとす事。鞠の數取人と同所に有へし。此方ハ長のかたをこし。柳蔭に居すへし。

一軒むき北ならは。西より鞠を出さは。酉戌の方よりあひを通りて。かへし目を松も柳に向て可置。其後つくるひて。又本の道を歸るへし。

一鞠の緒の事。四季に替へし。春は紫皮。夏はあい皮。秋は黄皮。冬は白皮。

一片打目縫の事は。針七針同し。

一鞠つくる事。四季に替へし。春ハ紫皮櫻。夏ハあい皮柳。秋ハ黄皮紅葉の枝。冬は松の枝なり。

一付皮の廣さかへら目と同三分に定也。

一鞠の付所最上の秘事なり。木の枝。何れも五尺三寸に定。是より枝に付へからず。立木に付へし。

一掛の本の遠近の事。木と木の間二丈二尺。軒端も木の間一丈。上屋の柱と木の間一丈五尺。亦一丈八尺に植なり。庭せはきによりてハ。木の間一丈八尺。上屋と木の間一丈二尺も有へし。

一常の木柳。櫻。松。楓の外に植る木の事。桜。丑むくの木。辰巳。柿の木。未申。桃の木。戌亥。

是をつきたてにても用へし。

一本をすかすにハ。先桃より枝ハきるこも、梢を切へからず。榎の木。柿木。むくの木は枝をも切へし。

一二の座の事。松の左上座なり。

一鞠のかきの事。かきの上木六寸に切へし。かきの枝ハ。上木に相應して切。一丈の竹のうらに。かうよりにて結付へし。竹のようの内へ入る事。なふし役人の前に落るまりをとむる枝をおらん時のためなり。

一鞠はさみ略義なり。御會の時ハ。鞠桶の中より取出し。庭におくへし。

一鞠を鞠に置事。妻戸の間より出へし。部の間を嫌ふへし。

一弓鞠の時は圓座に敷事。あみめを西になすへし。但家により。座配によるへし。圓座なき時は。うすてふ又あつ疊おも可敷。

一かゝり通るへき事。木と木の間不可通。人數鞠をとり蹴時は。禮及され、人數の隙をうかゝひ禮するも付、不可然。

簾中 柳 櫻 □ あしハ人の圓座。

□ 一 役人とは

北軒 □ 一 かすとり

□ 一 さほもち

棧敷 松 楓 □ 一 かきもち

一二の座の事。東向の家ならば。申の方一の座たるへし。是にて皆心得へし。

饌部門第十

一板の寸法二尺八寸。但大鳥板ハ三尺六寸なり。厚四寸八分。足三寸八分。合て八寸六分也。

一鷹鳥えかへをは取志。飼かいたる上にして

出すへし。

一盛へき事。鷹の鳥ならは。下はひつたれ。上には別足をもるへし。

一汁にきそくを指事も有へし。

一鷹の雲雀も。かけ尻を上に見せてももる。鶉はかしらを上になすへし。

一射鳥は。矢目を上にして出すへし。

一出陣の時。二種の肴組の事。晝は右に打あわひ。左にかち栗七なり。夜ハ右にかち栗七ツ左にうちあわひ七本たるへし。

一式三献の御肴参らする事。三献目とりて二献の上にかさねて。其上に始献をかさねてあけへし。

一御手掛ケを置て。三献目に御肴みな取てかさねて置へし。

一銚子を可包事。結目七ツ九ツなり。東へさしたる柳の二保なるを取て。銚子のさんほう

より二寸のけて。柳の枝を渡りの本まで指出し。五ふし又七ふしに柳を包添る事謂有。柳には薬袋をかくるなり。薬の名を梵散云なり。袋はすゝしなり。松の葉を包みそふる事ハ。りやく儀なり。又只右を一節上節に結なり。

一銚子の口を包へき事。次第は蝶をまなひて可包。又女蝶男蝶の心得有。男てうにはひけ先を少下へためて。女てうにハ羽先少あるやうにたゝみてよし。ひけのためやうも同前也。少上へためへし。是銚子の口結たるを。ひけになすなり。男てうをは。常のよりのことくによるへし。女蝶をは兩方のはしを少残してよるへし。

一聲嫁取の食にも餅にも。鮭。あゆ。さめすへからす。

一御臺迎の時。三はんたちの飯有へし。興鳥起



(鯉)

瓶子二重のかけ如常置。鳥鯉一番つゝするは然るへからず。車にても轡にても。主の下る時。妻戸の内にてすたれをあけて向る事なり。

一式の食と云は。三本たて。五品たてなして。

こわき食を大きに盛て。紙をたゝみて帶をして。結目をぬしの前にむけて。引とくやうに結なり。菜は色々の魚鳥を盛。又さらし物をも盛なり。九つにても八つにても十にても可盛。はしの臺にそへて。焼鹽。梅干。はしかみ等。かうのものをすゝきに入て。前にそへ

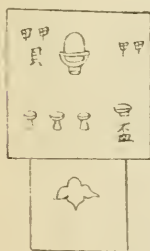
(朱カ)

るなり。式の肴のことく來土器にすへし。御汁の鯉には。別にすへるなり。是も如肴候。鯉のわた。いり鳥。醬鳥賊などにそへ。くそくは七五そふるなり。其次にいつものことく。食を一膳すゆるなり。ひめの食とは是なり。是も御汁の鯉二も三もそふるなり。追

(號イ)

膳等して御飯をかきわけて。いつれにてもあひまいりたる汁をかけて。きこしめすなり。何にても主人の(き脱カ)こしめしかけたるを取て。かけてくふ事。御わけ給るゝ也。

一公家内裏女房の時。供御したつる事。膳部といふは。如此の事をよく知て。したつる間。是に隨て仕立させよ。三條殿三はんは物きこしめすとはいへともましますなり。何にてもあれ。しるものは四番之(先イ)しるをなめ給ふへし。



式御臺之内



是はひめ食也。二番  
まいらするなり。



たうの事



是は小漬の  
さいしめ也。

内には  
み鯉のし  
たて也。  
なますハ  
本より不  
及也。

せうちや  
うしひや  
くたん



是ハちから  
小漬のめし  
也。

汁は鳥鯉  
さこち又  
なとミけ  
あるへし

一三峯膳ハ。點心以上の羹なり。中に蓬來。右  
にほうてう。左にゑいしゆ三の嶋を焼子盛  
なり。喰様ハ汁を三の山の間に請。箸とらぬ  
以前に。鶴ののほりたるかんを。生飯に取  
おさめ所に置て。あひしらひて上へし。其時  
はかならずさいせんに。當季の山をかたよ  
せてくふへし。箸納る事も。侍は上中下に渡  
り喰たる方を。わか前にさし納へし。女房兒  
ハ其喰たる方を。折敷の前に手よりを。はん  
分ふちの上に持せて置くへし。羹點心のは  
しの納やう。是以しるしかたし。饅頭次に

うんとん。扱むし麥成へし。かんをハ臺なから持上へし。謂はに(小イ)よしのまゝふかすものなれは。先左の手にておさへ。右のゆひ三にて。そとちらぬやうにきて。中のまんちうを取出して。晝はふくらを外へなし。夜はひらを外にむけて喰なり。

一羹ハ。羊羹。猪羹。しゆんろかん。筍羊羹。

雲月羹。蟹羹。白魚羹。駙獨羹。(狗イ)水晶鉄此外

竹葉羹等。數ハ□に不及。點心の數は先つに(羊イ)しるす。此外面□麵とて食後に長きまゝほ

そく切たる切麵なるへし。或ハ桐の葉饅子等にもりていたすへし。

たうふよくくゆてゝ。くるみ二はい。小麦の粉二はい。葛の粉かさ二つ。まめをつくやうぬかを入れてつくへし。けし拵やう。けしをよくくすりてせんして。水少入ていさせ

へし。

ろちやうかんしたにかんおもてかんたうのあいたにくつを置へし。  
こしきの下に。笹のはを敷。その上に布を敷へし。



一板出す事。鷹の鳥をは。くちへかふたる方を客人へ出すへし。

一射鳥をハ。矢目を本客へ向て板を出すへし。

一肴鳥かへる事。筈をは左の手に取也。

一常の板を持て出事す。二人しての役なり。先を後へ成やうに座敷に置なり。きりては右へ歸るなり。

一さんしきに瓶子を立る事。女客ならは男蝶を賞翫の方へ置へし。男は左。女は右を賞翫をするなり。

(迎カ下同ジ)

一女房向の時。三ほん立の飯有へし。おき鳥。おき鯉。銚子一貝に蝶。是は常のことく置鳥を。一かけするは不可然。車にても主のおるゝ時は。妻戸の内にて。すたれをあけて向る事なり。其座祝おとこつかぬ事なり。只女中の儀なり。三日の色直しの後。一座にて祝言有へし。女房のむねの守の緒をは。男よりとくなり。御拵供の女房ハ。左の方に有て。指よりて女房の左にそひて。女房は。後へおとこの手をまわして。片手にてまほりの右の

緒をとくなり。さなくは。かいしやくの女房もとく也。

### 筆法門第十一。

一料紙の事。至て敬ふには古紙壹枚なり。禮紙貳枚。立紙二枚是なり。當世は立紙一枚なり。雖然。賞翫の方へハ古紙を可用。あまねくハ一枚なり。

一うは所の事。公家には定る禮ハ有。其時の位によるなり。大臣家より執柄家に奉る書札の禮ハ。恐惶謹言と書て。すへ所の名を當所に可書。たとへハ一條殿。二條殿。近衛殿いはしと書歟。又大納言中納言等へ遣すに謹上と扇に書て。其人の官計を。たとへは權中納言殿とも。中納言殿とも可書なり。三膳散位二位三位等へハ。うは所不書して。狀如件と書か大分の狀。以上大納言より親王宮家に上るにハ。眞に恐々謹言と書て。官名を

も書なり。人々御中とも書なり。又は執柄家へ奉るも。親王家と同じ。大臣家へ奉るに。恐惶謹言と書なり。大將中將少將に遣はすハ。謹上と書なり。上所は恐々謹言と書なり。四位雲客等の事。狀如件と書なり。名字を可書。五位雲客には。狀如件と書也。料計する也。中納言より親王に奉るには。なにかし恐惶謹言と書て。當所ハ家つかさ名をかくなり。執柄の家に進るもおなし前と云々。一武家のやうハ。進上と書て恐惶謹言と。眞に書より外うやまふ書札。同輩ならは謹上と書。恐々謹言某殿と可書。是は禮紙したる狀の法なり。又腰文とて帶したる文は。賞翫したるやうなれは。内書と申なり。只敬方ハ。眞に書へし。むかしは禮紙本紙など書て。二枚三枚宛重て書事もあり。いかにも眞にかくなり。草に見へわかぬやうに書ハ。緩

怠なるへし。

一公家より御一族への御書は。不同也。執柄家より給り候は。某殿へとて狀如件と有へし。殿上人よりの書札ハ。恐々謹言と有てよき也。此方より遣狀も同事に書なり。公家に成とも。人々の方へハ。武家の人より恐惶謹言某殿と書送るへし。つねの事なり。

一二條攝政殿。或は九條の大殿などへ。即耳是を給文のことくハ。あなかしことかへせ給ふなり。

一武家より關白執柄家へ奉る文の事。いかに敬て書たりとも。すくには不可申。政所又召つかわるゝに。諸太夫にあてゝ書なり。書上る所に。以此旨御披露。又は以便宜御披露と書て。恐々謹言と書留るなり。又色々もこなたより遣す狀も同事なり。

一公家へなり給たる人々のかたへハ。御家人

の御一族よりハ。恐惶謹言某と書送ると。つねのならひなり。

一武家の人々は。我家人の方へ遣す狀も恐々謹言と書は。上中にはゆき。下にはゆきと計かくへし。

一可敬人の事。君。親。祖。師匠。伯父。烏帽子親。名字親。舍兄。嫡子尤おもく敬へし。

一主君へはいかにも恐れて書。伺公の人を當所にて。其さへ其人の尊卑によつて可用やう有と云々。

一師匠には居前の名をは可書なり。自餘これにしゆんす。

一俗家にハ嫡家を本とす。尤おもく可敬。つねにも敬をハ御宿所と書へし。

一賞翫も常の貴人へは。恐惶謹と書て。名字又恐々謹言と書たらは。在所の名小路の名を書へし。恐々謹言と書たらハ。人々御中と書

へし。是を敬とも申なり。其家に出頭の人も如此なり。

一僧中の書札の事。先五山長老へ書札には。内封に禮紙をして。立文にするなり。仍進上謹上とは不書なり。御家人よりの狀にハ。恐惶敬白とうハ所をかき。實名はかり書。當所は其外の寺へハ。恐々敬白と書て。侍者禪師と

もよし。書初に東堂へハ鎮(鎮下同ジ)而謹而言上。西堂

初山へハかたに鎮て言上。暖寮首座。以下へは鎮て言上。うハ所も眞行草(者脱カ)宛所も。眞の

方へハ何侍者禪師行の方へは。侍足下。草のかたへは侍者御中と有へし。

一ゑいさんの座主。高野の檢校ハ禪家の西堂に可准なり。

一北京三門跡。又南部西門跡等へは。大臣家來奉る書札に同し。又法親王家へハ宮と書加。うは所つねのことし。



一執柄大臣家等の公達の門主の時は。宮とハ不書加へ。うハ所も行成へし。當所執當法印の御坊坏書へきなり。法親王家へは人々御中と書なり。

一禪家へ暖寮首座へハ元禪師。藏主へハ記室禪師。書記へハ知敬禪師。平僧侍者へハ老僧禪師と書へし。

一僧中の書札を俗位に對する事。西堂僧初山檢校ハ納言准す。三議に准す。首座。法印。法務。僧都は四位殿上人に准す。書記。藏主。法眼。勾當。律師。五位雲客に准す。平僧。大法師。六位の士に准す。諸寺三綱。八幡社官。法綱以下。四位諸太夫に准す。武家には只同輩の書札を用なり。醫陰の兩道。社官の輩同前なり。

一御一族御家人は。公家の四品殿上人の位に准すへし。

一候上。後中。以下。

一殿上。殿上ノ中。殿下ノ上。殿下ノ中。殿下ノ下。

一畏而言上上。(懐カ)鎮而言上中。謹而言上下。

一抑をハ別行に可書事本也。置字には兼又本なり。禮紙置字追而上中下。重而と書。うハ所又書へし。

一仁々御言。人々御中。人々御中。又御館とも可書。

一位付は至上へハ官。下に姓を書へし。入道ハ沙彌。法印ハ沙門。僧も可書なり。

一うハ所の事。至上人へハ以此旨可有御披露候恐惶謹言。或は此由可令申候恐惶謹言。如此趣可得御意候恐惶謹言とも恐々。眞へハ謹上。行へは滲上。草へハ被上。係上と有へし。

一料紙と檀紙一向上方の御事。下様ハ如何。杉原厚紙中紙等は物によるへし。

一返狀の料紙を用落紙よろしき也

一文のはしの上中下。上へハ三寸計。中へは四寸はかり。下へハ五寸計也。此外有へからず。

一紙の裏表。吉の時は面を可用。凶の時ハ裏を可用なり。

一年號を書事。(息カ)證文なるへき消見には可用。

一眞行草の字。草字を好むは花族なり。武家は行眞なるへし。

一條と云字ハ。二又上の方へ大慶祝着満足悦喜快然等の文跡思慮有へし。

一うす墨の事。無禮なり。

一實名草にかく事無禮なり。

一時刻を付事。大事の用に巳日付の下。又ハ裏書の人の名取の下にも付へし。

一墨續のこと。二行目の中より上。三行の中より上り一通りハ見苦也。惣而眞の文字のな

らひにハ。行か草かを双。草にハ眞をならへ

書事法儀なり。

一六波羅又鎮西の探題。同奥州の探題等公家に注進は。常には可替。進上相摸守殿恐々謹言。あて所は其家の執使を書へし。

一御書之御請には。右令仰下趣謹而奉拜見候畢と書畢而後伺便宜御披露有へし。恐惶謹言進上貴四御奉行所と書へし。

一御教書の御請ハ。仰の旨畏而承候畢。此旨可有御披露候恐々謹言謹上御報。宛所は人によるへし。

一御教書ハ。抑と書始て意趣の末に。仍仰執達如件。宛所は人によるへし。

一御書ハ。右令仰下所之儀旨趣書畢て。仍何之狀如件。當所御奉行所の官なるへし。殿文字なし。

一綸旨除迎成意趣始より書とめ。依綸旨如此。年號月日の下に。御製攝政執柄の御官性實

名なり。たとへハ。

藤原朝臣左大臣

應永何年何月幾日

家弼御判

宛所は人によるへし。

一院宣も仍院宣如斯と有。年號諸篇如綸旨なり。

一令旨官符宣ハ。執柄攝政家の狀なり。書に不及

一仰書仕様ハ。御前にて常にはかわるなり。左のひさを立て。御硯をよせてハ。料紙を取て。善惡は御意に有時おさめて紙のほこりやみたらハ。御硯を引よせて。ふたを開て。さうなく同し座に不可置。上方の硯ならハ。此ふたをひらいて。扇の上に可置なり。次に水かめを取て水を入れて。次に墨を取。墨を見て。龍尾よりするなり。廻す事。先順に十返はかり。逆に十返計。次に中をする也。立様

にするやう有。墨口を疊紙に當てのこふへし。する内に墨口を。二三度も四五度も見てすること禮儀也。若祝言時宜ならハ。思安して可書。返禮ハ其文に依て書なり。高下は御意を受けて書ものなり。若おしきなどに据る硯ならハ。ふちの上に墨口をいたゝかせるなり。次に筆を取。成所の水に。少さしひたして一二返も染て。次第に引あけ。墨のあつき所にて染るなり。其後。紙を取卷置なり。書始は始さる事なれとも。能紙は禮儀の本意なるゆへ。初路と云事不苦なり。いかにも正路に文字をくつさす書なり。眞如實相妙の法に可叶。書様はかけ字等に閑有人それさへ鬼形蛇形鳥形かなハ。らんさう朽木より外は有間敷候。されは實形手本を用へからす。

一立文の事。進上と書て。人々御中とも。又は

官領など云て。又官領ならずとも。御氣色の方を書いて。其下に家つかさを書。名乗をかく。無官の人には。武からるへし。委記に不及なり。

一父方母方の伯父。しうと名字の惣領などへ遣書札の事。恐惶謹言と書て。名字にても在所にても。又小路等の名を書へし。若は恐々謹言と書て。人々御中なとと敬に書也。又其家の人烏帽子親なとの方への書狀も。敬て書なり。師の御坊なとへの文は。恐惶敬白とて侍者と書也。

一恐惶謹言とかくとも。事外敬申方へハ。文字を眞にかくなり。大方ならば。恐々謹言と草に可書なり。

一うるわしき書札の時は。進上人々御中遠江守某と書。上所には恐惶謹言と書なり。禮紙一枚なり。

一諸國の守護人の公家へ注進の書狀には。恐惶謹言某と書なり。

一女房へ可進文の事。本紙の上に禮紙二枚奉て。上を封る墨をひく立紙の下握て。昏縊(す脱カ)にて可結。ゆひ目の上に墨をひくへし。それかしどの、御局申させたまへと。左の方に細字に可書なり。御内の女房と云共。狀をは女(用脱カ)人うやまふへし。中紙惡様を努々不可之。尾籠なり。

一女文の書様の事。手跡よき人なれハ。女も文書事なとは口傳有へし。又源氏にも手習の君とて女なり。されは女にてもさのみなまめく事有ましく候。又あら／＼と書侍る事も口惜候。おもひ合て可書なり。

一けさう文は。一向別なるへし。長歌などのやうに書つらね。古歌などおほくつゝけて。いや言の葉を書ましへたる片腹いたき事な

り。心有兒女房ハ。わらひ草にするなり。又何事なと書事悪きならひ侍へりなとを。おほく書も悪敷候。只心の筋をよく顯はして加様の詞をは。少々可書事なり。心はつかしき女房の被仰しは。けさう文の詞に。おもひよるへきものは源氏物語なり。攝政殿の御家のやうにおもひの露と云物を。けさう文なとしてあそはしたるも。如何とおほゆることもましわりて見ゆるなり。けさう文あわせなとして。昔ハ心にくきいもせの間に。書かよわるも有けめとも。如何なるとハ見へさる。間。それをほんとすとも申かたし。後のあしたなとの文も。只哥一首をはめり。されとも歌もいさゝか一寸かた有へきはよせいかきりなく。しかも心ふかく候はん社ハ。いつくしくあさはかならぬ情もこもりて。面白くも有へく候なり。

一けさう文の料紙ハ。引合薄様などを用候。四節によりて。其下繪色ハ有へし。春は緑の薄やうに。梅。櫻。藤。山ふき。青柳。夏ハなてしこ。毎夏(常カ)あやめ。あふち。杜若。秋は萩。女郎花。しのふ草。冬は松の雪下こもりなどの色を用るなり。氷などの色を用るなり。氷の色とは。しらみかきつけ成へし。くれない一のみにあらず。いつも用る色也。それさへ下繪は時によるへし。結様ハ文の上かいを上かいに見せて結なり。墨を引事。思ひのつゆに見へたる行といふ字を。草に書かことし。かの心哥をとりて書には。三代集の内にむねと可書事有。さりぬへき哥のあまねく人のしりたるを取て書なり。集の哥なりとも。何れの哥やらんと人々のおもふをは不可書なり。源氏狭衣伊勢物かたり等肝要なるへし。

一けさう文の文字のくさりをは。四三一四二  
一とちらしてと昔は申けり。今は餘りにち  
らし過たるはわろし。これをゆつりて少文  
字おほくつゝけて可書か。たとへは四三と  
云四。何事か二三大すかたにして。文字は七  
三ハおわしまし三二五四一なりと共ちら  
す。委く四さふらふ。二二とはおもひの露に  
見へたれとも。猶心得わけへき爲にしろし  
侍なり。面に書留たるか能なり。さのみ多く  
書て。うらまでちらし書はわろし。それも常  
に書かよわしたるかたへは。いくらも有へ  
し。

一古哥をとるやう。たとへはいまた見ぬかた  
への文ならは。

たかせきもりとたに

さふら たれとしられぬも

はく ほとこのゆめの 一

こそ かよひ ちハ 三三一  
此趣に可書なり。猶可書は袖へかくなり。  
女返し。

見ぬ人戀らむ

うつゝな

く 夢のたゝ

こそハ ちハけ

此哥は。拾遺集の哥に。

見ぬ人の戀しさやなそ覺束な誰とかしらん  
露に見ゆとも

此心をとれり。

如此も返しはすへき也。されハ返しは其文  
の詞に隨て。書へければ安き事なり。

一後のあしたに。女のもとへ遣す文の様躰は。

道しは

の

露のし

れ

さふら



おれも

御

なをなくさ

ひて

おしハかり

まぬ

いかか

心まとひハ

うか

あけつる

(もい) 空を

此哥は。拾遺集に

あひ見ても猶なくさまぬ心かないくちよね  
てか戀のさむへき 此哥をとれり。

一つれなき人の方へ遣す文の様体。たとへは。

たまを

なすらへ たにたれ

とおほしき

さふらふを

さふらへ見

我なから

夜ふか

てや

うかれ

はてぬる心

きに

の 七九一七六一

すゑハおほ

つかなく

九七一七七

女返し

おもひとかめ

むすひとむ

さふらふ

へき

ちきりしらぬ

へき

身は

たか玉を

加様に心有て書也。此本哥は。

おもひわひうかるゝ玉の有ならん夜ふかく  
みへはむすひとめよ。此哥をとれると可  
心得。

一凡けさう文の詞は。三代集の哥。其外おほく  
心を付て工夫すへし。

一昔男のもとより。女の方へ遣しける文に。月

といふ文字一つ計書けるを。女の返し書を  
はかして。かの月といふ字の下に。おと計書  
て返しける。此心は人をめすいらへには。男  
はよといらへ。女はおといらへ申なり。され  
は此返しいらへたる心なり。月と書たる心  
は暮なはとく出よ。待そといふ心なり。其儀  
さととりて月の下に。おの字書事は。いらへた  
ることろなり。此女は式部の内侍とて。かた  
り傳へたるなり。けさう文は。加様にも書事  
有。此心けさう文の詞。ひたすら長哥のこ  
とくにくさりつゝけたるを。片腹いたき  
事なり。返すゝ歌と言葉は替事成へし。物  
を知たる兒女房は笑ふへし。それもいなか  
人のひとりむすめなどのまた一わの内に加  
しつかれて。一よのさまつきたるまな。た  
ちもいなかひたる人のもとへは。左様の片  
腹いたき事書たりとも。住吉の繪物かたり

も加様なるなとて。もちおこす事も有へ  
からん。正しく同心あらん女房の方へ。片腹  
いたき事をつゝけたらんは。はちをかきた  
ね成へし。誰やらん御所様の女房にけさう  
文遣したりけらし長歌のことく歌を。いく  
らも書つゝけて。はてには事の外のたゝこ  
とはのふつゝか成を書ましへ。女房あなか  
しこなとゝ書たりけり。物わらひてはちけ  
ると聞傳へ侍り。かくのことくの似合たる  
いもせのなかにてハ。さたの外なり。けさ  
う文は。たゝ歌のミにてはくるしからす候。  
しかも心の見ゆるハ能なり。歌と詞と書ま  
しへたるは。文には様有歌と言葉のけちめ  
見せて書ハ。比興の事也。たとへは。

けふとかやのことに

かくつひさふらひつるを

かねのこゑの告かほに

きこへさふらふも

もしさとりし

事にてやとなかめいたされ候へ

かきりやと

君チシこそすハ

ねやへも

いらし

こむらさき

わかもとゆひに

霜は

をくとも

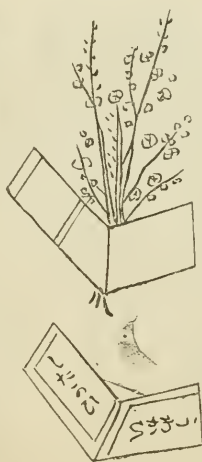
加様に。歌と詞書まきらかすやうにかく也。

一けさう文れうしの事。男も女もかき成りたる薄やうを用なり。繪は四季によりて有へし。

一文封る様。結の上に墨をひくなり。是をことく敷たゝしくのひきまわすハ比興なり。

筆の先にかけて。いかにもしとけなけに思すへし。

一梅櫻の枝又は松紅葉の下えたに付て遣す也。大將軍家土御門におわしませしに。したゝめてゝに進るは。初雪の朝にハ松の枝につけ侍しに。御返事には冬草につけ繪結カひし也。



一歌の只この事頭にむかつてよまねとも。いづれの風情にても心えよふにまかせて讀へし。其中にさりぬへき歌出來候とも。物にかき付て置て。そのてい題をよまん時出て用るなり。是は故實なり。家隆も定家もおほく

よみおかれ候。殊更同歌其沙汰有。此けいこにハ年よりて無用なり。物をわすれ候也。相かまえて三返も讀渡すへし。

一品輕の歌。十かいかくのことし。五かいの歌もかねて心あてに讀おくなり。書事ハ家々の集就中こめてにハ。竹蘭集見へたり。五七七。

一かなにて歌を書やうも。藤花立石兩流有。藤花には。上を詞ても下不同なり。

君か代は千代に八千代に 五七  
藤花様 さゝれいしの岩ほと成て 五七

こけのむすまで 七  
春日野にわかなつ 上九七一

ミけん君か代を  
いわふこゝろも 下七六一

神やしるらん

右如此書にも。立石やうは上句の末の字を下の句の上に置へし。是はていこ殿と申なり。又藤花十やうハ。上をそろへて下不同なり。

一加様に書へし。ちらし書と申も此歌様よりおこる事。然間。二枝の文を木たちのことく書なり。其間飛鳥亂水とてちらすなり。

一かんわを以て。歌書様。立石やうと中は。五七五の句を。九七と二行一字くたすは。少<sup>(上イ)</sup>よに不同間書なり。次七々の句をハ。七六一と二行一字に書也。二やうハ四行。木立の様とも申也。

春日野にわか葉つ

みけん君か代を

いハふこゝろも

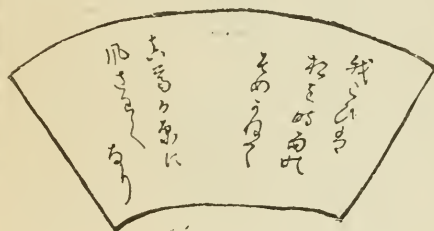
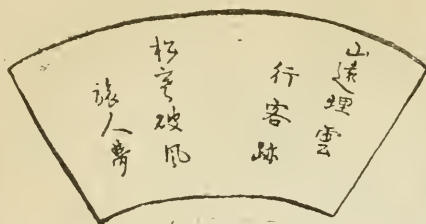
神やしるらん

一文。いつれの文も上一寸一分。下八分に行の

はしめをかきそむへし。

一水引にてゆひたるをは。上を二刀。下を一  
刀。上のむすひめ左へよるへし。下の結目右  
へよすへし。

一扇に物書事。不書間三間有。又折目に不可  
書。繪の生物由緒有物の上に書へからず。

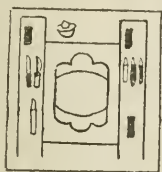
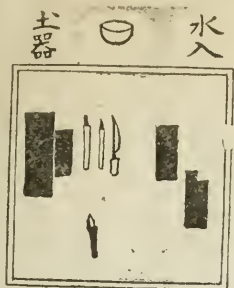


一連歌稽古の事。花鳥風月。述懷。戀等の句共。

にあら作おして。常に持候へは能有所のと  
き申せは。かんおの句あり。てにはに心と  
まり新作有へし。ゑせれん歌少の指合成と  
も。其まゝかへり候。是第一の心得なり。同  
筆者(筆)の禮之事。ゑんほとにて文臺を持な  
からむき歸り。刀扇を置。筆臺を取ておろし。  
扇の上にふたを置。紙を取て。中の紙を一重  
持上。目の通りして横に折なり。紙のこどく  
折て。紙の中程より先に。賦をくたりの有  
やうに見あて。賦の一字をかき。持のけて  
發句する人の方を見て。發句出來ハ三たん  
に請取。二通披露して。賦物(もの)をあてさせ。句  
をてにはよく大方は八と一行九と二行書お  
へて。作者作書納て。又披露して脇第三此心  
なり。貴人音形奉行の句。紙のうつりなら  
は。七句の物ハ六句。五句のものを四句。三

句のものを二句にて書へし。なおす事有ハ。  
 三度より外返すへからす。下輩平人ハなお  
 すへからす。かき置てとへる事にはいあけ  
 句のまわりとて。當世あけ句のゝちとへる  
 事も有へし。句ひきて後。とちめを上かい  
 に。賦を中におりて文臺にすへ。筆ふりすゝ  
 きて。筆臺のふたして御神の方へむけて可  
 置。刀持て退出すへし。

一 硯箱なから出さは。ふたをあけて。紙をふた  
 折敷硯



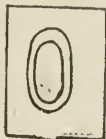
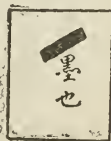
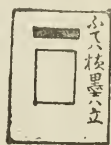
水かめのつかとへ

刀のさやはつす也

にとりくつして。紙をハふたの下に置へし。  
 ふたをは左。硯をは右たるへし。

一九面の硯の圖の事

此墨をハかきに  
 とらせ筆をハ鬼  
 にとらすへし  
 我より貴人の前にてハ  
 如斯出家ハ師僧主親の  
 前にて也



礪にて如此是ハ  
 同輩平生に用之  
 右の文字也

實檢門第十二。

一 實檢の出立は。大將つねのことし。左右の脇  
 に立たる家の子同し様なり。春は白糸の武



具。夏ハ黒糸あひ皮。秋ハ火威赤皮。冬ハ黄皮糸。土用には萌黄糸ト淺黄色なるへし。弓杖をつき重代の太刀を帶。大將の左の御脇尻にて。御實檢有やうになすへし。家の子ハ。弓を直し六具つねのことし。中刺をぬきて。緒の日より首を一目見て立へし。搦家の子二人の肩進候覽しこして御實檢有へし。弓は大平。弓矢は鷹の羽なるへし。

一大將にしるしを御目にかくるやうは。上帶にて大小道俗共に是に隨てからくるなり。殊に入道の首はよくくいましめてからくるなり。入眼の時は大將御座の左の方に。弓三杖へたてゝ首の右のそはつらを御目に可懸。ほろにても打かけ。かたきぬにても。其死かいの着たる物にても包て出。四重を三重。是にしかせ。一重面來<sup>(にか)</sup>ひきかけ左を隠し。右はかり實檢させ可申。又主人にむき合

不可申。又うしろさまもわろし。首の間に奏者は左よりに可伺公。

一頸かける事。御陣所をくひの後にして可置。一かけ卦は釧をゆひてかくるのも可有。結樣口傳。

一たゝの時ハ。小あしをつくりてかける也。一くひの据物かんなかけにても。又その石はんの裏にてもすへし。

一頸の事。罪の輕重に隨て。或は深夜に大路を渡し。或は獄門にかけ市にさらし。夫々に可行。

一頸切時の敷皮の事。將木に直り生涯すへき人をは。くひかみを前にして。白毛を後に敷なり。又平地にすへはら切時も。誅せらるゝ時も。白毛を右へも後へもして切へし。

一生涯する時のひつしきの事。緒の付たる方を前にして。毛茷を後に敷也。

一甫誘る事。死罪の名は白き(者下同ジ)繩にて三所四寸

にしはり。流罪の名をは縲索にて三所六寸にしてしはるへし。凡下はいをは三所八寸

ニ可縛。

一甫誘る繩の事。侍をは弓の弦或ハ簾の上帶

なるへし。敵をよくくかくさせ。すわうを打かけて。せなかを四寸計ほころはかし。夫

よりも繩をひきとおし。ほふをさせて渡すへし。

一凡下の者をはさし繩にてしはる也。

一甫取渡す事。いかにも弓斷なく力さそくを

心にかけて請取渡へし。是に限て上手をさるへし。

一人を沙汰する時の肴組。その打手にて同前

にひとときれ毘布にてちらしなしに酒を飲へ

し。然ハ常の祝にハ。毘布を一切。但或ハ中

をたつなり。又くまぬ以前。ちらしと中事三

度つゝよしゝて。四度目につくへし。

一人に腹さらせ。又ハたはかり可打時の肴組は。つねの祝に可替。相伴には香の物一切。

腹の切手にはかうの物三切組なり。打敷も

相伴の折敷ハ如常。腹の切手には打敷のふ

ちのはなれたるに居へし。

一銚子はかりにて提なし。

一酒ハ腹の切手に始させ。ちやうく二度。

扱相伴壹人呑ておもひ返しに。腹の切手へ

さすへし。いまた呑ておへさるに立へし。腹

の切手には。ちやうく二度。合て四献のま

せへし。銚子をは右にて逆手に。左口よりつ

くへし。然ハ常にくはへ一度加へて。おもひ

返しの盃と云事を嫌ふなり。又相手のひか

へたる内に不可立なり。

一誅儀(代カ)の役思(名)へ太刀渡事。一文字に渡なり。左

を突て右にて足間を可請取。されハ只の時。

片手にて太刀を取渡すへからす。一文字は人きれの字なれば也。

一頸のかみ結事。始より水を付て。四櫛二櫛四櫛二櫛とゆふなり。右より櫛をつかひそめ。櫛のみねにて。<sup>(結カ)</sup>本緒を櫛のみねにて四ツうち。結納るなり。折返してむすひてはし出すへからす。

一白衣の事。さひ糸にて可縫。針返しすへからす。截時はし不截。長計あつへからす。ひも菊閉ハより。なかひたをは左ひたに取くゝりをそとへまくり返してさすへし。ちどりかけ有へからす。着るやうは先素襖を前よりかつくやうに。こしたてハかみを四つに折へし。我とかゝり袴をは。まつ前腰をゆひて扱あしを左より歩ミ込て可着。紐は初むすひたる儘ぬきて。すつる程とくへからす。後ハ打こし。前ハ打こし着なり。此外はさう

くゝの馬のこしらへ様。かみを其まゝ禮儀にいかくへし。鞍覆。手綱。腹帶等もすゝしなり。尻懸むなかひもつゝむへし。追綱も白布なり。ひつそへは鞍おかの馬なり。馬衣白し。其外書つくすに不及候。

一吊の時のかんそうは。わかれかしらにすへし。

一ちういんの戸をは。客位を本にあくへし。

一白衣の時ハ烏帽子ハしらこ。ゆひかけも白より成へし。たゝはもどゐをかくへし。太刀をはすゝしのすん袋にて。左にかつくへし。弓長刀は禮に不及。かきの内にはいれす。いるゝとも餘所半なり。

一白衣の馬の事。ひきやうは右にて馬の左をひき。おひ繩には布を付。馬の右よりひくへし。廻す事も逆にまわすへし。

一頭のさかな有へし。かわらけに鹽を出し。くわへなくしてうにてたむくへし。

# 續群書類從卷第六百八十二

## 武家部二十八

### 了俊大草紙

武家に御引出物を進事ハ。鎌倉之宮將軍の御時正月の晩飯の御引出物より始云々。役人は立烏帽子に水干葛袴也。庭の座より持參しける也。沓をはきて參ると云々。一番に御劔を進之。御劔のつかの方を。我左の方にして。御劔の齒の方を上になして。むねの方を下に成て。兩方の足の所を諸手に取て持參して。御座の左の方に。二尺はかり隔て。左膝をつきて畏て。御劔の甲金の頭を疊につ

けて。御劔を取なをして。もゝよせの方を御身の方になして。はかせ給へき様に進をきて。左の手をつきて畏て罷出也。次御弓征矢を進には。御弓を張て弦を前に成て。弓の掬革より上矢摺簾の所を左手に取て。左の肩さきに御弓を打懸て持て。右手に御征矢の矢結の所を取て。簾の蜻蛉形の所を前にて。右の肩先に打懸て持參して。御前の御左方に弓を立。御右に御征矢をは置也。當時は左に弓も矢も副て立歟。式にハ左右に置也。次御鎧を進也。上下の役二人して持參する

なり。鎧唐櫃の蓋に置て。甲の落ぬやうに。甲の緒を鎧のしやうしの板にからみ付也。役人むかひあひて持參するあひた。下手の役人は。前に立てうしろさまに歩也。上手の役人ハ。跡に立て持也。御劔置つる所より少のきて置なり。北面にならぬやうに置也。主君南面に御座あらは。西面に置へし。東面に御座あらは。南面に置へし。如斯進置て後。下手の役人は急ニ罷出へし。上手の役人計り殘留りて。御鎧を少押直す様にして後。畏て退出するなり。又御沓行騰を進には。行騰のうちとを含て。緒を片結に結合て。白毛方を前にして。中腰の所を折て。兩方の手にて持也。御沓ハ緒を結合て。鼻を揃へて隻手に持て。行騰の陰に持て參て。御行騰の櫛上の方を。主人の御方に成て。すその方をはこなたに成て。押のして置さまに。御沓をは白

毛のはつれに置也。立ても伏ても置也。又御馬を進には。鞍置馬一疋。はたか馬一疋引副と號也。役人は組たる烏帽子懸をして。末を結て一からみして。袴のもゝたちを高くはさみて引なり。打ませの手繩を付て。下手の者に引するなり。下手ハ中間の役也。引副の馬は。始の役人同曳出也。是は下手の手繩あるへからず。只一人引候也。

一御引出物進次第三献目に進之

一番御劔。

二番御弓征矢。

三番御沓行騰。

四番御鎧。

五番御馬也。

一御酌取次第。父子三人して勤時ハ。初献ハ三郎子。二献ハ次郎子。三献ハ太郎子勤也。父は御引手物の役を仕事也。さならぬ時は。三献目の御酌を父可仕也。心得ぬ人は。一番勤を本と存歟。此外御小袖唐物御腰物やうの

物を進事。式有へからず。兎も角も進也。

一御馬を主人へ進時請取事。前よりすくによ  
りて。馬の前をわたりて。引手のまゑより請  
取也。引手の右にこふしより上の手綱をま  
つ取て。手に一からみして。左手にて轡の水  
付を請取也。自他同輩の人につかはす時は。  
馬の後よりまわりて。馬と引手との間によ  
りて。引手の腰を前の方へ押出す様にして。  
引手の右のこふしの下の手綱を先請取て。  
後に左の手にて。引手の左のこふしの下よ  
り水付をとるなり。是を相互に式躰と存歟。  
一主人或親方なとより馬を給にハ。馬の尻の  
方より廻りて給也。其時は。引手馬の頭の方  
に立廻りて請取らするなり。引手の右のこ  
ふしより下の手綱の末を請取人にとらす  
なり。是は無禮の儀なる故也。

一馬を引て御目に懸て。本の方へ引返して行

には。馬の頭を押出すやうに。轡の水付を押  
開て引返也。引人の我身(手)に引かくるやうに  
こなたへ引かくるをは。結ふと云ていまふ  
事也。幾度も馬の頭を押開て引て罷出候也。  
是は請取人のなくて。只馬を御目にかくる  
時の事也。

一鷹を人に進様事。人の多く居たる中を通じて  
參へからず。人の居さる方を通りて。すゑて  
參する也。鷹は後をいたむ間。人中にてハと  
はせしかためなり。如此の時ハ。只鷹計りを  
すゑて參也。或ハ餌袋を付。或鞭をさしなご  
すへからず。おのつから鷹のとはゑて。尾羽  
亂たらは。扇を拔出てつくろふなり。御前に  
すゑて參てハ。右膝を伏し。左膝を立て。膝  
頭に鷹をするあけて見參に入なり。

一鷹を人に進にハ。必うけとらせらるゝ也。請  
取人ハ。鷹すゑたる人の右の前の方よりい



さゝかよりて。鷹(たか)の飛せぬ様に請取なり。請

取も進も式躰をする也。其禮と云は請取人は鷹の大緒の末を請取て。我右の手の人さし指に。大緒を一からみからみて取て後。左手にて大緒を撫上さまに。鷹を拳にわたすなり。鷹するたる人の式躰に。幾度も我大緒を持たる拳より上の大緒を請取人に請とらせんとすへき也。拳の下をとらするハ無禮也。拳の上を請取するは禮也。如斯白地式躰深して拳の上より請取せんとせば。ちからなくするたる人の右の拳を。下より撫あくる様にして。拳の上の大緒を請取へし。是を自他の禮とするなり。如斯式躰をしらすして。左右なく請取間敷事云々。

一引出物に進する鷹の餌袋をは。後に追て進也。鷹に副ては不可進云々。

一鷹を進する時は。飛せざる秘事有之。左手袋

の掌の内のはつれに。鳥の肉を少握込て。人には見せずして鷹計に一見みせてするにハ。いかなる荒鷹も飛す事なき也。此事至極の秘事なりと。世戸入道と云し昔鷹聖の口傳也。

一内々の時。鷹をするて出る時も。餌袋を付鞭さして參事。口傳なき人のするたる也。縦餌袋を持て出と云とも。右手にて餌袋の緒を取て引さけて。大緒をは引すりて持て出る也。其時は。大鷹の餌袋をは。鳥頭の懸緒を取也。小鷹の餌袋をは。楚頭のかけ緒を取也。御前に畏て居時は。餌袋をは右膝の陰置也。

一庭にて馬乗て見參に人事。貢馬乗を本とする也。御前に引立たる馬の尻の方を廻りてよりて。馬と引手との間によりて。引手の左腰を右手にて押のくる時。引手馬の頭に立

向て。轡の緒口を取る時乗へし。乗て後。引手の手綱のまかりを馬の頭に打懸を請取て。右の方へ引打て三めくり打廻也。右方へ廻也。二へん廻し三返目に。御前方に馬を打立て。一足引しさらかして下て。轡の水付を取て立時。引手よりて請取後。左手をつきて畏て退出するなり。

一鞠の懸の右庭にて乗事。懸より外を乗也。内に馬を入へからす。まして四本かゝりを打廻事あるへからす。たとへは。



如此打廻し  
て下也。

一馬鷹請取事。同禮也。引人の手繩の下より請取ハ式躰也。鷹の大緒の末を請取も禮也。

拳の上を請取事は無禮也。同程の位の人の禮は。幾度も手繩と大緒との末を請取事也。如此事は。一反手繩に可習事也。大方をしるしけるなり。

一琵琶琴を持參する事。琵琶をは我か引ことくに持て參りて。御前にひさまつきて。ひわのらくたいの所を疊に立て。右手にて琵琶の頭を取て左を副て主人のひかせ給ふへき様に御前近く進置也。若御前に御琵琶有時は。右手にて琵琶の□を取て。ひつかけて持參て。先のことくにとりなをしても進る也。一琴を持參する事。右手にて琴の下。腹の中のはとをかゝへて持て。右手にて琴の龍角の方をかゝへて持て。琴のかしは形のみしかく成やうに持參するなり。琴の末の長出るは。物にさはる間。末みしかき様に持へし。さて御前に右の膝をつきて。長さまに龍

角の方を疊に立て。兩方の手にて取なをして。主人のひかせ給ふへきやうに進置なり。

一笙の笛を進には。笛の末のかたを我身方に成て。右の片手にて。せめ所を持參て。御前に畏て奉りさまに。左手を副て進なり。

一硯を持參するに。蓋を開て蓋の上に。硯の箱を重て持參して。蓋をは別に置て。硯の墨をすこし摺様にして退出する也。但御引出物に進時は。たゝ持參する迄也。細々にめさるゝ時の事如此。硯の水のこほれぬやうに持參する也。

一主人の御弓を張て進事。いかに弱き御弓成とも。二人して張を故實と申也。張時はいか程も弓の裏弭をたかく柱にあてゝ張なり。ひきく當て張るハ。弓を押折る事あるなり。二人して張るは。大鳥打の所とすら弭の所に。手を副さする迄なり。あらくとれは弓ゆ

るむなり。

一御社參の時。御幣の役事。御劔の役と御幣役ハ。同品の人つとむる役なり。細々には誰も仕也。御參内御社參には。一族達の役也。御沓の役は。右大將頼朝家より長井攝津の人々の役也。御調度役は。佐々木の家の人々の役也。御神馬の役は。天野の家なり。

一鞠の事。難波。二條。飛鳥井家也。人の好足の品によりて。此三家の内。いつれにてもまなふなり。鞠の庭に着座の事。皆圓座に居也。難波門弟の人は。右足を上に置て。烏帽子の風折をは。烏帽子の内裏を額留の前さすに。紙ひねりを長して。からみて風折する時。引出てするなり。琵琶琴を引人は。琴の十の緒。又は三の緒を烏帽子懸に用也。二條家飛鳥井家には。左足を上に置て。風折をは只上よりをしかけてする也。

一懸の本に立事。軒懸の木二本の本には。左右なく立へからず。軒懸より此方の木ともの下によりて立也。又貴人主人上手の人々の向つめに立へからず。又大事の木の下に立へからず。時によりて計て立へし云々。庭に立てもさのみ久立へからず。鞠二段はかり過て後。歸て本の圓座に居へし也。鞠に立時は。疊紙の上に扇を置て。圓座の前の少左方の下に押入て置也。幾度も座に歸居時は。扇疊紙をは懷に入。腰にさすなり。又立時ハ。以前のこことく置也。鞠を落たる時は。急退て歸座事也。凡鞠の庭に進退事は。或貴人或上足の古老の人などはからひたて立る事なり。自由には立へからず。貴人御延の時は。人數みなく手をつき畏なり。又貴人のあそはしたる鞠。遠く落るをは。いつくに立たりとも。ありやと云切聲ニこひてをよふま

しき所成とも。延へし。うら延足とて。禮にする事也。我か不覺に成よしなり。

一懸を殖る次第。(植カ)人の屋形ハ南向を本とするなり。良方には柳植也。陽の始の故なり。巽

方にハ櫻を植なり。坤にハ鶏冠木植なり。秋をつかささるゆへなり。乾には松を植なり。方は如此なり。然に柳。櫻。鶏冠木。松とかそふるなり。飛鳥井家には。柳を巽に植。櫻を艮植。松を乾植。鶏冠木を坤植なり。仍柳。櫻。松。鶏冠木とかそふるなり。柳四本。櫻四本。鶏冠木四本。松四本を植事ハ。貴所様の外にはせぬ事也。

一煙鞠は花の盛なる頃可用云々。鞠革ハ春二毛の大女鹿の皮を上品とする也。秋二毛も能きなり。夏毛の中にも。皮の色白て爪にて押は。しわのよる皮を上品とするなり。いかけも輕を可用云々。

一足袋は。初心の人若人は。皆藍白地とて。藍染の文の皮を用也。白皮の藍にて摺をして用也。鞠足に成て後は。文の付たる燻皮を用也。最上の足に成ては。無文燻皮を用也。錦皮と無文の紫皮をは。上臈達の用給也。凡足被の色ハ。難波家より計てゆるすなり。鞠の條々五十一ヶ條と云々書に見えたり。なを委細ハ刑部卿賴資卿の蓮花王院の寶藏記云物に見へたるなり。

一鞠人數と云々品々有事。云々姿よく足の曲(脱カ)みな調て。鞠を落さるハ最上足云々。曲をは悉備ねとも。姿よく足踏たしかなれば。人數に成也。姿惡癖あれとも。曲を能々仕も人數に成なり。又至て早足にて。落つる鞠をつく

(加カ)人も人數にかなり。是等を鞠足と云なり。

一鞠の數を申事。鞠を見時。鞠數多上て、面白(脱アラシ)口傳云々。

一弓の事。弓は先加地弓ト號て。かち立を本と稽古するなり。其稽古の次第大方の様ハ。今ニ常に射ことく成へし。立てをしはたぬきて。

袖を納て矢をはけぬ以前に。左足の太指の爪崎を的にうつくしく向て立て。右足を其通りに横に踏て立ハ。的にはそはさまに成なり。西向に的立たれハ。我身北向に成様に立て。左の腰の骨の上のあはら骨の下はつれの腰の骨のかとにあたる様に。ねちすゑて腰骨を落しすゑて。矢かまるをして。後に左のをとかひ中程を。胸の左のかつほ骨の中程に當て。左目頭にて。的を見て其まゝ置て。頭をも頸をも少もはたらかさすして。身持をも足踏をもすくめて持て後に。烏帽子のへりのほとりに打上へし。身持も頸持もはたらかぬ様に。ゆるゝと打上て。懸て引分る也。右のかた崎すこし下かごに。拳の大



指の根の當やうに 拳を外の方にねちまはすやうにすれハ。ひち尻は右のいかねの方に引まはさるゝなり。如此拳をねつるやうにせされハ。肘尻の堅まらて放の惡也。其後。拳を的にをし當て。矢崎と的に見合て。左の肘の皿骨の上の方に成やうにねち廻ハセハ。うけかひなはねうつくしくある也。すくかひなは。うけかひなに見ゆる也。木丁かひなは。すくかひなに見ゆるなり。其後。左の二のうてと。肩の間の一のきためのふかくくほむやうにかひなを押。下ハ矢崎と拳とは彌高く成間。能々押には矢は越るなり。押と心得て。矢崎拳を下には矢はさかるなり。相搦て一のきためのふかくくほむ様に押ハし。肩崎のたかきは見苦敷事なり。如此左右共にすれハ。矢束もなかく引かれ。放もよくきる也。放ツ時は。右拳の手内は

外に向様にねち放。ひちしりよくくかたまれハ。かならずつよく放とせねとも。一文字によく切也。放は二様なり。大放と云ハ。肩崎より三四寸遠也。小放は肩崎より二寸の内外に放なり。いづれも人により好に寄ヘし。物をよく射當る人は。多分小放也。大放は心地よく見ゆれ共。矢所違事有と申なり。放て後。すこしく持て弓たをしをすヘし。あまりにはやくすれハ。うつやうに見えて惡なり。始申つるやうに。身をも足をもそはさまに的に向て立て。的は西にあらハ。北向に立やうに立なり。的に向て立ハ。矢束もすこしひかれ。小當も違也。弓立の惡人は。胸も腰も的に向間に。小當も定す。矢束も引さるゆへに。或は胸打或はうてを打也。弓の癖は。みな身もちの惡故也。

一弓を握様。弓の前竹の内かとに。くすし指と



たけ高指の末のきためを當て。つよく握て  
打上ハ。次第々々に手のうちをのつからほ  
とけて。終に握とめけるとき。打上て引分  
也。必弓たをしをせんとせね共。放時。手の  
内くつろきて。弦はよく返る也。弓を取渡  
事は。日の通にてする也。秋山新藏人と云し  
上手は。諸手放て後。弓を取渡し。しり腰の  
通にて。弓の裏弭を右の方に振廻して。右  
手を寄て腰の通にて。弓を取渡候也。其外は  
昔よりみな同様に目前にて弓を高取渡也。  
我々は亡父のまゝするなり。當摩源三入道  
と云し上手も。亡父の中ことく教し也。御的  
には敷皮を敷也。其も武田。小笠原。本間。  
澁谷皆替なり。君達わさには。小笠原様をそ  
まなふへき。水干の紐を納るをも替なり。紐  
を納る様は。本間やうか能也。風吹などこ小  
笠原ハ煩しきなり。風吹日。秋山かせしハ

紐の末に少石を結付し也。故實也。大方如此  
しるし侍れ共。人に教には。手つから教すし  
てハ。あやまちもあるへき歟。

一的庭の遠さは。昔は弛弓にて三拾三枚に射  
梁を築て。的をハ三十枚に立し也。今は或は  
廿六七枚又ハ其よりも近くする歟。的も五  
尺二寸也。今は六尺あまりもある歟。

一笠懸の射梁も。九枚につきて七枚に的を立  
なり。今は馬さくりとの合と五枚六枚にも  
するなり。ときに可順也。昔は的をは真向に  
立しなり。今はむかへてすちかへて立なり。  
埒をは馬手の方にするなり。當時馬足跡を  
堀のことくにくほくする事。比興の事也。  
笠懸を射事。家々に替て少ツ、替なり。然  
共。御所の御當家の御流を。本にまなひ可申  
也。左馬入道殿御次男に。大上總介殿と申し  
ハ。犬追物笠懸の上手にてをはしまし候

之間。其様を御當家の流と申也。故實御所は上手にて渡らせ給しかは。人も其御様をまなひ可申也。馬場本に打寄て。馬を返して打入て。三足開て三足矢筈取て。三足馬とかゝせて。的に向て打上て。馬に走せて次第々々にねちまわして。的通にて放なり。放て後。又三足かゝせて手繩ちりて馬をとむる也。一鞍立好人は。打上を早くして。長引して射となり。鞍立わるき人は。矢筈をおそく取て。馬につめさて。的合近く成て一拳に射と云り。鞍立わるくは。前輪に懸て射よと教たる馬場殿又は御所の御前にて射る時は。沓をは御門外にてぬきて。片手に弓に取副て持て。御門の内にて沓を着て馬に乗也。又袴行騰の時は。沓をはかぬ事也。はたか足にて射也。

一笠懸的のせひは三六寸横手なり。的皮の布

ハ。白ても又すそを染てもするなり。縫目毎黒皮にてとつるなり。引目は染たる糸にてはくなり。羽は切符。中黒。爪黒等也。あかりと云鳥の羽をも用也。鶴羽の黒く羽崎の白をも用也。引目とゝめを糸にて巻也。笠懸の弓は少弦を可用云々。

一小笠懸の事。小笠懸引目は。めを向にする也。猪子引目のことし。當時は絶たることくにて。知たる人少敷。小笠原美濃入道に尋て侍しかは。大かたいかり申き。竹笠を着て。小手をさして打入開して鞍中に立て。引たてゝ射と云々。能射る人の引目は。引目頭土に付也。下手の射にハ。引目横さまに走云々。所詮引立て落し懸て可射也。犬追物の外の物のくひれたるを射ることくなり。但小笠懸には弓たをしを必ずへしと云へり。小笠原入道語しは。長井治部少輔ハ。終に弓た

をし不叶して。むつかしかりしと申也。我等  
はいまた不射しかは委口傳せす。的ハ三  
の少也云々。串長ハ壹尺八寸と申也。的をは  
馬足跡に副て立なり。三二九八的。四六三  
りとめいしくと云作物に候なり。皆々武  
田。小笠原の人々沙汰するなり。三的の事  
ハ。小笠原の委細口傳畢。別紙に注付り。

一丸物同草鹿の事。九杖に射槩をつきて。七杖  
に的を立也。しんどうハ本間の人々の様を  
本とすへし。どうの尻を廣くするは。比興事  
云々。細く削て三所を卷てぬる也。草鹿をは  
しね口にて射るを興とすると云。

一犬追物事。引目は人の好に大小有へし。同の  
糸を片手によりて。廣さ一分はかり卷なり。  
墨を下地にぬりて。漆<sup>ハコヘ</sup>葉<sup>ハコヘ</sup>を<sup>ハコヘ</sup>しほりて汁を  
合てぬるなり。漆の有ハ比興なり。掠實色を  
用なり。引目からの篋ハ。夏切はわろし。竹

子の末葉一二出來。末を一尺はかり切捨て。  
八九月の比。其本を用なり。うきすかるにて  
しかもつよくてよきなり。矢うら栳をは。黒  
糸にてはきて。本栳をは眞木皮にてはきた  
る面白なり。弓は若木の弓のかるきを。弓矛  
を七尺一二寸に切て。一人ぬりてよきなり。  
籐をつかひぬりこしらへたるはわろきな

り。凡射手具足と云は。手輕にすへきなり。  
弓の弦はちとふとくすへし。引目の音の有  
なり。弦のはたかきか好なり。六寸より今少  
はたかくするなり。さくりの定をは。大に卷  
なり。矢崎を一寸二三分計りさけて定を卷  
なり。くひれたる物を射によきなり。一束引  
目と云ハ。五腰なり。二十なり。其に笠懸引  
目一。小笠懸引目二副て一束とするなり。小  
笠懸引目猪子引目のこととするなり。目を  
四切なり。犬射小手は。京織と云絹を用な

り。強ハ射手の肩崎の高く見えてわろきなり。ひれは廣はわろし。すこし狭くするなり。

紅梅織物などにてする事。不可然なり。

緒は藍皮を可用。行騰は若人ハ夏毛なり。秋

二毛は老少共用なり。冬毛は老人はかり用

なり。熊皮は判官と彈正官の人用なり。ひれ

の廣はわろし。中腰は高はひたにしは有て

わろき也。中折より少上にあてゝ切なり。の

との狭も廣もわろし。中腰の廣さは八寸な

り。好程なり。引目とゝめは。藍皮をたゝみ

て片結にして。兩方のするをそろへて。劔形

に切なり。引目の大なる六うしろの方に寄

て結へし。矢筈のいくらも。弓手の方に成様

にさすへきためなり。行騰の沓くひのせぬ

様に。つねに鎧をけ出へし。行騰のひれを常

に引なほすへし。

一沓は。腰皮のいかにも薄を可用なり。昔は佐

渡沓を用なり。當時の木束沓は鼻皮の厚て惡也。

一力革も厚はわろし。犬追物の時は。尋常より

も力革を長するなり。鎧を踏て立上は鞍の

前輪を尻の骨の越さる程に長するなり。力

革短ハ射手姿のこゝみて惡なり。いか程も

射手姿は鞍中にすくに立て。背中の骨の直

に見ゆる様に鞍に居也。背中かゝみたるは

嫌なり。物<sup>(扱)</sup>射手繩は短する也。まかりめを

鞍の前輪に打懸て越すこのたる程短するな

り。布のふときをは。すこし細くわりてする

なり。ふときは手繩の取惡なり。毎度手繩を

洗て可用。射時は寒中にても薄小袖はかり

きる也。先年關東に參て侍しに見奉りしは。

基氏の鎌倉殿は。淺黄の帷の袖を細くして。

只其はかりをめして。小手をさゝせ給き。面

白事なり。鎌倉引目ハ八九寸にて。どうを事

外ふとくせられて。猪子引目のことくに見えしなり。引目の細長なるは悪なり。引目はいか程も大なれ共。目たけをひきく切には。弱弓にても能鳴。犬射弓はいか程も弱するなり。矢にても弱弓ハ高なり。射手は常に鬢のうしろ髪をぬらすへし。矢取に紙を水にぬらして持て。外の物など射て打歸は。時うしろの髪をぬらすするなり。

一矢答は。馬すふる所にて。只一聲ひきく答て檢見の方を見へし。矢答の高は田舎射手とゆふ也。

一繩際に打寄るは。射手も檢見も同時に打寄なり。矢をはくる事は。犬繩の内に引入てはくる也。

一鞍長ハ。弓手の方へ馬の頭をこしてやれは。鞭の崎のあなたに。越かぬ程にするなり。鞭の緒の繩は。拳の入程につめてするなり。

一矢印は。に何てもあれ。矢の羽は中にするなり。上方の御調度には。矢印せられぬ間。何にても私の矢印を可仕也。

一繩際の矢の事。弓手をしもらり。馬手切繩馬手以上□也。

一犬をけあくると云は。我弓手に物頭のさしあらはれたるとき。上手の馬をしきらして。我弓手にせんとする間。うわ手の馬をしきらかさしとて。我馬をあをり上を。けあけと云なり。さて犬放時分。我馬を只一手繩に急に土に付様に押下せは。矢崎にうつくしく犬にあたるなり。如此射るを。け上ると云なり。

一おしちかへとて。繩際近くて射矢有なり。其は我ひかへたるうわ手下手一二騎隔たる所に。犬の物頭のさし顯て見ゆる時。既に犬走出ると見て。うわ手の人射直とくる時。我馬



を急に引ぬきて。犬の行へき前へ馳出て。弓杖四五程の所にて。一さまに馬をすへて。犬の方に向て打立て待へし。繩際にて射直たる矢わろく。又犬まろひたる時。檢見射て置と云とき。犬頭のむきやうに隨て。弓手へも馬手へも馬を打立て待へし。かならず弓手にて馬手切にてもあふなり。射直て馬を馳出てするて。矢答を一聲して檢見の方を見へし。是を出しちかへの矢と云なり。此矢ともハ上手の必こゝろにかくる矢所なり。秘事と存間注付者也。左右なく人に教へからず。又繩際にて筒際の矢と云矢あり。普人の知らぬ矢所なり。長井治部少輔一人外ハ。此矢所を存知せぬ。其子細別紙に注畢。一外の物事。幾度も足跡に乗て可進なり。犬走のひらかは。馬を押入々々合へし。犬こなたに走よらは。一手繩ひらきて馬を急にすへ

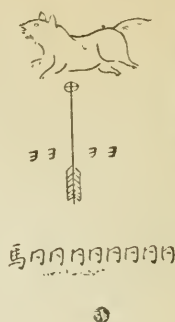
て。弓を引へきなり。又犬走ひらかは。まくり懸て逢なり。犬頭のおもむきによりて。まくりもひらきも。手繩をこまかにつかひて。弓をしけく引。又ゆるすなり。外物をはいつくにて。馬を急にするて射直て後。馬を出なり。馬手切の物を射直ては。必鞭を一打へし。

一すかふ弓手の物をは。馬を一さまにするて。少犬に向て射る。よくあたるなり。又ハうしろしはての通にて。をしもちりのやうに射も。一よきなり。うつくしくて。かねにて射には。必々はつるゝなり。笠懸の始は。此矢所を射習へきか爲なり。

一馬手物事。犬も馬も同頭に馬手に並を。弓の本を越て射なり。犬の跡の方へゆみをふかく越て押送る様に射なり。馬手の横矢とて。大事の矢所なり。其ハ我身の通。犬の行所を



射置矢の事也。



如此横さまに十文字に射置たるを。馬手横矢と申也。此矢所は。大事なれは。犬を少先立て。馬手の前しほての通にて射は安也。馬手物は稽古すれば中々安物也。長井治部少輔は終に馬手物を射さりき。馬を押ならへく見せつくろゐて。今弓の本を越出しと見しかは馳なかりて見送て打歸しなり。弓本を<sup>(越イ)</sup>は。射姿のおかしく射云必々はつるゝなり。笠懸の始は。此矢所を射見ゆると云て。如此せしなり。相構射手姿をたしなめと申なり。されは弓の本を越て久ねちまはす

は姿悪なり云々。早越て早射よと申なり。

一馬手すかひの事。馬手すかひと云ハ。縦は犬ハ西の方へ走を。射手は東向に馳達て。馬手に走すかふを。馬手すかひと云なり。如此時は。馬を急に一さまにするといめて。左にても右へにても打返すへし。其後は犬必。弓手の鐙の下に成を射なり。若は馬手切に成事もあるを射なり。急に馬をする返さまに弓を引ハ。必々矢所に成也。外物はいつくにても。馬をするて一手繩ひらき捨て。弓を冠ひきに引て射なり。しけく手繩をつかひ。しけくゆみを引ゆるすへし。若犬走とまり伏留まる時射は。をかしき事なり。幾度も左様の時ハ。弓をゆるして一手繩つかふへし。犬のつる伏く物頭のしけく替をは。馬をもする替く。手繩をしけくつかひ。弓をしけく引へき也。

一犬に不可射矢所有事。弓手より馬の頭を横さまに渡りて行犬を。弓手にては射すして。弓本を越て。馬手にて射事を。弓手切と號してつゝしむ也。又馬手より馬の頭を走渡犬を。馬手切にてハ射すして。弓本を越て射をもいましめたるなり。ゆめ／＼不可射事也。一犬いまた一足も走さるさきに射事。内にても外にても射直へからず。犬の一足も走と見る所にて。射へきなりと云々。

一射直たる矢所の不審を檢見の間時は。弓手に候共。抑もちり候共答へし。射手の方より弓手候馬手候なと云をは。矢せゝりするどて。比興事候と申也。幾度も只矢をは。檢見の沙汰に任て。射手は儀を云へからず。

右犬追物の條々諸人存知也。此注に申たる事等は。殊更心得分へき事はかりを注付事如此。

一人に召仕るゝ人の可意得事。主人の客人と寄合の御通へ。上座の上膳又我主人前の配膳ハかりを好て仕事へ。田舎人のいたりなり。幾度も末座の人々の前の配膳を仕て。上座の人の配膳をは。他人のせさるを故實と申なり。御酒の時。御酌を取事も。他人可讓也。是物知たる古人達の教し也。人に酒をすゝめ申も。あまりに抑々盃にあまる程に入は尾籠の事なり。よき程にはからふへしとなり。盃に入あまして。人の御袖御膝にこはしかくるは不覺なり。

一召出て奉公の人に酒を給時の事。あなかに人より前に飲と存へからず。後給も前に給も。御前にての酒は同事なり。末座の露盃なと云て。物知らぬ田舎人は嫌なり。比興事云々。

一或主人或他人などの人に物を云として。私

語事のやうに。そひかに仰らるゝ事をあな  
からに。耳に立てきかんとすへからず。さ様  
の時は。遠く退不聞を故實と申也。

一主人又は貴人などに向て。近く物を申には。  
我思の主人の御顔にあたるハ尾籠の事也。  
我顔を□さまに伏て。高申事なり。女房など  
に向て物を申も如此可用事云々。

一或主人或人ニ同道して。傾城のもとに行て。  
酒飲物脱などする時に。久其座に不可居。主  
人などを内々すゝめて。早可歸宅なり。如  
此の寄合に長居すれば。惡事必出來なり。如  
此所にて傾城又は人思さしすへからず。亭  
主或おとなしき傾城。又ハ中人女房達など  
には。毎度思さしをもすへきなり。傾城に思  
さしをするに。若其座に交たる人のね。傾城  
など有時は。物に覺ぬ男ハ。酒氣などにて腹  
立する事も有なり。物脱の時ハ。亭主に思さ

して其時脱物初なり。あまたゝひ物ぬきす

へからず(脱アラン)時は早出すへからず。一同に歸へ

きなり。さては傾城の所に久敷ハ不可居也。

一昔橋本の長者のもとに。古老の美女の申し

ゝハ。長者の家に。或六波羅殿或九州探題。

又は判官大名などの宿にハ。中門の庭に打

寄て下馬して。門の上にて。沓行騰弓矢を置

て。内に入給なり。柄長ひさこなとも。中門

に置云々。長者に馬長者の盃取たる時。馬を

給也。役人は御厩別當の親類。又は細々に奉

公の若殿原の役云々。其時ハ長者のもとに。

傾城のおとなしき一人廣ろんまで出てつる

居て。おとなしき美女にて。馬をは請取す

ると云々。其次に惣傾城達の中に。各前引と

て。或小袖或染物などを面々に與ふなり。其

時ハ長者も同如之前引を取也云々。若ハ前

引に料足はかりする事も有之。其は多少は

いか程にても。長櫃蓋に入て末座にかき出て。刀をぬきて。上を十文字に切まねをして若出るを。中居美女共はからひ。傾城の美女ともに分て。請取するなり云々。如此刀にて

切よしをせされは。長者一人して取と申き。又長者の宿ためも。物をたふ事は。厩になかれたる馬を。一疋つなきなから留られて。或長持一枚に小袖染物なと入て副也。料足ハ多少不定云々。物脱をせらるゝ事は。洒度々の後中座の板に疊を一帖取出て敷て。其上に傾城一人居て。御酌を取て主人に盃を進を。主人飲給て。其盃を長者にさし給時。をさなしき殿原一人參て。主人のめしたる小袖を脱申て後。殿原もみなく脱と申なり。今は如此の事も知たる人なき間。筆の次に書付なり。

一主人の路次などにて。殿原を御前に通れと

被仰時は。下馬して御前に通へからず。主人の御右方を引よせて馳通て。御前に打事なり。下馬して御前にて乗なと遅々するは無禮之事云々。

一主人の的場にたゝせ給て的付給とて。其相手に某參と仰らるゝ事も有也。左様の時は弓矢取副て急ニ乗さまに。紐をときて納なとして。道にてしたゝめて。急畏て御相事成へし。此事年始に御所的の後。坊門殿錦小路殿。毎年三度あそはし始給し。其相手に烏山大藏少輔。一色宮内大輔。愚身勤し間。亡父教られし也。此御相手に參しかは。我持たる太刀を進之なり。

一御劔の役仕ときハ。遠所に御出行の時は。劔を帶て御前に打也。昔醍醐の紅葉御覽に。兩御所御出の時。歸路暮はてゝ時雨ふりて侍しかは。馬より下て。御劔をかつきて歩にて

御太刀かつきて參たりしを感じ給て。御衣御刀など給たりし也。如此事は時によりて可意得事なり。

一主人亦貴人に差向て物を申ハ。御貌を守御目見合て中は尾籠事也。其時は御前なる人にも見やりて申。又伏ても中を禮とするなり。

一御輿寄の役事。上手下手有也。二人の役也。

御妻戸扉の上おそひあるかたは上手也。御妻戸左方也。右方は下手也。凡は如此相手に成事は。同位の人勤事なれば。あなち上下なしと云り。縦ハ年まさり。又官位次第親方次第など上手をすへしとなり。内々時は（脱カ）自他參次第なり。

一路次御供の時馬打事。主人の御近左に打は上手也。右打は下手也。其次々々如此。

一隨兵時。上手下手の馬打事。御車の前の近一

番左は上手也。（人イ）右は下手也。其前左右如此前に打は次第に下手也。一番の前の番は。皆の

下手也。後陣隨兵は御車の次に打左右次第に跡に打は下たる番也。前後共に御車に近を上手と申也。如此事。其時の官位次第を本とする也。武家には高家と號して。手つから上薦たてする人は有也。其御代に寄て賞飭せらるゝ也。凡殿上人諸大夫侍の位ハ定たる也。武家天下を執給て後。御一族ハ四位殿上人の位と同かるへしと云々。官位ハ今も不同也。先代の世には城入道は。同侍の位にてありしかとも。大忠によて御一族よりは下。諸侍よりは上と定られき。當御代には土岐伯耆守入道は。侍よりは上。一族よりは下と定られしにや。佐々木佐渡判官入道も如斯蒙仰しなり。是は皆其人の一代に取ての事と云々。故二條攝政殿の仰有しハ。いか



なる家高の君達と云共。官かいのみしかき時はみな下郎也。諸大夫の家の輩も。大中納言大臣に成ぬれば。上臈と云なり。侍の家ハ生得六位の位なり。然は諸大夫の家よりは勝たれとも。次第をたつときは。公卿殿上諸大夫侍と下たるなりと教給しなり。

一人の女子ハ父家を不繼。故によきも惡も同事云々。幸有は下女も更衣。御休息所。北政所。御臺など申なり。皇女。姫宮。關白の御姉なれとも。幸なければ賤人なり云々。其人の振舞によるへしと云々。

一武家奉公の人可意得事。宗と將軍家奉公の人は。弓矢儀を能々可意得分と云々。御物具をめさせ申も。次第々々の有なり。一番にし打鳥帽子。二番に御鎧直垂。三番に御腕御くゝり。次に御臈當。次に御小手。次御鉢卷。次御脇楯。次御鎧御刀。次に御太刀。次に御

征矢。次御つら貫をめさするなり。其後。御(旗以下同ジ)旗を付ける也。自身付させ給事有か。子細を存知の役人勤事も有なり。富永輩ハ御旗を付事は不存知歟。御旗はかりを調事はかり存知云々。御旗竿に付て後子細ある也。御祝の御酒きこしめす御肴進事も習事有也。如斯事を不存知して。左右なく御通などを不可仕事也。あやまりては不吉成也。

一御征矢付させ給とき秘事有也。此事ハ御具足めさする人の中に。一人可存知事有也。

一軍陣に出給路次に。神社又は鳥居に上矢鏑などを奉給ときの役人は。習知らずして不可勤。殊なる秘事有へし。然は左右なく人の勤ましき可意得。

一御旗差の役事。錦御旗をは。無官の人に差すへからす。凡何の御旗をも。侍の中甲の者を撰はれて勤させらるゝ也。軍の勝負は其日



の旗差による事云々。侍の勤には式の鎧甲征矢付て。太刀帶て勤する也。中間役の時は。征矢を略する也。雜色勤には。三枚甲に筒丸に小手をさす也。一番に御文の旗を差られ。二番に白旗。三番に錦の御旗を御身邊に差らるゝなり。錦の御旗差には。御旗副と號て。好兵或七騎或三騎などを副らるゝ也。是は大事の御合戰時事なり。左右なく人の知さる事也。人は意得て置へきなり。

一將軍の御位にてハ。必々弓征矢を御用あるへき也。近習の人々の中に意得て申行へき事也。弓征矢は軍神の御躰なる故也。

一將軍家には御矢口開の事。第一の秘事也。故御所の御時は。亡父の蒙仰奉行仕き。此事大御所寶篋院殿御時は。御さたなかりしなり。故御所の御矢口開の時は。興行有しなり。亡父か寶篋院に教申。御手つから御勤あり

しなり。當御所の御矢口開の儀も。故御所御自身御沙汰有けるにや。愚身には御尋もなかりし也。哀若君の御祝に。我等か子孫等か中に蒙仰奉行仕はやと存也。矢口開の事は。日本國の諸家には武田小笠原家の趣を用云々。御當家の趣は。更人の不存知事也。

一此御所當家の御弓征矢調進事。他家人更に不可存知事也。然共故御所の御時も御尋なし。然は不及調進。未愚老か親類等にも申聞せぬ間。いたつらに心中殘置也。哀に直に聞召をかれよかしと存はかりなり。

一兵法事。今天下に人の用所の兵書は。四十二ヶ條なり。此外るんちの卷と號て。手を下て習事等あるに也。又弓法とて。弓矢の不思議を教たる事。賴政卿と範清西行法師までは相續分明云。(脱カ)其後。口傳は絶たり。凡の弓矢のこしらへ様はかりは。今ハ少々存知の人も侍

る也。兵法の事は。皆眞言にて左右なく行か  
たき事也。御當家に御家日記と云事はかり  
ハ分明の事也。其も悉相傳の事は不侍にや。  
うたかはしき事なり。亡父か申しは。兵法  
と云は仁義禮智信也。されは張良ハ信と云  
字を書て本尊として。朝夕禮拜しけると云  
々。當時兵法をまなひ。武藝を稽古の若人に  
は。只氣なけふりして人を打はり。辻切洒  
くるゐするは。心外いふかるなき事也。いか  
にも身を正敷持。心をうるは敷して。天下の  
御大事にのみあはんと思へしと。くれくれ  
教侍し也。是に思みるも。我等か見及輩中  
に。如此氣なけふりして。いとかう者共を見  
るに。十人に八九人は軍には臆病なり。極心  
の人のうつくしき中に。最上の甲の人は。有  
條分明なり。此事我等か親類等中にもよく  
可意得ために注置なり。右申つる弓習事ハ。

其人に相對して手を取て教すしては不可叶  
也。尤弓は。亡父上手にて。更に物を射はつ  
さゝりしハ。身をはいつくをも高立て。的に  
向てひと身をねちすくめて。其身持を少も  
はたらかせずして。引堅て打上をも其身の  
はたらかぬ程に打上よと申なり。諸打上に  
かんはかり打上よなと教しをは嫌し也。  
一當世の犬追物のやうは。長井治部少輔と二  
階堂下野判官等をまなひしなり。武田。小笠  
原栖野いしと云し。昔の上手のやうは。  
今はや田舎射手とて嫌也。矢を□する事  
は。工藤。大たけの兩流を本とすへきなり。  
射手のやうは。彼二人のやうを人の好みに  
よりてまなふへきなり。下野判官ハ。入ふし  
たる馬の走とまると。馬を金に立て。弓  
を高くたふくと打開て引て押まはして。  
犬の繩を越にすの所を射直しなり。長井は

馬はいかなるなま馬にても。走姿あしなみ  
よけれハ用て。物頭のさしたる馬こみの中  
に打入て。馬を金に立て。弓かまへをも高々  
として。只一拳に繩の内より射付て。急に引  
貫て馳出てするて矢答をひきくとせしな  
り。筒際の矢といふ矢所をは。治部少輔より  
外の人は射さりし也。外物に逢て馬したゝ  
め。いしゝは此兩人更にかわらさりしな  
り。後には長井やうを浦山敷存てまなひし  
なり。筒際の矢事は。始一二年の程は。十疋  
に八九疋は。或繩内或繩にかゝりしなり。矢  
所射おほへて後は。十疋に七八疋ハ繩近に  
ふし候也。凡矢を射事。様々の故實口傳多  
也。此矢所の事ハ。義氏左馬頭殿次男大上總  
介殿と申ハ。吉良方の先祖なり。犬追物笠懸  
上手にてをはせし人の射出されたる矢所  
也と。亡父は語られしなり。故御所の御笠懸

のやうは。大上總殿のやうとうじたまはり  
及しなり。

右條々。先年於九州陣稽古の輩の爲に注  
付侍しを。大草子と名付て侍しを。今都に  
て人々少々依所望。思出候まかせて書付  
候之間。或前後不同。或無用事等用捨仕て  
書拔了。如此之徒事も。後代ハ人の不審を  
披かん爲計也。

右了俊ハ。九州探題今川了俊事也。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百八十三上

武家部二十九

京極大草紙

目錄

弓法之次第之事。

鷹之式躰之事。

太刀刀等ニ付式躰之事。

躰式法之事。

陣具ニ付而式法之事。

衣類ニ付式法之事。

馬ニ付而式法之事。

酒ニ付而式法之事。

鞠之式法之事。

食物之式法之事。

歌道之事。

# 京極大草紙

## 弓法之次第之事

抑弓之起は。七徳五形を表す也。先七徳とは。仁義禮智信忠孝此七也。五形とは。木火土金水の五也。是によつて。弓を七尺五寸に被定也。日本にて弓を作始る事は。人王十五代目の神功皇后と申奉る女帝にてましゝけるか。異國退治の御時。黒き兩頭蛇を見給て。たらの木にて作り給ふといふ。此故に弓を御たらしと云也。但三國に渡て。是に多くの口傳有之。

一弓を張へき次第の事。先かけたる弓を取おとし候か。又立おく弓を貴人張候へとあらは。かけにて張候て出る事なり。只是にて張候へと仰あらは。前にてもはるへし。又張へきかけなくなは。もとより前にて張るへ

し。貴人の方を後になすへからす。縦貴人を後になすとも。北へ向て張へからす。弓をはるには。右の膝を着。左の膝を立。すわうの袖にて。ほこりをのこひはるへし。縦ほこりなしとものこふへし。さて立あかり柱に弓を押當て。やすめ弦をはつし。貴人の弓ならば。やすめ弦をくはへへし。平人の弓ならば。弦かふらをくはゆつるを三より一よりもととして張候て。其まゝ本はすを疊に押つけて。右の手を上へはこひ。左の手をも上へはこひ。右の足をも前へはこひ。左の足をも前へはこひて。そのまゝつくはひ弓を押なをし。左の膝を立。右のひさをつきて。弓をみて取直し出すへし。惣して弓をはるには。七八はかりの小人の弓なり共。五人はり三人はりと思ひて張へし。人前にて弓を張に。押かへし又はおれたるは

はちなるへし。如此執して張候へは。おれてもくるしからず。弓のとかなるへし。やすくと張に。そこなひたるは。以外の恥と心得へき也。

一弓を貴人に出様。右の手にて捧<sup>ニキリ</sup>革の下を取。左の手にて本筈の下を取。右の膝を立。左の膝をつきて疊に付て可出なり。

一貴人たる方の請取次第。左のひさを少直し。左の手にて捧を取。右の手をはこしにとよせへし。

一同輩の人に弓を渡すへき事。右の手にては捧の上をとり。左の手にて本筈を取可出也。膝の立引如前。同輩の人かやうに出すを。左の手にて捧を取。右の手にては。本弦の上を取へきなり。請取人は左の膝を立へし。

一我より下の者に弓を渡次第。右の手にて中程を執。左の手にては捧より少下にそへ執

なり。被官以下に弓を出すには。右の手にて弓の中程を執。そのまゝ片手にて指出也。是は沙汰の外也。

一外にて貴人に弓を出すは。つくはひたかく差上出なり。様体如前。しもに御座候は。手をさけて可出也。例式の人などは。腰をかゝめて出へし。

一矢を人に出様の事。左の手にては射付の節を取。左の膝を立。右の膝を着て渡すへし。是はほつ執のふしを可被取也。矢を人に渡請取やう。手の上下は弓のことし。

一ゆかけさしなから禮する事あるへからず。ゆかけを執て禮をすへし。若取へき隙なくは。手覆を返して禮をすへきなり。

一ゆかけをは右よりさし。左より取也。惣してゆかけをは人前にてはさゝす。かけにて隠してさすへし。



一野陣にて御酒有て。めし出候は、甲をぬき人に預け。ゆかけを取て參てのむなり。ゆかけを取隙なくは。手覆を返して參のむへし。又甲もたせへきものなくは。高紐にかけて參るへし。

一弓を人に出は。捧のほとを大ほう一重にまきて。水引にてゆひて。はらさる弓も前のとく外竹は下へなるへし。

一我射ならしたる弓なとを。人に所望せられて出は。弦をとり。又捧革をもとり。卷たる跡のみえさる様に。能々のこひて。大ほう一重に卷て。水引にてゆひてつかはすへし。努々其まゝつかはすへからす。

一ぬり弓に白弦かけへからす。ことに馬上にて不可持。いはれある事也。白木にぬり弦かけへからす。子細有事也。白木にぬり弦をかけて的射へからす。ぬり弦にてもくるじか

らさるは。弦かふらを白き紙にて卷て射へし。

一鷹の羽にてはきたる矢にて。常に的射へからす。子細有口傳。矢に不付羽之事。とひ。ふくるふ。鷺の羽を付へからす。

一ゆかけをは一具ゆかけとはいはず。かたかたゆかけ共いはず。もろゆかけと云へし。右ゆかけ左ゆかけともいふなり。

一馬上も歩立も。主の弓を持はしる様。簞をつく。はつし弓を持候共。弦を上へして。左の肩にかたけ。右の手にて本はすのもとへ。手を廻して取はしるへし。主人馬よりおり給は。左の手にてひつさけ。捧より少上を取持て行へし。又馬に乗給は。本の如くかたけへし。馬よりおり立とまり。人に物をいひ給ふ事あらは。弓を立にもちつくはふへし。一馬上の人も馬よりおりては。弓を捧より少

上を。弦を下へして。ひつさけて持てねまるへし。

一弓そや參らする様。弓をは主人の左にたて。矢をは右に立可置。又一所に主人の左に立置事も有り。

一主人の矢とあらは。御てうと持て參と申付へし。御矢持て參など、努々いふましき事なり。主人の弓をは、御たらしと云なり。

一かちたちほむるごて。誰々はよき弓にて候など、申事。非興の至也。よきかちたち渡りなど、ほむる事也。よき弓と申は。たゝ弓の疵もなく。はりかほもよく。音もうちすも能をこそ。よき弓とはほめ候へ。かち立を能弓とは申へからず。

一雜談に神動を射る角木を射るなど、談るは恥なるへし。いつれをも中物を射と談るへし。四半共。立物とも談へきなり。

一野山にて小牛又は犬などを。引目を以馬をかけまはして射る事あり。是をおんたし物を射るなど、談るへし。野原にて物を射るをは。目當の物を射るなど、かたるへし。

一弓の捧を卷やう。數は七九十一なり。外竹のもとよりまき始。前竹の内かとにてごめへし。

一弦をは一筋二筋と云へし。一ちやう二ちやうとはいはず。一ちやうとは七筋なり。然間一筋二筋といふなり。

一人の的矢を執出しみする時。取てみるに。其ぬしかけて御覽候へと申され候共。努々そつしにかけ合て見へからず。そのゆへは若筈もかけ候ては恥たるへし。こゝとあらは筈をぬらしかけて合て見へし。筈ぬけかへる事有り。

一引目をは。一手二手とはいはず。一腰二腰と

云也。引目一腰とは。四ツの事也。

一 墓目を一腰たはねてはす様有。内へねちまはしてをきてはすへきなり。

一 内々外の物を射る事有。はた不脱して射るへき也。

一 的射る時、主人物をとほるゝ事有。努々其儘御返事申へからず。

一 ごかり矢などにて。物を射返したる矢音の事。ひやうつはと云也。雑談などにも左様に談るへし。

一 射はつしたる矢をも。ひやうすつかと射はつしたりと可談也。

一 四目引目にて物を射切たる矢音の事。ひいふつと射たると談るへし。

一 射當たる音の事。ひつはたと云也。射はつしたる音の事。ひつすつと射はつしたると談るへき也。

一 海河へ射込たる矢をは。遠なりしてさふと入たると談するなり。

一 的の有時。的場をよこに通る事不可有之。如何様の用ありとも。的すきすして通る事なかれ。

一 的を見物するとて。射手の批判努々不可申。歸りては何共申候ては不苦。場にては申間敷事也。

一 ゆかけ人に渡す様。左を下に。右を上にかさねて。緒をはたかねて手の内になるかたに置て。たゝ出すも扇子に置ても同前。

一 指懸をもたする様。緒をむすひ合て。小者の頭にかけさせへし。

一 馬上へ弓引目まいらす様。弓に引目を執副て。右の肩にかつき。馬の後よりまはりて執直し。左にて捧を下を引目に執へし。右にて本はつを取。そのまゝ御取候様にさしあ

けへし。

一矢の羽の事。上げやり羽。前はゆすり。今一はとかけと云也。矢の羽のなかさは四寸なり。的矢の羽だけは六寸也。

一ふしかけ執たる矢を取てみるに。節陰の上努々執へからず。

一送り迎などに出候時の弓の張様。前にしるすか如し。はり候て。そとす引をして。定にて弦音一度。定より上にて一度。下にて一度。以上三度する也。

一弓のにきり革を。人に所望せられて出すに。廣うなからたちて遣へし。こなたにてあてかひたるはあしきなり。そなたにて御たち候へと申てつかはすへし。

一神動など人の所望あらは。斟酌すへし。卒爾に出問敷也。堅所望あらは。散々に候得ともと言葉をつかひ候て可出。何の矢を出共如

斯。

一弓を持て馬に乗て鷹に逢たる時は。鷹の右へ馬を打出て。右へおりて弓杖をつきて。弓を左にとりうつし。同弓を立。右の手をつきて禮をすへし。

一弓杖をつきて馬にのるへき事。手綱を弓に執副。弓と馬と我身を三つ鉄輪に立て。扱左手綱を。同左の手にて前に執副て乗へし。さて弓を手綱に取そへなから。馬のかしらの上をまはして。左の手綱によりからみ持へし。

一弓を持て貴人に禮の次第。主人の馬に向て。(打)左のかたへ少ひきまはして。我右にして禮をすへし。惣て貴人にかきらす。禮をする時は。弓をかいこめて禮をすへし。れいしき物など申時も。右に持て申へし。

一弓を持てこしに立寄物を申様。むかふによ

り申時は。こしの右へよりて。右の長柄に右の手を付て。弓を常の如くに。左の手に持て。左の腰に置いて申へし。後より寄候はし。

こしの左のかたへよりて。同左の長柄に左の手を付て可申。弓を持様。左右同前。

一馬よりおりて。こしのごもすへき事。左の長柄のわきに。弓を右に持ても行也。こしを立らるゝとき。弓を立ても又左の脇に置てもつくはふへし。

一すいひやう軍陣の弓をは。下地を黒ぬりにして。せんたん巻をして。その上にしけ籐をつかふへし。

一籐の寸法は。二寸間に五分。矢すりは五寸。末筈は長く。本筈はみしかく。いつれも赤かるへし。

一弓の鳥打と云始之事。人皇三十九代日の天智天皇の御時に。ゑんの物鳥にけんする

弓の上筈にて。打殺によりて。此いはれにとり打と云なり。鳥打と云は。上筈一尺二三寸の内なり。

一矢は三才、二儀を表するなり。三才とは天地人也。(とは脱カ)二儀陰陽なり。因茲三尺二寸に用なり。

一主人に矢を出す事。根のかたをひつそるへて持。羽のかたを主人の方へして。左の膝をつきまいらせ候也。

一矢つかならひにはこの事。惣して我々の手にて矢つか十二束本也。又人によりて。十四束も十五束も有。但十三束とは平世はいはざるなり。扱弓は我々かゆひにて七尺五寸なり。

一の時。弓を落したるを取様の事。若足本に落候刻。其まゝ取へし。但弦前になり候はし。片手にてあけて可執。若足もうこかさは

ほさめたる袖を引かけ。後足をうこかし畏て可執。又遠くへ落るは。直に肩を入れて足を引すして取て。如前なをして立なり。いつれも弦前になり候は、ハ。手にて可執なり。

一箏をさして弓を馬上にて持事。例式の如く鞍の弓手のかたを下手に。箏をさし入て。小指薬指の二つに。弓の弦をかけて。弓は箏より内へする。弦は上へなるやうに脇にはさむなり。

一御供の時。弓を持禮法の次第の事。左の肩にかたけ弦を外へするなり。扱主人に人の逢下馬あれば。左の手にて弓をにぎり。弦を上へしてうら箏をさけて。よこたへて持なり。又久敷路次などにて人に逢。滞留ある時は。左の手に弓をもち。本箏を地に付て弦を上へして持へし。又主人に物を中上時は。左の手に指たる弓を右へ執渡して。右の膝の上

へよこたへて持なり。扱畏てあれば。弦は外へなるへし。

一矢の様体。五節をかたとり候。地水火風空。木火土金水顯也。箏の名所は。かこい弦付ふたこしまき。内をはゑりと云なり。惣て矢餘多の習有なり。

一矢の卷目の寸法。ねた卷五分。くつ卷六分。本はき六分。上卷三分。氣らくひ三分。卷目黒ぬりの時は。のこひ篋ふしかけたるへし。赤うるしの時は。白篋なるへし。

一張弓を主人馬上へ進上申様。右の手にて烏打を下を持て。左の手にて捧の下を持。弦をそごへして。よこたへて。主人の右の脇と膝の上の方へ進上申なり。常に座敷にても畏。膝をつきて。是も以前のこく進上申なり。一上指をさす次第之事。神動を三つさすか本なり。扱二つ指は過飾なり。又一つ持事は。



なき成によつて。鞭を上指にさし添る時は。鞭をは奥にさし。矢をは口に指なり。二宮流には。矢を奥に。鞭を口に指なり。いづれも難すへからず。矢數てうに指は。鞭を一筋指添るなり。若又矢數半ならは。前に指へきなり。上指三つさすには。甲矢。乙矢。甲矢と指なり。又二つならは。甲矢乙矢と可指なり。自然雨など不慮にふり出は。卷の内へ矢の筈を。かまとの方へして入なり。上指神動ならは。當世角木成とも指也。

一騎馬の時は。弓うつほなり。扱うつほの實は。七九十一なり。然るに指様の口傳は。初春より七月中旬までは。鴈又一つもあれ。二つもあれ。上へさすへきなり。其より十二月までは。けんさきとかり矢の根などを。上に指へきなり。又此外には遠矢二つ。神動一つ入るなり。又用心の時は。木ほうをも可指。

惣ては身に付かたあかりなり。

一征矢又とかり矢などを。我もちたる時。貴人御覽せんと仰あらは。矢の筈の方を出すへし。矢の實の方を出事なし。

一三ツ神動之事。甲矢二ツ。乙矢一ツ。三ツ神動と申なり。以上三ツなり。

一一手有神動を。かた／＼人に出す事。甲矢を出すへきなり。

一本ほうの羽は。長四寸五分なり。同本ほうの羽を人に出すには。雜羽を可出なり。

一軍陣にて弓のおれたるにて吉凶をしる事。捧より上のをれたるは吉事なり。捧より下のおれたるは惡事なるへし。

一はつし弓白木をは。前竹を下にして後竹を上にして。本筈の方をまいらすへきなり。同輩には。末筈の左に成様に出すへし。左様に出世は上筈は我左に成へし。又馬けわしく

は。後より弦切れ弓出す様に出すへきなり。  
 一夜引目之事 夜引目射るには。ぬるての木の  
 三方へ枝のさしたるを取て。してを付て持  
 て參るには。腰にさして。畏には弓と弦の間  
 に指へし 又手にも持なり。弓の庭の間先七  
 杖にて射て 三杖よせて又射へし。射方はき  
 々神へ向へし。

一御座の藁目射には。白き大口ひたゝれにて  
 射るへし。白へりのたゝみ一疊出すへし。そ  
 れにむかはきをかけて射へし。弓の庭の間  
 七杖半にすへし。射數は女子には一手可射。  
 男子には三かいな可射 先一手射て待て御  
 座所より左右可有。扱男ならは重て一かい  
 な可射 以上三かいな也。射る方は玉女の方  
 なり。藁目の羽は鶴の本白を付へし。

一引目をしらへるには。ひほをかす。はたぬ  
 かす弓返しせすして可射なり。

一弓杯取落たる時は。遠くに落たらは。かいな  
 を入て置へし 近く落たるは其儘取へし。弦  
 我前に成たらは。下より手を入執へし。又弦  
 外へ向は其まゝ執へし。

一弦きれたるには。近くならは。取てしさるへ  
 し。遠くならは。そのまゝかしこまるへし。  
 その時。張替の弓を持て。かたを入へし。後  
 より末筈にて袖に當る時。心得て袖をあく  
 るに。そのまゝ入て本の弓を取てしさる也。  
 其時。前弓の人は。つかひたる矢をはつし  
 て。肩を入へし。後弓はつかひたる矢をは  
 なして 肩を入て禮をするなり。

一四半とは。小折敷を四ツに切也。九半とは。  
 九ツに切也。はさむ事は。地上四寸なり。

一簞に矢さす數。九ツならは鴈股一ツ。的矢  
 一。手丸根四ツ。どかり矢一ツ。柳葉一ツ。か  
 ぶら矢一ツ指へし。されは矢數九ツ指へき

事は。大國に日の十出たりしを。けいと云者有けるか。此日を射て落したりしか。九は鳥(鳥イ)なり。一の矢正に日輪に當りけるによつて。そのおそれをなし。九ツ指なり。けいか流なり。

一馬上にて矢の實をぬきて持事。其時は。そやの實のかたを。弓のうら筈のかたへして持へし。

一征矢又はとかり矢なとを。我持たる時。人の御覽せんとあらは。矢の實の方を出事。努々不可在之。

一弓とゑひらを。人の方へ一度に出に。先弓を出し。其後ゑひらを可出なり。

一弓袋菊とち(三イ)二ツ可付なり。三ツ折にをりて一ツ付。又中に一ツ付る事もあり。

一袋に入たる弓を所望候て見候は。又袋に入て返へし。

一弓を持。鷹すへたる人にあふ時は。弓を右のかたへ執うつすへし。

一主人に弓を御目に掛るには。捧の下を右の手に執。本を左の手に持。主人の左の膝の上へまいらする也。弦を外へして。弓のもとを前にしてまいらするなり。

一張弓を馬上へまいらせ候所。此弓は氣にあはす。別の弓をと仰あらは。持て參時。主人前に持たる弓を。右の弓杖をつくことくにして御座候へは。又馬手の方より馬のかみ中の少下より。弓の本をさきにして參らせて。前の弓を取て歸るなり。若又。主人かやうの様体をしり給はすは。主人の後へまはり弓手の方より指寄て。是も弦を外へして。弓を我左の手に持あけて。前に主人の持給ふ弓とおしならへて持あくる。扱其後。主人の前の弓をはなさるゝとき。執てしるな

り。

一弓を御目にかくるには。はつし弓をは。主人の右の方へ。張弓をは左と心得へし。御請取有て。そのまゝ御張候様に進上申なり。張弓をは左のひさの上へ進るなり。

鷹之式躰之事。

一鷹居て貴人にみせ申事。座敷にてうちをもつかせたるは。すへての恥なるへし。先ゑんにて口餌を引せへし。左様にすれば。半時の内にうちをつくへし。ゑんにてかやうにいたし候へは。座敷にてつきたるともくるしからず。さて縁にて鞭を抜き。尾などをかきつくるひ候て。いかにも鷹をしんに思ひて座上に直る。左膝を立。右膝を敷て。鞭にて羽をかきつくるひ足緒を引しめ。鷹の面を見せ申候。扱身よりを御目につけ。其後。たなさきを見せ申。扱後を見申へし。むちにて

尾をしあけて御口に掛へし。

一鷹を人に渡すには。先鞭を出し。其後。鷹を右へ居て。手袋の緒をくひとき。ゆかけをと。鷹を元の如く居て。さて餌袋を出して。其後。鷹を渡す也。賞翫の人ならば。うは手を渡す。下輩の人ならば。下手を渡なり。馬の如く成へし。さて渡し左へ身をひらき候てしさる也。請取ては。右へひらく也。若請取人。ゆかけをさして出は。ゆかけをとるにおよはす。ふち餌袋渡し。其後。鷹を渡す也。一鷹を請取は。居手の右の脇へ。そろりごこきより請取居上なり。上手下手の禮あるへし。渡す時も。とはへぬやうにすへし。

一繫たる鷹架のもとへ。他人左右なく寄へからす。

一ひるやみたる鷹を繫事。かけに架をゆふとも。木の本を。鷹の右になすやうにゆふな

り。さて鷹をつなくには。みふしつなきて。扱其わなつりなどのなき方を。大緒をそのわなへ引入て。大緒さきをとめすして置なり。旅にてひるやみ鷹繫と云口傳有之。可秘。

一鷹の鳥を物にすへて人に出す事。鳥の後の方を下へして。羽を上かしらの方を出すなり。御樽などの上に置ても同前なり。次に鷹の鳥山緒。請取人の方へ出事。山緒を右の手に取持て渡す人前にて下え置。山緒の方を渡して。首の方を出なり。

一餌袋を人の方へ出す事。春夏は鳥頭を渡。秋冬はうさきかしらを渡。春夏はうさきかしらを我取。秋冬は鳥かしらを我か取なり。

一小鷹の餌袋は。何時も鳥首を出すなり。

一鳥を餌袋にさす事。鳥の後の方を。我身付候様に心得て指なり。

一鳥をゑふくろにさして。鷹師の方へ出すには。鷹師の付られ候様に出すなり。

一主人の御鷹と我鷹を繫へき次第之事。我か鷹をは。主人の鷹の左のかたに大緒さきをとめへし。主人の御鷹をは。我鷹の右の方に大緒さきをとめへし。大事の義也。

一鷹の大緒の寸。弓の弦を二ツに切たるゆへに。その長さ三尺三寸五分なり。

一鷹架に繫たる所を通る事。鷹前にて手つきて通るへし。只は努々通るへからず。内に繫たるも。同前後を通る事不可在之。

一新鷹又は鳥屋出したるなどを。大緒さきを指にまとひて出し。又餌袋にもおほくのならひ有。能々しりたらん人に尋あきらめて。其躰有へし。

一人に鷹を渡すへきと思ふところに。只架に御繫候へと申候は。其まゝ架に繫くへし。

大鷹は七くさり。せうは五くさり。小鷹は三くさり。(策一) 箆にゆかけをゆひ付て。身よりの架のはしにかけておく也。

一架に繫て置鷹を寄て見る様。先鷹の顔をみて。其後。鷹の身よりをみて。扱たなさきをみて。後をはたなさきよりはこしにみへし。先よりて架のそはにつくはひ。手をつきて立てみるなり。

一餌袋に鳥を指様。男鳥をは尾の面を前へ指事なし。尾のうらを面へ指なり。めんとりをは。うつむけて尾の面をみるやうに指なり。一鷹の鳥ことしはに付て出事有。ことし葉の木は。松の枝又は梅の枝たるへし。餘の木に付へからず。

一鷹をみせんとて。客人なともとめられ候はし。いかなるいやしきかせものに居させられ候共。縁などに不可置。座敷へしやうし可

置。居ても斟酌すへからず。

一鷹の鳥をはきるとはいはず。さくと云也。野山にて鷹の鳥を物に居て出事。まな板ありとも。板の上に折敷を一枚置て。其上に鳥を置て出也。折敷も板もなくはたしも不苦。

一谷こし河こしに。山なとに鷹をつかふ事有。見かけたらは。遠しと云とも下馬すへし。鷹師の方へ禮をいたさんも。程遠くて聲不届は。杖をあげて禮を見せへし。

一鷹犬を請取やう。やか繩(りカ)の末を右の手にて繩の中程を取て引なり。請取時は犬の名をいふて請取なり。惣て名をとはずしては不可請取なり。

一鷹を請取候事。弟鳥にて候はし。をき繩を用意して可持。小鷹ならは。へ緒を用意して持へし。鷹を請取ては。左の袖よりへ緒にてもをき繩にても。引とをして大緒のさきにさ



すへし。是は自然馬なところはしたらん時。

鷹をまわせましき用心也。我より上の人の居たる鷹を請取事。大緒のさきを。右の手の下より取て。其後。鷹を請取へし。我々下輩の人居たらは。右の手の上より大緒のさきを取へし。我も大緒の先を。右の手にからみからみて。さて鷹を居へきなり。又我より上の人には。大緒の先を我身に引そへて。鷹を先さし出してまいらするなり。我より下輩の人には。先大緒を先をさし出すへきなり。同輩の人にも如斯。

一同架に弟鷹と兄鷹を二繫事。弟鷹をは木の本に。兄鷹をは木のうらの方に繫へし。先弟鷹を繫。其後兄鷹可繫。扱居る時は。先兄鷹を居て。其後弟鷹を居へし。

一鳥やとあかけを人にみする事。先あかけをみせて。其後。鳥屋をみする。大鷹も兄鷹と

あらは。先せうをみするなり。

一田鳥山鳥に繩をかくる事。田鳥にはわら繩を。山鳥には藤をかくるなり。かへるまたに結へし。

一鷹の鳥を持て出る事。左へかしらをなして。右の手のひらに置様になして。右の手を上よりかけて持て出。御前にて疊の上に置て。扱おしまはして。取飼の方を貴人の方へなして。押よせて置なり。扱又御目にかけて候には。右をみせ申なり。水鳥も山鳥も。市にて置候鳥も同事なり。

太刀刀等に付式躰之事。

一御供之時。主人の人に出さるゝ太刀を持には。主人取能様に。右へまはりて。つかの方を進上申也。

一貴人高かんなどの人に。太刀を出さるゝに奏者して被下は。殊外の賞翫なり。又太刀を

請取。直に持て參。御禮を申上は例式なり。又奏者して申上は至ての御禮なり。又太刀を奏者して被下は至ての賞翫なり。其時は太刀を持て御前へまいり。つかの方をいたゝひて御禮を申上也。太刀を宿へもたせ被下事もあり。何も人によりてさま／＼なりと云々。

一太刀を主人に披露申次第の事。若折紙有は。太刀に副て主人の左のわきに。御はき候様に置なり。惣て太刀折紙は。八文字なりに渡すへし。若風吹時は太刀を敷なり。

一若門外にて太刀を渡さは。下に置して折紙有は。太刀の上に置て渡すへし。又太刀を立なからも渡すなり。

一猿樂に主人太刀を被下候は。右の方にて太刀のつかを取。下に置して。片手にて出す也。又あしらひを持て渡も有。

一長刀を貴人又は主人などに持て參時。みねの方を主人の方にして。左の手につかを持。主人の右の方に置。是もやかて御取有やうにみせ申也。

一御腰物を貴人主人へ持參する様。左にて下緒を取て。刀の柄を何となきやうに。さけ緒にて卷。常に太刀など參らする如くに。主人の左の方に置なり。

一主人の御太刀打刀をは。右にあしあひを持て。みねのかたを渡申なり。御つかを我右の(左)方へなして渡し申なり。

一主人貴人などへ。御腰物を作りて進上申様。大略金作にして上をぬるものなり。扱目貫の上を。紙よりにてゆふへし。努々つかをはまかす。扱盆にても物のふたにてもすゆるなり。扱居やうは。柄を渡す人の左へして。はのかたを人の方へせすして横様に置な

り。又前々用意もせずして。俄事にはそのあつかひなきもくるしからず。

一他所他家へ御使に參候時は。若太刀有事の子細を能々申上て後に。進上申へきなり。若同道衆有は。參時は次第に參りて。歸る時は下座より立ものなり。

一刀を主人に進候には。左の手にて下緒を取。刀のつかを何となきやうに卷。常に太刀を進上申ことくに。主人の左のかたに置なり。一奏者の時。太刀を請取には。かた手にて足の間をとるへきなり。

一主人の給候太刀をは。兩の足を取て戴て取直して。左へもちて歸るなり。

一太刀折紙を披露之事。右の手にて足の間を取てひつさけ。主人の御前にまいり。片膝をつきて。左の手にてかふと金を。さか手に取て。主人の左の方に二三尺はかりのけて置

て。折紙をはひるけて。御目にかけて下に置なり。

一刀を人に出には。太刀の様に出事も有。又つかの方をも可出。つかのかたを出には。かうかいを上にして。下緒のはのかたにからみて出すへし。(脱アラン)

一貴人に太刀を出様の事。直に努々渡すへからず。奏者して渡すへし。若奏者なくは。誰人にも座敷に伺公の人に目をつかひ渡へし。若又直に請取候は。足間を右の手にて取て。甲金の下に手をかけ。右の手をなをして足間の下へ入。はかなくことくにたゝみに付てさし出へし。とらるゝ人は。右の手にて足間をうけ。太刀より下へ手をはなすなり。片手にて執へきなり。

一太刀を人に出様。常々持やうに。右の手に太刀を持てあゆみ出て。出すへき人にむかひ

て。つかをちとたゝみにつくるやうにして。左の膝を着て。太刀を取直し。客人太刀をはき給ふ様に。すちかへて左に置なり。手を着て禮を申て歸へきなり。

一小刀を貴人に出すやう。ゆめ／＼刀をつかむへからず。つかの方を出すへし。

一中間に主人太刀渡す事。常のことく持にあらず。右の手にて太刀の足合を取。左の手にて二ツの足よりうらを執て立差渡なり。然間。中間右の手にてつかを取て。其まゝ肩にうちかけ持也。

一太刀を人に出様。常に太刀持様に。右の手にて太刀を持てあゆみ出て。出すへき人に向ひて。つかをちとたゝみにつくるやうにして。左の膝をつきて太刀を取直し。客人。太刀をはき給ふ様に。すちかへて左に置いて。手をつきて禮をして歸るへきなり。

一御供をきんしこしの内に太刀を立る事。こしの左より参りて。主人はかせ給ふへきやうにして立るなり。又二度目に立に。太刀をは右よりまいりて。つかの方を入るなり。

一弓と太刀とを人に出す事。先弓を出し。其後。太刀を出すなり。

一人の刀を所望して見る事。居たる前にて抜て能々見て。やかてさしかうかい小刀を見て。扱返す也。

一刀をさゝぬ所は。鞠の庭。風呂。貴人の御寢近所なり。

一芝居などにて。御太刀持ながら召出しのむ事有は。太刀を持たるまゝまいりて。右の膝の上にのせて。盃を取のむへし。のみては右へ歸るへし。努々太刀を人に預けへからず。右條可秘也。

幟式法之事。

一御供之出立は烏帽子すわうはかまなり。但烏帽子ささる時は。髪をちやせんゆふなり。又こし當をして下緒をとめ。もゝたちを取て。きやはんをするなり。

一よめ殿の時の火會せをは。扉重門の脇にて。二人の役者ちやうちんより取出して。たかひに三度とりちかへてとほすなり。扱らうそくは白かるへし。

一御供の時。小者に敷皮をかけさする次第。左のうてに切目をまへにして。すあまを左へして。大指にまとひてかくるなり。皮を二ツに豎に折なり。扱しかせ申時は。よこにもたてにも主人のこのみによるへきなり。さてまた横に敷候時は。諏訪間を左へ敷。若又同道の人あらは。すその方に客人をなをすへし。

一主君の御使を申時は。能々心をしつめて仰

を聞へし。扱なま聞なる事をは。押かへして不審を申。(もの也)又奏者して。我主人の名乗官などを申上たる。縦御對面ありとも。主人の名をは申へからず。又人に物を申時は。片膝を少立人の顔に息のかゝらぬやうに出合て。少かたむきて物を云もの也。就中夏などは。ふはくして。人前に出合事あるへからず。

一主君の御使に他家へ行て。(構)主君の官にても。又名乗にても。努々正印などゝはいはぬもの也。又大人大名。又は主君の一族殊更賞翫の御方へまいりては。直に物をは申さぬ也。奏者を取て申上ものなり。但又直に御尋有時は。申上候ても不苦。扱又歸る時も。貴人を先立申て其後歸ると云々。

一御座敷或は路次にても。人に逢ふて歸る様は。たゝ其人にさわらぬやうにちかへて歸

る也。扨座敷にても。其座のやうによりて歸るなり。今川流又二宮流に。左右の歸り様有。又出陣の時は右へ歸るなり。左へ歸るへからす。

一かよひの時。扇をさしてするなり。置もよし。又召出しなどの時は。扇を置なり。又かよひの時も。御膳は目とたいやうに持て。膳の下座敷を見。又足本をみるなり。又肴を膳の上より見るなり。

一定光寺殿被仰しは。奉公人の眞實主人の用にたゝんと思ふものは。相構て宿直かへり。又夜居などに無人數之時。残りともりてよきなりと被仰なり。

一會などの時。主人へ御茶を持てまいるに。左道ふさかりて。しとみの間計あきて。それより通れと主人仰有は。しとみの間の下にて。かしこまりてしとみの上を。何となきやう

に一日見て。御茶を持て。する／＼とまいるへし。是しりたらん人をもよき躰と申へきなり。

一伊勢の御はらひ箱披露する時。主人御請取給ひて。口をあくるまねをして御戴有事なり。

一貴人主人などの御手水つかひ候て。手拭のなき時は。左のすわうの袖をまいらすへし。

一正月のてうつたらひには。うら白を本を右になる様に置て。その上にゆつり葉を。本を前にして。三葉も一葉も一所に置て。其上に青目の石を。三金輪に置也。水をこほす時は。心得て手をかへてこほすへし。手巾を團扇又は扇にも可置。同楊枝をも置なり。

一鹿の皮を御目に懸る事。二ツに折たるを。白毛を上にして左に持へし。折口を右になして御目にかけへし。陣にてはくしかみを上



にして。御目にかけへし。

一敷皮しく事。白毛を右にすへし。陣にてはく  
しかみを左にするなり。

一御とのゐの時は。ねぬを本とすへし。枕など  
所持するはいふにかひなし。惣て人のねい  
るは。くせになるものなり。夜八ッ打時たに  
も。目をさましならへは。必其時さむるな  
り。嗜むへし。此時分。人ことにねる間無用  
心なり。

一主人の前にいさる人の御前のかよひを。田  
舎人は□るさけて。かよひをせぬ事有。是は  
ひかふの義なり。縦主人又は上座の人のか  
よひはせずとも。座せさる人のかよひをは  
細々すへし。主人の前のかよひをは。上下共  
に□□にて心得なり。

一かよひの時。物持ながら物云事不可有之。  
一人のさゝやき事なと云を。きかんとすへか

らす。

一武家の人は。さのみかうはしきはひろうな  
り。又くさきも比興なり。しつみにほひうす  
／＼とするは能なり。相構々々口の匂ひ心  
得へき也。

一傾城。自拍子などに付て心持の事。傾城のそ  
はにさうなくゐす。人を隔て又少も間をの  
きて可居也。傾城の盃をは人にゆつりのま  
せへし。若傾城男などあらんを指こしての  
むはわるきなり。又さゝやき事すへからず。  
若物ぬきあらはぬきて後。やかて歸るへし。  
長居は惡敷也。

一何事も式躰は二度三度まではよし。あまり  
にするは。人ををこづくに似てわるし。

一奉公人或役人などは。相構而事あり貌に。情  
けはしき躰有間敷なり。尾籠無禮の事なり。  
一奉公人の可心得事。朝の出仕に相構て。餅を

一も二もくふへし。大小便ごゝこほる物なり。僧俗共に大小便のしけきは浅ましき事なり。縦隙なくして。一日ほと物をくはねども。こたへらるゝものなり。

一主人の御前にてたゝみを敷事。たゝみ一疊を二人して。兩方のはしを取て。疊のうらを主人にみせ申さぬやうにして敷へし。又御成の時。御座を立候事も二人しての役なり。其時醫者も主人に裏を見せ申さぬ事なり。

一くすしに逢て。脉をとらする時は。刀扇をそはに置て。脉をとらすなり。

一碁盤の寸之事。大内の御物は。堅目一寸つゝ。横目八分。あつさ四寸五分。足三寸五分なり。平人の碁はんは。堅目八分。横目七分。あつさ五寸。足二寸。惣して高さは七寸なり。

一主人硯紙を持てまいれと有は。料紙をは硯

の下に持てまいり候て。疊一てう計へたてゝ。箱をあけて墨をよくくすりて御そはへおしよせ候なり。

一香盆に香爐香はし香包など置様有。香爐の中に。右に香包。左に香はし。盆長くは立様に置へし。

一人前にて香をたき。香爐をまはす事。請取はななさしつけてかく事なし。ちともふき方にて。次の人へ渡なり。よきども又あしきともいふへからす。殊懷へ入とむる事。努々不可有之。若少人などには。人取て袖へ入事あり。それをも斟酌すへし。堅被中は袖の下へ入。やかて取出し返すへし。

一主人の供又は迎など。或は辻かためなどに大ひつ敷を敷て居やう有。腰に付たらは。其まゝ取て。よこに敷て緒の方を右へなして。毛の方をしくかたへの緒のときたる方を。

五六寸計折返して敷なり。

一式の引出ものゝ次第。初献に弓征矢。二献目に鞍鐙。三献目は太刀。四献目には小袖。五献目には馬なり。次第如斯。其後は何をも參らせられへく候なり。

一鶴をつなきたる所を通る事。努々前を不可通。後を通るへし。

一主人の袋を持事。袋の緒をはとらへなとして。さけて持事なし。左の手の上に置いて。中に持なり。

一扇に物を置いて持て參る事。何成とも扇の上に物ををくには。扇の裏にをかぬなり。何時も表に置へし。扇のかなめのかたを。主人の方へして押直して置なり。努々たゝの所にをかず。繪の上に置なり。

一ひさけにても又ははんそうにてもなき時。貴人に御てうつまいらせ候事。常に銚子な

と取様にはかけぬ物也。左の手を先にして。ひさくをさかての様に取てまいらせ候なり。同御巾ゆなくは。左のすわうの袖をさし出してのこはせ申なり。又手を内へ引入て。のこはせ申事なく。手を入すして。其儘のこはせ申なり。

一主人に圓座をしかせ申事。後前あるへし。わのこごとくしてとめたる所前なり。是を主人の御前へしくなり。

一金をまいらす事。うすやうに包也。うすやうは時にしたかひて色ふしたるへし。四季によりて包むへし。紙に包む事もあり。時によるへし。あら金を折敷又はやないはこにをかるゝなり。是は持てまいるも別に義なし。置て歸るも同前。

一毛皮をまいらす事。毛を上へなして。兩方のはしを中へ折て。扱三ツにをる。鹿の皮の

時は。白毛を上になす。又其上を或は眞羽風情などを置いて出す事も有。又白橋の鞍などに羽をそへて出す事も有。其時は鞍を役人のかたへ向て。羽をはよこさまにはくきの方をかなめ尊者の御前に向て置也。扇などの上に。羽を置時も。要を貴人の方へ向て。羽をは横様に置いて。貴人の左の方に置へき也。

一しやうしにかくる敷皮は。白毛を前へ向て。くしかみを後へなすなり。佛詣などの敷皮は。くしかみを前にしてかくるなり。

松明

一よめとりのせうめひの役の事。庭上に役人左右にかしこまる。左の役人は右の手と右の膝をつきて。左の手にたい松を持。右の役人は左の手左のひさをつきて。右の手にたい松を持。扱事過候て後。兩方のせうめいを。其庭にて一ツに取合て。下部にとらする

なり。此義式もちひらるゝもあり。家にしつけられたる様にせらるへき也。

勤

一御とし男きんする事。元三にいかにも早天に出仕をして。先御やうし二ツ奉りてよし。長さは六寸たるへし。是を一ツ、かななかけに置いて可進也。其後。しやうしなどを明て御座敷をきよめへきなり。炭をも置へし。御てうつも御とし男の役也。若水をいつもの御てうつのかんにわかつて。まいらせへきなり。はんそうたらひの中にゆつり葉を置へし。したを下にゆつり葉を上。さて青めなる石のちいさきを三ツかなわに可置。十五日までは何事も御祝事は。御年男の役なり。節分の夜の鬼の大豆をも御年男きんするなり。

一御茶を持て參るには。片手をつきて。片手にてまいらすなり。兩方の手にてはまいら

すへからず。人前にて茶をのむには。臺なからのむなり。臺置てのむ事なし。但様躰によつて。臺を置てのむ事あり。

一 おし板に香爐にても又燭臺にても。足三ツ有物を置には。一ツの足を座敷にむけて置へし。足かならず兩方のすみへむくへきなり。それも裏表あるものならば。能々見つくるひて。足を座敷に向て置へきなり。

一 座中らうそくをとほす事。燭臺の先を貴人へ向て置なり。

一 ひわを持て参る事。我引へきやうに持て。御前に膝をつきてらくたいの皮の所を疊に立て取直して。主人引へき様に御前に置へきなり。

一 ことを持て参る事。右の手にてりうかくをかへ。左にて腹中をかへ。何にても角に物のあたらぬ様に。すゑをみしかく左の方

をゆりこして。持てまいるなり。りうかくの方を疊に付て取直して。主人のひかせ給ふへき様に御前に置なり。

一 <sup>室</sup>しやうのふえを持て参には。右の手にてせみの下を持て。左の手そへてまいらせへし。貴人は右の手にて請取給ふ也。かやうの事なれとも。口傳なくしてはまへかたかひせらるゝものなり。

一 楊枝の事。二本合てけつるへし。腹と腹を合て。かごをけつらぬもの也。かむ所も一方計そく也。されとも男の楊枝は腹をほそく。女房の楊枝は腹をふとくけつる義也。是は五月元三の楊枝也。平常別にあり。

一 扇を人に出す事。我つかふ様に持て参。さて出す人の前にて。扇をとり直し。請取人のつかふやうに出すなり。

一 ひわを出す事。先わか引やうに持て。さて出

時は取直して出也。さりながら日あき日く  
らによりてかはるへし。日あきには。すみの  
ある方をまはして。又目くらには。我か前へ  
すみの方をまはして。若一二の間のほとを  
出事あらは。右にひつさけ出す所にて。兩方  
の手をそへ出すなり。

一主人の御袋を持事。中間小者力者にかわる  
へし。小者は頭を取持へし。力者は偕取て下  
をかへ持へきなり。

一鷹を人に渡事。是は丸やさめを我かたへし  
て。鷹やすめを出すなり。

一主人に笛を進する事。我ふく様に持て取直  
し。兩方の手を添へて出事なり。

一主人と碁双六參事。主人には白石にてうた  
せ中へし。其ゆへは役なと參には。我石にま  
きるゆへなり。

一上敷を鋪事。敷て筵の上を手をもつて。二三

度なてへき義なり。なてぬは大にいむ事也。  
一扇を手にて出。我などに禮すへからす。腰  
にさして。手はかりあけて。禮をすへきな  
り。念珠をはかんさん過ては。卷てふところ  
に入へし。尊主の御前をのそくへし。

一御座敷に炭をおこす事。努々炭を其まゝく  
つし入るゝ事不可有。炭取より手にてつか  
みて置へし。くつし入るゝ事は。内事ナ云フ彼一段之  
時。くつし入るゝ也。座敷に置時は。いかに  
も山のこどく高くつみあけて置なり。又口  
にてふかぬ事なり。火箸をは灰の中に立へ  
きなり。

一さうりの緒をたつる事。はなつゝむ紙をそ  
とへ卷へからす。内へ卷なり。彼一段之時。  
外へ卷也。いか様にもそつしに請取事有へ  
からす。又裏へ出す緒のさきを切なり。かの  
一段の時はきらぬなり。なしとも切るまね



をするなり。

一あしたの緒をたつる事。くさひをねち。緒の内と外との内に折なり。外には一段の時なり。

一始て呼人の事。是は佛事などのへるてに不可呼。先祝言しきを以大奔する故なり。始て來る時。佛事などあらは。さのみとむへからす。いやと思ふものあり。態々心を引見てとむへし。

一人來て主人を尋る事有。れうしに出て主人は内に居さるなとゝいはぬ事也。その故はいかなる心中にてかあらん。惡事の出來もやせん。愚身は只今余所より參候とて。さらぬやうにて。子細をさふへきなり。

一膳をすゆる事。指をふかく入て膳を持。すゆる時は。左右へ手をひらけは。懸て手やすきなり。左へ歸るなり。

一門送りの事。先座敷にて一禮。立て縁にて一禮。庭に一禮。上中下人によりてかやうに禮あるへきなり。

一人の尊錢を持て參る事。客來直に持參あらは。主人請取へし。但人々以下によるへし。供の人持て出は。内の人出て請取へし。たゝし上下によるへし。

一禮などにおそく行て。今まで遅く參候。さそものしらぬやうに思召候哉といふへからす。只無沙汰といふへし。我と物しりたる様に聞えてわろし。

一箸のけつり様の事。箸の本末と云事は。ほそきはうら。ふときは本なり。箸の本をは三刀なり。うらをは一刀なり。されはふとき方にてくふなり。すゆる時はふとき方を。汁のかたへすゆるなり。引返してふときかたにてくふなり。努々ほそき方にてくふへからす。

箸の本末とは是なり。はしのさきをはやくみてくふなり。其故は箸を汁にひてゝみるなり。

一繪讃懸る事。是はいかにも下まで手をそへてさけへし。是はしつけなり。客來老者ならは。わかき繪をかけへし。若客人ならは。老たる繪をかけへし。繪と客人と懸ちかゆる。殊相尅相生を掛へし。又繪をかくる時。風躰をうこかさぬは不吉也。風躰は繪のたましひなり。

一楊枝けつる事。かり楊枝は早々當座まで也。いかにもあらゝとけつるなり。また四節の楊枝。春は。かむ所をはそく。木々のもえ出たるをまね。夏は腹をふとく。秋は上下等分。うらをちとふとくけつるへし。冬はかむ所より大かたほそく。楊枝の裏表をは。かむ所を一方をは長。一方をはみしかくそくへ

し。長き方は表。みしかき方は裏なり。ちこのかたへはしめてまいらするをは。うらのかとを取。女房には面の方を取なり。祝言の時は。三方のかとをそく。めしうこの楊枝。又陳の楊枝は。四方のかとをとらさるなり。可秘なり。

一いやしき身にて。尊主に禮をすへからす。參會の心なり。又中間或は同宿なときんする身にて。こしをかゝめ禮すへからす。若我一人ならは。物もいはすもく禮計すへし。

一尊主の前にかよひ之事。是は始おはりまで一人なり。いかにもいしやうをあらため。ふくめんをすへし。

一坪見物之事。春は山より見下て。磯にておはる也。夏は中より見て水分石におはる。冬は岩間より見てすなに終る。又中掛をは。春は櫻。夏は柳。秋はもみち。冬は松。かやうに心

有て見るなり。出家三尊石を本とす。俗は水分石を本とす。若やうかう石に香爐を置は。れうしに見物すへからす。

一人のもとへかよひ奔走せられて。はや外にて活計を申候といふ事。大なる無禮なり。是は能々可心得事也。

一笛を人の方へ出すには。ふたんかけたる緒をとくへからす。右の手にて右の方へ出すなり。尺八は左へ出すなり。

一つけ太鼓持て参る事。兩のはちをしめ緒にさし持て参り。御前にて抜て。さてしめて持て緒をとめへし。れうしに持てまいるへからす。持やうは兩手にて兩の膝を。右を片敷左を立て。かたむけてうたせ申へし。膝にあたらぬやうに持へし。

一人前にて文みる事。急ならは。ひさをそはめ立て御禮を申へし。急ならずは。座を立てみ

るへし。若又皆の方の文ならは。上座の人にまいらすなり。

一主人に文を披露申には。懷に入。はしを少出しかけ。様躰をのへて後。扱文をすへし。又手に持ても理を云述て。文を左の方へ出へし。

一兒に路次にて逢御禮の事。出家は大事也。惣して申の刻。未の刻ならは。何方迄も御供申へしと披露するなり。其以前は不苦。少御供をりあらは。兒の右へよけへし。又日にむかひたらは。左へよけへきなり。

一風呂にてちこのあつかひの事。是は餘人は不入。同宿二人計入也。先いる時は。二人の同宿風呂の口の兩所に居へし。扱風呂にては後前に居へからす。兩の脇に居てあかをかくなり。扱出る時は。跡さきに同宿出るな

り。中に兒を出す也。惣て様躰しりたり共。  
兒のとうけん斟酌すへし。

一あんとんを。押板にても又は床にても置事。  
ごもし火を面に置なり。後へなして置事不  
可有。無祝言なり。亡靈手向時は後へするな  
り。是を能々心得へし。

一貴人の御前へ硯を持て參る事。先かけにて  
墨を摺て。最前のことくふたをして。紙を箱  
の下にそへて。貴人の向に置いて。扱硯を紙の  
左に置いてさるへし。但風吹は箱のふたの  
下に。半分計みゆる程に置いて。川過候はゝ。  
ふたをして歸るへし。持參候時は。硯の前を  
貴人の方へなしてまいらす也。扱又硯を  
右に持。紙を左にもちて參てならへて。紙と  
硯を置事も有なり。

一文臺に硯紙を置事。文臺の下に紙。かみの上  
に硯を置へし。紙文臺の上に置ども。紙を

敷。硯を上置へし。

續群書類從卷第六百八十三下

武家部二十九

京極大草紙

陣貝に付て式法之事。

一 鎧腹卷などを貴人にすゝむる事。先からふとの蓋をあけて。蓋の上に胴甲を置へし。持ていつるには。さきはさかり。跡はあかるなり。

一 旗竿の節をかそふる事。甲より始て甲乙とかそへ。甲のふしにてつくへし。小旗の竿も同前。

一 軍陣の時。旗竿のおれたるにて。吉凶をみる

事。持たるより上のおれたるは吉事。もちたるより下のおれたるは凶事なり。

一 御旗のちをは。みそきぬと云なり。

一 軍陣へ出給ふ時。女に後を見せぬ事なり。

一 鍬形のいはれの事。分捕などして大將の御前にまいりて。御感を蒙りて。又打いつるとき。左の鍬形を打かくるなり。是は數とりのこゝろ也。

一 頸を捕ては。からけて左のもの付につくへし。惣て物付といふなり。

一 頸をはかいに入事。朝敵の頭。又御一家の頭

ならては。ほかいに入ましきなり。

一頸を御目に懸事。左の手にて本とりをとり。右にて臺を取て。左の膝を着て。右の足をふみ。なかめて右の手をのへ。首をねちまはして。實檢させ申なり。我身をそはめへし。大將に直に頸をみせ申さぬ事なり。又頸取たる人の名字を申上て。其後。頸を見しりたらは。頸の名字を申へし。但我取たるを。我御目に懸るには。名乗を申なり。然共。大將の御一家。我よりも目高き頸ならは。先頸の名字を申て。其後。我名字を名乗なり。又臺にすゆるに。位によるなり。朝敵又は御一家ならは。公卿にすへへし。常は平折敷なり。居物なくは。はな紙に居へし。昔頸のしるのたるをは。ぬるての葉をしくへし。

一御出陣の時。御具足からふとを出る妻戸より出へし。御旗も同前なり。

一六具と云は。指懸<sup>ユケ</sup>。鞭。ゑひら。母衣。小旗。扇。是を六具と云なり。

一五 一いつ装束と云は。籠手。はい立。甲。はち巻。腰當也。

一 小印のある所を通る事。春夏は左になして通るなり。秋冬は右になして通るなり。

一幕打たる所へ入様の事。兩手にてつくはいなから幕を打あけて入へきなり。又出るときは。左の手をつきて。右にてあけて出へきなり。努々家紋の有所を出入事有へからす。紋のなき所をうちあけへし。可秘々々。

一幕にてかりそめにも。手なごのこふ事なし。一幕にかりそめにも掛る物とては。母衣。小旗。大將の御弓計なり。

一幕の名所。まくはこわふといふものはき出て幕となるなり。然間。のを五色にするなり。大まくと云は。乳の數八十一つく也。今



ち付

は半まく也。小まくとは。内まくなり。五四

おきゆ物見かつのかぶり。

一幕をたゝみて。鎧甲の上に置時は。たゝみて三ツに折。手繩にて十文字にゆふへし。鎧櫃にゆたん有へし。其うへに置へし。惣て鎧甲の上に置ものは。はた。まく。そや。是三ツより外はをかす。

一頸をみて後にすてへき方之事。北へすてへし。其故は。北と云字をにくるとよむによつて也。東へすてへからす。

一人の具足見る事。先左の袖を見て前を見。右の袖を見。必をし付を見。又前を見て。近比かた物と計ほめへし。こと／＼敷ほむれは。其内に惡き言葉も有。又手にて努々いろふへからす。

一我具足を人にみせ申事。一番に右。其次に前をみせ申なり。御所望により左をも御目に

かけへし。立なから見せ申なり。

衣類に付て式法之事。

一主人に小袖御目に懸る様。先右の袖を見せ申。其後。面をみせ申なり。御所望によりて左をは御目に懸るなり。立なからみせ申なり。

一小袖請取て退には。中に手を副てしさるなり。

一きる物ごあふみと太刀とを。人の方へ一度に渡す次第。先小袖の上に鎧を置て出。其後。太刀を出すなり。

一小袖をまいらす様。下かさねに引かさねて。兩の袖を一所に取て。小袖を中より二に折て。袖を上へ打返して。ひろふたに置て。下に紙を置なり。ゑりを主人にむけて。右の方におくなり。

一まひ舞猿樂のるいに。貴人すわふはかま等

を被下をは。袴を下に。すわふを上。或は扇に居ても。又たゝ持ても渡すなり。請取左の扇にかけて罷立なり。又小袖も同前なり。さて小袖に扇を添て被下は。扇を小袖の上に置て。左の方に置なり。又太刀あらは。ならへて置退なり。

一主人の御すわふなどをぬかせらるゝ時持事。左の手に打かけて持なり。左を上にするなり。

一小袖を多く出す事可有。二重三かさねまては。只持てまいるなり。五重共有は。ひろふたに置なり。三重の時も。あつわたにて持にくゝは。廣蓋に置て出すへし。貴人客人の前に小袖のおふくひを前にむけて。尊主のまへにちとすちかへて置なり。

一小袖を檀紙に添てまいらするに。檀紙一束の上に小袖を四ツに折て。よこさまに折か

けて置なり。細物を前にむけて置なり。四ツに折てとは。二折にして。又中よりをれば四ツになる也。袖を中へ折籠て。扇などの上に。小袖を置も如斯なり。

一あそひものに小袖を出事。是は式躰すへからす。立なから出すへし。すわふはかま同前なり。又しやくに立たる人。肩衣ぬきありともぬくへからす。過てぬくへし。

一小袖。扇。太刀を一度に人に渡す事。一番に小袖。二番に扇。三番に太刀と心得へきなり。

一湯あふる時。湯帷を出す事。是はいかにも打振ていたすなり。ふるはぬ時は。一大事の時にかきるなり。ふるひてきせ申なり。

一御こし又は座敷などにみせ絹をかくる事。きる物の表の方を簾へ付へし。袖のうらをは。表へ出すへし。又つまを出すへきなり。

一主人にすわふはかまきせ申には。惣してゑもんに參入。二人前後に居て着せ申なり。左の袖をまついれさせ申。扱足をも左を入させ申なり。

### 馬に付て式法之事。

一抑馬を乗先へ飛する事。天下安穩ひきやう自在といたすなり。されは我朝に仁王より此かた三國相傳して。弓馬の秘事なり。依之。飛行自在のりんほうとも名つく。しゆみこくわうより以來。淨ほん大わうしつ達太子。唐土にては周のほく王。白樂天。我朝にては聖德太子。鹿嶋大明神。八幡太郎義家。天馬をとく道して乗給と云々。今のわうそん是をつたへ。弓馬の二ッは。鳥の左右のつはさの如く。天下の重寶。家の寶として。以公家武家様とて。當流にてもあそふ秘術なり。天魔鬼神も退くをそれなすなり。馬に

乗らん人は。大般若の文を唱へし。佛法白馬のいはれなり。能々馬をしんすへし。忝も馬は(さい)さい天のとひやうの明神生給ふと云々。

一御供之時。馬を打程の事。間一町或半町計なり。又河或は橋などにて。常に能々氣遣肝要なり。相搆てかりそめにも。人にけあけかけへからす。

一我も人も騎馬の時。路次などにて行合事。東馬の左の方を合て禮をするなり。かちにても此心得あるへし。但路次なとせはきは。その扱なしと云々。

一沓をはき馬に乗には。左を先にはき。又ぬく時は右を先ぬくへきなり。又むかはきも同前。

一神の御前にて下馬の事。若馬にくせ有。又は主人の御供などにて。隙なくは左の沓をは

つして。懇に禮をすへし。又沓はかすんは。鐙をはつして禮をするなり。

一大人<sup>(仁)</sup>大名などに。路次にて參會候時は。下馬仕候て。或は小家。或は木陰つるちなとのかけにかくるゝ時。若見合て下馬あらは。そのとき足早に走出て。御供の衆に對しふかゝと御禮を申なり。努々直に御禮を申事不可有。

一都歸たとへは出陣の時。其外へ出る時。馬に乗へき次第。東へ馬を引向て乗へし。何ものやうに乗て。左右の手に手綱を輪にして。左へ三度廻すへし。但出陣の時は。口をひかすまはして乗る也。

一馬に乗主人の馬に打向て禮する事。馬を打寄て。主人を我右の方へ廻し乗に出すなり。一馬に乗て主人に打向て物を申事。主人の右の方へよりて。左になして打ならへて。もの

を申へし。但向より打向ては。馬を横に立て。左の方になして申へし。主人の左へよりても。我左に置へき也。

一鐙をおさへ申次第。主人なくは。鐙の水金のもとを。右の手にて取。左の手にては鐙の沓込を。内の方より取て。腰をすへて。つよくおさへへし。傍輩其外の人をは。右にて力革をとり。左にてむなかひを取ておさへへし。一馬上の人に鞭渡次第。鞭を右にもちかたむる様にして。左のかたの七寸を。左の手にて取。大松原のごをりをさしこし渡也。

一鞭請取へき次第。右を上手に出して取て。袖をこしてさすなり。

一又鞭を請取次第。右膝を立。左の膝をつきて。同右を上手にして請取。左の手をつくへし。請取て左右へのくへし。

一馬御目に懸る事。馬を引立て向ふに立。兩方

に輪をして。しさらせてえたをそろへ。我右の足を馬の右のかたへつかひて。左の足をふみそろへ。扱主人のみるなり御覽候時。馬の右を御目にかけへし。其後。うしろをまはし御目に懸。扱御所望によりて。左をみせ申なり。又はしめのことく向に立。えたをそろへて立へし。

一はたせ馬ならは。乗てをのせて。左より手綱を渡し。右の手綱を渡し。又鞍置馬ならは。手綱を懸て鎧おさゆる者なくは。左に持たるひつ手をはなし。左の引手を左にてとり。右にて鎧をおさへ乗へし。又馬の左のむなかひを取て。おしつめてのせへし。

一馬に乗て鷹に逢ての次第。鷹の向へひかへて禮をすへし。是は鷹師も馬に乗たる時の事なり。弓を持ても同前。鷹師かちにても有は。馬より下て一禮すへし。縦居ては如何

様のものなりともおるへし。

一主人の鞍鎧に乗へき事。いつものことく馬の右へよりて。我右にて七寸を取。つくはひて左の手を鎧に付戴て乗るへし。同輩より上ならは。右にては何ものことく手綱をもかひに取添て。左を鎧に付。鞍をかへて乗へし。

一馬渡すへき次第。引立右の手にもちたる輪を取こほし。腰をすへて渡すへし。のくへきやうは。馬後より右の方へよりて。左へまはりてつくはふなり。

一馬を請取へきやう。右の手をいたしてわたして。右の手に持たる手綱を。左の手を出して。左に持たるひつてを輪ながら取へし。其後。右にて引取をしさらかして。左へ馬をつきまはして。本のことくに引立置へし。足ふみは右の足を出す時は。右の手を出すへし。

左の手を出す時は。左の足をふみ出すへし。  
右の手にて輪を取時は。右の足をつかふへし。

一 鐙鞍御目に懸へき次第。前輪を貴人の方へ向て。左のうてにかけ御目に懸へし。鐙をは右にて水金の本を。一度に取て。鞍と鐙を一度に持て御目に懸へし。鐙ははこむねを。主人のかたへすへし。

一 鐙の名所の事。水尾金の下をは。かくと云なり。沓こみのまはりをはやなひは。むかふをは鳩胸と云なり。

一 しらさる馬を鞍鐙わろきにて乗へからす。縦は等閑なき間なり共。思慮肝要なり。又人に我馬をし乗する時酌斟あるは。しゐて乗せへからす。

一 鞍置馬。御目に懸る事。馬を引立てはたせ馬のことく足ふみをして。主人の方をみてひ

かゆる也。主人御覽し候半とあらは。赤馬ヘウカのことくに御目に懸へし。

一 軍陣にて馬御目に懸へき次第。引立時しさせぬものなり。足をそろゆる事も不可有。足を揃るには。前へ引出して揃るものなり。努々しらせて揃る事不可有。

一 軍陣にて馬乗へき次第。努々しさり口に乗へからす。乗様はいつも同前なり。

一 鞭さすへき事。馬を引立る時。馬の左に祇候あらは。鞭の取束を右にて取。馬の後をまはり。同後にて左の手をつきて。馬の右のかたへよりて。膝をつきて鞭をさして。右の手をつきて乗へし。乗様は同前。

一 鞭なき所にて。いつにても鞭と所望の時は。竹にても木にても。折て出すへし。努々刀目付へからす。

一 沓をはきて。人に逢て兩方をぬくひまなく



は。左の沓計をふみぬきて禮をすへし。かやうにすれば。兩方ぬきたると同前なり。

一はたせ馬乗るへき次第の事。鞍置馬同前なり。右にて同右のをとかひを取。左にてはくひ中をおさへ。右の手はなし。左の手の上をこしてあらは。とりの髪をとり。左の手をはなして。おさへの本をおさへ乗るへし。手綱を左より請取へし。是を一手二手といふなり。

一馬に乗て。弓を持馬のり。又は輿にあひ候時は。左の方へのきてとをるへし。必我弓手のかたへ可成。主人ならば。我右のかたへすへし。

一騎馬を打ておりて供の時の次第。弓をかた手て。馬にても輿にても。主人の左の先にあゆむへし。但右も苦からず。貴人のあとにもあゆむへし。

一主人に乗り沓めさすへき事。沓の(ない下同ジ)左おいを左にてとり。沓のはなさきへして持て參。め

さする時。取まはして左の左おいをひろけてめさせ。其後。右の手にては。沓のかゝををおさへへし。ぬかせ申時も。手の付所同前なり。左右同事也。後よりぬかせ申ときは。沓のきひすの方を。右の手にてとり。左の手にては沓の中ほとをぬかせ申へし。我はくさきも。左よりはき。右よりぬく也。

一輿に逢ての禮の事。簾をあけられすは禮もすへからず。簾をあけ候は。馬よりおり一禮すへし。主人ならはいそき下へし。女房のこしには禮なし。但目高き人としりたらは下馬すへし。

一鞍の寸の事。二尺五寸。二尺六寸。二尺七寸。二尺八寸五分。二尺七寸五分ふさきはきなり。取束は六寸なり。取束のなりは口傳。下

地をして其上を革にてくけへし。緒のとめ事は。執束のくけめへ届ほとにむすふへし。むすひ様は有口傳。是はせめ鞭なり。

一籐の鞭は二尺七寸五分。執束は六七に籐をつかふへし。緒のとめやう有口傳。是は上の鞭なり。中のふちは二尺七寸籐をつかふなり。口傳。執束同前なり。

一鞭の事も二尺三寸。三尺五寸。三尺六寸。三尺七寸。三尺八寸。執束にてぬき。何も同前なり。六尺五寸にする事も有。竹の鞭は節をかすへて平にする事あり。

一手綱の尺染之事。將軍家の手綱。腹帶の寸の事。八尺。色は紫なり。かたはすしにほひにほはせて付へし。引手きは、一尺三寸。かたを付て染へし。腹帶は九尺にすへし。そめやうは手綱同前也。赤根にも染へし。紫にそめて。又引手きはを。紫にそむる事もあり。

柿にも染へし。何も賞翫なり。梅にしほるもあり。

一犬射物の手綱の寸法。六尺七寸也。染様はその賞翫によるへし。腹帶は一丈二尺なり。二重腹帶にするなり。二重腹帶は三ひろ一尺なり。

一大名家の手綱の寸。九尺三寸。腹帶同前なり。但二重腹帶ならは一丈二尺なり。染様はひやう文にすへし。但柿にも染なり。梅にもしほるなり。かやうに候へとも。赤根紫は乗へからず。引手きは、一尺三寸なり。筋をひやうもんにすへし。淺黄にも染なり。

一馬刀の二尺八寸にけつり様は。口傳在。先は馬の舌先をまねへし。又三尺三寸にもすへし。けつり様はいつれも同前なり。

一馬梯の寸は數の事。はかすは十三。長さは二寸五分。柄の長さ五寸に作るへし。形はいろ

くゝなるへし。但はかすは七も九もすへし。  
一薬筒の寸。節より上五寸。につり様は口傳  
有。竹の太サ五寸。ふしより下六寸五分な  
り。

一爪打つちの事。長サ二寸五分なり。柄の長さ  
七寸五分なり。六寸五分にもする。

一爪打刀の長さは。七寸五分なり。是ははひろ  
なり。うらをこしらゆる刀は四寸五分なり。  
是ははゝせはし。長さむきくゝなり。但六寸  
五分。五寸五分。是は裏さきのつかなり。長  
さはゝのひろさ六寸五分なり。

一かみはさみの長さは八寸なり。もとりかは  
さみの長さは五寸なり。

一湯洗柄杓の柄の長さは八尺なり。うけ柄杓  
の柄の長さは八尺五寸なり。是はきぬかけ  
のごをりにて置へし。

一きぬの長さ五尺。但四尺五寸。四尺三寸にも

すへし。如斯定共。馬のたけによるへし。尾  
上にかゝるを。打返してきぬの中へ届は  
とにすへし。賞翫の染やうは石たゝみ。色は  
もよきなり。但その様は其外いろくゝたる  
へし。

一馬ふねの長さ三尺なり。馬の右にふせて置  
へし。

一馬刀は。草ふせきのとをりにかけて置へし。  
一路次にて輿に逢禮の事。然に男の乗るこし  
ならは。左の方へ打よりて禮をするなり。若  
又乗馬の時。人によりて下馬し。又沓をぬ  
きて禮をするなり。扨出家女人などのこし  
には。右へ打よりて。是は必下馬して禮をす  
るなり。其外は。輿の乗ても人によりて。こ  
しを立て禮をするなり。又こしの騎馬あれ  
は。其人下馬して禮をするもあり。是則互の  
位によるなり。能々儀をきゝ。位を見合て式

牝肝要なり。但我より位下りたりとも。禮の過たるは然るへし。不禮は是災難の起なり云々。

一貴人に鐙御目に懸る事。引揃て舌先をもち。

左のかたに御ふみあることく置なり。

一貴人にしら橋ハシの鞍を御目に懸る事。左のかひなに前輪を。我まへにして。主人の左のわきにめすことく置なり。又ぬり鞍をは。兩方の肘に前輪を。左の手に持て。後輪を右にもちて出て。是もめし候ことく置なり。

一路次などにて。主人の御馬に乗候へと仰あらは。脊をぬきて乗へし。又主人の馬に庭乗させられ候事あらは。たちよりて鐙に手をかけ。なにごなきやうに。すわうの袖にて鐙をそとなて候様にして乗なり。主人の御前にての騎なり。

一別當乗人に向て。一の馬屋の馬にて候と申

候は、御前の手綱を乗へし。御前の手綱のやうは。うつらまはしの手綱の事なり。一の厩とは。二間もあれ三間もあれ。其厩のつと入口の厩の事なり。努々人にかたる事あるへからず。一厩といふ秘事なり。

一主人の御馬に。我鞍置て乗る事有は。鐙に手をかくる事努々あるへからず。無仕付なり。

一主人の御前にて。馬を引立乗り候得と有は。馬の左にてあらは。尾のかたをまはりて乗るへし。但馬跡つまり。又堀なご有之。退所なくは。馬の首の方より寄て乗る事も有。乗様口傳有り。先あゆみ寄て。ひかへたる人の左の手綱。同馬の右の水付手綱の輪より。上乘るへき人の右の手を先出して。ひかへたる人の右の方の馬の水付を取て。扱我左の手にて。馬の左の水つきより。下の手綱を取て。扱主人に向て。ひかへたる馬を少手

綱を馬の首にゆらりと打懸て。馬の左おもかひこひほむすひ候あたりを経て。左の手にて鐙を少引出し。足をかけ。扱左の手にて馬の左の方のはせう毛を。しりかひのしほてのねをにとりそへて乗り。扱手綱を取直して。馬を如本主人の方へ首をよく直して。三度口を引て打出して。左へまはしてのるへし。かやうの趣仕付をもしらすして。かしらの方よりてのる事あるへからす。

一 貴人の御前にて馬尺さす様の事。馬の左よりよりて。しゆみの髪の上よりかうかいを渡してさすなり。努々すみの髪を分てさす事あるへからす。

一 馬引掉の事。六尺二寸に切り。二寸をきて。穴をもみて緒を付へし。緒の長さ一尺二寸に付へし。緒付かたを丸めへし。

一 横手一尺の鞭の事。口傳有候。取束以上三寸

なり。

一 馬はたをは。前を左に持て。後を右にもつなり。これもめし候やうに置なり。兩方へ押ひろけて置なり。

一 馬上にて御供の時。先へ馬を打候へと仰あらは。主人の左を通るへし。通る時は。脊にても又足なかにても。主人の方をはつして通るへし。若左の方つまりて有は。右をも通るへきなり。其時は弓を持てあらは。持様あるへし。弓をうつむけて。末筈を馬のほうみの本へ入て。其方の脊を取て打通るなり。

一 主人に鞍置馬を進るには。主人のちかくへ引てまいらするなり。

一 わうはんの馬をは。常の如く引てまいりて。そはにて口ををし直して。そのまゝまはして入る也。

一 馬牽様の事。印を出してみて引も有。引かけ

て引もあり。何もよし。後を御目に懸候には。馬の跡を主人の方へ二三度押しさらかして見せ申なり。足を取直しては見せ申さぬなり。

一むすひ馬をほとく事。むすふとは引てまいり候時。尻を引手の右へしたるをむすふといふなり。それをほとくには。右の手をはなし。左の足をひらき。かやうにすれは。我は主人には後むくなり。扱本のごとく直して引也。そのときとねりのもとより。請取か如くなるへし。

一旅にて宿主に御引出ものを被下事。既につなき候まゝにて出すへし。努々轡などはめてわたすことなし。

一貴人に鞍みせ申様。左の手にて後より手を入てもちてまいり。御前へ前輪をむけて見せ申なり。その後左右を見せ申。扱後を見せ

るなり。

一鞍を進上様。前輪より手を入てもちてまいり。貴人の左の方に置なり。

一鎧御目に懸候様。鷹首を引さけ。はとむねを我まへにして。舌先を貴人に向て持てまいり。御前にそのまゝ置て見せ申なり。

一輿を人に見參に入る様。左右の引手をひつさけ。はみを人にむけてみせ申なり。

一轡の名所の事。はみ。ほうみ。たちきゝかゝみ。引手。又水付共云。わちかひ。つほつき。おもかひ□□□□□□□御はれ又は軍陣なとして乗ましき也。

一鞍置たる馬引立たる時。村雨抔ふる時。鞍覆などなければ。大ひつ敷を鞍覆にするなり。緒の付たる方を。左へなしてかけへきなり。一賞翫の人の馬を渡すを請取やう。左右なから下手にわたさるゝかたの右へより。腰を



かゝめて請取なり。

一 貴人に馬を引出して掛御日候様は。厩より引出す事は。厩の者わさなり。別當うけとり引手にわたす。引手うけとりて。手綱のまかりを左にとり。立向てをししさらかして。扱右の手に取たるまかりをすて。身をひらき。馬の右へ立よりて。左の手をのへて。手綱さきを右にて足をひらき。貴人の方を一目見て。其後。馬をしまはして。左を御目にかへし。其後。うしろを御目に懸て。扱もとの如く引入へし。

一 馬を御目にかへ候時は。努々かみすきながら御目に懸へからす。かみをぬきて御目に懸へし。鞍置馬を御目に懸候にも。かみをぬくへし。

一 軍陣にて馬を見せ申には。まへのことくみせ申て。左を御目に懸。右を見せ申。其後。面

を御目にかへ申なり。努々をつさまを御目に懸ぬなり。

一 馬屋に立たる馬。御覽あれと人中され候は。立寄見物するやう。先馬の左を見て。扱右を見へきなり。次第は左右面と心得へし。一 脊。むかはきを人にいたす様。むかはきをかさね。脊を上にて置て出すなり。脊はきひすの方を人に向て。脊先を我かたへするなり。一 むかはきのいまたぬはさる皮を出すには。毛の方を上へして。二枚を引重ねて。中より二ツに折ていたすなり。

一 主人と騎馬の間。凡的場たけと心得へし。乍去。近きもわろし。又遠きもわろし。能比に見合打へし。

一 主人庭乗り相成候は。各庭へ罷出候てつくほうへし。いかにもつはさみを高く取てめし候馬に。各心をかけて氣遣有へし。是は

自然馬もあまり。或は馬はなれたる用所の心なり。

一用ありとも。庭乗りする所を通るへからす。無駄なり。たしなむへし。

一厩に立たる馬にても。また引出したる馬なり共。主人の馬をしかるとて。努々さう言申へからす。ふしつけの第一なり。

一主人に沓をはかせ申事。賞翫の役なり。平人すへからす。右よりはかせ申。脱せ申時。左よりなり。

一主人の馬よりおりてひかへたまふ馬を請取事。主人の後へより馬と主人との間へさし寄て。下にさかりたる手綱に取付なり。其後。主人馬をはなち給ふ時。手綱をとりなをして引なり。前よりよる事も同前なり。

一乗鞍。白木なるをは白木とはいわす。白ほねと云なり。

一馬をなてはたけ。或は湯あらひ。又ふしをき以下は侍の役なり。下職に心得てははしたるへし。

一鐙の力革懸る所を。見とふかねといふなり。是はわるし。さすよと云よし。又高頭をは。かくと云也。

一御前にて馬御日に懸る事。先御前へ引てまいる。縁よりあまり近よらす。又遠くなき程にはからひて。そはに立引てまいり。引立て後。おもてに立。諸口に引へ。二三足しさらかし。扱元のこどくに立直し。御前の方をきつとみて。其後なをして。馬の右を見せ申。其時は。諸口に引て。又前のこどくに御前をきつとみて。馬を跡へをし直して。馬の左をみせ申也。扱御前を見申て。元の如く口をし直して。面に立てちとしさらかして。はしめの様にそはに立て。御前を見申て。其後。

馬を押出して引入るなり。是は三方見申なり。大概今時分は。かやうに御用候なり。

一馬の鞍覆する様。革は夏毛。秋毛。春毛。又は豹虎の皮にてもあるへし。熊の皮は。位ある人ならてはすましきなり。位なくしては。しんしやくあるへし。懸様は。何れも白毛を見するなり。力革に緒付て。むなかひを引まはしてすへきなり。

一主人御馬の上にて。御藥きこしめす事。是はきこしめす間。馬の口を取て待へし。第一の躰なり。

一馬はたけの木。二尺五寸なり。

一馬結繩の事。結繩と云は六尺五寸。駒結繩と云は八尺五寸。馬ゆひと云は二尺三<sup>マ</sup>尺五寸なり。

一神馬引事。是は七五三を付るなり。ゆかみ毛みゝの間に付へきなり。耳のしめは七。いた

ゆかみは五。いた尾は三。いた以上七五三と云たるを。しりくめとよむなり。日本紀に有。扱神前へ引立。輿をさし上て。神人のかたへ渡す。神人請取て。鳥居へ引出し。馬をしやうめん<sup>マ</sup>に前の如く引立て。七五三を取て。三返五返七返に三ヶ度乗なり。

右馬に付ての式法大概如斯。

一輿の御供之次第。一番に引馬。二番弓とり。三番に太刀はき。四番に坊。五番に小者なり。惣てこしにても。たゝにても。主人の身近きは賞翫と云々。

一御こし寄る事。妻戸の左を賞翫するは常の義也。扱よめとりの御こしは。のりたる人の右を賞翫する也。右と云は。乗てのためには左なり。しかるに大方こしをよせるには。役人のとのらはら兩方よりねりよりて。左右に膝まつきて。妻戸をおしひらきて。さて御こ

しの内へ口を見入れずして。長柄をとり。其時。力者綱をはつしてまいるなり。又長柄に取付時。力者さしよるなり。さて兩方の戸ひらを押よせて。しさりてかしこまるなり。乗給ひて後。うしる妻戸をほとくとたゝき給ふ時。則左右の役人。妻戸を開て長柄を取候は。力者心得て御こしを引出すなり。其時。左右の長柄を力者に請取らせて。手をつきて片手にて妻戸を押とつるなり。扱妻戸のしやう木のある方を。上手といふなり。御こしをよするをは。いさすると云なり。

一御こしよするには。女には右のあかり。男には左のあかる也。こしをよする時。殿原。縁の上にあかりて。謹て畏るなり。其後。中間御輿をさし寄る也。其時。左の手をこしの長柄に打懸て。右の手にて。輿の長柄をかゝへて寄るなり。妻戸をたつる時は。下まへの方

より押とつるなり。扱又こしの綱も。右にためて。又左にとむるなり。是もとめ様は男女によると云一儀もあり。

一御こしの供之禁制の事。先むかはきふか沓あをり紺しりかい。白木弓。足つきすへからす。御こし又は御馬にても自然路次などにて滞留有は。御供の人は下馬して畏なり。又御こしは太刀はきなから寄るなり。

一御こしの内に。主人の太刀刀を立て置事。太刀をは御腰物と並へて。左のかたにたてゝ置なり。又打刀をは右に立て置なり。又太刀を立て置に。努々御輿の内へ入る事なし。左のわきにならへて。つかを左の手に持て。右に足あいを持て立るなり。扱主人の御腰物を御さし候時は。御太刀を立ぬまへに。御腰物を一目見てたてるなり。

一むことりよめとりの時の折紙は。引合なり。

扱かけさする時は。二枚有紙を一枚取て出すなり。扱主人こしより前に。御局の行なり。此とき御臺の御こし主にても又は親類にても手を懸るなり。

一御輿の内へ太刀をまいらす事。右の方より常のやうに參らすへし。左からもまいらすなり。それは其まゝ立て置るやうにまいらすへし。長柄のうちへ入る事。努々有へからず。

一こしに會たる時。よけへき事。男には左。女の輿には右たるへし。

一こしの前に御はしりの太刀をはきてはしる様の事。中をあけて左右にたち。ひとへにはしるなり。次第にさきへはさかり。御輿のきは賞翫也。左は尙々賞翫なり。

一輿を見かけ。馬上の人下馬有は。輿の右に立る人出て禮あるへし。馬よりをりたる人。賞

翫の人ならば。はやく輿をたて、一禮あるへし。男ならば我出て一禮あるへし。

一女房こしに乗ては。下簾の脇よりも。きぬのつまを出すへし。かやうの事は。こしそへの人申へきなり。

一輿の内へ物を申へき事。長柄の外より申へし。長柄のうちへまいるへからず。男のこしならば。右の方の長柄の脇によるへし。女房ならば。左の長柄の脇へよるへし。

一よめ入のとき。迎の人にこし渡事。こしをたて、扱互に一禮して。先右の方の長柄を請取らせて。頓て左をとらせへし。こしの後よりまはりて請取へきなり。

一鷹に逢て下馬の事。鷹師の右へよけて下馬すへし。鞭を抜て持へきなり。鷹師をやり過して馬に乗へし。下馬したりとも。鞭をぬかすは乗打同前なり。

一鷹犬にあふて下馬の事。鈴を付たる犬ならは。下馬すへし。鈴つけぬ犬には。鞭を抜てをるなり。

酒に付て式法之事。

一召出しのときは。主人誰まいれとある時。あなち傍輩に對して式体有へからず。扱又常の時は。まいるに次第あるへし。然にまゐり候時は。扇子はな紙を置て。主人に左を御目に懸る様に出へし。扱左立時は盃をどらさる前に。主人の方を一目みるなり。さて酒をうくる時。少しさりて。少も目をあけすのみ。一目見て罷立歸るなり。盃をはあけさるなり。又酒をさてす又すわふにてまいるときは。紐を直していつるなり。

一祝言の時は。御とをりとて。ちいさき土器をあまたつみて御前に置くゝ也。或は七度入。或は五度入にても。酒を御うけ候て。卒度口

をあてゝ置くゝを。今のちいさかはらけにつき渡して。めし出さるゝ人に被下なり。此時。かはらけを持て立なり。扱主人の御盃をは酌取銚子の上に置て出るなり。

一主人のすゝ盃を取事。右の膝をつきて左を立。左のかたの指を二つつきてさしおよひて。右の手にてはうの物を取。少のみてさるなり。若召出しの跡あらは。其時は少しさりて。そのまゝのむへし。又はうの物を持てまいりて。主人の左に置へきなり。

一梅の花の盃をのむやう。左の方よりのみはしめて。下を中なる盃に入て。其盃を本所に置て。皆順にのむへし。扱後に中なるをのむなり。三ツ星も左よりのむなり。

一主人貴人などの御前にて。中吞をせよと仰候時は罷出て。片膝を立て出ていたゝかすして。左の手をつきて。右の手にて盃を取て



吞てしさる也。扱搦て少しも下をせさるものなり。

一わたましるとき。祝言の初献は。出仕の人々も。又役人以下も赤衣を不着。さて疊も白へりなり。蠟燭盃までも白きを本とするなり。一客人。樽を持て来るに。亭主初献を。是は客人御もたせとて。先亭主。酒をのむへからす。何時も客人に盃を始さするか賞翫なり。されとも又多分亭主かはしむるなりと云々。

一戦場への酌の事。てうく二度して。扱つくへし。大將に大指のさきをむけへからす。酌取人もかよひの人も。しさる事を嫌なり。

一御した入を渡事。右にてとりたゝみ一疊しさり。左の手をにきりて。大指計つきて。片膝をつけ。片手にて吞へし。扱持てしさに。皆のめと仰有は。指さきをつきて。もろ

手にて吞へし。

一酌またかよひるとき。扇子鼻紙をは。かたはらに置てすへきなり。

一主人の御前にて。召出の酒給るには。あなかち人より先にのむへき思ふへからす。或は主人の召にしたかひ。又は人のはからひにより。いてゝ吞へし。貴人などは。いかやうの人の後にのむとも苦からす候か。只主人の前にて一こんの有をせんと存候間。後にのむも先にのむも同事なり。

一はうの物と云は。土器か本なり。又はうの物と有は。主人の左に置へし。ぬり物のはうのものゝ客なり。

一出陣のとき酌取事。御酒まいらするには。左の膝をつきてまいらするなり。膝をはなすとも。足をは後へひかぬ事なり。又御肴よりの物一きれなり。

一出陣の門出の時酌之事。常は長柄の星をおさゆる事なし。此時は左の太指にて星をおさへへし。左の膝を立。右の膝を片敷。三々九度をすへし。くはへは有へからず。扱貴人の左のわきへよりてかしこまるなり。御立候て後罷立なり。

一人の所へ行小盃を出事有。盃の出たるをみて歸るへからず。物をしらすと同前なり。盃出候は、一献のみ候て歸るへし。然らされは盃のいてさるまへに立へし。又二献のみ候は、三献吞へし。二献のまさる事なり。二献は頸實檢の時のむ也。其ゆへに一献三献と云なり。

一召出にいて、盃をいたくへからず。去なから貴人の盃ならは戴へし。何時も左へかへるへし。下少もこほさぬなり。

一ほうの物もつて參候ては。主人の左に置な

り。同肴をすへ候時も。御せんをおしあけて置なり。

一召出しの時は。主人を三度見申事なり。盃とらさるまへに一度酒うけたる時。少しさりて一度見申て酒を吞なり。吞あけて一度見申てしさる也。然は合て三度なり。

一御酌を貴人する事。酌を取て皆々御式体候時。盃をしかと置て。手をはなしてしさるなり。當世は置もさためす。手に持事はわろし。然は下に置て御式躰あるかたへ。いく度も持て行。持て歸る也。式躰のある間は。斯の如くすへきなり。能々心得へき事なり。

一召出の酌の事。大勢いて、のむときも。人おそくいて、間ひさしくあらは。いく度も主人の御かたへむかひて畏へし。酌むすふといふこときらふ事なり。いくたびも弓手へかへし候へし。但それも座敷の様によるへ

し。又前後といふことすへからす。縦は御盃と主人の間を通る事。努々あるへからす。酌にかきらす物ことに前渡りする事。返々もひはふの事なり。

一召出のむ事。誰まいり候へとあらは。いそぎ參てのむへし。主人又は賞翫の人の御盃にてあらは。いたゞきてさけをうけて。主人にさしむかひてのむへし。かた／＼へむきて吞事いはれなし。ことさら下をすつる事あるへからす。すきと吞へきなり。ひほをすわふと小袖との間へ押入て吞へし。我と同輩の盃ならば。戴事努々あるへからす。若其中に主人の一族又賞翫の客人などの盃をしらすして。たゞのみてしさる事ひろふなり。盃の賞翫すへきを御酌取心得て。盃を銚子の上に置なり。其時吞へき人心得ていたゞくなり。又下戸にて酒をのまさるに。大なる盃

にたふ／＼と入られて。のまれぬとてすてんとするに。能座敷に疊のすきまもなくは持て立。敷居をこゆれは。其盃をは用へからす。去とも吞入えぬ事有は。たゞ置てしさるなり。酌とり心得て。酒を盃につきかけてまつ也。努々其酒したのこりたるにあるへからす。又召出しは。先にのむも後にのみたるも同事なり。然間。誰にてもちかくある人。さしより／＼吞てしさるなり。遠く伺公する人の。目にも見えさる人を待なとして。おもひさしすること有へからす。但主人。それにさせと御意ある様は。待ても思さしすへし。召出しを給りては。弓手へ歸るへし。

一盃持て參る事。主人と同事の方ならば。兩方の真中に置て。弓手へ歸るへし。客人賞翫の方にてあらは。客人のそはに置てかへるなり。初献の盃をは。誰にても客人の位により

て。主人の一家一族家子持て出へし。二献めの盃をは。初献の酌取り持て出へし。三献目の盃をは。二献めの酌取り持まいるへし。酌もかよひ賞翫の客人ならは。人によりてすへし。人数ならぬ身にて。そこつにかよひ酌の事斟酌すへし。

一酌に上かい下かいと云事。右の手を先へ左をあとにして。銚子の柄をとるへし。左の大ゆひを。右の手の下に成様に取へし。上へなるやうに取のは。さかてにみえてわろし。心得へし。銚子のきほうしに。大指を懸るはわろし。きほうしのきわせめのあるまはりをは。上手にてとるへし。

一客人酌なとめさるゝ事有はつき。酒の提をも其伴の人に渡すへし。又餘所へ主人の供に行て。其座につらなりて。主人酌めさるゝ事あらは。提を所望して持て畏へし。主人の

酌なと御取有を。よそに見る事あるへからす。是は人の被官の身にかきらす。兄酌をとらは。弟提をとりて。その躰をふるまふへきなり。

一鷹をすへて酒をのむ事。盃を片手にて出して下に置ぬるを。そのとき。酌取人盃に左の手をそへゝ酒を入れて。扱銚子を置。兩方の手を以。盃をとり。鷹師へ置へきなり。

一銚子のつかぬの方の口の事。是はたゝの人に□らぬことなり。めしうごに酒被下時。逆に一方の口よりのまするなり。其時の酌は。左の手を銚子の口の方へよせ。右の手をは上におくなり。

一兒女房。男の酒うくる事。兒女房は下へさけへし。男は盃をあけへし。是は酌取は盃をさくるにおしてもらぬ事なり。出家も侍も押もる事。ひけふふしつけなり。

一あふむかへしの盃の事。是は七返まですへし。八返はせず。但れうしにさすへからず。すへて我ぬしにあらすんは斟酌すへきなり。

一酒などのむ所へ。人多く来る事。はしを持膳をおさへ待事有へからず。いか様人來るとも。御免有れと言葉をつかひてのむへし。

一盃を出すに。我前に来るに言葉を出して。謹てあれへといふへし。來らぬ前にあれへ云事は。いなか人なり。我前に盃を置定候て後。あれへといふへし。

一兒三人も五人も寄合て御座候時の座敷之事。酌盃大事なり。左様之寄合の時は。盃をのむの前にまいらするなり。酌取も同前。酒を吞申とき前後あるへからず。

一坪見物之時は。盃を□□□□右に置へし。盃を出す時。その故は坪にこす肴なし。扱銚子

をは盃の前に置て。松の葉にてもあれ。銚子の柄に置なり。をけは酌取に成なり。惣て坪の中を酌取出ぬ也。吞人さしよりくゝのむなり。盃と銚子をはもとのことくに置なり。是一方庭のしつけなり。若四方庭ならは。坪の中に座をするなり。四方のまはりに伺公するなり。扱盃銚子は嫌のことく。又坪見物の時。人數餘多引つれ行へからず。殊太刀。長刀。長具足持へからず。

一鞠のかゝりの内にて酒をきこしめす事。かよひする人は。懸りの脇より入なり。又酌取は軒の向より入へきなり。

一兒の御酌めさるゝ時の事。是は先酒をうけて置て。銚子をこふへし。されども兒余人のために御渡しなくは。まつ吞へし。其後。盃を置銚子をこふへし。但のむへき人あまたあらは。さのみこふましきなり。心得へきな

り。

一祝言の時のつき酒の事。内の方へ一度。外の方へ一度。扱又内の方へ一度。外の方へ一度。扱又内の方へ一度。以上三度つくなり。

一芝居などにて。御太刀持ながら召出し吞む事有は。太刀を持たるまゝにまいりて。右の膝の上ののせておき。盃をどりのむへし。右へ歸るへし。努々太刀を人に預けへからす。

鞠の式法之事。

一鞠棹の寸の事。長サ一丈五尺。上下の節一寸置て切へきなり。難波方は節を置なり。二條方は節をおかぬ也。棹を置も。難波かたは家の上によこさまに置なり。二條方は上なけしに立そへに置也。

一鞠のかゝりをはく事。軒より始てしきりはきにはくへし。足跡付たるは。いかにも今はきたり共。ふる庭といふなり。新庭古庭とは

この事なり。

一鞠のかゝりをはく筈の事。はきにて結付て一丈成へし。

一懸りも水を打事。軒下より始て打なり。少も木にかけぬ事なり。

一鞠はさみの高サ一寸八分なり。

一夏鞠に參るには。あたふ敷かたひらを腰より取りて水に入て。しかとしほりて着し給ふなり。汗を上へ出さぬ秘事なり。

一鞠のかた打目をぬふ事。針數七五にぬふなり。

一鞠のかゝりを通り。座敷へ入様。かゝりの内努々通るへからす。木の外をまはるへきなり。

一鞠見物するには。庭へおりて遠くしかと居て見物すへし。家などにて見物することなし。若座敷の内にて見物する共。ゑんに居る



へからず。

一鞠の庭へ茶とかよひするには。鞠の落口を見てまいらすなり。庭中へ入事有まじきなり。又けても近くへよりて可吞。鞠の蹴手に用あり共。かくのことし。

一鞠を懸にほす事。春は櫻。夏は柳。秋は紅葉。冬は松に懸へし。向時も一の枝に懸へし。其蹴ましき鞠ならは。緒を一ツむすひて懸へし。四季ともに松に懸てはなんあるまじきなり。一の枝とは下の一の草かけなり。

一鞠を蹴に。三足式躰之事。一番に軒のむかひ。二番に軒の下。三番に松の左。又花盛ならは櫻の木につけるやうあり。座の方へつけへきなり。

一鞠の庭はくへき次第之事。是は大成ならひあり。木の間を七はゝきつゝ。懸りの内へはくへき也。四本ともに四七廿八なり。是は廿

八宿をかたとるなり。中へはきいれて出るときは。後様しさりなから筥をあてゝしするへし。座敷前なり。

一鞠音を聞は。早々草履をぬくへし。惣してはつるまで見すは。一向に見まじきなり。

一鞠をあそはす内に。酒にても或はそうめん湯つけにても有をは。足かためといふなり。

一鞠の庭をはくへき事。春は櫻より柳へはき。扱楓へはき。扱松へはき。中へはき付へし。足跡の付ぬ様にはくへし。是は祝言のはきやうなり。四海波をはきをさめたるこゝろ得なり。右條千金莫傳。

### 食物之式法之事。

一鷹の鳥を主人に御目に懸事。山緒をどらすして。兩の手にてかゝへて。左のかたの取飼をちと御らんするやうに。御目にかけるなり。若他家の人。主人の一族。又貴人主人な

らは。今のこくとく御目に懸ることく渡しま  
いらするなり。又人によりてよこにして取  
飼のせて渡すもあり。能々人の位を見計か  
肝要なり。

一まな板を持て出るには。二人して持て出。座  
敷に入時は。同様にあゆみておくなり。跡か  
あかり也。同取てしさるには。一方をは切て  
付て。前のこくとくとりてしさるへし。

一まなはしの寸一尺にきるへし。手かけを四  
寸に切なり。先は八分なり。一尺二寸にも切  
るなり。

一焼串の寸の事。節より上をは六寸。下をは五  
寸にするなり。惣て一尺一寸なり。別て刀の  
數十一刀なり。先を丸くひらくすへし。竹の  
皮を付ることひけふなり。

一鳥の焼串はかはるへし。先をはけんさきに  
すへし。本よりけつるものなり。

一客人の相伴仕候へと仰あらは。座敷にて肴  
のすはりてくふときは。吸ものなどの汁を  
すふことあるへからす。二箸三箸くふて汁  
をすふへし。

一人前にて飯くふ様の事。人より後にくひ始  
箸をは人より先に置なり。冷汁を請る時は。  
箸持たる手にて。左のすわふの袖をかい取  
て請へし。汁の再進引人の前に來る時。先す  
ふていたす事比興なり。又何とうまきに汁  
冷汁なりとも。かけてくふへからす。大汁を  
懸へし。若冷汁などは不苦。又汁の中なる魚  
鳥の骨を折敷の角へ取出す事。ひけふの第  
一なり。

一強飯くふ様。箸すはりたりとも。箸にて喰へ  
からす。箸にてすくひて。左の手の上に移し  
て。手にてくふへし。去なから汁候は。箸  
にてくふへし。

一鷹の鳥くふ様。努々箸にてはさみくふへからす。手にてくふへし。若又汁になり候はし。たゝはさみ。手にて一箸くふへし。其後はすひたるへし。

一粥の再進引の事。若粥に汁懸候人あれば。其人に再進引へからす。是ははやくふましきと思ふ時。汁を懸るなり。

一御座敷のさつしやうの事。御湯殿への具足。白へりの疊。白紙の屏風を立へし。以下の事。皆人の家々にしつけられたるなり。御誕生後三日のうふたて。七日のうふたて。是不同の義なり。但當流には三日。五日。是を用る間。扱五日取なぞらへ給ひし也。是は故實なり。

一むことりよめとりの雜しやうの事。肴にも御めしの具足にも。あゆのうほすえへからす。其故は一年魚なるか故なり。

一始ての家のさつしやうに。肴にも焼物すへからす。かよひも赤衣装着へからす。花にも赤物立へからす。

一式の御飯などまいる事。するの御飯をきこしめすなり。それも主人の右の方にちかき物をまいらするなりといへり。是は御手むきなる故と云々。御こつけをすみにまいらせ置も。御手かけのためなり。

一鯉のかしらなとを。わた煮の上にもる事は。内々の時の事なり。若骨はかいしきのみと云て。下にもるなり。わたを御前によせてもるへし。子をはあなち用ひさるなり。

一女房の三献之事。鯉のわた煮には。魚の左のひれを上にもるなり。をもむきのひれと號するなり。其次の女房には。とむきのひれを上にもるなり。外むきとは。魚の右のひれなり。おもむきとは。左のひれなり。きこし

めす時。むかひ給ふにをもむきと云なり。な  
ますをうすみをまはしてもり候。もりてう  
なものとみを上にもるなり。是は男には如  
此。女房には鱒のをはりに。のしあわひをち  
ゝめて盛也。若は又けつりてもまはし盛に  
するなり。かやうの儀は。常に式三献と云こ  
とくにてする也。別に子細不可有之。

一れうりする人心得へき事。魚鳥は味ひよき  
所を。主人にも又上座の人にもまいらすへ  
し。鳥の焼ものは。別足の身を前盛にして。  
ひたれの身をはうしろに盛なり。別足は味  
ひのよき間。先まいらせへきためなり。秘事  
いかのみも雪まろはしの骨とて。羽節の骨  
を上盛なり。是も味ひよき所をまいらす  
へきためなり。鷹を取飼時も。山わすれの筋  
をかふと云も。此はふしの節の味ひのよき  
間。山に分行へき心をわすれてなつくゆへ

なり。又白鳥鴈なども。別足の身とわたは。  
味はひのよきかゆへに。上方にはまいらす  
るといふなり。鯛の汁も。首の身をは上方に  
まいらするゆへは。目と口との間。別て味ひ  
のよきか故なり。

一しきの御肴に。はしかみ。梅干。鹽などを。陶  
器に入てまいらする事は。自然物をきこし  
めす時。むせ給ふ事あり。酒にも飯にもむす  
るは大事なり。梅ほしをみれは。口の内につ  
は出来て。物にむせぬ也。しほも箸の前につ  
けて。少なむれは物にむせぬなり。又はしか  
みは。物の味ひをよくする物也。きこしめす  
時。味わるきときは。入てきこしめせは。よ  
きとの心なり。又鹽もきこしめす物に。不足  
ならは。入てきこしめせとの義なり。

一しきの御飯の事。是はむねとの御もてなし  
と云事有。其時すへき事なり。それをたゝの

祝言の時。りやくきに少する也。二本立。三本立といふも。飯を二様にまいらするを云也。一番には本飯なり。是はくつものとし。こはき飯を盛て。紙をたゝみて帯にするなり。其帯はを片むすひにして。主人の御前の方をむすひめにするなり。それに御具足を十二盛なり。次には二本立。是もこはき飯を常のごくにもりて。御具足をは色々にもるなり。此外に御こつけとて。かきわけて其上に汁をかけてまいらするなり。御めしには三本ながら御しるのはいせんもあれとも。汁につけてまいるには。こつけの御めしに。何れの汁にてもきこしめし度をとりにきこしめすへし。三本立は。ひめの飯に計御手をかくるなり。こは御ものくる御物と云は。そうをは只まいらせ置までのことなり。今時分はかやうの御物をは。きこしめす

やうしりたる人すくなきゆへか。ひめの御物と云は。常の飯の事なり。何様にも飯よりの方にもり立たる具足を。飯の上より箸をこして。はさみてくふへからす。右のかたなる具足と。前の具足をまいるべきなり。こつけの上にかけてまいらする御汁は。ひしほいりこ也。さてはたゝみの汁(ナシイ)なり。たゝみの汁とは。色々(九)のうらなになり。

一まな板の長さの事。二尺五寸。ひろさ一尺八寸也。あつさ三寸。足二寸二分。又まなはし九寸三分といへり。又一尺二寸にも色々たるへし。

一物をくひて。箸をは折敷に置いて。酒をも吞へし。汁わんの上にはしを置事。努々あるへからす。右に折敷に置へし。

一さんはの事。惣てさんはは取事法なれとも。先れうりに執へからす。惣てははうれいの

手向と多分思なり。暫思慮あるへし。祝言の  
難しやうには取へからず。

一 羹のさんはの事。惣てさんはのかんは下に  
有。上なるをはさんはにとらぬ事なり。さん  
はのをき所ちやつのなかなり。<sup>(さい)</sup>きひの數ほ  
とかんは有へきものなり。一番にすいどん。  
二番に羹。三番にまんちう。四番にめんす。  
此内に一番はかんの内不入。つきより本と  
す。めんすのさきにかんは。いくつもあるへ  
きなり。

一 かんにすさひくひ合する事。鼈かんには里  
のもの大こんなとをすへし。其故はへつの  
字は。かめとよむ。かめは海河の物なり。海  
岡をくひ合するなり。やうかんなどは。海草  
をくひ合するなり。是は山海をくふなり。大  
ちやうかんは。鱸の腹わたをまねたり。是は  
山里のものをすさひにくふへきなり。

一 しや金といふかんは。こかねをつゝむ様也。  
橋のことし。是は包めをくひ切てくふへき  
なり。

一 湯<sup>(ナシイ)</sup>の事。先一番に出すへし。銀の皿を以  
のむなり。先粉を入れて通れは後に湯を引な  
り。あらくのめはむするなり。後には紙にて  
きんするなり。是を引には。せをかゝめて引  
へからず。立なから引なり。但上一人にはこ  
しをかゝめへし。

一 人前にてさ<sup>(ナシイ)</sup>釘ひくふ事。さひをは。山海野里  
と如斯次第をしてくふなり。但時の賞飭を  
次第して先くふへし。

一 箸を持て汁をすふ事。まんちうにかきりた  
ることなり。まんちうはまんといふもの。  
かうへをまねたりと云へり。其後。母の血  
をかたとりて。ちもちいと云なり。かならず  
をしわつて三分一くふなり。はしにてをし



いれて。あんをこほさすくふなり。

一 出家の庖丁の事。兒の前にていたすなり。是は念珠を手にかけて。夜けさ萬をしそろへて切る也。何にてもあれ。腹をむかひへして切なり。是は餘所の兒計にあるへし。細々はかなふへからす。

一 はうはんと云は。三ほうせんをまねたり。是は飯を半分にもるなり。扱又さいはいくつも。又こもいくつもらて重て。かさをしをかき合てくふ也。

一 飯をくふやう。先左を一箸。右を一箸。向を一箸。三はしを一口に入てくふなり。是は門出にくふなり。我所にて向左右をくふなり。一うほの焼串けつる事。上三寸下四寸。是は一流也。多分は上七寸。下五寸なり。

一 點心の時。むしむきのきさみものゝ事。其内に青きものあるへし。それはからしの葉な

り。これはわんの本へはさみ入てくふ。おかしき事なり。麥の油をとらんかためなり。入て頓てはさみ出し。前の處に置てくふなり。一肴の吸ものを。汁をすふて。さてみをはさみてくふなり。

一 貴人の御前にて。飯の鬼をする事。かさをとりて。御めしの上をとらす。左の方のそはをとるへし。

一 客人のとき。まかりいてゝ相伴仕候へとあらは。座へいてゝ膝を立ることあるへからす。又肴のときは。膝をたつへきなり。

### 歌道之事。

一 當座にて歌有時。我うた讀いたさぬ事あらは。題の趣に相似たる古歌を書て。さてそはに書様あり。昔の名人もかくこそ候しかと書て。をつて此子細を中へしと書へきなり。餘所よりたんしやくなとを被下は。一向返

歌なければ惣しらすと思ふなれは古歌にてもあれ書て遣すへし。

一たんしやくの寸之事。今時分の長さは一尺二寸なり。ひろさ一寸二分。是は定家の流なり。家隆は一尺三寸。ひろさ一寸三分なり。惣して不破の關屋の板ひさしの板のひろさほとなり。是は一寸八分なりと云々。

一たんしやくとつる様の事。上の切目よりたんしやくのひろさ程にとつる也。縦題を書たる上なりともとつへし。

一坪に歌をよむには。たんしやくをは三尊右の前に置なり。

一亡靈吊の時分歌の事。是は皆よみをはりて。扱請取文臺を置。上にたんしやくを置なり。文臺の前後二人祇候するなり。一人はよみて。二人はたんしやくをあつかふなり。まつ歌を出す時は。よむ人のかたへたんしやく

をむけて。吊の歌の題を披露して扱主人の名をよむなり。三度までは題をよみ。その後にはよみ人の名計をよみて歌をよむべき也。一簇は別なし。しんしやうに見よくするを能しつけとは云なり。右條々可秘々々。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百八十四

武家部三十

小笠原入道宗賢記

一禁中へ公方様より八朔に御太刀一腰。白。御馬一疋。鞆毛ツギ參候。何毛之御馬なりともつき毛と被調候由候。白の太刀とは。しろかねにてのしにしゝ太刀をいふなり。又ひらさやといふ太刀も參らせ候。

一御とのへ物。公方様へ年中に三度參候。御とのへ物は。夜るの物の事也。

一貢馬の御なつの事。くめとは。毎年御馬のねんく公方様へ參候を云也。

一五色よりの事なり。

一とりちかへ蓋の臺にちいさきハ。うへにすへ。大なるハ盃を取候事禮儀なり。さて貴人ちいさき盃を御取候て。酒御うけ候を見て後。大なる盃にうくるなり。貴人きこしめすを見てのち。又下手の人吞なり。かやうの時は。かけて盃下にをかさる事にて候。兩方酒きこしめし候て。盃下に置候を。酌取かわりての人の盃より取候て。ちいさきをは。大なる方にすへ。大なるをはちいさき方にすへをくなり。

一同とりちかへ酌の時。兩方しきたい候時ハ。酌とり酒を盃につく事あり。其時は。是ちいさき盃より酒をつくへし。酌取心得へき也。

二前。

一むち。ゆかけ。小者に渡やうの事。右の手鞭ゆかけを一ツに持出て。先ゆかけの緒をひつごきむすひて。かたにうちかけへし。ゆかけの右ハ右へ。左は左へなるやうにかくる也。ゆかけ小者のちのとをりにある程に。緒を結候なり。さて左の手へむちを取なをし。小者の其まゝさすやう渡すなり。

一幕の出入の事。入時はさのみまくのきはへよらすして。兩のひさを□左の手をさし出し。まくを下り手を入とりて。我前へ引かくるやうにして。さて右の手をそへ。兩の手にて幕をわかうしろへ打かけて入なり。

一出る時も。左の手を先へまつ出して。まくを

とらへ。右の手をもそへ。兩の手にて打上出。其まゝ左の手をはなす。立歸るやうにつくはい候て。まくをおろしかくるなり。

一まく出入せさる所。月日の物見よりいるに心へあり。又幕の紋の下を出入有へからず。さりなからさやうの用捨あらさる所にてハ。紋の下なりとも出入有へきなり。

一一條まくの時は。男まくの方出入事可然候。是は男幕の方出入ならさる時ハ。女まくの方なりとも出入有へく候。先男幕の方出入と心得也。

一矢の請取渡の事。左の手にてのゝ中程を持。右の手にて本をかゝへて渡す也。かりまた。けんしり其外にかきたる根矢にて候はゝ。下に手をかけへからず。其時ハくつ卷のあたりをかゝへ。又片手にて矢をすくに持渡候也。請取やう人のわたすことく請取なり。

上中下に上手下手の心得あり。

一軍陣にて持扇事。日方は地紅にて。日は金箔(薄イ)にて扇のちのたて一はいにする也。月ハ白(薄イ)箔にてちかみ一はいほとらいにするなり。

月のかたには。星三と四とあるへし。骨は一尺二寸なるへし。かなめはこめんくる皮にて入也。又赤かねにても入なり。骨の數十二なり。十二時をかたとりてしたる物なり。つかふ時は。ひるは日のかたを上になして。我むねにをしあてゝ。ほねを六ひろけてつかふなり。又夜は月のかたを上になして。むねのかたにをしあてゝつかふなり。何も骨をは六ひろけてつかふへし。またみなひろけてつかふこともあるへし。秘説々々。

右一卷者。一宮信濃守以自筆之本書寫者也。可秘々々。可外見憚々々。

一とはこのたけは四尺七寸。一内ノハ四尺五

寸。同五尺二寸にもする也。

一はこのよこは六尺二寸。ほこたれは三ふんにする也。

一鷹狩の杖たけ四尺五寸の同鳥かけ八寸。梅。

一大かひ杖五尺二寸。さか木也。

一むちも四色に長かはる。大鷹の足皮のたけ八寸五分。はゝき皮まで。

一せうは七寸五分。一はい鷹六寸五分。

一このり五寸七分。一つみは五寸一分。

一ゑつさい四寸五分。一青口傳。

一稱(れすい)千緒たけハ大鷹三寸三分。

一せうは二寸九分。一はやふさも同前。

一はい鷹二寸五分。一このりは二寸三分。

一つみ二寸二分。一ゑつさい二寸九分。

一おゝのたけ大鷹四尺五寸。

一せうハ四尺四寸。一はい鷹四尺三寸一分。

一このり四尺二寸三分。つみゑつさい同前。

一へをのたけ廿ひろ。又はんへをは十五ひろ也。

一おきなのはのたけ不定。

一鷹とやへ入へき次第。卯月八日に入て。七月十五日に出るへき。

一なかとやは。五月五日に入て。九月九日に出へし。後のとやは。六月入て九月廿日に出へし。

一鷹を人に可渡事。先ゑ袋をときて。兎頭をさきへなして付よきやう渡。其後。鷹を渡て。むちを渡。人の位によりてしきたい有へし。渡時ハとはせぬ事也。然間。きのみしきたい有へからず。又請取時は。ゆかけふところ持て出へし。

一人に奉時は。左のひさを立て。右のをはひさまつきておふおのさきを。右の手持て。人さしゆひに一巻まくへし。さて主を一目。又鷹

を一目見て。其後。遠く居しさるへし。

一鷹を請取へき事。ゆかけを持て出へし。ゑ袋を渡。請取て付へし。むちをはさすへから

(將イ)

す。わきに置へし。鷹狩の右のわきによりて。おふおのさきを。右の手にて取さまにしきたいあり。左の手にておふおをこきあけて。鷹をすへし。請取其まゝ左へしりそくへし。さておふお手に巻て。むちにて鷹を人に見せし。とくなをして可罷立也。

一鷹を人に見せ可申事。むちをぬきて。わきの腹の毛を押入へし。同ひうち羽を尾へ入へし。左右同前。羽の重様。せうはたこさき鷹は。身より上へかさねへし。其後。尾の左右をむちにて打ふるへし。人の所望の時。うはをみせよ。鷹のうしろをは見せぬ事なり。然共。所望の時は。むちを尾の下へ入て。をしあけて見せし。何もく書しるすといへと



も。大有口傳。

一 公方様御乘馬始。正月二日。御沓御鞍。伊勢守進上。御うたい始。正月四日。

此本有りかたく書寫也。

一 鞍をは。一口二口といふ。

一 鐙をは。一懸二懸といふ。

一 轡ハ。一口二口といふ。

一 一切付ハ。一口之分二口之分と云。

一 しはて。のくつ。馬はた。いつれも一口の

分二口分と云。

一 力革。一筋二すちと云。一すちと云時は。

兩方二の事なり。一ツの時はかたくと云

へし。

一 手綱腹帶。一筋二すちと云。一具二具といふてもくるしからす候。

一 鞭も。一すち二すちと云。

一 鞞。一かけ二懸と云なり。

一 鞞。一かけと計書載候へは。鞍むなかひしりかひまで。一具二具と云てもくるしからす候。

相揃ての事也。又ふさしりかいと云事ハ。大ふさこふさとてあり。これによりての事也。

一 鞞の事。むかしは大ふさたる也。然間。大ふさ本儀也。又鞞はおしりしりかい本也。くみたるよりは。おりしりかいを用へし。

一 はなかわは。一間二間と云なり。

一 馬の鞍と云事。おかしき事なり。たくとらといひ候へは。くらのことなり。

一 馬具とはいはず。くらかい具と云へし。くらかいくとは。くら。鐙。切付。力革。手綱。腹帶。おもかい。むなかひ。しりかひ。くつわ。惣別くらのかい具の事なり。

一 かい具と計は云ましきなり。よろつ物によりてかいくと云事有へし。これによりくらかい具と云は可然なり。

一 馬屋に馬を入候時は。主人の御馬にても。こ

なたへ取入候へど候へ共。又ひとつこまれ候へ共申へし。手人の馬ならは。こなたへいれ候とまてなり。

一馬屋に馬を立かふとも。又久敷はや立てをきて候なとも。又は馬やたちあしく候なとも申候也。

一馬の立具とはいふへからす。つなき道具といふへし。

一つなき馬を。むまやよりはひとつ出といふなり。

一馬の道具におこすといふ事は。はつなをとくと嫌ふ故に。おこすと申候也。はるひなともどくといふ事きらふにより。おこすと云ふなり。

一馬にくらを置と申候也。又おろし候時は。くらをとり候ごも。おろすとも申候。主人御馬にても候へは。御馬にくらをおき申候へ。と

り候へとも申候なり。又主人の御めしのくらならは。お見うそひとも申候也。お見うそひの時ハ。をくと申候なり。

一はるひハ。しむるおこすといふなり。

一くつわに手綱しかくるといふなり。

一しりかいむなかいを。もかひもしかくるなり。

一馬のくつをはうつといふなり。又かけ候とも申候なり。くつかけすまひの馬ごも被書たり。又どるときは。おこすごもぬかすとも申候也。

一たつなの事。いくすちといふなり。

一手繩と申も。かまなわと申候も。又さしなわと申候も同事也。又しつなをさして引とも申候也。

一尾袋の事。さすと申候。數をは一ツ二ツといふへき敷。凡本儀にあらす。自然に路次等の

ために用候哉。軍陣其外はれの時に。さし候事あるへからす。殊に進上候事も。猶以あるへからす。

一あをりの事。人のわたくしにしいたし候哉。其儀知る事なし。曾以不用。

一馬のふりのかみをきりて。少はへ出候を。はいかたとも。又こいかゝみとも申候也。

一惣別かみきつた馬ども申候なり。

一馬のおふいのかみきり候事をは嫌ふ事也。

さりなからあまりなく候へは。あらはにきりたるやと見えぬやうに。(そし)さとかりきりて置へし。

一馬のかみまくをは。まさたるかみといふなり。

一まさかみをぬきてすきたれるといふ也。まさきたるかみを。ぬきくしにてとく事なり。

□□□□ ひくなよむ  
いさむるともよむ。

一馬を將さするといふ事。多説に申候哉。馬を軍陣の時ひくとい事をきらふて候哉。あなかに嫌ふへからす。

一馬尻さゝらをつくといふ事。とまりくちのときにしりゑたをよくしきとまる馬に。尻さゝらつくと云儀なり。

一馬のしたれたるといふ事。馬のはしり留る時なり。又馬のふりのしなりとあるしほらしき躰をいふなり。

一ちあふみといふ事。隨兵のときあふみのやないはを。惣別かたより。かこくひ。たかかしら。さるしり。鳩むねまで。白も金にもふくりんをかけ候て持いく事也。

一當世ふとんと申候也。馬のうわしきのうへに。又むまは度(はたに)のせはさみのことく仕候事有。曾以なき事也。

一紫竹のむちの事。むらさき竹のむちの事也

一馬のうらおもての事。乗かたをおもてこいふ。左はうらの心也。

一馬のはしり候をは。かけあしとも。又はしり候共申候なり。

一人の馬を被乗候時。かけあし見たり候はし。そとかけまわされ候て共。又はあしをも出候て共申へきなり。

一人に馬を乗せ候はん時は。賞翫の人ならは。此馬をそとめし候へ共。めされ候へ共可申候。常には。此馬に被乗候へ共有へし。

一ちあしとは。ちのりなり。あしなみそろひゆくあしなり。

一たゝくとは。前後のあしを大略同様に取様なる物也。

ちあしのなみにはあらず。又かけあしにてもなし。

一かたおろしといふは。かけあしのこづくに

て。いなくこづくなるあしなり。一向に此足乗へからず。嫌ふ足なり。

一くつわをは。はめ候といふへし。

一すのりといふは。ちみち(けし)の心に乗りてありき候をいふなり。

一庭乗とは。常にひる庭にても。又は鞠の庭にても乗候事也。

一下乗と云ふ事。人の馬をせめ候を。したのりといふなり。惣別人の馬をまつ乗候を。下乗と云なり。

一下地の馬といふ事。犬追物に乗候はん馬の事也。

一笠懸に乗候はん馬をは。笠懸によき馬といふ也。

一こま馬といふ事。若き馬のふるはのある馬也。六歳よりはかきそろへて候ども。又六歳とも可申候。

一馬のとしをは。惣別一歳。二歳。三歳。四歳。

五歳。六歳。七歳いかほごもかやうに申候也。又はさきと云は。一段ふるき馬なり。

一駒雑とはおとこ馬也。駄とは女むま也。さうや

くと申候事不及聞候也。

一くら達者とは。いふましきなり。馬達者とはいふへし。

一くらつよき。くらよはきとはいふへし。

一馬を乗に。いくかこたへて候なごゝいふへし。いくかとをるとはいふへからず。

一馬かすを乗といふ事。馬をかへていか程も乗事也。

一くらかすを乗といふ事。たゝ一疋をいくたひもくらかすを乗事也。

一くつわゝ白みかき本也。宗信は犬追物の時は。ぬりたる轡を被用候由候。又さやうもあるへき儀共被書載たる物もなし。然共其分

候也。ぬり候事は赤うるしなり。はさみのうちをはぬらぬ惣なり。

一手綱の事。色はあさきにても。もえきにても。ちや色にてもすちを付へし。筋のかすいくすちと定はなし。くつわにしかけ候。手綱さき一尺あまりには。すちをつけぬ物なり。かならず地のそめいろにてあるへし。腹帯もとめ候所のはしを。一尺あまりは。すちつけすしておくなり。是もはしを地先にておくへし。

一手綱。腹帯。加賀しほりは略儀なり。

一手綱。腹帯。かき色にハせぬ事也。

一手綱。腹帯。むらさき又たてすちこもんをは。斟酌あるへし。それも又すちにも。ひきりやうをは付ましきなり。

一かき色に。手綱腹帯せぬ事なれとも。あさきにそめませ候はくるしからす候。

一手綱の長さ七尺五寸なり。

一腹帶ハ。八尺計と申候へ共。馬にもよるへし。

一はるひとめ候所の事。公方様御馬をは。前輪

の山かたのまつ上にす。上に丸くとめ候て

置候也。それにより常式のしからそめにも

さやうにすへからす。たゝとめて前輪の右

の手かたへ。おしさけて置へし。

一くらにふくりんをかけ候事。前輪尻輪共に

くらつめ迄かけ候事。むかしはせさるとな

り。當世はつめさきにて。みなくふくりん

かけとけ候也。

一手繩の色の事。軍陣のは白し。白布一のを三

にわりてうつ也。此時は。わなあるへから

す。うちとめたるはしをは。黒かはにてゆひ

て。まむすひにどめてきりておくなり。式装

の時は。白と黒とあさきと三はりしてうつ

也。是もはしをは黒皮にて結びて置也。常式

之時は。あさをにて三あはせにうちて。あかくそめて用へし。あさにてうち候には。必つほあるへし。つほのかたをかみとすへし。布にてうちたるには上下なし。

一手繩の永さ。いづれも三尋。かたわき計。さりなからこなわをはさしてみて。馬の程に隨へし。

一入道手繩も。あさき色ハしんさくなり。あかきを用へし。あふみのうちをもくろくして可乗。くらおゝひもあかきもうせんにてはすへからす。しりかいもあさき茶なとたるへし。かき色紫にてなくは。あしこにもせずは不苦。

(類イ)

一おとこ入道せぬうちに。あふみのうちのくろきあかくなきしりかいなと用候事有へからす。入道は俗躰の躰ならず。また俗躰のうちに入道の學ひもならず候也。

一くらをは。うつといふ也。



一あふみもうつといふ。やないはをは。かくろ  
といふなり。

一くつわは。するといふ也。

一くつわに手綱しかけ候事。はしを中へたゝ  
み入。少よりてひつてのくわんへ入て。二つ  
まはしてひきしめ候也。たへは右へまはし  
候へは。右をに左へまはし候也。口傳有。

一くつわをしかけ候時。をもかいたすけにか  
わをとをして。今程用之事。本儀はあらす。  
たゝ直におもかいにとをしてしかけ候也。

一むなかいしかけやう。左右共に二まはして。

引しめる事本也。又みしかく候へは。一つま  
はし候也。其時ハ右のしほてに一まはし。左  
をは引ごをしておく也。おもかいの事。左右  
を一つまはし候へは。かわにてしほてにむ  
なかいをつけ候也。下のかたにてむすふへ  
し。口傳有。

一しりかいしかけ候事。是も本義ならは。二ま  
はしてよきなり。

一二重腹帶の引やう。常流に不用候也。

一軍陣の手綱腹帶同事候也。常式のことく。

一軍陣の手繩のさしやう。手繩を二重にとり。

中を馬の左のかたよりくひにうちかけ。の  
ごのもごにてとりて。なわむすひにして。一  
方のわなへ。一すちの手繩のはしを入引し  
め。又一方も。むかしはさやうに入ちかいた  
るとかや。今は一方はかりも入候也。さて手  
繩のはしをとのはみ返しに入。一つまとひ候  
也。是もむかしは又とめたる也。さて手繩  
のはしをうちへまごひて取左のしほ手にか  
けむすひにわなにして。其あまりを取合て。  
しほてより下へさかる分六寸はかりむすひ  
おく也。右は又左のことくにとゝめ候也。左  
右同前なり。くはしく書載かたし。口傳有。

一馬はたゞいつも切付に付てをく也。別にはすへからす。馬はたもつけのおを切付につけおく也。

一あふみを急用のために。左右を取かへてかけ候ために。力かねのまはり候やうなるはしよし。たひあふみとてあり。是もつねのことかかけ候也。たかかしらをちから皮のかけになしかけ候事比興也。

一ゑたての事。左のしほてにつけへし。付やうなし。しやうもさたまらず。かねにてもする牛のつのとニてもする也。おはあさきのを、三あはせてなひ。さしなわのこごくなひて。あをく染て付る也。又かわをも緒に付候事あり。たゞの時は傘袋のきはに。笠のゑに付て置へし。是も付様とてハなし。

一力革の永さ。なかくは四寸。みちかくは三寸といふなり。くらたちての事なり。口傳。

一手繩をしかけし時は。四にたゞみてかたかたのはしよりも。かうよりのことくよる也。一犬追物笠懸の手繩の長さの事。笠懸のは手綱のまかりを。むねのとをりにもちよきほと也。犬追物のは。又前輪にまかりをかけて。まかりと前輪のあい手二ツをく程と云也。但少のよりのきは。主のこのみによるへし。

一口のわろき馬の口。大略よくなりて。又わろく成をは。口のもとりとも。ねは口になるともいふ也。

一口いたむ馬とにくらのみつよくなき事なり。口のよはきはよはきなり。これはいたむにてはなし。

一口をいたむ口のつよきよわき馬なと、物語する也。

一馬上にては弓手馬手といふへし。かちたち

の時ハ、おしてかつてといふへし。たゝの時  
は左右といふなり。

一たちの馬とはいふ。おくたちとはいはず。

一主人。馬の爪をうち給ふ時は。惣別馬屋へ下  
へし。役人ともハかたなをぬき。もゝたちを  
取おろし。さやうの時は。大略侍の役たるへ  
し。乍去中間なこともあるへく候哉。

一弓を人に渡様の事。張弓にてもはつし弓に  
ても。又はあらきの弓にても。前竹を下へな  
し。外竹のかたを上になし。うらはすをさき  
になして。にきりの上を。右の手にひつさけ  
てより渡候時。左のひさをつき。右のひさを  
立。うらはすを我左へなし。弓をさきへひね  
り返し。前竹を上になし。同輩ならは左の手  
にてにきりの上を取。右にてにきりの下を  
取。弓を一文字によこたへて可渡也。又常の  
ことく持て。出人の前にて。左のひさをつ

き。右のかたに立。前竹を人にみせて。のち  
よこになし。如常も渡候也。

一弓を請取様の事。渡人賞翫ならは。兩手をに  
きりよりも下を取へし。同輩ならは右の手  
を渡人の兩手のあひたに入。左右の手を上  
下に入ちかへ請取へし。是も左のひさをつ  
きうけ取て。ふりなをし。右の手にて前竹を  
下になし。うらはすをさきへなし。ひつさけ  
て持歸るへし。奏者の時ならは。かやううけ  
取持て參。左のひさをつきて。右のかたに。  
すの前竹を我左へむけて立て。にきりより  
下へ。右の持たる手をおしさけ。左の手をつ  
き可懸御口也。罷立時は。弓持てと□持ては  
惣別右へまはり中へきと申候へ共。所によ  
りて何かたへもすはるへし。はしめのこと  
くさけて持候也。

一貴人に弓をまいらせ候時も。もちて參候様

如常。參候時は。左のひさをつき。前竹のかた我か前になし。弓を立さまになし。もとはすを右の手にすけ取。にきりの一尺はかり下を左の手にて取。貴人の御眼の前にすくに立なから參へし。つねに可敬人ならは。それよりもそと我左のかたへ。うらはすをなひけてまいらすへし。はり弓もはつし弓も同前也。あら木も同じ。主人はなにとも被取候也。

一荒木の弓。あまた結合なと候は。おもくて輒もちかたきまゝ。渡請取事披露候儀も。大かた其儀に隨へし。

一荒木の弓。人に出候時。なにとも結合候へし。定法あらず。又かすも何張にかさるへからず。乍去四張とはあるましく候哉。二張なとはくるしからず。

一荒木をは。籐かつらはなしとも云也。又一説

ふちはなしと云は比興也。たゝあら木と云へしとも有り。

一白木の弓にても。拵たる弓なり共。射ならしたる弓なりとも。人に出候時は。必つるをしかけたるまゝにて出へし。白木をはしら木。むらこきにはしらつるをかけへし。拵たる弓には。ぬりつるたるへし。態出候者つるもなくは。しかけて可出也。又當座に人の所望候時は。其人の前にてにきりととき候も用ありさうにしてわろし。其時はにきり見くるしく候へ共と申候て。ことはをそへて。其まゝにきりとかす可出也。自然はもたせて共出候者。つるはかけ。にきりはいつれの弓成共ときて出へし。

一白木は勿論。又拵たる弓にても。人に出候時は。にきりをはまかす。つるをはしかけ。にきりの所を。引合にても又は杉原などにて

も。ふみの上すきのことくつゝみて、前竹のかたにて巻留。水引二筋にて、兩竹のかたにて。かたわなにむすひとめへし。つるをはかうよりにて。外竹のかた。弓とつるとの間に。一ツまとひて。かうより一すちを以。是も前竹のかたに。にきりより上にかたわなにむすひとめてをく也。かやうにして出事本也。

一當座に其弓をど人の所望候時は、張たる弓ならははつし。つるをはかうよりにて。そとゆひ。にきりをは其まゝおき。言葉こそへて出候へし。にきりにつきての時宜也。

一弓とうつほは一度に渡候事。うつほの緒をこしにも巻てもおく。さなくはくりそへても持候也。うつほのさを左へなし。ふたの上をそらへなし。左の手にてハコシを持。よこさまに持也。弓を右に如常ひつさけて持て

出渡候ときハ。先うつほを左のかたに立ておくへし。立る所なくうつほのさを後になし。あをむけて下に置。うつほを疊に置きためて。左のひさをつき。右のひさを立。弓を如常渡候て。其後にうつほを取。右のひさをつき。左のひさを過。うつほのこしを。左の手にもち。右の手をしはつきにそへ渡候へし。

一弓とうつほは一度に請取事。先弓をいつものことく請取。右のかたに立おくへし。立る所なくは。からはすをさきへなし。前竹のかたをそとへなし。右のかたに置へし。其後。うつほをうけ取。やかて取なをし。渡候人の持て出候ことく持候也。弓を右に持。うつほは左に持歸るへし。奏者の時ならは。披露には兩ひさをつき。左のかたにうつほを立。弓はいつものことく右に立。うつほも弓も持な

から。疊にもとをつかゆる也。弓は前竹を我左へむく。うつほもふたの方を御前へむけ懸御目也。退出候時は。又如常もち退出すへし。

一うつほはかり請取事も。渡候事も無別儀候也。左にてこしを持。右をしはつきにそへて。右のひさをつき渡候也。披露の時もさやう持。右のひさはかりつき懸御目候也。兩手に持なからさるへし。請取事は如常也。請取たらは。やかて取なをし渡候一人の持たることく持。退出すへし。

一弓をは渡候人も。請取人も。左のひさをつき。右のひさを立候也。うつほと矢と渡候人も。請取人も。是は又必右のひさをつき。左のひさを立へき也。

一弓と矢を一度に渡候事。弓をはつねのことく持也。矢をはすをさきへなし。ねのか

たを後へなし。篋中の邊を左に持。渡候時は左のかたに矢を立ておく。立所なくはねを後へなし。下におくへし。弓をは先いつものことく渡候て後に。矢を取。はすを我右へなし。左の手にて。すけふしの上を取。是は貴人の様體也。同輩へは左にて篋中をもつ。しとうや。しめ。ひきめ。的矢ならは。いつれもねを右の手にすへ。右のひさをつき。左のひさを立て出すへし。そやの類や。けんしり。かり又なとのかなねのやをは。右の手にては。くつまきのもとを取渡へし。請取事。先弓を取。右におき。其後。矢を請取事。ふりなをし左にもち。弓を取退出すへし。請取てハ渡候人の持出候ことく。持て退くへし。請取渡披露候も。弓とうつほと同心得なり。

一矢はかり渡請取候事別儀なし。但矢計の時ハ。はすをさきへなし。篋中の邊を右に持出



渡候とき。右のひさをつき。すけふしの上を左にて取。右にてくつまきを取渡候へし。同輩には左にての中の間を持へし。請取事如常。請取候て取直。右に持歸る也。

一矢を渡候人も請取候人も。ふしをぬりたるやならは。ふしの上は持へからず。

一人の弓を所望候時も。又出候時も。矢をもそへてと候はすは。矢ハそふへからず。

一弓と矢と一度に出候時ハ。いづれも弓をは弓。矢をは別々に可渡候也。弓に矢を取添渡事なく。馬上へは取添候て可渡候也。自然弓計とあらは。弓計參へし。箭も同し。

一矢により渡請取事。替儀なし。程のある也。又はしとふなとや。又はふしかけを取やにより。少故實あるへし。其外不易也。

一矢のから計渡候事。請取事もねのある同前なり。

一矢のね計。人に出候事。何と成共帯に包候て。物にもすへて成とも出へし。ねのさきのかた我前になし可渡也。披露時も請取候て取直。ねのさき我前になし可懸御目也。

一我弓をは何時も左に持へし。乍去當時人の渡候をは。先右にもち退出候好候。其も定右に可持にもあらず。左に持てくるしからず。

一弓には太刀共添渡候事有ましく候。うつほにも矢にも。太刀はそひ候ましく候。

一主人などの御弓張やうの事。つねくはかけにてはりて持て參へし。惣別弓をはる時。北むき西向にむかふてはる事をきらう也。又主人貴人などへむきてはるも如何。又柱のかとや。ぬきなとや。戸のさんなどのよはき物にはすをつけおす事あるへからず。主人御弓なりとも。一人してはるへき御弓な

らは。ひとりしてはるへし。其時ハもとはすのつるわをくわへ。弓をおし。左のひきにもとはすをもたせ。右にてくわへたるつるをとりかけて。うらはすをつけなから。つるを中にして。兩手にてとりあげ。ゆかみたらは。疊にうらはすをつけおしなほし。つるをとを二ツ三ツして。常のことくまいらすへし。主人貴人の御弓にかきらす。人の弓をにきりととりはる事あるへからす。又つるをとする時も。にきりととりてはすましき也。弓をはる時ハ。其主にいつかたを取おし候やと問候てもおす也。二人してはり候は。一人につるをかけさすへき也。おす人の兩手のあひよりつるを取かけへし。

一つるくひしめす事。主人貴人の御弓ならは。くひしめせと不被仰候者。くひしめすへからす。くひしめすやうは。先うらはすのつる

は。かたのきわよりも下へ五寸計くひしめ候あとへくひもとし。其後。もとはすのつるわのきわ。かたより上へ五寸計もくひしめし。是も又。あとへくひもとし其後。さくりの上より下まで五六寸くひしめし。是も上へ又くひもとし。さてうらはすのかたよりも。すわふの袖にても手にても。もとはすまでのこふへし。

一弓をはる時。中程にもあてす。生木にもあてゝはるへからす。

一弓を一人おし。一人につるをかけさせ候は。二人張也。二人おし。一人に弦をかけさせ候は。三人張也。かやうに候へはとて。三人張まであるへし。四人はり。五人はりなといふ事なし。三人の外は取つきておすへきやうなし。

一弓をかけておく時。うらはすを。きたむき又

ハ西むきにかけておくへからす。

一人の所へゆき。弓立てをく事。うらはす空へ成により。何と立てもくるしからす。

一弓を一ちからといふ事は。やけつりてつるをかけて後は。又つるかけぬ以前にも。又削ほそめ候時。其かなくつ兩方手にて手のうちにつかみあるを。一ちからといふなり。兩手をおし合候時。つよくおし合候へは。あまりの事也。たゞゆる／＼とおし合て。あるほとたるへし。

一弓杖いくつえうちてといふ。弓たけとはいふへからす。

一弓杖に一ふくら二ふくらといふ事あり。一ふくらとは一枚の事。二ふくらとは二枚の事也。さやうあればとて。三ふくらなどとはいはず。三枚よりはいくつえといふ也。

一弓はこといふも。弓杖の永さの心也。是ハ犬道物の時の

也。事

一弓をはうつといふ也。つくる事也。

一弓うつに。きつかけといふ事は子細なし。不聞事なり。

一弓を射かへしてといふへし。弓かへしとは不云なり。

一引目一束人に出候者。おつどりのふしのもとを。かわにてゆひて出すへし。此時ハ矢代申なり。合候様に順にねちたるやうに結合へきなり。結ひたる所を右に持。左の手をひき目にそへて在て出へし。請取事別儀なし。又一腰の時は。かうよりにて結て出へし。一束の時は。矢結ひのかわにて結也。

一矢結の革の事。菖蒲革一もんをたちて。さきは劔形にきりて用へし。矢を結時は。二まはし三まはし廻して。ひほのことく引結也。又略義にはあひかわ。ふすへかわにてもする

也

一弓に紫竹を打事不及見。ことに竹のうすくよわきハあしきとてうたぬなり。

一弓のはりたるなりのよきあしきをは。はりかほのよきあしきといふ。

一弓のはふとい。はたかひと云ハ。弓とつるとのあひのひろき也。又ははほそい。はひくいと云は。弓とつるとのあいのせはき事也。此時はふといといは。はほそひといいてよし。はたかいといふ時は。はひくいといふ也。

一弓をはりはつし候といふ。おろすとは不云也。

一弓をはりては。つるを外竹のかたへやる時は。弓の外へまはすなり。つるやすめハ外竹よりかくる也。

一くすねかわの事。くすねかわのつきたるか

わ也。しやうにふはなし。よそへの時かはるふくる也。又人にも可持也。

一弓に何張本何張弦といふ事比興也。

一矢の後の物といふ事。いふましき儀也。人の弓勢によるへし。

一遠矢たけといふ事。猶しれぬ事也。

一目かけの物と申候事。不聞儀也。

一目あての物と申候事。たとはうちむかふかたのいつれのなにとある所を射へきともふ所。それを目あてと云也。

一射取の物とは。何にても射て取る物の事也。

一矢ふすまをつくりてといふ事。きかぬ事也。

一弓にもと袋といふ事も。きうたいと云事も。不知儀なり。

一矢ひとつの事。板にて四方に立になかくさしたる箱也。ふたあるへし。矢うつなと云事しらぬ事なり。

一百矢の臺とて。むかしはおふてありといふ也。

一つるうちとも。つるおとゝもいふ也。鳴弦の事也。

一矢はしりのつよきはきとはいふ也。

一せいひやうとは云。大ひやうとはいはす。勢丙。

一こひやうとはいふ也。

一弦弓とは云也。つよ弓といふとせいひやうといふは。心得ちかふへし。せいひやうは上手達たる事なり。

一何にても射る時。こしたさかつたとハ云也。

こしやとはいはす。

一遠やとハ申候へ共。遠くとふやのひなとゝはいはす。遠く射たる歟。何町なと射たるとはいふ也。

一矢すちのよきとは。ふらすして。ゆく矢の事

也。

一矢のとふといふ事。せはに申候へ共。さたまりて云事はなし。

一矢立のよきわるきとはいふ也。

一矢みちといふ事は。矢のとをる分の事なり。

一矢さけひは。戦などに弓を射てやこたえの心に云事なり。

一弓をと。木手音の事たるへし。音のうつうたぬの事なるへし。つるをとの事也。

一あひうちといふ事もあり。

一つるのふときほそきとはいふ也。まけたかちたとは不云なり。

一はほそき弓をは。つるをゑりてもかけへし。又おりても懸候也。

一矢に羽なしといふ事なし。

一ひらいたる射手。つほふたる射手とはいふ。うすきあつきとはいはす。

一かいなのすくなる共。うけかいなる共云也。  
世話にきつちやうかいなゝとゝもいふ也。

一神代の矢は。かふらなり。

一ひとて四目とは。眞に拵たる也。たゞ又四目  
と計いふは。赤をめなとにぬり草なるの事  
也。一手四目と云ハ。一手のほかあるへから  
す。一手つゝあまたはあるへし。

一一巾しとうの事。是も一手しとうといふ時  
は。二手にかきるへし。一手つゝあまたはあ  
るへし。草に拵候は一ツも三ツもあるへし。

一こしとうといふ事なき事也。

一しとうも四めも。草に一ツ拵候時ハ。一ツ共  
二ツとも云へし。

一かりまたから。かふらのかゝりや。とかり  
矢。犬射から。笠懸からに笠懸のから。皆一  
ツ二ツと云へし。

一的矢四目しとう一手のをは。一手二手と云

へし。一ツはかた／＼はいふへし。

一引目一束とは廿なり。一こしとは四ツの事  
なり。其外は一ツ三ツと云。十又十五共いふ  
なり。

一うつほのみにハそやを用候也。其時はすけ  
ふしを本にして。そや成共。うつほのみに用  
候はゝ。白籠もする事。本儀たる由。宗信被  
仰の由候。其外如常なり。

一うわさしとは。ゑひらにとかりやをさすを  
云也。此時は二ツさすなり。

一ゑひらにそ矢をさす事。そやのかす廿五廿  
六まで也。廿五廿の時はとかりやをさす。十  
六の時はとかりやさゝす。廿五の時も廿の  
時も。とかりや共に廿五廿也。

一うつほの矢かすは。十一九七なり。中は九ツ  
程也。十一九の時は。かりまた三ツもさす  
也。此時ハそや一ツすくなくさす也。十一九



七の時により。又二ツもさす。かりまた三ツもさせ。二ツもさせ。かりまた共に十一九七たるへし。そやもおふといふ也。同事也。

一ゑひらはおふといふ也。うつほはつくといふ也。

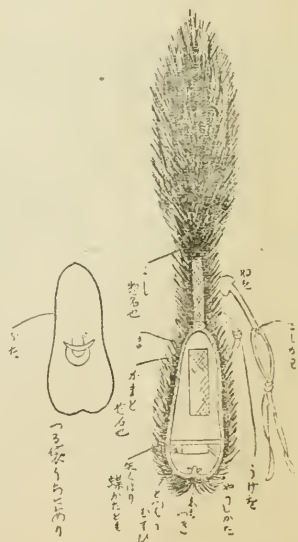
一ゑひらよりは矢をぬき出すと云。うつほよりは矢をかり出すと云なり。

一ゑひらには。そやをさし。上さしにとかり矢をさす也。かふらはさすへからす。又うつほにはとかり矢をさす。かふらはさすへし。ゑひらにかりまたもさすへからす。

一ゑひらはさかつら本也。しこかわゑひら略儀也。

一つるまきの事。ゑひらの時は。こしかわのさきにつくる也。うつほの時はふたのうちのつる袋に入へき也。

一つる巻につるをまく事。まつもとはすより



もまくへし。かけ候時。うらはすよりかけかへ候ため也。弦袋にまきて入候事も。うらはすのつるわよりまくへからす。本はすのつるわより巻はしめて。うらはすのつるわを。上になるやうに巻とめて入る也。

一弦巻をうつほのこしかはに付る事は。あいかわをむちの緒のこたく丸くくけても。又かわを疊ても付候也。かけをのみに。一方をはまむすひにつけてきる也。一方をはこ

しかわにあなを。二つあけ。それに一ツ、とをし。をもてにて。とむはうむすひにさんほうのかしら。こしかわのさきへなるやうにして。きりてをく也。兩方のあひも五寸。又つる袋のをのなかさも五寸はかりたるへし。

一うつほに矢をさす次第事。四の時にかやうなり。式装の時は如此たるへし。次第に身よりをあげてさすへし。



十一さす時かり又。二ツの時如此也。

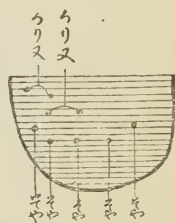


十一さす時かり又付也。



七ツさす時かふらさしそゆるやう如此也。

當流にこそなる秘事にする義也九十。一さす時も此趣也。



兩ふりなとにしようや。狩などの時遠矢などはかくしてこゝにさす也。けんあらハそやより下にさすへし。

一かふらさしそふる事。かりまたそやの數には入へからす候。かふらはかすの外にさすなり。

一狩の時軍陣などへは心もちにて箭數さし候共。さしやうは大略あとにするすこく也。又狩の時は人にかくし。とかりなどさす事。下にさすへし。

一四季にかはり。うつほに矢をさしかゆるやうありといふ。當流になき事也。

一引目うつほにさすと云事あるへからず。

一うつほの事 一ツ二ツといふへし。

一うつほのほとはいはす。さきといふへき也。

一うつほのかわには。なにかわもくるしからす。さりなから馬の皮。牛の皮。いぬの皮をはかけす。又虎豹の皮などは。本人ハすましき也。しましの皮。猿のかわ。いのこのかわ。熊のかわなどは。たれもしんさくなし。かけてうしにはせいひ也。又は青漆にひきはたをぬりたるをもする也。

一うつほは。ゑひらよりも以後出来候歟。からよりも渡候哉。うつほとい字は。唐よりも渡る上は。唐土にて出したる也。又うつほといふ字。ゆかけといふ字など。當流にも秘事候也。いづれもかなにかく事をならひとする。うつほといふ字は。義家被遊候筈に。たつちもんうつほもんどてあり。正し。

一座敷にうつほかけおくやうとてはなし。たゝ緒を懸てをくまで也。かけ緒たけ緒に引こみてもをく。又たゝなかきなからもさけておく也。

一矢などにも。犬射から。引目から。笠懸から。かり又から。是はかやうに何からといふ也。此外は小笠懸のから。とやのから。かふらのから。とかりやのから。何のからどの字を入れて云へし。

一矢こたへの事。犬追物の時者。よき矢を射たれば。くひをつくるとて。かほを左へくひをつくりて。おうとやこたへをする也。狩の時へはあをむきて。のこをそらし。あつとやこたへをする。又臥鳥射取の物には。あをむきてあゝといふなり。

一二ツの矢とは。一ツ射て。やかてあいたもなぐ又射るを。二ツの矢といふ也。是も一人し

ての事也。射手兩人ならは。二ツの矢にあらす。又一人しても射よかし。一ツ射てのちに逗留ありて射たらは。二ツの矢にあらす。又矢をつかひて射なといふへし。

一二の矢にてはあり。おつとりく射たる共。二の矢の外は。また射てまた射てといふへし。三の矢。四五のやなとゝはいふへからす。

一矢つか何束と申候事。如何人に手のなと不定。我手に何束といふへし。

一矢に四方の物と申候事有へからす。四たてとはいふ也。

一四立の時。しきりはきとて。ゆすりとかけのこはを。羽中にてはきとめたるをいふ。他流也。不可用之。たゝ當流には小羽をも上はきまてにをす也。

一羽一尻といふ事。眞鳥羽鷹羽にかきる事也。

大鳥羽は十四枚。小鳥羽は十二まい也。鷹羽も十まいなり。

一雜羽といふ事。いつれよりも雜羽といふ定なし。眞鳥羽などの外たるへく候歟。わきて云事不定。

一矢をたはさむといふ事。矢を持事也。しとう四目をは。的矢のことくねのかたをたはさむ也。かり又。かふらや。けんしり共。はすをたはさむなり。引目はのくちをも持也。

一すかり又を射るといふ事。先かふらを射て。二の矢にすかりまたを射てなとゝいふへし。かふらにつき射すは。すかり又とはいふへからす。

一矢にねをすくる共いふ。しめしとうをはしすくるといふ也。やしりさしてとはいはす。一うつほとゑひらにさゝぬ矢二ツにかきる也。あとに委細見へたり。

一引日うつほに人にかくしてもさす事なし。  
若四日などは。兩ふりなどにはさす事もあ  
り。

一わたくりといふ事。あるましき事也。とかり  
やを心得ぬ人。右様にもいふへき様。わたく  
りといふ矢はなし。

一矢をみるやうとて別義なし。人の矢を見候  
とてつまよるへからず。ことにふしぬりた  
る矢などのこいのなとつまよる事。尾籠之  
義也。

一矢はすをゆひ候て。ふさきつめぬ事也。

一しとう的矢に射つけのふしと申事。むかし  
はあつちなくて。すなをかきあけて前につ  
くらを置。それに小的を立射たると也。其後  
よりあつちは出来するなり。それによりあ  
つちの法量なし。又的矢としとうにいつけ  
のふし出来候は。いくらをいつけといふに

より此譜也。

一矢印の書やう。羽中にかき候時は。羽中のふ  
しのもとに。三方にみな書也。又おつ取に書  
時は。はしり羽のとおりの下。おつとりのふ  
しのもとに書也。又すけふしに書時は。是も  
はしり羽のとをりに。すけふしのきわに書  
也。書所は羽中。おつとりのふしのもと。す  
けふしのもと三所まで也。されども三所  
には不書。いつかたそ一所書へし。羽中のとき  
は。羽の間ことに同通りに三方書へし。おつ  
とりに書時も。又はすけふしに書時もた  
一所也。

一我名乗までを二字書也。名字位などはか  
す。

一やうしはといふ矢のねの事有へからず。若  
丸ねの事歟。

一そやのねのさきのふときは。うつほにさし

てもぬけすして惡し。うすきかよき物也。

一手ための事。急用の時うけなにて。我矢なとはさもあるへく候哉。人の矢なとは左様にあるへからす。おきためなとは。細々ならはきも有へし。

一矢しるしかゝぬ矢の事。的矢。四目。しとう。笠懸に小笠懸。からの。是等は矢印すましき也。

一矢印を書に。犬射からなとには墨にて書たる上を。うるしにてとめ候也。又犬射からにかきりて。もとはきの下ひきめのすけふしにはすへからす。尤族の儀也。三職なとはさせられ候也。平人は其儀あるへからす。又犬射からなとには。繪をも書事あり。印まて也。其も書所は同前也。

一朱漆なとにて。矢印する事なし。

一はしり羽。弓すり。とかけ。かやうに申候に。

とかけと申候子細ありと候へ共。其謂なし。とかけの羽共いわす。

一矢を見るやうとてはなし。はすより羽をみて。くつまき迄も見へし。ふしぬりたるは。ふしの上をはりたす。

一うつほの見様。さたまる儀なし。

一弓の見やうとてさたまる儀なし。うらはすよりもとはす迄みへし。

一ね矢の持やうとてはなし。かなねははすを手はさみ。しとう。まとやなとは。いたつきのかたを持候也。

一しとうを人の所望候時は。矢代めとのためならは。一ツも出へし。草鹿丸物を射へきためならは。二ツも出へし。

一ひしの矢といふ事。かふら。とかりやたるへし。魔障のものをしりそくる心もあるへし。



右條々。小笠原入道宗賢判形之以本令書  
寫訖。可爲證本者也。

慶長十四年五月日

以東京帝國大學圖書館本謄寫以同史料編纂掛本及宮內  
省圖書寮本校合畢

續群書類從卷第六百八十五

武家部三十一

伊勢貞親以來傳書

貞孝

貞宗

貞陸

貞忠

貞順六郎左衛門尉之事

一正月二日御乘馬始。手綱腹帶并御沓。伊勢守進上之。御沓ハ伊勢駿河守作之仕。仍御乘馬之時は伊勢守并同名大畧就役者祇候仕。小笠原民部少輔參勤毎年此分也。

一正月四日御うたひ始。觀世太夫同四郎左衛門尉致祇候。從右京大夫殿進上之御扇子に御織物之御服を被相副候て被下之。同四郎

左衛門尉にハ御織筋之御服を給之也。仍太夫に遣樣之事。伊勢守御扇を右に持同御服を左の手にかけ候て持出。先御扇を遣さて御服を渡之時。大夫給則いたゞき申やかてうたい申候。其後四郎左衛門に御小袖遣候。是は御服はかりなり。音曲をも不申候。例年此分にて候也。

一同七日御吉書始也。右京大夫へ被遣御書候。御使伊勢守京兆則有見參。太刀を伊勢守に被出之。駿河守も罷出御吉書之入たる御文箱を秋庭備中守持出渡候を。駿河守出向給

之。同伊勢守に京兆被出太刀をも伊勢守次の間にて貞順に渡之。御文箱をハ左に持。同太刀を右に持て罷出。京兆之縁にて伊勢守被官人に遣之。従先々此分に仕來候。則京兆御禮に祇候有之。次伊勢守支度裏打京兆同前也。

一御吉書之御文言之事。

改年吉兆不可際限

猶期面候也。

正月七日 御判

右京太夫殿に

一十日御參内始。御供衆以下如例年伊勢守御供。

一十一日御作事始有之様躰者御大工以下何も伺候仕始申之也。

一從島山尾張守殿被官人六人罷出て。兩人つゝもつこに砂を入れて持。御殿之正面に置之。

すなを御庭に置候事六人して九度なり。仍支度之事小袖上に白きかたひらを着仕。かちんにそめたるはかまはかりきて。はかまの前を如常取てかい候。返しもゝたちなど取候事はなく候也。さて御庭の者五六人罷出候てえふりを持て。其にてすなをひろけ其上をはうきにてよくはきて。さてさいもくれうの物をかきりてまかり出候て。木のこくちに金をたて木のふりを見てすみを如常あて候て。まかりのき候へは。御大工罷出てうのを持。いかにもよくはい仕候て。さてうのにて三々九木を作儀式を仕候。仍御大工の支度はかむりを着候。同じやうそくの色は黒候。役者六七人ハ此支度なり。此外はえほし上下にて候。則又御大工に御馬を被下之。御作事奉行伊勢加賀守結城七郎祇候。御太刀をは加賀守御大工に遣之。例年此

分也。伊勢守并同名衆何も祇候。

一同十一日惣檢按致伺候。於御前平家申之。仍御小袖を被下之。是は其日の申次被渡之。亦平家之時琵琶をも申次取て遣候也。御前へハ座頭の手を引て祇候也。

一同十一日御所様何も御參三献參。御宮仕ハ御供衆。御手長ハ伊勢與一。同伊勢六郎左衛門。伊勢又一。同伊勢又次郎也。

一正月十四日於公方様まつはやし御座候。從御臺様御小袖を十觀世太夫に被下。御廣蓋に九被入候て。御母持出し禮候て御臺様の御そはに被置候。さて御臺様の上にめされ候唐織の御小袖を、御母ぬかせ被申候て。如常たゝみ候て九乃御ふくの上にをきて。御てゝ伊勢守に渡申され候を請取中。御前を罷立觀世太夫に遣之候。太夫拜領仕此十の御服にて。松はやしを仕候て懸御日候。次

に御小袖を御廣蓋に入候次第。人の無存儀に候歟。御小袖に色々高下有之事候。御母とハ伊勢守か妻の儀に候。御てゝとは伊勢守に候。

一十七日御的始。小笠原民部少輔同六郎參勤之。伊勢名字畠山名字此外參勤之方有之。射手ハ毎年替候なり。

一御的之儀式内様躰迄も相替り候歟。委不被注置事候也。

一十九日八幡宮へ爲御代官。御供衆申次の間に一人參詣候。八幡より御へいまいり候を。公方様御ちやうたい候。御へい役人ハ伊勢駿河守勤之。先々は裏打を着候。今は小素袍のにも候。

一正月之御儀式は此分也。

一二月朔日從畠山殿御樽進上之。仍御樽之事御肴は白鳥一并熨斗あふひ千本也。天野樽

伊勢守貞親以來傳書

貞孝  
貞宗  
貞陸

貞忠  
貞順

一永正十年七月五日下午京三條御所御普請始并御事始。

一御普請始辰刻細川右京太夫高國勤之。被官人兩藥師寺罷出之。

一御事始未刻同日惣奉行畠山修理太夫。同小奉行伊勢右京亮。宮下野守。結城七郎。

一右筆方松田丹後守。齋藤美濃守。齋藤上野介。同御普請奉行金山三郎。

一御事始。當座に番匠に御太刀御馬被下之。檜大工同前。塗大工同前。都合御太刀二振御馬三疋なり。御太刀ハ伊勢右京亮渡之也。

一惣奉行以下并伊勢貞陸着座敷皮なり。以此後御太刀各進上有之。次第右京大夫殿。畠山

五荷二月之朔日又七月朔日十二月朔日。年中に三ヶ度進上候。御肴計掛御日二種なから二人してかきて被參候。一人は畠山名字にて候。亦一人は伊勢名字加候事も候。又兩人ともに畠山名字被仕候也。又河内國に取亂之事時は京都にて柳樽を進上候儀も我等畠山殿之申次を仕候條能存候。

一此御酒を出仕之人に被下候。官領以下事外沈酔候て退候也。

修理大夫殿。大内左京大夫殿以下。如常惣番奉行以下御普請始御事始之御禮御太刀二振進上候。之は持參太刀なり。惣番以下は金也。同明は各相注候て御禮申也。

一惣々御太刀以前に畠山修理太夫初て先役人一番に御太刀進上候也。

一永正十一年三月七日。就大内義興被相尋候貞久弘中越後守所へ。貞陸爲使罷越御返事申條々之事。

一三職之内者御成申事武衛甲斐一人なり。同織田も御成申之由常に雖申之。更何之御代に申たると云証據無之也。

一畠山殿にては。遊佐。しいな。神保。譽田。御成申といへとも。是又何之御代に申たると云事無之也。譽田紀伊國之郡代を持たる時公方様熊野御參詣有之。其時旅宿之御宿を申たるを御成申たると候歟。是は一向各別

之事なり。

一細川殿之内にも一人も無之。其外ハ各殿内に垣屋御成雖申之是も無語跡也。此分慥に御返事申渡候也。惣別大名の御内仁なり。

公方様へ直に物を進上仕候事昔ハ無之也。又奉行衆にも進上仕候者あまたは無之。當時所により進上候事無謂也。大名等へ御成被申時ハ其時ハ。御禮申事は常の儀也。是は各別なり。此者慥に貞陸被申之也。

一永正十二年十一月十九日。畠山殿。鶴奇殿。俄元服申刻於畠山式部少輔亭伊勢守貞陸刺髮在之。號次郎殿實名恒長。

一出仕三ヶ度御太刀持御馬一疋并万疋進上。是元服之御禮也。

一御太刀御馬一疋御劔ならひに御腰物。御拜領之御禮也。

一御太刀御馬一疋。御相伴御免之御禮也。



一御太刀御馬。被官衆御對面之御禮。被官衆六人。遊佐河內守。遊佐又五郎。松田。三宅。譽田。井地。各御太刀持進上之。  
 一三ヶ度之出仕。先一番ちやうけぬ。二番裏打役鶴。三番小素袍。  
 一從伊勢守次郎殿江。 目錄之認様。

御太刀	一腰持
馬	一疋
以上	
伊勢守	

一次郎殿伊勢守かたへ御出。馬太刀にて禮を被仰候目錄之認様此分也。

太刀	一腰持
馬	一疋
以上	

別に又青銅貳千疋被持之。又遊佐其外伊勢守に太刀にて禮を申也。

一永正十三年八月十四日。就參 宮從大内左京大夫殿御尋候間貞陸へ申。弘中中務五興兼へしるし遣之。

小者 中間 中間 中間 中間  
 小者 雜色 中間 中間 中間 中間  
 小者 主人 厩者 笠持  
 小者 房太刀 中間 中間 中間 中間  
 打刀 小者 弓袋 中間 中間 中間 中間  
 一主人うつほを被付候時ハ雜色之在所に弓ふ

くろあるへし。

一社參の當日とて相替儀有間敷候也。

一大和うつほ同鍵之事。以前御尋候つる遠路之儀候間爲御用心也。走衆之供衆等可被持候事ハくるしからす候也。

一小者六人被召連候事有間敷候。

一御社參の當日裏打にて御座候者。房に長刀をは被持候間敷候也。

一永正十三年八月廿八日細川右京大夫殿高岡八幡宮へ社參之事。

一御輿供衆三百人計。供衆の騎馬十二騎。一番に内藤彦四郎以下。悉うつほを付同弓を持也。

一永正十五年三月十七日畠山式部少輔順光亭御成之時。御輿御供衆。

御劍

細川右馬頭

三番

細川次郎

二番

大館上總介

四番

細川四郎

五番

一色兵部大輔

七番

伊勢兵庫助

九番

伊勢因幡守

十一番

古阿同朋也

六番

一色彌五郎

八番

伊勢備中守

十番

伊勢守

一能數十三番此内三番今春太夫仕之也。

一要脚万疋舞臺に積之。此役者之事。

壹番

伊勢備中守

三番

伊勢因幡守

五番

伊勢右京亮

七番

伊勢六郎左衛門尉

以上七人勤之。

一田樂四人伺候。松阿。野阿。藤阿。道阿。今春

太夫各に折帛被下之。

一十一献參。初献に御馬太刀進上也。

式三献御酌 細川右馬頭

初献之御酌

御酌 大館上總介  
御提 畠山七郎

二献之御酌

御酌 一色彌五郎  
御提 大館上總介

三献之御酌

御酌 細川四郎  
御提 一色彌五郎

四献之御酌

御酌 細川次郎  
御提 畠山七郎

五献之御酌

御酌 畠山七郎  
御提 細川次郎

六献之御酌

御酌 一色兵部大輔  
御提 畠山七郎

七献之御酌

御酌 畠山次郎  
御提 畠山七郎

八献之御酌

御酌 右京大夫  
御提 細川右馬頭

九献之御酌

御酌 飛鳥井殿  
御提 伯

十献之御酌

御酌 伊勢守  
御提 伊勢備中守

十一献之御酌

御酌 公方様  
御提 飛鳥井殿

一大永元年十一月廿八日細川右京大夫高國被  
任官領職。御使兩度。伊勢守貞忠京兆へ參

中。初度は被任之旨被仰出之御使也。二度目者御請御喜悅之旨之御使也。此後右京兆被祇候御三盃參。惣別ハ三ヶ度可有出仕之由候。御禮御太刀持同御劔御拜領御使伊勢守裏打。官領出仕同前裏打。右京大夫出仕之供衆香川美作守裏打。太刀を持秋庭備中守小素袍。長鹽又四郎小素袍。

一各京兆へ禮に參金を進之。

一公方様へ京兆同名衆計御太刀進上之也。

一年始歲暮などに 公方様へ御末衆御禮申入る事見及不申候。自然御代始などには御禮可申なり。仍年始歲末御禮申入る式日不可有之。是以可有分別候。同朋衆同前に候。同朋衆 公方様へ御禮申上候時ハ唐物などを進上候。各次に御太刀を進上仕候事無之儀也。

万 疋

是は從公方様禁裏様へ御進上之御折紙如此高檀紙一重也。

提婆品

同前なり。

五千疋

御劔 一腰國光

御馬 一疋鶴毛印  
雀目結

已上

是ハ從 公方様 禁裏様ハ八朔に御進上之  
なり。伊勢六郎左衛門尉貞順御使なり。若公  
様御同前なり。

天文五年八月朔日

一於 公方様御憑之事。伊勢守并同名衆勤之。  
七月廿七八日之間に伊勢守如此注進懸御目  
候。

奉行

伊勢守

右筆

伊勢因幡守

伊勢右京亮

御使

伊勢守一

伊勢六郎左衛門尉

木阿彌

古阿彌

直阿彌

季阿彌

葉阿彌

喜阿彌

此をく又同朋衆を注候て懸御口候。是ハ役者なり。

一他家へ遣書狀に人の朦氣を相尋候時は。御歡樂如何候哉と可認候。又我相煩候事を書候時は。所勞と可書候。人の□を所勞と書事あしきなり。皆々人のをば御歡樂と可認也。

一於路次三官領其外貴人等へあひ申事あるべし。貴人と見かけ申さハ則下馬候て然もかくれ申たるかやに心よく候。其儘候へは時宜も六借敷候なり。

一父子主人の供を馬上にて仕候事あり。自然親荷馬仕候共。子の身にており申ましく候。但又主人おり候へと承り候は。其時ハ下馬可仕候。りうんにおり候事候ましくと。又犬追物同笠懸の時も此分にて候也。

一十月いのこの御かなり切之事。公方様御直に被下方へハ其分にて候。又御直に不被下

方へ御荷之御成切過候て。五ヶ番へ御成切四方にすはりて。一膳つゝ五ヶ番へ被出之五ヶ番之月行事有伺候請之。番子にちやうたいさせ申候。又奉行衆にハ公人奉行伺候仕候て請取申。是も各にちやうたひさせ申なり。毎年此分にてなり。御成切共申。又御嚴重とも申也。

一しよのめい披露之事。容躰ハ大きな盆に各爐同ちいさきそく臺らうそくをとほしてしよのめいをも盆にすへて。陰涼軒被渡候を請取申。御前へ持參申候。しよのめいに公方様御實名を被遊候て。被出候時給にて。陰涼軒へ渡申候。御香爐の火をは殿中にて被取候。らうそくの火も同前に候也。



伊勢守貞親以來傳書

貞孝

貞宗

貞陸

貞忠

貞順

わたましのときは馬の生なごをも能ら  
まれて可有進上候。火性の馬を進上候事不  
可然候。むね上等のことも同前也。

一御成のとき。大門のそとの柱のきはまて其  
時の亭主伺候て被畏候。門の左右之事。御成  
の道つたいによりて可相替候。いづれも御  
こしむかはれ候て伺候也。

一御成のとき進上之事。主殿にて式三献參候

御事始

時。一族御入候方は御弓征矢持參候て御座  
被置候。さて鞍置馬進上候。是も一そくちつ  
候て被懸御目候。御盃亭主御給候。三目の御  
盃を聞召候時。亭主白太刀を進上候。其後御  
會所へ御成にて御看參候時。初献に亦御馬

太刀にても進上候。此後には献々にも進上  
候。但還御なとはやくなりさうに候へハ。献  
々にも進上候。時宜により候也。

一正月朔日大名出仕官領計御太刀進上候。此  
外ハ山名殿正月十五日に進上計に候。

一御所にうくひす持參候て掛御目候事。小桶  
のさまの方を御前へむけて可置候。同丸輪  
之方を小桶のさまのかたへなして可入候。  
同こおい可入候。さて御目にかかけ候時は、  
そと小桶のふたをあけのけて。うくひすを  
すへあけて。左の手にて小桶のふたをあけ  
のけて。小桶の上に置て。丸わの方を御前へ  
むけて可置候。亦ここのさし木は板目に  
さし候。鶯を小桶のふたの上に置候時は、こ  
おほいを取可申候。こほはいをおしたたみ  
てそはにをさ候。又奏者などに渡候時は、前  
に如申小桶より取出して。蓋の上に置候て。

丸輪を奏者の方へむけて。こおほいを取て  
鶯を奏者に見せ可申。さてもとのことく小  
桶へ入て蓋をして緒をゆひて渡候。此外急  
度時宜なく候歟。但りうくによりてやう  
舁可替候間一むきに難申定候也。

一於公方様一献のとき。御前へすへかはらけ  
を被出候て。御下を御入候御供衆の内一人  
罷出たへ候。たへたるかはらけをもとのこ  
とく御前に置事。れうしなにやうに可申候  
へとも。されともむかしより。かやうに仕候  
あいた非新儀候。皆御前のすへつきの御酒  
よき比になり候ハ。御供衆のうち一人罷  
出たへ申候。公方様よりたへ候へと被仰候  
ハねども。たゝこなたより罷出たへ候。又自  
然上意の儀も候。いたゝき候てたへ申候。是  
を公家方には。左の手をつきてたへ候と被  
仰候哉。されとも公方のはさやうには不仕

候。前に如申にて候也

一御寺へ御成の御せう香の香合をは同朋持參  
申候。御供衆之持參之儀は無之。

一刀を人に遣候時。自然火打袋をさけ申候時  
ハ取候て懷中仕候てさて可出候。袋ごもに  
遣候事不可有之。

一一献之時は先折を出。其後かはらけ物を可  
出候。此後くきやうの物たるへし。又おさへ  
物は末つかたには又食籠は貴人の御前へは  
不出候。心安時の事にて候也。

一うりをけつりて人の給候時。そとたへ候て  
そはに置候事。くはんたいなる事にて候。其  
うりあしく候ともみな喰事なり。

一酒の時亂酒に成候て各音曲候事。毎々儀々  
酌同くはへなとうたふ事不可有候。そうし  
てうたわぬにて候なり。但又貴人主人の仰  
に付候てかうたひ可申也。

一召出に參候事。あたりの人々にたゞ一禮して參候か能候。如常禮を申事あしく候。又參候時はたゞさきはかり見候て參り候かよく候。左右を見候て參候事不可然候。たゞ伺候の時ハ御禮不申候。又退出の時はうやまふ人の前にては手をつき御禮申たるかよく候也。

一主人貴人の爲使。同名其外我より下たる方に候とも。いつもよりいんきむに拵可申候。もとより同名衆たらは猶うやまい可申候。おくり禮もふかゝと可仕候也。

一於殿中三管領着坐之事。當職先上申候間座上に御入候。其次は前の職にて候。亦其次は無職にて候。着坐之次第此分に候也。

一わたましの事。心得さまゝ有之儀に候。先衣裝に付候ても何にても赤色を可有斟酌候。三ヶ日過候ては赤き色をも着候。惣別赤

色にかきらす。ひにひわた色もよき等をも不被着候。下緒までも赤きをはさけ可申候。又きん勺などをも用捨候。衣裝も白物可然候。此外色々様躰有之事候なり。

一足袋之事。年寄候へハ公方様へ申上御免候て着し。りうんにはき候事不可然候。亦病者などは其ことへりを申上候て若き人もはかれ候。是は各別の儀候也。

一雜色と申は中間よりはさかり候。又厩者よりはあかり候。馬上の時こうつほの役に候。亦公家方には中間を雜色と被仰候哉。武家は此分にて候也。

一下緒の事。主人不斷さけらるゝをは其内の者ハ可有斟酌候。又紅の事は此拵にも不及候。誰々もさけ申候。

一宮仕の時はかまの前を取て帶にかひ候事不可然候。宮仕にかきらす人の前へ罷出候

時此分。長はかまを着候て外へ罷出候時ハ。前を取て出しかい申候。又遠く罷り候へは返しもゝたちを取申候也。

一主人を申候て能をさせ候時。舞臺に鳥目を積候事常の儀に候。此役を下職のやうに人の存候歟。更に下たる役にては無御座候。於公方様隨分の方被仕候。御紋を着候程のやうにて候。爰以可有分別候也。

一金襦緞子以下進上の時拵様の事。唐つゝみのまゝ可然候。但つゝみそこね候時は引右一重。さてつゝみて如常水引にて結ひて臺に居申候進候。亦帟の上にすへ申候時ハたゝ其のまゝすへ候。折に入候て帟の上に置候事ハなき儀にて候也。

一寺家へ御成又ハ貴人等御入候時ハ。御宮仕をは喝食侍その間せられ候。俗衆なと被加候て被仕候事はなき儀にて候也。

一御供のとき乗替ひかせ候事。先遠所への事たるへく候。其時騎馬あまたの中へ引入候てひかせ候事有間敷候。程をおきて跡に可引候也。

一貴人主人の前を罷通候時は其方の手をつきまかりとをるへし。又御兩所御入候中を通候時は兩方の手をつき可申候也。

一ひやうもんの事。色をつくしてそめたるをひやうもむと申候。御きんせいにて候。たゝ二色をもつて色へたる計可然候也。

以東京帝國大學圖書館本謄寫以宮内省圖書寮本校合畢

續群書類從卷第六百八十六

武家部三十二

伊勢兵庫守貞宗記

萬葉方聞書。

一太刀折紙を人に渡候様。奏者に先可申事を申。其時ハ右の手につかを前へなし。帶取を一右の方へなして。膝の上に可持。又さして可申事なくは。太刀の石突をつきても申也。扱折紙をハ。左の手に折たる間を先へなして可持。渡す時は。兩の手にて折紙をひろけて。奏者にみせて可致。わたし様。折紙を下。太刀を上。足間の所を折紙の上に置いて可

致。又太刀計なれハ。左の手をつかにそへて可致なり。

一太刀請取様。左の手にて折紙を取。右の手にて太刀を可請取。太刀の下へ手を入れて可取也。足間なるへし。又若渡す人。折紙をひろけてみせすは。そと使の前にて取直し。ひろけてみへし。但おもてむきにては。ひろけてみせ不申。内々にてはひろけて。御目にかけて候なり。

一太刀折紙披露の事。太刀折紙を渡す。請取て主人江可申對面候得は。折紙のおりめの方

を御前へなし。其上に太刀の足間を、折紙の上につきかへて。むねの方を御前へなして置へし。わたくしさても同前なり。若酒など参られ候へハ。奏者折紙を取て後盃出候。唯對面計なれば。禮者歸られ候て後。太刀をとり候也。

一 貴人亦うやまひ候人に。太刀をまいらせ候様。太刀持たる右の手を取直し。太刀の帶取よりさき太刀の下へ。手のひらをなし。左の手をつかにそへてまいらすへし。又それほとなけれハ。右の手をは前に持たる儘にて。左の手をつかにそへて出也。等輩の人には。右の手計にて可出。三段に心得へし。

一 太刀と刀と一度に持参申。御禮申候哉の事。腰刀を進上之時ハ。太刀をそへられ可然候。其時ハ刀ハそへ。こしはのかたそへ候也。太刀の上にもちそへて進上申也。是ハ等輩も

同前候。

一 御太刀御馬御ふく鎧以下引出物。又拜領の時。高下次第の事。御太刀。御弓。御征矢。御鎧。御馬。此外沓。行騰。御小袖。此分候哉。先式の御引出物と申ハ。此五種ニ而候。又た引出物と申ハ。別の事にて候。私云。五種者。太刀。弓。征矢。鎧。馬。以上五色也。

一 太刀料足請取渡しの事。左の手にて代を持。右に太刀を持。兩方ひきちかへ候也。□□代を太刀より先に置渡す也。受取事。左の手には太刀の上より料足をさかてに取。右にて太刀を取。兩方へ引分る様に仕候て。太刀を膝の上にておさめ。又つき候ても不苦。さのみ主人きわへよらぬものなり。三百疋までは持て遣事也。

一 太刀と鎧と請取渡しの事。右の手にて鎧のたかかしらへゆひを二ッ入。鳩むねのかた



さきへなし。右に太刀を持。左のひさを付。鎧を太刀よりさきに人の左の方へ成様にして置候也。請取事は。まつ左の手にて。たかかしらをさかてに取。其後。右にて太刀をとり。兩方へ引分る也。あふみをまへのことくゑみの方表に成やうにもち候也。

一 太刀折紙狀文箱以下請取渡し之事。無別義候。書狀ひろけて御目にかくる事も候。文箱に封付候は、文箱にてもとりて。其後。右にて太刀を可取也。太刀を輿に入候事。輿の左の方へ入候。太刀を左に持候て。なかへの外より入候也。取出し候も。なかへの外より取出し候也。

一 貴人主人へ太刀持參候事。無別儀候也。右に太刀を持候間。如常御前に置候時。左の手をも太刀のつかへ添申候。又等輩へは。右の手にてはかり出し申候。左の手を添候事ハ。貴

人所への儀にて候。

一 輿の時。太刀の持様の事無別義候。輿の間ハ中間持候。御かり候時。中間持たる太刀を。なにかし請取候而持候。是も主人の左の方に可有か。其日の供の年寄分の人持候。又輿の中へも太刀を被入候。それをもとり出し候て可持候。

一 一人の内者返上にて被人御覽人の内衆進物などは申す。請取候て御座敷に常のことく置申候。主人江小刀など參る事無別義候歟。つかの方を御取候様に可參也。銘の方。上へなるへし。

一 一刀の拵様の事有定候歟。但ふちはゞき。しとゝめ計金にて。目貫かうかいハしやくとう可然候。かやうのを殿中へもめされ候。惣金作は昔ハ御禁制にて候。又若き衆などハ。少金作のも不苦候か。是も可依入候。又太刀打

刀ハ。金作のも所によりて持候

一主人腰物參候事無別義候。是も柄の方を御取候やうに參候。只人に出候時は、太刀のこたくそへ。この方上へ可被成候。刀のむねの方を、人の前へ成様に可出候也。主人より御腰物給候事。昔の儀ニ候。また拜領の様躰之事無別義候。給りて則いたゞき候で。御前を罷立。我さしたる刀をぬきて被下候をさし候而御前へまいり候て御禮可申候。

一小袖を進候事。袷を重ねる事も候。又小袖計をも出し候。數ハ不定。十廿。又ハ五三分別有へし。小袖を人に渡候様、ゑりさきを請取人の右へ成やうに。ちとすしかへて出すへし。受取人取直して持也。手にもすへ。廣ふたにも入て可出。手にすゆる時は。左の手に添可致。又主人へまいらせ候時は。左のゑりを御前へむけて。ちとすちかへて。主人の左

の方に可參。御成などの時。公方様江進上。此分又毎年正月。松はやしの時。御臺様より觀世太夫に被下御ふく。唐織物以下十被下。御袷ハ必伊勢守取次申。御廣ふたにすわり候。太夫はひろふた共に取て。いたゞきて罷出候。又御服計を給て。いたゞきても退出致候。又御ふく計を廣ふたより取出し。被遣候事も候由。又公方様へ御小袖進上。又被下候など申候。練ぬきの事也。十重十五巾ハ。常の小袖の事なり。

一下緒の事。いづれも用候。但主人の不斷被用候色をは。しんさく候而も可然候か。又くれなひの事ハ。其扱にも不及候。不苦候。次に寸法の事。刀に合ける能程に仕候而。さのみ長き下緒も不可然也。

一すわうぬきの時。喝食ハ扇など被出事有。其時は持様の事無別儀候。たゞみ持□候。又取

直しかなめの方をつかはす事も候。何も不  
苦候。かた衣を人に遣事無別義候。かたひら  
なと遣ことくに候。是も下かへを上へなし  
て。ゐりの方を人の前へ成様に渡候。汗のこ  
ひの事。長さ一尺二寸也。又色の事。只白き  
か能候。あさき又は梅などに染て用る人有。  
是は昔の事ニ候。今は白きも可然候也。

一 貴人奏者の事。先いかにもうやまひ可申候。  
太刀口録以下有之候。如常受取。主人へ中。  
扱奥の座敷へしやうたい可申候。見參候て。  
則太刀口録可取之。書狀披露の事。文箱に入  
候て取出し候て可懸御目。又文箱のふたの  
あけ様の事無別儀候。少わきむきてあけ候。  
又貴人よりの御書にて候ハ、文箱のふた  
にかへて參る事も可有之。

一 書狀を人に渡事。名乗の方を人の方へなし  
て出候。又よみ候時は。人のよむ様に置てよ

み候事有。又本式ハわか方へ字の本をなし  
て如常よみ候。可寄時宜候。主人貴人の御前  
にてハ、字の頭を此方のかたへなし候て。よ  
みたるもよく候也。

一 らうそくの出様之事。同しんの取様の事。無  
別儀候。先御前のより出し候。其後、御縁舞  
臺たるへし。御座敷のは、右の手にて計持  
候。御縁のも同前。又舞臺のは有明に臺にて  
候間、片手に不合期候間。もろ手にて可持  
候。又しんの取様の事。らうそくのなたれを  
取て。扱てしんを可取候。臺ながら其儘取も  
のにて候。取おろしき事は自由の儀候。又取  
かへ候時は。らうそくに火をとほし候て。右  
の手に持。左ニ而ハ臺のをぬきてさしかへ  
候。前のをも火をとほしなから持て罷立。お  
くにて消し申候なり。

一 脇差披露之事。無別儀候歟。御刀たるへし。

但脇差の事は。惣し而表向へは出候へぬものにて候間。時宜も急度ハ難立候程。脇差の事。貴人の前へさし候而出候儀ハ如何に候歟。殊酌宮仕の時ハ。猶以不可有之。内々にてハさも候はんする歟。

一上下の色は。何れも可然候。但先あさき。かちん。むくのみ此等能候。又うら打ハ大略あさきにて候。入道などはかちんのを着候。紋の事は。松。竹。鶴。龜等を付候。又字の紋をも付候。小紋の上下ハ略儀に候。近年はやり候もぢののすわう。同かた衣の事。殿中へは無着候。貴人の御前へも同前にて候。内々にては不苦候歟。

一輿の油單の事。ぬり輿にはかゝり候はす候。但旅の時はかゝり候事も候。板輿にハかゝり候。公方様御輿に油單被掛候事見及不申候。一段雨風候へは。掛られ候由候。然ハ御

供衆笠さし候。御臺様□□の雨にても。御輿油單被掛候。

一客に依てしやうたいの様躰可有之。縁迄罷出しやうし入る事も有。又庭へ罷出候事も有。可依高下候。主人□儀の時ハ。門の外迄罷出候。

一召出しの時ハ。いたゞきもせず。下をもすてす其儘置て罷立候までにては。酒なとこほし候事。らうせき成儀にて候也。銚子の口包候事。正月計下々の人包候。公方様其外大名方には片口を御用候。

一御通りの時酌の事。無別義候。扇を扱ひもかはを納候。納所は小袖すわうの間へ入候。又銚子に酒候ハねハ。何時も加へ候。如常數を合て加へ候事ハなく候。又さいこしに加へ候事ハきらひ候。あいにさい候へは。そと手をさいへかけて加へたるかよく候也。

一火鉢にさしすみの事。手にて取置候。女中衆  
迄も殿中御前にては。手にて御置候。同炭  
のこしらへやう。長さ四五寸に切たて。口を  
おくなり。

一すみ笠の事。私のあるきの時さす也。貴人等  
御供申時ハ。さすへからす候。

一あかねの小袖の事。誰にも着候。年寄たる人  
もくるしからす候。殿中へも用候なり。

一主人又うやまひ候人に。物を申候時は。少我  
顔をそとへふり。我いきをあて申候はぬや  
うに可被心得候。

一琵琶琴箏など參せ候様の事。ひわを人にま  
いらするには。人の引時の様にいたきて。く  
ひを左の手にてたてに握て。右の手を撥面  
の上をからていそかたをかゝへ。たいの方  
をたゝみに立てをしまわして。ひわをあを  
のけて。海老尾のかたを左に成様に可渡。又

琴をは。左の手をは。腹の中程の下に置て。  
右の手はりうかくのもとをかゝへて。柏形  
を前へなして。持て置様に御ひかせよふ様  
に參らすへし。又箏を參候ては。せめの所を  
取。ゆひを竹のあいへ入て。さきの方へ向  
て。つゝの方をさし遣スへし。

一主人へ御手水まいらせ候事。はんさうに水  
入。たらいの中に置。その上に手拭をたゝみ  
て可置。その御手拭を取て。我肩に打懸て。  
御手水をかけ可申。公方様御手水ハ。女中上  
臈の御役也。御成杯の所にてハ。御供の衆の  
内ニ而も。御一家の人かけ申さるゝなり。

一足袋の事。殿中へは御免候ハては。御はき候  
ハす候。御免の時は。必上の御足袋一そくを  
被下候。又入道同朋は御免の沙汰なく候。人  
の内衆も主人の御免候へははき候。無紋之  
かわふすへ皮など不可用。但出陣の時ハ。ふ



すへ皮の足袋たるへし。十月一日よりはき。翌年の二月廿日までなり。但三月にもはく事不苦候。

一 一そく一ほんの事。扇ハ一包又一本五本なととも。檀紙。杉原にて包てもすへ候。又一包と申て進上ハ。十本か廿本之事にて候歟。いかにもうつくしくだみたるうすやうのかさねたるにて包。金銀の水引にてからけ候。料紙の切口のかたへなかく置て。要の方を御前へなすへし。つゝまぬ扇を人に參らせ候も。なかの方を人に參らするなり。同拜領の様牀無異儀候。

一 貴人物を被仰候を承候事。先心をしつめて承候之所へ。御使などに被遣候一事も不審候ハはたつね申。心得すまして可勤なり。

一 主人江茶なと參候事。無別儀候。片手にては臺を持。又片手にては臺と天目を持添たる

か能候。參らせ候時。常の如く臺計を持候。其儘主人の前に居る事要候。下座へ先罷立候。受用候而又前のことく持て退出候。公私御通ひの事。配膳の様。いにしへハ。飯てんしん者以下をも目より上に指上。持たるご申候。夫は餘にことごとしく候。又足もごも見へ間敷候。只我息のかゝらぬほとに指出す様に持たるか能候。但下ささまへ別ひきくても不苦也。扇をはぬきて可置。袴みしかきは足見へ候て尾籠也。昔ハ何にても。貴人のはさみ候落候物候へハ。かよひの人取ける喰たる由申候。今はなき事に候。貴人の膳持て。よの貴人の御前を通り候共。禮ハ有間敷候。次さまの人の膳を持てとをらは。そご貴人の御前恐れる心あるへきか。手明たらは。貴人の御前にては。必手をつき可申。人の躰たゝかとのなきを本と申なり。

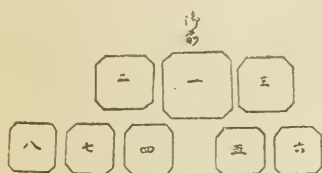


一盃に口を添て禮の事。一段の貴人主人の御盃ならは。ふるくといたゞき口をそへ候へし。佛法師匠兒若衆同前。其外うやまひ候入成共。口にあつへからず。猶心得古實有し。

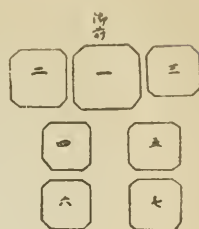
一貴人に折かわらけの物肴取て進る事。敬人にか人に依て斟酌有へし。まいらせてかなわぬ事も有へし。何れも喰よさそう成物をはさみて參へし。折かわらけの物。あなたこなたへ持てありき候はわろく候。其儘置てはさみ候へし。殊に末座などに候肴。貴人の御盃持て置候事不可然候。肴貴人の給候をは。ふかくいたゞきやかて喰へし。懷中するも能中人候へ共。それはわろく候。金仙寺の給ひし大さ成物なとは。喰切て残るをふところへ入候はいかゞ。喰切てそと脇に置へし。肴。下手の人の給候共。可載由二面。それ

に淺染の心得可有歟。

一毎年節分に伊勢守亭へ御成候。五迄參候。此時同名衆御供を仕候ハぬ衆も御相伴衆の御配膳被申候。別七迄まいり候時も。各へハ三迄する候。惣別御前の參やう度々にかわり候やうに有いかゞ。當時此分定たる由。故伊勢守給ひし也。

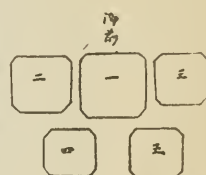


八迄參候時。かやうにすわり申候。同名舊中常喜しるし被置候も此分二候。但近年八迄參候事ハなく候。七に定候。參やう御膳のすわりやう。まへの御配膳の衆おほへ被申候事候。勢別も如此宣ふ也。



七迄の如此。

五迄の常式の儀也。



新様にてハ。引物も此分にすゆへし。上方様へハ引物ハまいり候はす。

一鷹鳥喰様。亭主鷹の鳥の山可被申。ふか／＼と載過分の由申候て。箸を持添。二三程つまみ喰へし。其後箸にて喰へし。

一御盃持て參事。右の手にてハ臺を持。左にては臺と土器とを持て參置様。先へつきのけ候様に置て。二ツ三ツ程しさりて立候様躰見よく候。何時も主人貴人の方をうしろになして立間敷候。此分可然候。

一召出しの御酌の事。銚子に酒なき事。酒候は

ねハ何時も加へ候。數を合加へ候事ハなく候。

一食籠之事。公界へは不出候歟。公方様へは參らす候。さか月の臺に色々の作り物な候時。酌の仕様の事。盃臺大きに候て。片手に持にくゝ候ハは。御銚子をそはに置。臺を御前へ持參し。扱てうしを持て有時。主人貴人ご御式退候。互に御禮濟候時。御酌被寄てまいらせ候。一献の中に御酌かわり申候也。久敷候共。一献の内に酌かわり候事有間敷候間。御加へも同前。主人貴人江銚子渡申候事。銚子のさきの方を兩の手にて取候而。たゝみにつけ候而。なかへの方を渡可申候。一御酌仕様之事。御銚子をもろ手にてさきあかりに御持候へかし。さいこしに加へ候時は。片手をさいの内へつきて加へ候。御銚子をさいより外へ遣しける。加へ候時は。又手

をそへ。つきて御加へ候へし。惣別何事もさ  
いこしをさらわれ候。子細あり候。

一肴喰時。先汁を吸て扱食事。人によるへきな  
り。有間敷事と云々。肴持上て喰て貴人の前  
を見合て置へし。置て後ハ又持上て喰事不  
可有。殊にわかおさなき人などは汁を可吸  
事。一向有ましきなり。

一くきやうの事。本式にはくきやうの物出さ  
る物にてハ。自然御肴とをすへ候而。出し候  
事ハ。ふと御參會の時の儀なり。食籠の事。  
御成の時は不出候也。殿中へも不參。各御參  
會の時もきと候時は。折計にて候。常に御參  
會又ハ僧衆來臨の時ハいたされ候。

一湯漬之事。無別儀候。あかりさまにハ。御湯  
は必まいるものにて候。ほし飯の事。夏用  
候。おし出しに受用候事は。まれに候。くろ  
鹽を添候。水を御まいり可懸ために候歟。ち

まさの事。かわをむき。小串にさして。人の  
たまはり候を用候。餘の義なく候。

一食の喰やうの事。左の手にて箸を取上。右の  
手に先持。扱食椀を取上。飯を一口參て。汁  
を取上參。又飯を參。又汁を取上吸てみを參  
也。扱さいを參也。何にても中をきを先參。  
されどもせんくみさいによりてまいるな  
り。一の汁を參る様。箸を持たをし。汁を右  
にて取上て。左へ渡して參候也。本膳のさい  
と二三のさいとかけてまいる事わろし。本  
膳ハそれ計。二ならハ二計。三ならハ三計さ  
いを參候なり。

一再進請る事。我より下の物うけ候間は。少待  
心をして。さいなとをいろひて。下の者再を  
請候て。又參るなり。三の汁ハ。左の手にて  
取上參る也。飯に汁をかくる事。本膳のさい  
を。右の手にてのて。扱食をわけて精進の汁

をかけて。大汁。冷汁同前。但時の景物共にて魚類ともあらは。それをかけへし。賞儀の心か。又汁の再を引間は。飯をまいらすして箸を取直し。汁の来る間まつへし。

一赤飯の喰様の事。せきはんの事候也。箸あれ共手にてくふなり。雑煮の喰様の事。上おきのまつあわひなと二ツ三ツ喰申候。貴人はその儘聞召候。貴人なとは。相伴の時は持上て喰申候なり。

一御折持て參様の事。御折は三献め五献めより參候而可然候。乍去献數少き時は。三献めよりも參候。きこくの物候は箸はすわらす候なり。又様躰によりすわり候事も候。しハりをは。かけにて解候て持出候なり。はう飯の喰やうの事。別儀有間敷候。

一餅の喰様の事。きつと候時餅なと出候事は。いかゝにて候間。實儀に候ましく候歟。や

うかんの喰様の事。箸にてわり候て喰申候。汁をも吸申候也。鮭の焼物喰やうの事。昔ははつなをの時は懷中候。はるよし申候。今は左様の事なく候由に候。若人さうめん參へき様之事。冷汁杯も。さのみおゝく請候はて。さうめんなとも少ツ、入候てまいり候。さうめん折敷など。若人ハ。我とハさはき候間敷候。□を引しなをして置也。こせうなどおも。汁に入候間敷候。おも高く候わぬ様に參へく候。表の添物。もし若人にハ箸をそへて出し候も。御箸なく候はゝ。かよひの人。箸を取かへ候てすへ候。粥すわり候様の事。若人は汁に山椒など入候間。置候梅干なども參候はぬものにて候。口をと高候ハぬやうに有へく候。粥に汁をもうけへからす候。但年より候てはかけ候ても不苦候。又汁をさいゝ吸候も。見苦しく候。若人まんちう

參候事。おとなしき人したゝめて參る物にて候。さのみ參候やうなく。口をとわかまのうち箸にて取りて。あんなと落候はぬ様に。御まいり有へし。度々汁御吸候事わろく候なり。

一火鉢持やうの事。足を上座へ向へし。

一□□の織物の事。御ふくにて候へは。拜領候はて各召候事無之儀候。又すち見すなどは召候。かうしハ召候はす候。かうしハ召候はすかげもへき梅染おもてへ召候。惣別無紋ハ召候間敷事に候。紫のうらの事。御禁制の沙汰はなく候。但下々の人ハ斟酌可然候。一かたひらは。五月五日より八月晦日迄着候哉。同惟の事。何れも不苦候。唐布をも殿中へ着候。赤きかたひらなどは。兒若衆は可然候。すゝしハ人により候。若人等ハこうちしろ。又梅もへき杯可然候。

一紫の小袖の事。紋を付候てハ殿中へも召候。無紋はめさす候。裕の事。何も不苦候。乍去。紫をは斟酌有へし。おり色御禁制にて候間。るりをしほりて召候。しゝら可然候。掛物の事。めし候半する方は。人によるへく候。女房衆にも。中老衆ハこかうしを召候はす候。是もくわしよくにて候。中老の中に。上意に相叶候方には。御ゆるし候へは召候也。織ものかうしにて候へて。すちを織たるをり物をは。中臈衆も召候也。こかうしの織物召候半するは。人によるへく候。男衆の織物着候半する事ある間敷候。但被下たる其色に織つるせ候て。いつ迄も被下候事にて候程に。御持候て着候半事有間敷候。被下たる小袖出仕にきられ候半するまで着へく候。其以後また色をにせ候て。織つかせ候て着候はんする事。殊に織物白綾など有間敷候事に



て候。自然この春被下たる御服の織物。又來春迄たしなみ候て。出仕に着用候半んする事有れば。其身のたしなみにて候。織物の御服なり。公方様より拜領候。定て御相伴衆御供衆。其外別て上意にあひ候方へ被下候。

一すわう袴。紋を一ツにして。地の色を上下にかへて召させ候事。近頃畧儀ニて候。又すきすわうとて。さいみのすわう召候事不可然候。透すわうと申候者。越後の事にて候。内々の時ハ不苦候。肩衣袴。是にしゆんし候はんや。こゑりに小袖を召候事。さして不苦候。乍去たゝ一に召候事可然候。兒若衆などは色にて召候。又年寄なれば物を多く可着ために。二ゑりに着候。

一丸すゝしの事。大上臈に上ろう迄召候。中臈より不苦候。御服の事不及申候。又大身かわりなどに染候て。大名之内のしなと着候。是

ハ一向別事ニて候。一重すゝしの事。只の人の召候間敷事ニ候間。ひとへすゝしハ。一段の事ニて候。

一つむきの事。紋を付候て染たるハ。御前へも不苦候。丹後紬とて變事有間敷候。自然白き上に紋を書て着事。白きにハ相かわり候歟。一裕計。いつよりい頃迄着申候や。四月朔日より五月四日迄着申候。秋は九月朔日より八日迄着候也。染小袖の時分之事。九月九日の出仕に必着申也。それより何にても着候。すわうの下にも着候也。紋を付候淺黄の小袖召候ても不苦由候。無紋之白きに小袖おもてむきへ召候ハす。裕の上に小袖數多くいかほと着候ても不苦哉の事。數多く着候は惡敷候。何時も時分よりかろくと出立候て可仕候。帷子の時あわせ。裕の時小袖着候事。慮外ニて候也。小ゑりなどの時。ひ



とつまへにあわせ候半ハあしく候也。

一 おりすち計着候時の事。何比と定り候事ハなく候。おりすちをは。老たる若きによらす候。にあひ候やうにおへせ申候て着候。

一 肩衣袴ハ老たる若きおさなひによりて色違候かの事。變事有間敷候。但ひやうもんなとは。れうしにハ着候はす候。二色を三色なとに染めけるは不苦候よし申候。肩衣袴おなし色に候□□□□□□袴はおもてむきへは出候ハす。ないくにてハ着候。かた衣のよにはつとく又はかわきぬなど打かけ。貴人の御前へ參候事。いかへに見へ候。ぬかれ候て可然候。肩衣うちかけ候て着候事。慮外ニ候よし也。

一 入道道人出仕被申候時。肩衣袴着候事勿論にて候。頭巾御免候てかつき候事。色などは定り候わす。

一 板金披露之事。是も無別儀候。五枚。十枚。百枚と候得は。折又唐の盆などにすへ候而披露候。又只一枚二枚も同前候。御前などにて包をあけ候事などハなく候。但時宜によりて相變事可有之候。

一 野遊何狩鷹野などにて。馬太刀など進上候事は。れいしきのことく候へて候共。何となくそと披露可申候。但太刀など進上候ほとこの儀にて候ハ。疊なども敷へし。其時はいつものことく披露可然候。芝居などにて□□□候は。太刀よこれ候へき間。中ニて持候て披露申候。

一 座敷に屏風立様之事。座上に金屏風扇なかし。其次は墨繪のうちから繪候は。尤賞翫にて候。金屏風より座上にハ立間敷候。白地の屏風ハ。祝言には立候はする不可然候。一あしなかの事。御前しらすなとへも被召候

事ニて候間。いつく迄もめし候。但又可依時宜哉。刀の柄は。御はれの時も。只の時も卷たるは畧儀にて候。卷たるは事により申へく候。

一公方様御前などにて。直に物を御尋ある事有。御返事をは。そとに伺公の人にむきて申候也。万一申候はて叶ふ間敷子細あらは。うつふきて御前を見まいらせすして申へし。御請最初之事。御奉行衆所共書候。常に進上と書候へ共。殊進上は不謂事にて候。其子細は進上とは。直札の書札に相似候間。如何候山中候。御内書御請ならは。謹て頂戴など。忝又事可有之候。下知等種々分別可有之。

一鷹。鴨。鵲。其外田物目錄かけ様の事。田のうしろ山の前と常に申候哉。流々可相變書狀目錄などにハ。鷹雉と員數可然候。一折と書て脇に員數を書候事有間敷。鯛。鯉。鮒。鰯見

たて可然候へは。數を書候事にて候。大畧一折ニて候。海老。貝。蛸以下一折可然候。海月。このわた等桶の物は。おけと可書事。勿論鮭鹽引一とも一尺共書候。鰯は一と書候。あゆも可爲一折候。披露以下無異儀候歟。ゐのし。狸ハ進物にはならず候。

一鷹の鶴鴈受取様の事。常にはかい口を上へなして。尾のかたを人の前へ成様に出し候。臺に居事も候。請取やう無別儀歟。流々によりて様牀可有之儀ニ候間。一篇に難口定候。鷹の鳥をは。臺の板目にすへ候はぬ様に申候。同鷹鳥披露の事。右等提て若人をよひ入て禮有時。常のことく横にして。ちうにて戴せ申也。下置事なし。

一鷹の請取渡の事。先むちを下に置いて。ゑ袋の緒をときて。ゑ袋の中へ緒を入れて。人の右の方へ形取て付る様に出す。扱大緒のさきを

とりて。引かへて大緒のさきをひひ。二に一  
まといして。先鷹の方をさし出て。大緒をハ  
右のひさに引あてゝ式退する也。受取人も  
大緒のさきへ寄て。右の手は大緒を取て。指  
にまといて左の手大緒に付て。やかて受取  
也。扱左へちとひらきて。大緒かたに打かけ  
て置なり。扱むちを太刀出すやうに。右の脇  
へ出す也。りうくによりて相受事ニ候。忍  
袋の取様。その方を右の手にて取。左の手  
にてめかしらを取直して付る也。

一 貴人へ笛まいらせ候時ハ。貴人のかたへか  
しらの方をまいらせ候なり。尺八出す時は。  
しりのかたを參候也。太鞍ハしめたる方の  
さかりを下へ貴人へまいらせ候哉。大つゝ  
み同前。小つゝみハ御かつての方へとく取  
直し參候。

一 貴人へ御禮申時は。扇は扱候はす候。但やう

たいかわるへき事も可有之候。扇御酌之時  
は。ぬきて可然候。御かよひの時はさし申  
候。召出しの時。扇扱候事惡敷候。御召もさ  
し候へと有。乍去るのこの出仕のとき。御前  
にて御酒の時召出ニ候。この時扇をぬくな  
り。貴人へ扇參せやう。鹿の目の方を參らせ  
候。

一 かうる請取渡の事。左の手にてすへ。右の手  
をそと添。足一ッ人の前へ成様に渡候也。か  
うる座敷に置時も同前也。かうろの灰押す  
事。兼てたくみ候て出し候かうろには。本式  
にをす事にて候。其時は三ツの足の間をい  
ちやうかたに三ツつゝ。以上九ツをし候。  
當世取あへすかうろ出候時。灰をはいかき  
あけ。三所に箸目を付候て出し候。箸目つけ  
所。三ツの足のとをりを押なり。香爐ハ公儀  
へちんかうにはひなとつき候て參候事ハ。

なき事にて候。心やすき遊覽の時は出候。

一 硯を持て出様。料紙を硯箱の下に取添て。我可書様に持て出て。御前にて取直して。料紙をは人の左に置なり。

一 花つゝむ事。草花をは包也。紙一重を一ツに折て。折目を上になして卷て。下の方のさきを折返て。其上を三ツにゆふ也。上を二所ゆひて。下同前とむるなり。とめやうに習有。同木の花は包へからず。只五所結なり。結やは右に同し。

一 題のなき短冊書様の事。短冊の題なきにハ。必下の句一字さけて書なり。是は男の事ニ候。女ハ題有ても。下句一字さけて書なり。名乗勿論不可有事なり。縦名題の事。並詩題の事。かな題の事。五文字七文字。その古哥のこと葉置所をかへて。よみなさるへく候。詩の題の事。常の題にかわる事有へか

らす。能々題の心を分別すと申たる事なり。短冊に題書ほとらいの事。同題と哥との間の事。たん冊に題書ほとらい。一字題。二文字。三文字ちと變り候事。三四分計ははの置様。題と□の程らいの事。折目より聊あ□て書候。題さかり候ハ。哥又さかり可申候。口傳多候

一 小短冊の事。常のことく書事也。又ちらし書に認へき事も可有之。同短冊ちらし書の事。下なり上へちらしして書事也。其字くわり哥二首有ハ。初のハ三通り。後のハ四通りに書て。以上七くたり可然候。

一 短冊草木に付様。同むすひ様。同枝の拵様。同付所の事。枝の拵様。本はしん共に三有を。左のかたの中の枝に。短尺下より上へ二ツに折て。三ツにたゝみてむすひめ上へと申儀も候へ共。たゝ短尺の折め下になして。

上をうへになして付る事よし。

一 銚子の受取渡の事。右の手にて銚子のさきをかゝへ。順にまわし。左の手をそこ添渡すなり。ひさけ受取渡しの事。左の手にて挑子のつるを取。口を我か前になし。逆にまわし渡すなり。右の手をそへ渡すなり。御酌御加役人上下の事。御酌あかりにて候。

一 三献めにハ。何も加へ候はて不叶候もの事。主人貴人御前にて加へ申候。末々にては不加候也。提子の事。右の手にて提子のつるを取。左の手にてハ。ひさけのそし手をかけ。左の膝をつき。右の足をふみ出し加へ候也。酌とり立て參をみて。加への人たつなり。

一 うちのもの酌にてのませ候共。片手にてハ有間敷。貴人御酌にて下され候時ハ。如何候て給へく候哉事。さしかゝみ忝躰を仕り。酒なとこほれ候ハぬ様に候て。下戸にて候共。

堅斟酌なと仕候はてのみ可申候。等輩又少あかり候人の方へ。右上より盃なとさゝれ候時。御さへの中へ入候て。酒をうけ候半哉。その儘居たる所にてうけ候半かの事。ちとひさなとなをし候て。その儘うけ候半哉。但様躰によるへく候。御三はうに盃すへて御酌の事。かわる事なし。同四はうにすへ候ても。同前成へく候。

一 火打袋の事。若き方は御前へ努々御さけ候間敷候。四十已後御さけ候由。それも自然病者なとにつきて御免有之。御さけ可有之候。りう人に御さけ有間敷候。惣別はれの所へ御無益にて候。

一 御幣まいらするやうの事。御拜の御幣にいたり候様社頭などにては。神主の手より言なから受取候。左の方をあげ。右をさけて持てまいり候。御前にて畏。御幣を取直し。我所

をちかく持て。上の方をとらせ申へし。御左のかたへ幣紙のなひく様に。うけとらせ可申也。御拜過て給り候時ハ。ちうにて又取直して。もとのことく左をあけて可持なり。

一鞍を貴人へ懸御目様。鞍はね計の時ハ。前輪を御前へ成やうに。兩方の手にて兩の居木をかゝへて。ちとそはさまに鞍の右を御前へ成やうに疊に置て。御目につけへし。鎧を御目に懸る様事。兩の鎧を兩手にてしたわきを取。大ゆひを打懸。四ツのゆひを下へなす。ゑみの方を御前へむけて御目に懸へし。又鞍を出し様にそはさまにかた／＼へも出へし。兩やうともに可然候。

一御ゆかけ參せ様の事。左のゆかけをあをのけて。其上に右を重ねて。緒をくる／＼と巻て。手の内に置て手覆せ御前へ成様に參へし。同御ゆかけを下さるゝ覺悟の事。兩の手

に給てをし戴て懷中すへし。くひにかけ腰にさくるよしを申方有歟。不存知候。一具の時ハ懷中候。若又數多候時ハ。左様には有間敷候。一具ゆかけ數多も進上。又音信等も遣候也。鞍鎧を出す様。前輪を我前へして。左の手にかけて。鎧をは左右なからかをと右の手に提けて出て。脇に置て。先くり出す時。右の手を前輪より入て。兩の手にて前輪をさきへ。乗形もちと横さまにするやうに置て。鎧を乗形ハ左をちとすゝむるやうに置なり。

一益香合進す時。袋江入たるをは。袋より取出し取て御前へまいり候已後。此方より持せ進上候時。袋入候て進上候也。但袋あしく候ハハ。無益にて候。

一繪替の物の事。一ふく二ふく又は三ふくにも。益に居候て進上候。又益無之候臺にも



居て可然候。板の物とんす。金らん等進上の拵やうの事。板の物厚薄板同前。上を引合にて包。水引にて中程をゆひ候。敷多時は引合十帖又ハ杉原十帖などにてすわり候。から物の事。からつゝみの儘も能候。又ハつゝみ直し候時は。板の物同前候。から物ハ一二たんも臺にすへ。これ計もつかひ候。

一行騰進しやうの事。左皮上に重て參せ候。行騰をは一かけなとゝいふなり。敷皮拵様の事。鹿の皮にて白毛を残し。ひつなりにかとを丸くし。しやうふ皮にてへりを取候。緒はなきものにて候。大ひつ敷拵やうの事。にくの皮熊の皮などに拵候敷皮をまねびたる物にて候。是は緒有ものにて候。同敷やう。すその方を前へなして。我こしにしたる様に。右の方を上へなして敷へし。但緒の付たる方を五六寸折返し敷へし。

一御門役所辻堅の時。雨降などにひつしきの下に敷候板の名。同寸法の定たる御法にてハ妨之無之候間不存候。足なとみへ候てハ慮外たるへく候。

一玉人へ笠さし懸申様之事。公方様へ之雨降ハ。諸侯衆御さし懸候。日笠ハ御小者さし懸候。亦官領へは雨降りには小者さし中日笠ハ馬廻り衆さし申候。馬上へも同前也。

一仰書の仕様の事。硯を主人の方へ向て書候。山候。筆などをあれこれかへ候事わろく候。初よりみままして書ける能候。

一はいれ持て參置所の事。てうののの事候哉。貴人主人御座候かたはらに置申也。貴人の御前に物なと仰きかせられ久敷候て。膝をたて直し可承候也。座敷にて鼻をかむ事。貴人主人の御前などにてはかみ候事慮外に候。居立かけにてかみ候而可然候。等輩など

の參會の時は。かたかけへむきかみ申候なり。

一あんとんに油つく時。袋を取。其儘置事惡敷。右の方に横になして置物也。疊に油つき候てハ比興たるへし。

一かへし股立取候て。馬せめ候哉の事。さやうに有之事ニ候。

一鞠のかゝり拵やうの事。是は御家ある事ニ候。□□□候ても。

一刀指申候帶の事。袴の前のこしのとめ候帶にさし巾なり。

一油火など人中にて吹けす。惣してなき事也。

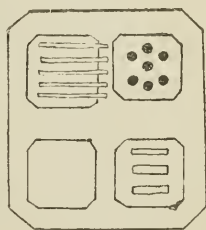
とほし火をしめせとあらは。どうしんをかうかいなとにて油の中へ引入へし。

一ちやうちんハかこちやうちん本也。へいせい持候ちやうちんは古實にて候哉。

一出陣看くみ様之事。

一出陣看の喰やうの事。

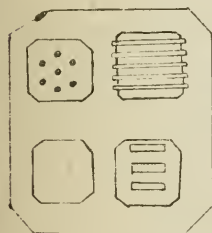
盃一つねのことく三とうけてのみてのしあわひ。二のみてかちくり。三のみてこふ。三めにハ一とうけてのますへし。加へて又二とうけてのむへし。



前

うつてかつてよろこふ。

一開陣の看くみの事。



前

かつてうつてよろこふ。是ハかちくりよりくう喰やう同し。

一軍陣酌取人一度つゝまいるたひに。此文を心の内にとなふる也。そひはいと三度めの盃の時は。そひはいと唱へし。又酌取人少もうしろへしさる事不可有。左右のわきへは可向。加さる人も同前。左へまいり候へし。一首御實檢の時ハ。股立を取。太刀を可持。私の實檢するに。軍陣などの事ならは。太刀を可持。首みせ申事。おもてより持所にそのかはを見せまいらせて左へ取也。向をみせ申さぬなり。さまよりいかめて持て參也。本ハ御前にて臺を下に置て。首を持上みせ申たれ。昔御前はやうやう敷久敷事無用とて。近年ハとめられたり。臺の拵やう厚サ五分計の板を六寸計にきりまはして。足はあしとく二ならへてうちて。あしの中を少とりて有るなり。朝敵の首をまむきに見ぬ事なり。さるほとに御覽し様う。右の足を左へ御う

しける身をひねりて。首につひちかひて實檢有ものなり。

一主人よりくそく被下候ハ。からひつ共に上取に置て。扨からひつのふたを取けるくそくを取出し。ふたにすへ。使をしやうして御目に懸候て。忝由可申哉。御鎧を進候事。上下の役人二人して持參する也。鎧からひつのふたに置て。御甲の落さる様に。甲の緒を。鎧のしやうしの板にからみ付る也。役人むかひ合て持參する間。下手の役人は前に立てうしろさまにあゆひ也。上手の役人は跡に立て持也。御劔置つる所より少のけて進置也。北面にならぬやうに置なり。主君南面に御座あらは。南に向て置へし。かくのこくとく置て後。下手の役人は。いそぎ／＼可罷出。上手の役人計残りともりて御鎧進。少なをす様にして後。畏て退出するなり。

一御劔を進事。御劔の柄の方を、我か左の方に  
して。御劔の刃の方を上にして。みねの方を  
下に成て。兩方の足の所をもろ手に取て持  
て參て。御座の左の方に二尺計へたて。左  
のひさをつきて。畏て御劔の甲金の頭を疊  
につきて。御劔を取直して。股よせの方を  
御身の方になして。はかせ給ふへき様に懸  
置て。左の手をつきて。畏て罷出るなり。

一幕の出入の事。入時はさのみまくのきわへ  
よらすして。兩のひさをたて。左の手を指出  
し。幕を引かくる様にして。扱右の手を添。  
兩の手にて幕を我後へうちあけて入也。出  
る時も。左の手を先へ先出して幕をとらへ。  
右の手をも添。兩の手にて打あけ出。その儘  
左の手をははなす。立歸様につくはひける  
幕をおろし歸候也。

一月日の物見夜晝に心得有。又幕の紋之下を

出入不可有。乍去左様の用捨不成所にてハ。  
紋の下成共出入可有也

一幕の言はの事。出陣の時ハはると云。責よせ  
候時はうつと云。歸陣の時ハ引と云。又舟中  
にてハはしらかす。くわんちやうのたうし  
やうなどにては。引かこむなと申候。幕の拵  
やう別紙にしるし參らせ候也。

ましまくと申候物。見およひ候はす候。

一太刀のつか足間なと巻候糸の事。何色も巻  
候也。同帶とりの色の事。りんとくと申候物  
にてし候。又はくぼくどんす。しゆすなとの  
様成ものくみてとし申候也。同帶取の尺の  
事。太刀二たけにして。つかの方よりつは本  
まで折返すなり。

一舟の中にて太刀打紙の請取渡之事。異成事  
有間敷哉。但故實等も可有之。太刀折紙の白  
洲にて請取渡の事。ちうにて受取渡候也。同

拜領の事。別義有間敷候也。御縁にて太刀折紙請取渡の事。下にて受取渡候而能候也。庭上にて御禮申程の人持參申候哉の事。左様にハ有間敷候。申次如常可有御披露也。御ゑんにて御禮申入ハ。何れも持參申候哉の事。人により様躰より可相變候。雨ふりに太刀折紙受取渡やうの事。しう儀時の請取渡しにしゆんし候半。

一 盃の土器に前後有よし如何の事。若土器のそこのへらのとめ所など。又ハ雲などの躰により候て申候哉。たしかに不存候。

一 銚子提子寸法の事。定り候事ハなき事にて候。

一 虎ひよりの皮。又熊の皮。鹿の皮などを。上の時拵様の事は。豹虎の皮臺にすわり候。進物之時此分に候。熊皮鹿皮急度進物にいかゝにて候。

一等輩にて互に力を出しあひ候時。戴候やの事。勿論互に戴可申候。

一 太刀計拜領の事。深く戴候て可有退出候哉。然を同名又は家の年寄などの功者取候半や。

一 入部の時。其主人江太刀を進上する様の事。別事有間敷哉。移徙の時太刀を出す事。是も異成事有間敷候哉。火性の馬など又ハ赤き色を斟酌の由申候間。左様の事にしゆんし故實候半や。

一人に我が家の字をまいらせらるゝ時。太刀出申やうの事。變事有間敷候。申樂に太刀折紙をも遣候哉。太刀計遣候哉の事。太刀折紙をもやうたいにとり遣候事も可有之候。常には折紙計遣候。同折紙の調様之事。只百疋共千疋共かやうにはかり引合一重又ハ杉原になり共可有之候。



一 公方様にて御能時。申樂に御折紙ハ御縁にて被下候。

一 勸進帳などに申樂に花をかけ候時。英あけさけに違ひ候との事不存。一同花の代せん  
の事。翌日に員數ハ此方次第に宿へ可遣候  
半哉。又太夫方より取に參候事も可有之。

一 御前へ指申候刀寸法定り申候哉の事。さた  
まり候事ハ不存候。下緒の寸法同色の事。是  
も寸法なとは無之候。何之色をも不苦候由  
候。但紫杯ハ如何候半なと申候方も候。下緒  
人に出し候事。同拵やうの事。板物なとつゝ  
み申候様に拵候て可遣候哉。面向なと急度  
進上にハ有間敷候。ゐ中なとへの音信にハ。  
いく品も可遣候半哉。

一 ぬき刀受取渡候事。異事有間敷候。はの方渡  
候人の方へ不成候様に可有之哉。

一 十疋。二十疋。百疋。千疋。万疋料足披露之

事。何時も折紙に調候て披露申候。俄などの  
事にハ。十疋。二十疋その儘ひろう申事も可  
有之候。

一 輿披露拜領之事。輿は臺などにすわり候て  
進上候。拜領のやう別事有間敷候。只くつわ  
計もち候時は。はみを持たるか能候也。

一 鞆披露拵やうの事。引合に包。水引にてゆ  
ひ。臺にすへ候て進上申候。五具十具も音信  
なともつかひ候。拜領別事有間敷候。しら  
糸紅なと進上拵やう披露の事。五斤も十斤  
も盆にすわり進上候也。披露別事有間敷候。  
手綱腹帶進上拵やう披露の事。いかほとも  
候へ。引合にて包。水引にて結び。臺に居候  
て進上候。又十帖の上なとも居候て參也。  
一 白洲にて手のつき様の事。座敷にかわる事  
有間敷候。御禮に罷出候時ハ。その儘出候て  
罷歸さまに。各御座候方の手を着可申也。



一扇子に物をすへ候て進上候時ハ。うらにすへ候哉。表にすへ候哉。かなめを貴人の方へなし申候哉。裏表と定り候てハなく候。鹿の目のかたを我持候而。先を主人江向候也。みかきつけの扇ハ。おさなひ者に十四五迄ハ持候ても不苦候。扇ハ黒ほね白ほね上下候哉の事。公方様へ御進上のは。みな白ほねにて候。黒ほね白ほね上下の沙汰ハ不存候。

一裕の下に帷子着候事候哉。着候ても候なり。ねりなと着候事ハなく候共。四五迄ハ是も着候半哉。織物織筋之下などにハ。ゑり見へ候ても不苦候哉之事。上にハ御禁制にて候間。如此候由の古實にて候儘。苦しかるましくや。すはうの下かた衣の下に着候ても。努々不苦候や。かた衣袴の色に上下有由候。ひやうもんなどは常にはいきんせいにて候。其外の事ハいかゝ候哉不存候。

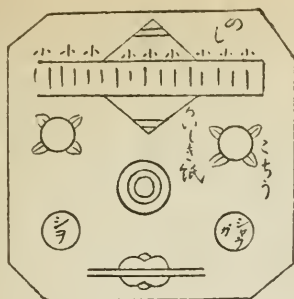
一御はしりなとに。四の袴などを着候時色の事。かちんあさきいつも各着候也。かた衣に裏をつけ候て着候事。面向へハ着間敷。内々にてハくるしかるましく候也。

一股立取候所と。返し股立取る所と定。□□□  
□如何。御馬をひき申候時ハ。こもゝ立と申物を取申候。又嫁人の時の送り迎などには。返し股立ハ取不申候

一式三献などにも加へハし候はね共。御ひさけの役人は出候ハ有之もの也。軍陣の酌は何やうの人仕候哉。其家の年寄分などの人し候はん哉。末々の人などハいかかにて候。入部の時着。但酌加への事定る式三献などたるへく候哉。酌くはへ異儀有間敷候。

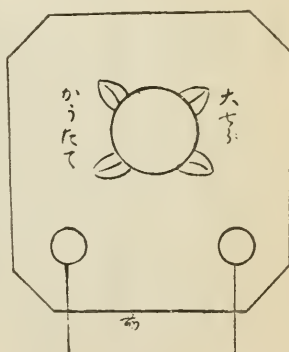
一鞠のかゝりにて酌の事。軒の方へ後の向候ハぬ様にきつかひ候。又軍陣の酌のやうにひさをつき候はす候様に。心もち候へし。鷹

飼に酌の事。別の事有間敷候。ゐ中にて御供衆其外御部屋衆。諸侯の衆へ食なと參候時ハ。足打候哉。折敷候哉。足打可然候半哉。又折敷もくるしかるましく候はんや。花見月見の酌の事。花の方へ後のなり候はぬやうに。



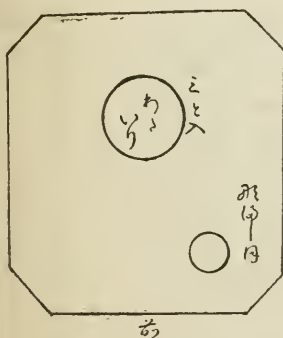
一式三献の事。三ツ盃ハ一と入。二さ入。三さ入。以上三ツ也。又三ツながら同じほと成かハられけもする也。大ちう三と人の間たるへし。  
一男の參會ハ足打。女ハくきやうなり。但同程ならハ何もくきやうなり。男計の時ハみな足打なり。  
一式三献ハいつれもくハぬもの也。箸をもいるハぬものなり。

二献め同圖  
うちみハ大ちう入。大かくの内に四方に厚紙をふたへにしきて。是を盛も有也。ふちの中たるへし。



からミわさびにてもまたしやうかにても。おろしてまろくもるなり。にちうなり。かうたてなし。

しほかわらけ。



鯉のわた入。女にハひれを下になす也。男にハひれを上になして盛なり。鯉のわた少なり。見へる様に脇へ出してもるなり。

一 一番に三ツ盃重たるをすゆる所にて。上の盃をとりて。相手に禮をして。貴人先聞召てきよたいを二ツめの盃にいろゝなり。のみたる盃をハ。右の方たゝみの上に置候也。相手又うけて吞なり。右盃の置所も同前。扱酌取人次の間へ行て。銚子を別の人に渡なり。別の人。酌取て則加へて。扱末座に畏て居る時。さしみを參す也。膳をすへて後。酌すゝみ寄りてまいらするなり。式退し此度ハ次の人のむなり。同じくきよとうを前のことく捨る。右の疊に置也。又御酌かわりて。次の間にて別の人に渡して。則酒を加へ。前のことく御前に畏也。なをゝ酒くわへ所ハ。例式にかわりて次の間也。酌銚子を渡して。則そこにてかわる也。扱前のことく酌畏て居る時。又わたいりをすへて。扱又酌まいりて式退有て聞召也。おもむきは同前なり。

一 一人の前に三膳なり。三膳のすへやうは。一番の膳は主人の左の方。二番のは右の方也。三番は二番目の膳をかみへあけて。その跡に三番の膳を置也。如此調て一膳ツ、あくるなり。其時。右盃を自身とりて。一番の膳もとのことく置なり。あくる時は一番の膳より次第々々に三度にあくるなり。

一 貴人と三ツ盃吞むやうの事。一番に貴人聞召て。二番目に打手吞て。又二献めを相手聞召て。又三こんめのを貴人聞召。此度ハあひては盃を一ツ吞すして残して。貴人三度め聞召たる御盃を戴なり。貴人の盃給て。其盃を置所まへの我のむ二ツの上にハ不可置。並へてそはに置候。又あくる時は我のむ盃二ツを。いまたのみ候わぬ一ツの盃の上に。前のことく次第に重て置くなり。

右一冊に。蜷川新右衛門入道 道標家之日  
記之由。貞亨二年。阿州住某所寫之。奥書  
にみへたり。猶考へし。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

齋藤松太郎  
田中敏治校  
大和田五月

大正十四年二月十五日印刷  
 大正十四年二月二十日發行  
 昭和十二年十一月二十四日發行  
 昭和十五年十二月二十五日發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
 續群書類從完成會代表者

太田 藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島 喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八

不許  
 複製

發行者

印刷者

印刷所

發行所











EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6463